

朝日村

UJIGAMI
氏神遺跡

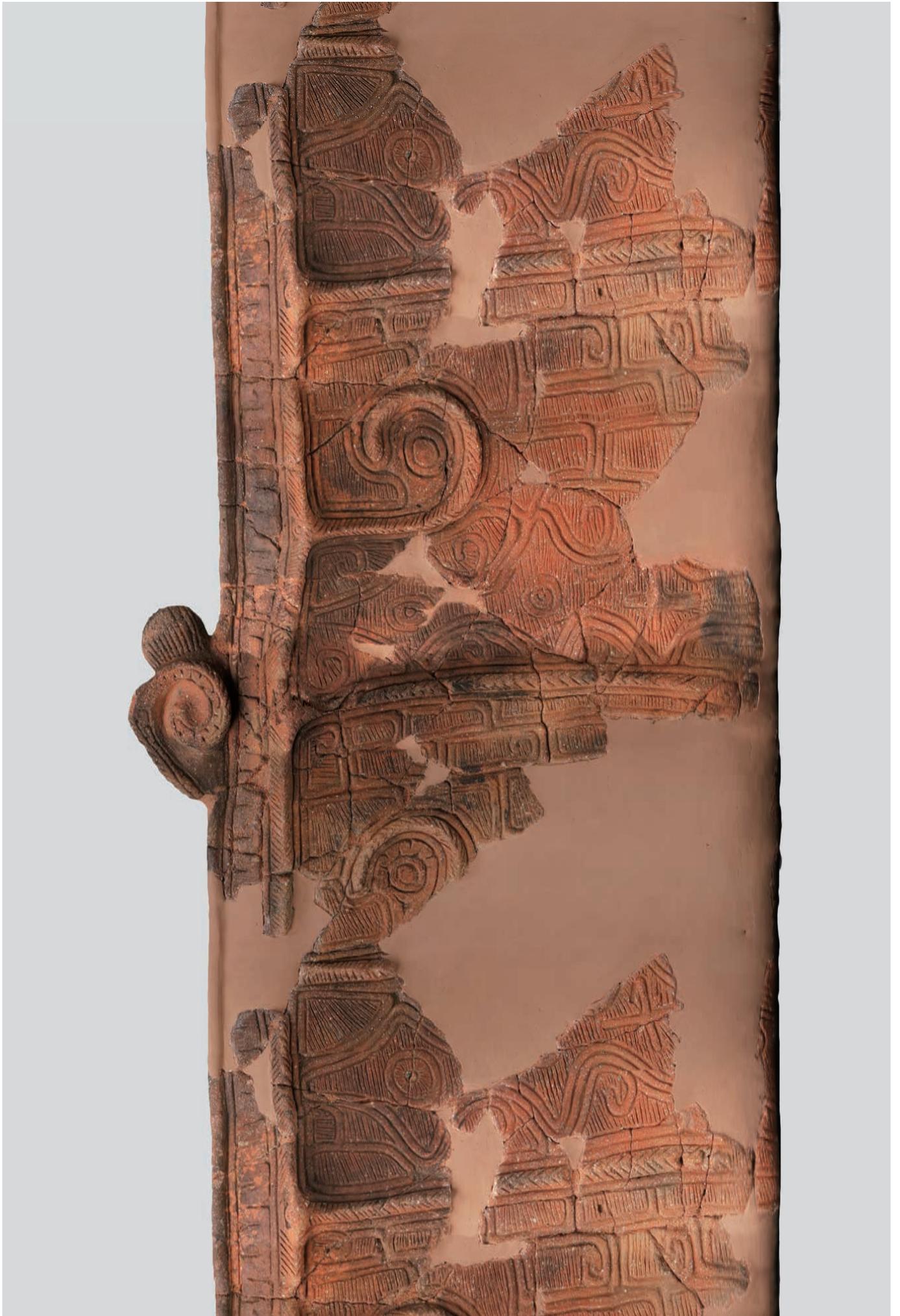
朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022. 3

朝日村
長野県埋蔵文化財センター



氏神遺跡調査範囲 全景（南西より）



S B 1001 出土縄文土器 (No 8) 展開写真

例 言

- 1 本書は、長野県東筑摩郡朝日村西洗馬向原 1845-1 ほかに所在する氏神遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、朝日村向原地域道路等整備事業に伴う記録保存調査として、朝日村から委託を受けた一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査期間は、発掘作業が 2020 年 4 月 1 日～8 月 3 日、基礎整理作業が 2020 年 8 月 4 日～9 月 30 日、整理等作業が 2021 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日である。
- 4 発掘調査の受委託契約等については第 1 章第 1 節を参照願いたい。
- 5 発掘調査の担当者は第 1 章第 1 節 4 に記載した。
- 6 本報告書の編集は、村井大海が行った。執筆分担は以下のとおりである。
第 1 章、第 2 章第 2 節、第 5 章第 2 節 2・第 4 節 2 平林 彰
上記以外 村井大海
校閲は、調査部長川崎 保、調査第二課長西 香子、課長補佐河西克造が実施した。
- 7 発掘調査に当たって、以下の機関、諸氏に業務委託または指導を得た。
出土骨鑑定：京都大学名誉教授 茂原信生氏（2021 年度）
測量・空中写真撮影：株式会社 AB. do（2020 年度）
放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ 株式会社（2020 年度）
株式会社 パレオ・ラボ（2021 年度）
黒曜石産地同定：株式会社 パレオ・ラボ（2020 年度）
遺物実測：株式会社 アルカ（2021 年度年度）
遺物写真撮影：株式会社 信毎書籍印刷（2021 年度）
報告書印刷：蔦友印刷 株式会社（2021 年度）
- 8 本書で報告した氏神遺跡の諸記録・出土品は朝日村に移管される予定である。
- 9 発掘調査および報告書作成に当たり、以下の諸機関・諸氏に御指導・御協力を賜った。御芳名を記して感謝の意を表します（五十音順、敬称略）。
朝日村教育委員会、朝日村公民館、朝日村土地開公社、朝日村美術館、朝日村文化財保護審議会、朝日村役場、安曇野市教育委員会、清沢土建株式会社、塩尻市教育委員会、塩尻市立平出博物館、長野県文化財保護審議会史跡・考古資料部会、長野県立歴史館、松本市教育委員会、松本市立考古博物館、山形村教育委員会
一ノ瀬幸治、上條一美、上條兼一、上條靖尚、久保沢実、小池貴浩、小林司、小林弘幸、小松学、

齊藤正志、塩原厚三郎、塩原康視、曾根範枝、曾根原富夫、土屋和章、直井雅尚、中村文映、原敏二、前田和也、牧野令、丸山真由美、三村直、村田幸子、百瀬司郎、山中秀樹、和田和哉

- 10 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』37などで紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 11 本書に添付したDVDには、以下の内容を収録した。
本文PDF、遺構一覧表、遺物一覧表、遺物集計表、自然科学分析報告書

凡 例

1 本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準としている。座標値は世界測地系による。

2 本書で掲載した地図は、国土地理院発行の電子地形図（1:25,000、1:50,000）をもとに作成した。

3 掲載した実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構実測図 SB・ST 1：60

SK・SF 1：40

ただし、調査区全体図・遺構配置図・挿図などは任意である。

遺物実測図 土 器 1：3、1：4

石 器 2：3、1：3、1：6

遺物写真 遺物実測図と共通である。

4 遺物番号は、遺構種類ごとに付けたが、発掘調査の過程で遺構と認定しなかったため、欠番としたものがある。

5 遺物番号は時代別に1から付けた。個別遺構図に添付した遺物図は、番号が重複する場合があるため、種類名も明記したものがある。

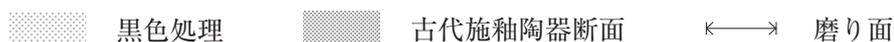
6 土層および土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』（2010年度版）を基準とした。

7 遺構・遺物図中のスクリーントーンは以下のように用いた。これ以外の場合は図中に凡例を示した。

(1) 遺構図



(2) 遺物図



8 土坑の平面形及び断面形は以下の基準で分類した。

平面形

円形：長径／短径が1.1未満で角がない弧線



楕円形：長径／短径が1.1以上で角がない弧線
長径端の弧線が相似ではないもの



卵形：長径／短径が1.1以上で角がない弧線
長径端の弧線が相似ではないもの



方形：長径／短径が1.1未満



長方形：長径／短径が1.1以上



不整形：基本形が定まらない形
※ 基本の平面形がゆがんでいる場合は、「不整」を付ける

断面形

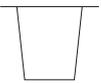
A：台形 平底
上端長／底面長が1.5以上



B：箱形 平底
上端長／底面長が1.5未満
上端長／深さが1.0以上



C：筒形 平底
上端長／底面長が1.5未満
上端長／深さが1.0未満



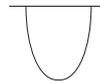
D：皿形 丸底
上端長／深さが3.0以上



E：壜形 丸底
上端長／深さが2.0以上3.0未満



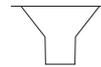
F：砲弾形 丸底
上端長／深さが2.0未満



G：袋形 平底・丸底
最大径が堀方下部にある



H：ロート形
中段を境に、上位は台形
下位は筒形



※底面の一部に落ち込みがある場合は「段差有」を付ける

目 次

口絵	i
例言	iii
凡例	v
目次	vii
図版目次	ix
挿表目次	x
写真図版目次	xi
第1章 発掘調査の経過	
第1節 発掘調査に至る経過	1
1 事業計画の概要 2 過去の調査と保護措置の調整 3 行政的な手続 4 調査体制	
第2節 発掘調査の経過	7
1 発掘作業 2 整理作業 3 普及啓発 4 作業日誌抄録	
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	12
1 遺跡の位置 2 遺跡周辺の地形環境	
第2節 歴史的環境	14
1 朝日村周辺の遺跡 2 西洗馬地区の変遷	
第3章 調査の方法	
第1節 発掘作業の方法	25
1 遺跡記号と調査区の設定 2 表土掘削と遺構の検出 3 遺構の認定と精査 4 記録作成	
第2節 整理作業の方法	28
1 整理等作業 2 報告書作成と資料収納	
第4章 朝日村氏神遺跡の調査概要	
第1節 氏神遺跡の位置と環境	32
第2節 縄文時代	33
第3節 平安時代	35
第5章 調査の成果	
第1節 遺跡の概要と基本層序	
1 遺跡の概要	36
2 基本層序	36
第2節 縄文時代	
1 概要	39
2 遺構	43

(1) 竪穴建物跡 (2) 土坑 焼土跡	
3 遺物	74
(1) 竪穴建物跡出土遺物 (2) 土坑出土遺物 (3) 遺構外出土遺物	
4 科学分析	126
(1) 放射性炭素年代測定 (2) 黒曜石産地推定	
第3節 弥生時代	132
第4節 平安時代	
1 概要	133
2 遺構	133
(1) 竪穴建物跡 (2) 掘立柱建物跡 (3) 杭列	
3 遺物	145
4 科学分析	148
(1) 放射性炭素年代測定	
第6章 調査の総括	
第1節 氏神遺跡及び周辺遺跡における縄文時代前期末から中期の動向	
1 縄文時代前期末から中期中葉の土器変遷	149
2 縄文時代における氏神遺跡の石器群	155
第2節 氏神遺跡の平安時代における墓坑と集落	165
第3節 まとめ	168
参考文献	169

図版目次

- | | | | |
|------|-------------------------------------|------|-------------------------------------|
| 第1図 | 試掘グリッド配置図 | 第27図 | 縄文時代の遺物図 (1) SB1001A・B、
1002 (1) |
| 第2図 | トレンチ及びグリッド配置図 | 第28図 | 縄文時代の遺物図 (2) SB1001A・B、
1002 (2) |
| 第3図 | 遺跡位置図 | 第29図 | 縄文時代の遺物図 (3) SB1001A・B、
1002 (3) |
| 第4図 | 遺跡周辺の段丘面 | 第30図 | 縄文時代の遺物図 (4) SB1001A・B、
1002 (4) |
| 第5図 | 松本盆地南西部の遺跡地図 | 第31図 | 縄文時代の遺物図 (5) SB1001A・B、
1002 (5) |
| 第6図 | 調査範囲及びトレンチ、グリッドの配置
図 | 第32図 | 縄文時代の遺物図 (6) SB1001A・B、
1002 (6) |
| 第7図 | 基本層序図 | 第33図 | 縄文時代の遺物図 (7) SB1001A・B、
1002 (7) |
| 第8図 | 遺構全体図 | 第34図 | 縄文時代の遺物図 (8) SB1001A・B、
1002 (8) |
| 第9図 | 遺構分布拡大図 (1) 1 トレンチ | 第35図 | 縄文時代の遺物図 (9) SB3002 (1) |
| 第10図 | 遺構分布拡大図 (2) 3 トレンチ | 第36図 | 縄文時代の遺物図 (10) SB3002 (2) |
| 第11図 | 遺構分布拡大図 (3) 4・5 トレンチ | 第37図 | 縄文時代の遺物図 (11) SB3002 (3) |
| 第12図 | 縄文時代の遺構図 (1) SB1001A・B、
1002 (1) | 第38図 | 縄文時代の遺物図 (12) SB3003・
3004 (1) |
| 第13図 | 縄文時代の遺構図 (2) SB1001A・B、
1002 (2) | 第39図 | 縄文時代の遺物図 (13) SB3003・
3004 (2) |
| 第14図 | 縄文時代の遺構図 (3) SB3002 (1) | 第40図 | 縄文時代の遺物図 (14) SB3003・
3004 (3) |
| 第15図 | 縄文時代の遺構図 (4) SB3002 (2) | 第41図 | 縄文時代の遺物図 (15) SB3003・
3004 (4) |
| 第16図 | 縄文時代の遺構図 (5) SB3003・3004
(1) | 第42図 | 縄文時代の遺物図 (16) SB4001 (1) |
| 第17図 | 縄文時代の遺構図 (6) SB3003・3004
(2) | 第43図 | 縄文時代の遺物図 (17) SB4001 (2) |
| 第18図 | 縄文時代の遺構図 (7) SB4001 | 第44図 | 縄文時代の遺物図 (18) SB4001 (3) |
| 第19図 | 縄文時代の遺構図 (8) 1 トレンチ
SK (1) | 第45図 | 縄文時代の遺物図 (19) SB4001 (4) |
| 第20図 | 縄文時代の遺構図 (9) 1 トレンチ
SK (2) | 第46図 | 縄文時代の遺物図 (20) SB4001 (5) |
| 第21図 | 縄文時代の遺構図 (10) 3 トレンチ
SK (1) | 第47図 | 縄文時代の遺物図 (21) SB4001 (6) |
| 第22図 | 縄文時代の遺構図 (11) 3 トレンチ
SK (2) | 第48図 | 縄文時代の遺物図 (22) SB4001 (7) |
| 第23図 | 縄文時代の遺構図 (12) 3 トレンチ
SK (3) | 第49図 | 縄文時代の遺物図 (23) SB4001 (8) |
| 第24図 | 縄文時代の遺構図 (13) 4 トレンチ
SK (1) | 第50図 | 縄文時代の遺物図 (24) 1 トレンチ
SK (1) |
| 第25図 | 縄文時代の遺構図 (14) 4 トレンチ
SK (2) | | |
| 第26図 | 縄文時代の遺構図 (15) 5 トレンチSK | | |

第51図	縄文時代の遺物図 (25)	1 トレンチ SK (2)	第69図	平安時代の遺構図 (5)	4 トレンチ墓 坑、SK
第52図	縄文時代の遺物図 (26)	3 トレンチ SK (1)	第70図	平安時代の遺物図 (1)	SB3001 (1)
第53図	縄文時代の遺物図 (27)	3 トレンチ SK (2)	第71図	平安時代の遺物図 (2)	SB3001 (2)、 墓坑
第54図	縄文時代の遺物図 (28)	3 トレンチ SK (3)	第72図	IntCal20による暦年較正結果 (2)	
第55図	縄文時代の遺物図 (29)	4 トレンチ SK (1)	第73図	松本盆地における縄文時代前期末葉土 器群	
第56図	縄文時代の遺物図 (30)	4 トレンチ SK (2)	第74図	松本盆地における縄文時代中期中葉土 器群	
第57図	縄文時代の遺物図 (31)	4 トレンチ SK (3)	第75図	松本盆地における縄文時代中期中葉土 器群	
第58図	縄文時代の遺物図 (32)	4 トレンチ SK (4)、5 トレンチSK (1)	第76図	石鏃完形品長幅比	
第59図	縄文時代の遺物図 (33)	5 トレンチ SK (2)	第77図	ピース・エスキュー完形品長幅比	
第60図	縄文時代の遺物図 (34)	5 トレンチ SK (3)、遺構外出土遺物	第78図	打製石斧完形品長幅比	
第61図	IntCal20による暦年較正結果 (1)		第79図	打製石斧完形品長厚比	
第62図	黒曜石製石器産地別判別図		第80図	敲石完形品長幅比	
第63図	弥生時代の遺物図		第81図	敲石完形品長厚比	
第64図	平安時代の遺構分布拡大図	3 トレンチ	第82図	敲石完形品幅厚比	
第65図	平安時代の遺構図 (1)	SB3001 (1)	第83図	石材数比率	
第66図	平安時代の遺構図 (2)	SB3001 (2)	第84図	石材重量比率	
第67図	平安時代の遺構図 (3)	ST3001	第85図	石器組成	
第68図	平安時代の遺構図 (4)	ST3002、 SA3001、SK3017・3018	第86図	氏神遺跡の石器群 (1)	
			第87図	氏神遺跡の石器群 (2)	
			第88図	10世紀中葉から後葉の墓坑長短比	
			第89図	10世紀中葉から後葉における松本盆地 出土の墓坑	

挿表目次

第1表	2020年度発掘作業工程	第9表	縄文時代土坑一覧表
第2表	2021年度整理作業工程	第10表	SB1001A・B、SB1002出土石器 組成表
第3表	松本盆地南西部の遺跡一覧表 (1)	第11表	SB3002出土石器組成表
第4表	松本盆地南西部の遺跡一覧表 (2)	第12表	SB3003・3004出土石器組成表
第5表	松本盆地南西部の遺跡一覧表 (3)	第13表	SB4001出土石器組成表
第6表	松本盆地南西部の遺跡一覧表 (4)	第14表	SK出土石器組成表
第7表	松本盆地南西部の遺跡一覧表 (5)	第15表	掲載石器一覧表
第8表	縄文時代竪穴建物跡一覧表		

第16表	掲載石製品一覧表
第17表	放射性炭素年代測定結果（1）
第18表	黒曜石産地分析試料一覧
第19表	測定値、指数値及び産地推定結果 （1）
第20表	測定値、指数値及び産地推定結果 （2）

第21表	遺構及び時期別の産地
第22表	平安時代竪穴建物跡一覧表
第23表	平安時代掘立柱建物跡 杭列一覧表
第24表	平安時代土坑一覧表
第25表	放射性炭素年代測定結果（2）
第26表	型式・土器群と系統の組み合わせ
第27表	10世紀中葉から後葉の墓坑一覧表

写真図版目次

PL 1	氏神遺跡全景	PL24	縄文時代中期初頭の遺物（6）
PL 2	SB1001A・B、1002	PL25	縄文時代中期初頭の遺物（7）
PL 3	SB3002	PL26	縄文時代中期初頭の遺物（8）
PL 4	SB3003・3004	PL27	縄文時代中期初頭の遺物（9）
PL 5	SB4001	PL28	縄文時代中期初頭の遺物（10）
PL 6	1・3トレンチSK、SF	PL29	縄文時代中期初頭の遺物（11）
PL 7	4・5トレンチSK	PL30	縄文時代中期初頭の遺物（12）
PL 8	SB3001	PL31	縄文時代中期初頭の遺物（13）
PL 9	ST3001、SA3001	PL32	縄文時代中期初頭の遺物（14）
PL10	ST3002、SK4007	PL33	縄文時代中期初頭の遺物（15）
PL11	縄文時代中期中葉の遺物（1）	PL34	縄文時代中期初頭の遺物（16）
PL12	縄文時代中期中葉の遺物（2）	PL35	縄文時代中期初頭・後期後葉の遺物
PL13	縄文時代中期中葉の遺物（3）	PL36	縄文時代中期初頭の遺物（17）
PL14	縄文時代中期中葉の遺物（4）	PL37	縄文時代中期初頭の遺物（18）
PL15	縄文時代中期中葉の遺物（5）	PL38	縄文時代中期初頭の遺物（19）
PL16	縄文時代中期中葉の遺物（6）	PL39	縄文時代中期初頭の遺物（20）
PL17	縄文時代中期中葉の遺物（7）	PL40	縄文時代中期初頭の遺物（21）
PL18	縄文時代中期中葉の遺物（8）	PL41	縄文時代中期初頭の遺物（22）
PL19	縄文時代中期初頭の遺物（1）	PL42	縄文時代中期初頭の遺物（23）
PL20	縄文時代中期初頭の遺物（2）	PL43	縄文時代中期初頭・弥生時代の遺物
PL21	縄文時代中期初頭の遺物（3）	PL44	平安時代の遺物（1）
PL22	縄文時代中期初頭の遺物（4）	PL45	平安時代の遺物（2）
PL23	縄文時代中期初頭の遺物（5）		

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

1 事業計画の概要

「福祉あふれる元気で明るい朝日村」¹は、村内定住の促進と地域の活性化を図るため、1993（平成5）年度の見住住宅団地以降4か所の住宅団地を分譲し、2014年に第1期（向陽台住宅団地）、2017年に第2期分譲を経て、2018年度に第3期の造成事業を計画した。これは、9,574.03㎡の開発区域に25区画の宅地を分譲するもので、朝日村（以下「村」という。）は2019年11月に着工し、2021年4月に分譲を開始した。

2 過去の調査と保護措置の調整

過去の調査 氏神遺跡は、1951（昭和26）年に國學院大学教授大場磐雄氏を招いて行われた東筑摩郡誌編集委員会の踏査で発見された²。氏が作成した地名表には、縄文時代と古墳時代以降の集落遺跡として掲載されている。1952年には、藤沢宗平氏が本遺跡から表採された磨製石鏃を紹介している（藤沢1952）。これらの調査結果を受けて、『信濃史料』では本遺跡を、縄文前期末・勝坂式土器、土偶、打製石斧、石皿、石棒、磨製石鏃、土師器・須恵器片、灰釉陶器が出土する集落遺跡と記載する（信濃史料刊行会1956）。その後の『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』及び『長野県史』は、『信濃史料』の内容をほぼ踏襲する³が、『朝日村誌』は、西洗馬在住の柳澤勝己氏が採集した有舌尖頭器を口絵写真と実測図を使って丁寧に紹介し、「村最古の石器」と特筆する（朝日村村誌刊行会1991）。

保護措置の調整 2018年度、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）が市町村の教育委員会等に向けて行った公共事業照会に対して、村教委は、当該事業を回答したため、県教委は村教委に対して事前の試掘確認調査の実施を指示した。

2019年9月に実施した村教委の試掘調査では、対象地に9か所のグリッドを設定し、それぞれ重機によって耕作土の掘削を行った。遺物が出土した時点で手掘り作業に変え、遺物包含層や遺構検出面を確認した。その結果、調査範囲の東側のグリッド4～8では、地表下20～40cmの黒色土から縄文時代前期末葉から中期初頭の土器が出土し、地表下50～90cmのローム層直上で茶褐色土を埋土とした土坑を検出した。一方、西側のグリッド1～3、9は、畑地造成等により遺物包含層がすでに削平されており、地表下30～45cmでローム層を把握するまでの間、遺構・遺物は確認されなかった（第1図）。

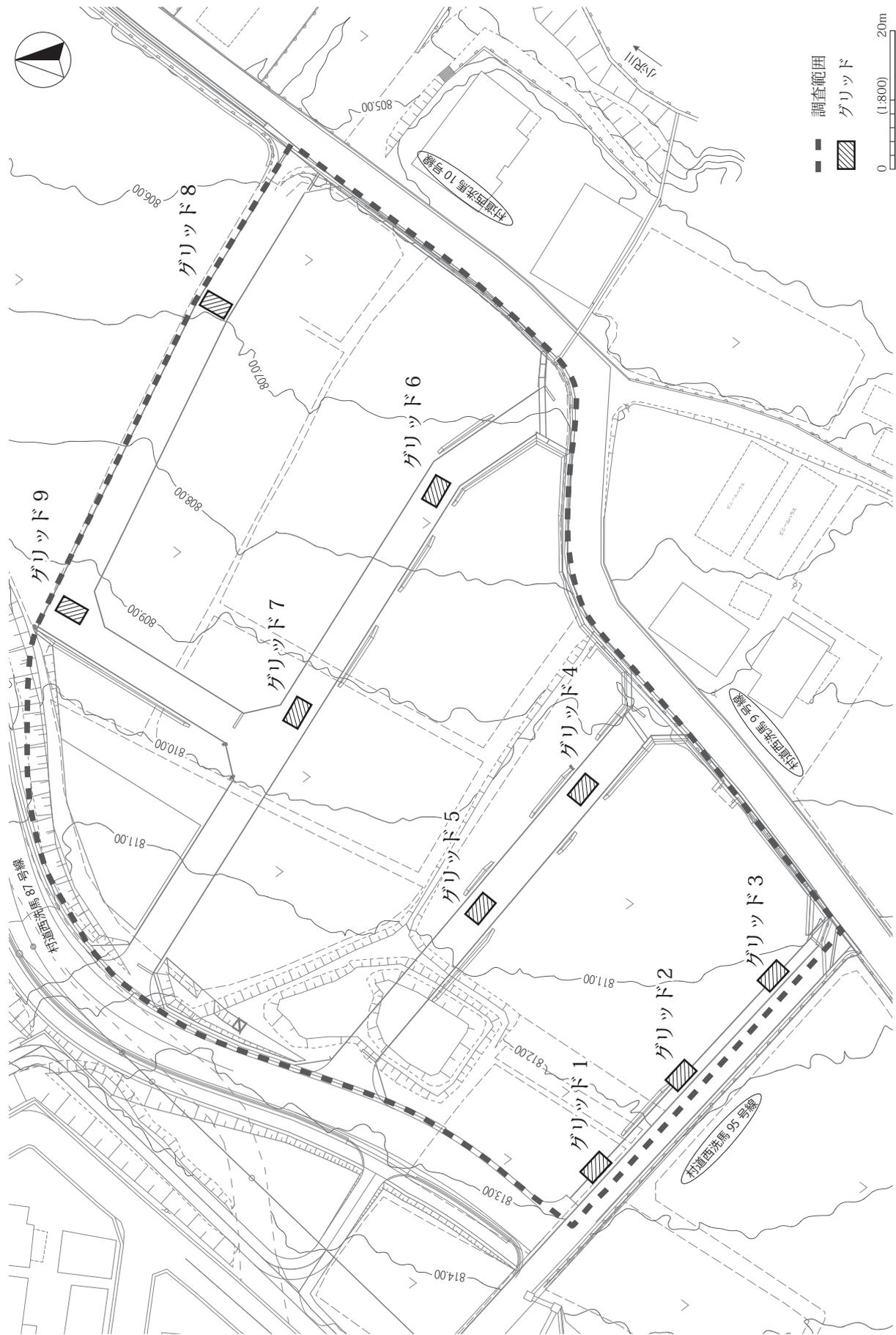
試掘結果を受けて村教委は、同建設環境課、同土地開発公社及び県教委と保護措置の協議を行い、造成工事計画地内の道路部分を記録保存、宅地部分は盛土保存、排水路部分は工事立会とした。また、村教委は専門職員が不在で記録保存調査ができないため、（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）への委託が検討された。

こうした経過を受け、同年10月18日、県、村、埋文センターによる調整会議が開かれ、村は記録保存調査を埋文センターへ委託して実施すること、記録保存調査に伴い村は県教委及び埋文センターと協定を締結すること

註1 朝日村のキャッチフレーズ（朝日村 2020）

註2 大場磐雄氏の講演記録（東筑摩郡郷土資料編集会1951）に記載されている。

註3 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』には縄文時代の磨製石斧、石錘、石匙、石製装身具、弥生時代の石庖丁も図面を掲載して紹介している。



第1図 試掘グリッド配置図

となった。記録保存調査の対象面積は2,000㎡で、発掘作業は2020年4月から9月までとした。また、整理作業及び報告書刊行は2021年度とし、報告書刊行後は、出土品及び記録類を村へ移管することで合意した。

3 行政的な手続

工事通知と協定書 村教委は県教委に、2019（令和元）年10月21日付け元朝建第218号で、文化財保護法第94条第1項に基づいて、周知の埋蔵文化財包蔵地である氏神遺跡において向畑地域道路等整備事業に伴う発掘を行う旨、通知を发出した。これに対して県教委は村教委に、同年10月31日付け元教文第8-217号で、当該事業に先立ち、記録保存のための発掘調査を埋文センターへ委託することを勧告した。また、村は、県教委および埋文センターと当該事業に伴う埋蔵文化財発掘調査について協定を締結した。その内容は以下のとおりである。

朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書

朝日村長（以下「甲」という。）と、長野県教育委員会教育長（以下「乙」という。）と、一般財団法人長野県文化振興事業団理事長（以下「丙」という。）の三者により、朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査（以下「発掘調査」という。）の実施について、協定を交わすものである。

（目的）

第1条 この協定は、甲が文化財保護法第93条に基づく緊急調査として実施する甲の事業施行地区内に所在する埋蔵文化財の取扱い及び発掘調査の実施方法等について定めることを目的とする。

（発掘調査の対象範囲）

第2条 この協定を適用する発掘調査の対象範囲は、別添図面に示す通りとする。

2 前項の発掘調査の対象範囲外から新たに埋蔵文化財が発見された場合は、甲、乙、丙が協議の上、その保護措置及び発掘調査の対象範囲について決定するものとする。

（発掘調査の体制）

第3条 甲は丙に、前条の対象範囲の発掘調査を委託するものとする。

2 丙は、発掘調査を実施する組織を速やかに編成し、別添実施計画書に基づき発掘調査を実施するものとする。

（発掘調査の指導）

第4条 乙は、丙が行う発掘調査の内容・方法に対し、検査、指導、監督にあたるものとし、問題があった場合は、改善を求めることができる。

（発掘調査の期間）

第5条 丙は、この協定に基づく発掘調査を、協定締結の日から令和4年3月31日までに完了させるものとする。ただし、やむを得ない理由により期間を延長する場合には、朝日村教育委員会立会いのもと甲、乙、丙で協議して決定するものとする。

（発掘調査の費用）

第6条 この発掘調査に要する費用は、別添年度別計画書のとおり概算総額50,000,000円とし、甲が負担する。

2 前項の費用は、第2条第2項により発掘調査の対象範囲を変更した場合及び物価賃金の変動等により増減が生じた場合には、甲、乙、丙で協議して変更するものとする。

（発掘調査の契約及び経費の支払方法）

第7条 甲と丙は、前条第1項に定めた概算額の範囲内において、別途年度ごとに委託受契約を締結した上で実施するものとする。

2 甲は、必要な経費を前項の契約に基づいて丙に支払う。

（業務実績報告書等の提出）

第8条 丙は、業務が完了した時は、業務実績報告書及び費用の精算書を朝日村教育委員会立会いのもと甲に提出する。

（出土品及び記録類の取り扱い）

第9条 発掘された出土品に係る処置については、丙が法令の定めるところにより行う。

2 丙は、出土品についての権利を放棄する。

3 甲は、乙に譲与申請をした上で、報告書刊行後、出土品及び記録類を保管する。

（著作権の帰属及び譲渡）

第10条 発掘調査に係る図面・写真等の記録類及び調査報告書の著作権は、丙に帰属するものとし、著作権法上、

甲に著作権が生じた場合でも、甲は著作権を丙に無償で譲渡する。

(朝日村教育委員会の位置付け)

第11条 朝日村教育委員会は、域内の埋蔵文化財の保護、行政目的調査の実施及び埋蔵文化財の周知を担う部署であることから、丙が行う発掘調査について、必要に応じて助言を行う。

(協定の変更)

第12条 この協定を変更する必要があるときは、甲、乙、丙が協議して協定の内容を変更するものとする。

(協定の有効期間)

第13条 この協定の有効期間は、協定締結の日から第5条の発掘調査が完了し、委託金の精算が完了した日までとする。

(その他)

第14条 この協定に定めのない事項又は疑義を生じた事項については、その都度、甲、乙、丙が協議して処理する。この協定締結の証として本書3通を作成し、甲、乙、丙記名押印のうえ、各々1通を保有する。

令和元年12月26日

甲	朝日村長	小林弘幸
乙	長野県教育委員会教育長	原山隆一
丙	一般財団法人長野県文化振興事業団理事長	近藤誠一

発掘届と委託契約 協定の締結を受けて、埋文センターは県教委に、文化財保護法第92条第1項に基づいて、2020（令和2）年3月4日付け元長埋第1-4号で、氏神遺跡における発掘調査の実施について、届出を発出した。これに対して、県教委は埋文センターに同年3月20日付け元教文第6-8号で、発掘調査を慎重に実施するよう通知した。また、埋文センターは、県教委および村教委に発掘調査実施計画書を提出するとともに、村と埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結した。その内容は以下のとおりである。

埋蔵文化財発掘調査契約書

朝日村長 小林弘幸を委託者とし、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター所長 原田秀一を受託者として、次のとおり委託契約を締結する。

(委託業務)

第1条 委託業務は、次のとおりとする。

- (1) 委託業務名 令和2年度朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託
- (2) 業務箇所 東筑摩郡朝日村西洗馬向原1845-1ほか13筆
- (3) 委託内容 埋蔵文化財発掘調査 A=2,000㎡
- (4) 委託期間 令和2年4月1日から令和2年9月30日まで

(処理方法)

第2条 受託者は、発掘調査計画書（以下「計画書」という。）を作成し、委託者に協議の上、委託業務を開始するものとする。

2 受託者は、前項の計画書に定めのない細部の事項については、委託者と協議するものとする。

(委託料)

第3条 委託料は、金25,740,000円（取引に係る消費税2,340,000円を含む。）とする。

(契約保証金)

第4条 契約保証金は、金2,574,000円とし、朝日村財務規則第124条第3項第8号の規定により、その納付は免除する。ただし、受託者画工の契約を履行しなかったときは、契約保証金に相当する金額を違約金として委託者に納付しなければならない。

(委託業務の調査等)

第5条 委託者は、この委託業務の処理状況について、随時に調査し、必要な報告を求めるとともに、業務の実施について必要な指示をすることができる。

(業務の変更等)

第6条 委託者または受託者は、この契約後の事情により、委託内容の全部または一部を変更することができる。この場合において、委託料または委託期間を変更する必要があるときは、委託者及び受託者が協議して変更契約を締結するものとする。

(完了報告書)

第7条 受託者は、委託業務が完了したときは、遅滞なく完了報告書及び成果物を提出しなければならない。

- 2 委託者は、前項の報告書及び成果物の提出があったときは、受理した日から10日以内に受託者の立ち合いの上で検査を行い、合格したときは引渡しを受けるものとする。
- 3 受託者は、前項の検査の結果、不合格となったときは、委託者の指定する日までに補正して提出し、再度検査を受けなければならない。
- 4 前2項の検査に要する費用は、受託者の負担とする。

(委託料の支払い)

第8条 受託者は、前項の規定による検査に合格したときは、委託者に対して委託料を請求することができる。

この場合において、委託者は、適法な請求書を受理した日から30日以内に委託料を支払うものとする。

- 2 受託者は、前条の規定にかかわらず、委託料の範囲内において概算払いの請求をすることができる。
- 3 受託者は、前項の規定に基づく概算払を請求しようとするときは、資金計画書を委託者に提出するものとする。

(秘密の保持)

第9条 受託者は、委託業務の処理上知りえた秘密を他人に漏らしてはならない。

(契約の解除)

第10条 委託者は、次の各号の一に該当するときは、この契約を解除することができる。

- (1) 受託者が、その責めに帰すべき事由により、第1条の期間内に委託業務を完了しないとき又は完了することができないことが明らかと認められるとき。
- (2) 前号の場合のほか、受託者がこの契約に違反したとき。

(不履行の損害賠償)

第11条 受託者は、その責めに帰すべき事由により第1条に規定する委託期間内に業務を完了しないときは、当該期限の翌日から委託業務を完了した日までの日数に応じ、委託料に対し年2.6パーセントの割合で計算した額の遅延損害金を委託者に支払わなければならない。

- 2 委託者は、その責めに帰すべき事由により第8条第1項に規定する期限までに委託料を支払わないときは、当該期限の翌日から支払った日までの日数に応じ、委託料に対し年2.6パーセントの割合で計算した額の遅延利息を支払わなければならない。

(暴力団からの不当介入に対する報告書及び届出の義務)

第12条 受託者は、当該契約に係る業務に当たり、暴力団等から不当な要求を受けたときは、遅滞なく委託者に報告するとともに、所轄の警察署に届け出なければならない。

(文化財保護法等に関する諸手続き)

第13条 発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続きについては、受託者が代行するものとする。

(その他)

第14条 本業務に関し、埋蔵文化財発掘調査委託費用の透明性の確保に努めるものとし、委託者及び受託者が協議の上、委託経費の根拠資料を業務完了報告書に添付又は完了検査時に提示するものとする。

- 2 整理作業及び発掘調査報告書の観光に関しては、別途協議するものとする。

(疑義の解決等)

第15条 この契約書及び発掘調査業務委託仕様書に定めのない事項に関して疑義が生じたときは、委託者及び受託者が協議して定めるものとする。

この契約の成立を証するため、本契約書2通を作成し、委託者受託者記名押印の上、各自その1通を保有するものとする。

令和2年3月18日 委託者 住所 長野県東筑摩郡朝日村大字古見1555番1

氏名 朝日村長 小林弘幸

受託者 住所 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4

氏名 一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター所長 原田秀一

令和2年度 朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務計画書

長野県埋蔵文化財センター

1 調査機関

1) 実施主体

所在地	長野市篠ノ井布施高田 963 - 4							
名称	一般財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
	所長 原田 秀一							
2) 事務局								
所在地	長野市大字若里 1 - 1 - 3 長野県県民文化会館内							
名称	一般財団法人長野県文化振興事業団							
	理事長 近藤 誠一							
2 調査目的及び期間・内容								
1) 目的	朝日村向原地域道路等整備事業に伴い、用地内の埋蔵文化財包蔵地について、工事着手前に発掘調査を実施する。							
2) 期間	令和2年4月1日～令和2年9月30日							
3) 内容								
	遺跡名	氏神遺跡						
	所在地	東筑摩郡朝日村西洗馬						
	調査面積	2,000㎡						
	時代	縄文時代(推定)						
	調査内容	令和2年度に発掘作業を行い、令和3年度に整理作業を行って発掘調査報告書を刊行する。						
3 調査工程								
	作業内容	4	5	6	7	8	9	備考
	発掘作業							
	基礎整理作業							
	実績報告書作成							
4 調査範囲	略							

発掘終了報告と発見届 埋文センターは県教委に、令和2年3月20日付け元教文第6-8号県教委教育長通知の別紙記載事項に基づいて、2020(令和2)年8月5日付け2長埋第4-2号で、氏神遺跡の発掘調査終了報告を行った。また、同年8月6日付け2長埋第2-2号で所轄の塩尻警察署に、埋蔵物の発見届及び埋蔵文化財保管証を提出した。これに対して県教委は、同年8月11日に文化財認定を行った。

4 調査体制

氏神遺跡の発掘調査にかかわる体制は、以下のとおりである。

2020年度 発掘作業

所長：原田秀一 副所長：山田秀樹 調査部長：川崎 保 担当課長：櫻井秀雄
 調査担当：村井大海 平林 彰
 作業員：青木重雄 高橋和彦 竹入修二 中村 誠 南波秀武 西原達雄 村澤宏美
 柳澤令一

2021年度 整理作業

所長：原田秀一 副所長：山田秀樹 調査部長(担当課長兼務)：川崎 保
 課長補佐：河西克造
 調査担当：村井大海
 作業員：大澤紅美 塩野入奈菜美 中島英子

第2節 発掘調査の経過

1 発掘作業

2020（令和2）年度 村教委による試掘調査の結果を受け、氏神遺跡は比較的遺構密度の低い縄文時代前期末から中期初頭の集落で、調査範囲西側が大きく削平されていると予想した。当初計画では、記録保存の対象となる道路部分すべてを調査対象として、トレンチを設定した。表土掘削を行ったところ、予想通り調査範囲西側は削平により遺物包含層及び遺構検出面は滅失していた。3トレンチ及び4トレンチ（第2図）の西側道路部分は、面的調査を実施せず、層序等を記録して終了とした。

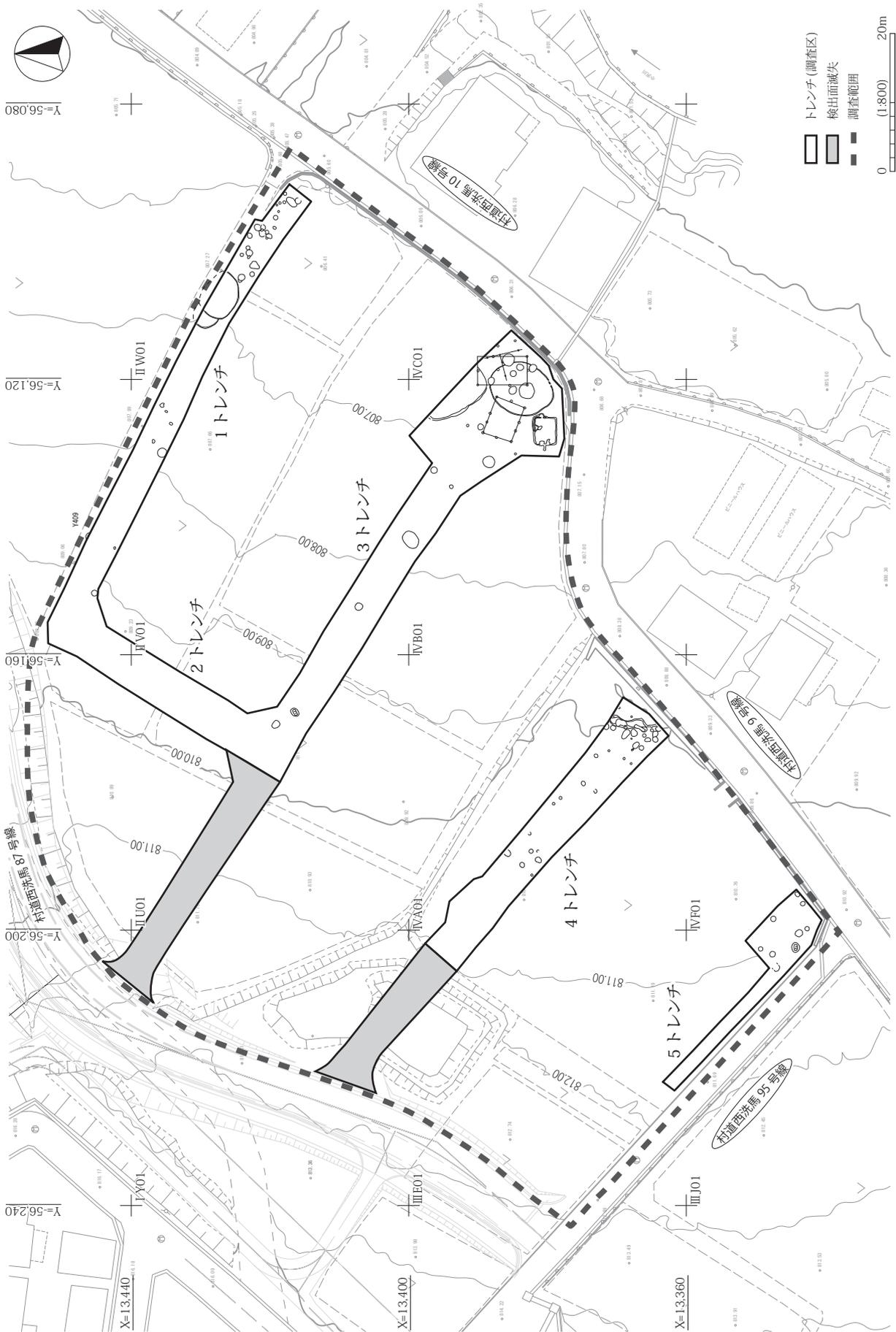
その他の1、2、5トレンチは、削平が遺構検出面まで及んでおらず、面的調査を行うために、表土剥ぎを行った。土層の堆積状況が良好な調査範囲東側では、遺構検出面の上層に縄文時代と平安時代の遺物包含層を確認したが、遺物包含層から遺構に伴う明確な落ち込みを見つけることは困難だった。そこで、黄褐色ローム層上面を遺構検出面とした。

表土剥ぎ後に2トレンチは南から北に、その他のトレンチは西から東に向けて遺構検出作業を行った。遺構番号は、原則として検出順に付けた。検出作業の結果、2トレンチでは遺構が確認できず、その他のトレンチでは縄文時代の竪穴建物跡や貯蔵穴、陥し穴、土坑等、平安時代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、墓坑、土坑を確認した。その際、3トレンチ東部ではトレンチ外北側に竪穴建物跡が延びることが判明したため、トレンチの一部を拡張した。遺構調査は、各トレンチごとに時代の新しい平安時代の遺構と規模の小さい縄文時代の土坑を先行して調査し、その後、縄文時代の竪穴建物跡を調査した。トレンチ掘削箇所は、道路工事との関係で埋戻しは実施していない。

基礎整理作業は、発掘作業と並行して出土遺物の洗浄ならびに注記作業を行い、8月以降は遺構、遺物、写真台帳の整理、遺構図の点検・修正、遺構所見の作成・整理、出土遺物の計測、接合を行った。これらの作業は9月に終了した。基礎整理作業と並行し、放射性炭素年代測定および黒曜石産地推定等、科学分析試料の抽出を行い、8月後半に科学分析業者に業務委託した。12月に成果品が納品され、2020年度の業務は終了した。

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
発掘作業	準備										
	表土掘削										
	遺構検出										
	遺構精査										
	記録										
	現場片づけ										
基礎整理作業											
科学分析業務委託の執行管理											放射性炭素年代測定 黒曜石産地同定

第1表 2020年度発掘作業工程



第2図 トレンチ及びグリッド配置図

2 整理作業

2021（令和3）年度 氏神遺跡は、出土遺構と遺物から、縄文時代中期及び平安時代中期の集落跡であることを確認した。縄文時代中期の集落は、近隣の熊久保遺跡（中期中葉）と山鳥場遺跡（中期後葉）に先行する中期初頭及び中葉に属する。松本盆地において、この時期に属する集落跡の調査例は僅かで、出土土器は当地の縄文時代中期における土器編年を検討する上で重要な資料となる。また、広汎な地域との交流をうかがわせる関西系や北陸系、東海系の土器と下呂石が出土した。氏神遺跡及び周辺遺跡出土の土器群を比較検討し、土器群の編年的位置、当期の石器群の特徴、交流圏を検討した。

平安時代中期の集落は、朝日村内において初の調査例となる。竪穴建物跡及び掘立柱建物跡、墓坑の規模と構造、出土遺物を分析し、集落景観を考究した。

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
遺構	トレース													
	編集													
	版組													
遺物	土器復元・実測・トレース													一部委託
	石器実測・トレース													
	版組													
	保存処理													鉄製刀子
	出土骨の整理													鑑定及び年代測定を含む
写真	写真撮影													
	写真データ現像													
	版組													
記録	原稿執筆													
	入稿													
印刷・製本・発送														
収納														

第2表 2021年度整理作業工程

3 普及啓発

(1) 遺跡説明会

2020.6.20 現地説明会 参加者（31名）

(2) 展示会

2020.3.1～ 埋文センター速報展 埋文センター
 2020.3.13～5.9 埋文センター速報展
 「ほるしん2020」 長野県立歴史館

(3) 調査情報誌等の発行

2020.4.13 「うじがみ遺跡ニュース」 vol.1
 2020.4.27 「うじがみ遺跡ニュース」 vol.2
 2020.5.25 「うじがみ遺跡ニュース」 vol.3
 2020.6.15 「うじがみ遺跡ニュース」 vol.4

- 2020.7.15 「うじがみ遺跡ニュース」 vol.5
 2020.7.30 「うじがみ遺跡ニュース」 vol.6
 2021.2.16 「縄文時代と平安時代の集落跡－朝日村氏神遺跡－」『信州の遺跡』第16号
 2021.3.23 「発掘作業の概要 氏神遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』37
 2022.3.18 「整理作業の概要 氏神遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』38
 (4) マスコミ等対応
 2020.5.1 「朝日・氏神遺跡の発掘進む」 市民タイムス
 2020.7.25 「考古学界ニュース 縄文・平安時代の集落跡、氏神遺跡」『季刊考古学』152
 雄山閣
 2021.2.1 「各地の動向 長野・朝日村・氏神遺跡」『文化財発掘出土情報』通巻477号
 (株) ジャパン通信情報センター
 (5) その他
 埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載

4 作業日誌抄録

2020（令和2）年度

- | | | | |
|-------|---|-------|---|
| 3月18日 | 村と受委託契約を締結 | 5月19日 | 遺物洗浄作業開始 |
| 4月6日 | 発掘作業開始 | | 本日から雨天・暑熱時に遺物洗浄実施 |
| 4月13日 | 2トレンチには遺構・遺物がないことを確認 | 5月21日 | S K 5002の底面で逆茂木跡を検出 |
| 4月15日 | 1トレンチで縄文時代中期の竪穴建物跡（S B 1001・1002）を検出 | 5月25日 | S K 4007出土頭骨を発泡ウレタンで梱包し取上げ |
| 4月17日 | 市民タイムスの取材
測量業務委託契約 | 5月26日 | 3トレンチで古代の掘立柱建物跡（S T 3002）1棟、
4トレンチで縄文時代中期初頭の竪穴建物跡（S B 4001）検出 同トレンチの土坑から縄文中期初頭のほぼ完形の土器出土 |
| 4月22日 | 3トレンチで縄文時代中期初頭の竪穴建物跡3軒（S B 3002～3004）、古代の竪穴建物跡1軒（S B 3001）、掘立柱建物跡1棟（S T 3001）検出
松本市教委直井雅尚氏来跡 | 5月27日 | 3トレンチで古代の杭列（S A 3001）を検出 |
| 4月23日 | 1トレンチのかく乱（トレンチャーによる掘削跡）から磨製石斧出土 | 6月2日 | 4トレンチS B 4001埋土中で検出した土坑からはほぼ完形の縄文中期初頭土器が2個体出土 |
| 4月27日 | S B 1001埋土から多量の土器が出土し始める | 6月9日 | 平出博物館小松学館長、牧野令学芸員ほか来跡 |
| 4月29日 | 朝日村小林弘幸村長ほか来跡 | 6月6日 | 4トレンチの土坑（S K 4045）から小形磨製石斧出土 |
| 4月30日 | 朝日村百瀬司郎村教育長、上條靖尚同教育次長ほか来跡 | 6月12日 | S B 3002を切る土坑（S K 3025）から複数個体の土器片が多量に出土 |
| 5月7日 | 4トレンチの土坑（S K 4007）検出面から頭骨出土
テレビ松本取材 | 6月16日 | 県教委谷和隆氏来跡 |
| 5月8日 | S B 1001が拡張された竪穴建物跡であることを確認
5トレンチで縄文時代の陥し穴（S K 5002）を確認
小林弘幸村長、百瀬司郎教育長ほか来跡 | 6月20日 | 村教委と共催で遺跡説明会開催 |
| 5月11日 | 村、村教委、村土地開発公社と第1回工程会議 | 6月22日 | 遺構図の点検・修正、土器接合開始
下諏訪町教委前田一也氏来跡 |
| 5月12日 | 古代の竪穴建物跡S B 3001床面から刀子出土
朝日村小池貴浩副村長来跡 | 6月23日 | 村、村教委、村土地開発公社と第2回工程会議 |
| 5月15日 | 1トレンチのSK1016に廃棄された縄文中期土器の大破片が出土
S B 3001は一部拡張したことが判明 | 6月24日 | 炉内埋土の土壌フローテーション開始 |
| | | 7月1日 | 遺物注記開始 |
| | | 7月14日 | 遺物台帳等の作成開始 |
| | | 7月16日 | 元山形村教委和田和哉氏来跡 |
| | | 7月21日 | 村、村教委、村土地開発公社と第3回工程会議 |
| | | 7月30日 | 村教委が現場終了状況を確認 |
| | | 8月3日 | 遺物台帳等の作成終了
1トレンチ北側の工事立会でS B 1001・1002の続きを確認、記録しすべての発掘作業終了 |
| | | 8月4日 | 基礎整理作業開始 |
| | | 8月7日 | 遺物洗浄終了 |

- | | | | |
|-------|--|-------|---|
| 8月11日 | 遺物の分類・選別開始 | 9月15日 | 西洗馬区五社神社宮司小林司氏らから西洗馬の歴史を聴取し、神社に奉納された鉄銚、鉄鐸等を実見 |
| 8月18日 | 炉内埋土の土壌フローテーション終了 | 9月16日 | 遺構二次原因図作成終了
測量業務委託完了 |
| 8月21日 | 遺物注記終了 | 9月18日 | 科学分析業務委託に伴いパリノ・サーヴェイが年代測定試料を発掘調査現場事務所にて採取 |
| 9月1日 | 遺構所見カードの作成開始 | 9月15日 | 西洗馬区三村直氏宅で氏神遺跡既出資料を実見 |
| 9月3日 | 遺構二次原因図作成開始 | 9月29日 | 遺物接合、分類・選別、遺物台帳等の作成終了 |
| 9月8日 | 村元文化財保護委員会委員長塩原厚三郎氏から西洗馬の歴史を聴取し、三ヶ組遺跡採集の磨製石斧を実見
科学分析業務委託締結（放射性炭素年代測定） | 9月30日 | 遺構所見カードの作成終了 基礎整理作業終了 |
| 9月9日 | 御馬越区八幡神社氏子総代齊藤正志氏立合いの下、神社に奉納された双雀蓬萊鏡を実見 | 12月3日 | 科学分析業務委託（黒曜石産地推定・年代測定）完了 |
| 9月11日 | 科学分析業務委託締結（黒曜石産地推定） | 12月5日 | 2020年度委託契約終了 |

2021（令和3）年度

- 4月1日 村と受委託契約を締結
本格整理作業開始、土器接合、復元、石器観察・分類、写真データ現像、遺構図のトレース
- 4月28日 第1回報告書編集会議
- 6月2日 遺物実測業務委託契約締結
- 6月9日 遺物実測業務委託に伴う遺物搬出（縄文土器）
- 6月29日 科学分析業務委託（年代測定・火山灰分析）契約締結
- 7月6日 第2回報告書編集会議
- 8月2日 科学分析業務委託（年代測定）契約変更
- 8月31日 遺物実測業務委託完了
- 9月3日 科学分析業務委託（火山灰分析）完了
- 10月22日 科学分析業務委託（年代測定）完了
- 10月26日 遺物写真撮影業務委託締結
- 11月8日 第3回報告書編集会議
- 12月13日 遺物写真撮影業務委託完了
- 12月24日 報告書印刷製本業務委託締結
- 3月11日 報告書印刷製本業務委託完了
- 3月31日 2021年度受委託契約終了

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1 遺跡の位置

氏神遺跡は、長野県東筑摩郡朝日村西洗馬 1845 - 1 ほかにも所在する。鎖川の支流である内山沢左岸の段丘上に立地する（第3図）。

2 遺跡周辺の地形環境

朝日村は、松本盆地の南西部に位置する。村内には、鉢盛山を源とする鎖川が南西から北東方向に流れ、地形的には北アルプスに属する山地と、鎖川及びその支流である大小の沢により発達する平坦地で構成されている。

山地は、珪質粘板岩、チャート、凝灰質シルト岩、珪質泥岩、泥岩、砂岩、礫岩及び、それらが破断された混在岩によって構成される美濃帯中生界によって形成される。これらの岩石は、地質体全体が海洋プレート沈み込みの結果形成された付加体であると解釈されており、岩相及び地質構造によって、沢渡、島々、味噌川、藪原の各コンプレックス（集合体）に区分される。鎖川流域は、砂岩及び泥岩を主体とする味噌川コンプレックスが主として露出している（下田・大塚 2008）。

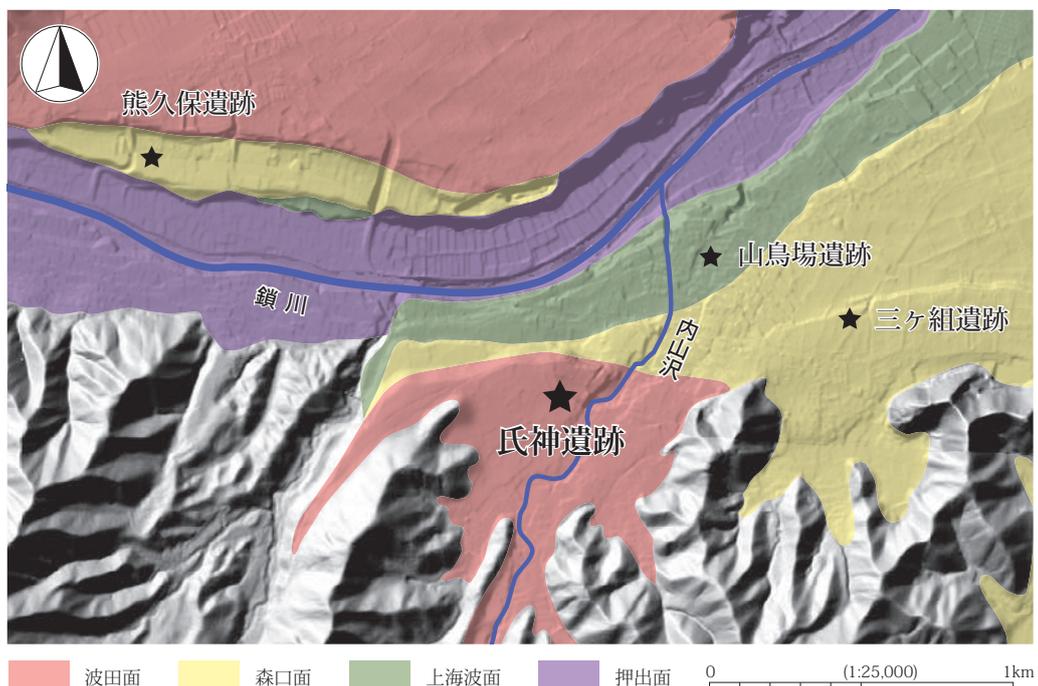
平坦地は、鎖川沿いに発達する河成段丘や扇状地からなるものと、大小の沢沿いに発達する高原状の扇状地からなるものがある。鎖川の形成する河成段丘は高位の面から順に、波田面、森口面、上海渡面、押出面に分かれる（第4図）。波田面は、乗鞍岳および御岳山が供給源と推定される波田ロームと、一部に小坂田ロームをわずかにのせる礫層の厚い堆積面である。形成年代は約 60,000 年～40,000 年前とされる。森口面は、約 40,000 年前以降で晩氷期より前に形成された。波田ロームは上半部しかない（小林国夫 1961・1963）。上海渡面は晩氷期以降に形成された。波田ロームが二次的に堆積する。押出面は現成の面



第3図 遺跡位置図

である。扇状地は針尾付近を扇頂とし、中央は松本市神林・笹賀まで達し、朝日村内では左岸の古見原、右岸の西洗馬地区の平坦地がそれに当たる。松本盆地の扇状地は一般に、堆積域が波田面形成期に拡大、森口面形成期に縮小、上海渡面形成期～現在に拡大したと判断されるが、鎖川流域では上海渡面形成期以降は扇状地の発達是不活発であったと考える(小口 1988)。

氏神遺跡の調査では堆積状況の良好なローム層及びロームと腐食土の漸移層を掘り込んで遺構が形成されていることを確認した。ローム層の特徴は、上部のソフトローム(V層)が褐色で層厚は約35～45cm、下部のハードロームは、暗色帯と思われる色調が僅かに暗くなる層を1層確認した(VII層)。これは小林の指摘する波田ロームの岩相(小林1960)に類似している。したがって氏神遺跡の基盤となるローム層は波田ロームと推定され、遺跡が立地する段丘面は波田面であると推定する。このことは火山灰分析の結果からも確認できた(第5章第1節2)。



第4図 遺跡周辺の段丘面

第2節 歴史的環境

氏神遺跡の「地域」の歴史的環境を語る上で、本書では、大小二つの地域に着目した。一つは、朝日村とその周辺（鎖川を始めとした奈良井川に注ぐ松本盆地南西部の小河川水系群）というやや大きい地域であり、もう一つは、前者の中の小地域としての朝日村内の地区「西洗馬」（鎖川の支流である内山沢水系とその周辺）である。

1 朝日村周辺の遺跡

朝日村内に分布する遺跡については、山鳥場遺跡と三ヶ組遺跡の発掘調査報告書で報告した（埋文センター 2018）ほか、『朝日村誌』でも詳細に解説されている（朝日村誌刊行会 1991）。本書では、氏神遺跡で確認した縄文時代前期末葉から中期中葉及び平安時代の遺跡を中心に見ていくこととするが、松本盆地の奈良井川と梓川の間を北東方向に流れる河川に視点を置き、本遺跡も含む朝日村の中央部を流れる鎖川を中心に、さらに関連する山形村の三間沢川、松本市境の唐沢川、塩尻市洗馬地区の小曾部川の3つの河川流域に分布する遺跡も概観する。

鎖川流域 鎖川は、鉢盛山と烏帽子岳から流れる野俣沢、中俣沢、檜俣沢を源流とし、松本市島立南栗で奈良井川と合流する延長約 17km の一級河川である。村内を北東方向に下りながら段丘地形を形成し、東方向に流れを変える針尾辺りから左岸に古見原の、再び北東方向に曲流する西洗馬辺りから右岸に岩垂原の、それぞれ広大な扇状地をつくっている。この流域には、朝日村駒込遺跡（1）上流の3か所と松本市南荒井遺跡（32）、二階道遺跡（33）より下流の下神遺跡等を加えて 40 か所程度の遺跡がある¹。

旧石器時代の調査例はないが、朝日村芦ノ久保遺跡（7）、氏神遺跡（14）では有舌尖頭器、今井矢はぎの西原（23）では尖頭器とナイフ形石器が採集されているという²。

縄文時代は、ほとんどの遺跡で遺物を採集している。前期末葉から中期中葉の遺跡は少ないが、朝日村熊久保遺跡（6）では、10 次にわたる調査で、中期中葉 8 軒、中期中葉 25 軒を含む中期後葉までの竪穴建物跡 120 軒と土坑 145 基以上を発掘した。そのほかは、向原遺跡（13）や氏神遺跡で前期の土器が、三ヶ組遺跡（18）では中期中葉の土器や磨製石斧が採集されている程度である。

弥生時代は、朝日村芦ノ久保遺跡、氏神遺跡、中村遺跡（16）で磨製石鎌が採集されているほか、熊久保遺跡や東電南遺跡（9）では前期ないし中期中葉の条痕文土器がみついている。また、下流域では、松本市こぶし畑遺跡（30）で岩滑式・貝田町式土器を伴う炉跡が、二階堂遺跡では竪穴建物跡 2 軒が、それぞれ検出されている。また、今井北耕地遺跡（31）には縄文時代晩期終末の土器片を伴う土坑もあり、流域に縄文時代最終末から弥生時代初頭の遺跡が点在する。

古墳時代の遺跡はこの流域にはないが、古代に入ると、氏神遺跡をはじめ熊久保遺跡、本郷遺跡（12）、向原遺跡、大日遺跡（15）、中村遺跡、三ヶ組北西遺跡（19）と、灰釉陶器を含む平安時代の遺物を採集した遺跡が朝日村内にいくつか存在する。三ヶ組北西遺跡では、試掘調査で竪穴建物跡のカマド周辺部のみ確認している。下流域では、こぶし畑遺跡で竪穴建物跡 3 軒、今井北耕地遺跡で竪穴建物跡 2 軒と掘立柱建物跡 1 棟を発掘したほか、今井南耕地遺跡（29）から「松本平で唯一」（松本市教委 1998）の双面硯

註1 朝日村教委は埋蔵文化財包蔵地として登録していないが、朝日村誌によると、鎖川流域には城館跡や社寺跡など中世の遺跡がある。また、松本市誌には、今井地区の小段原、南原開拓、野尻、平林、東耕地の合戦場、東耕地の東で遺物を採集したという記載があるが、いずれも松本市教委の埋蔵文化財包蔵地と一致しないため省いた。なお、市誌の遺物採集地点と埋蔵文化財包蔵地との照合について、松本市教委百瀬耕司氏にご協力いただいた。

註2 朝日村教委からの情報で、朝日小学校の東側にある畑地で採集したという黒曜石製の尖頭器を実見する機会を得た（上條悦男氏蔵）。

が出土している。また、最下流部には、下神遺跡や南栗遺跡のように8世紀以降の大集落が広がっている。

中世は、朝日村犬ヶ原遺跡（5）で常滑系の甕の破片と共に炭化米が出土したほか、背後に旭城跡（111）を控える芦ノ久保遺跡で鎌倉時代制作という鉄製内耳鍋と土製内耳鍋が発見され、三ヶ組遺跡に隣接する下洗馬郷尻かいと（110）からは埋納銭が出土している。また、鎖川上流域では八幡神社改築時に双雀蓬葉鏡が出土した宮前遺跡がある。下流域には、こぶし畑遺跡で土坑墓2基と黒釉天目茶碗や石臼が発掘されている。

三間沢川流域 三間沢川は、山形村清水寺近傍の山中を源流とし、松本市神林で鎖川と合流する間、山形村の中央部を流下する延長約14kmの河川である。山形村上大池の諏訪神社辺りから右岸側に扇状地を形成し、鎖川の古見原扇状地と複合する。左岸側には南から大池川や鳴音川などの小河川が合流し、西山麓部にはこれら小河川が形成する小扇状地や崖錐地がある。微視的にみれば、この地域の遺跡の多くはこの小扇状地上あるいは崖錐上に立地しているが、ここでは広く三間沢川流域という視点でまとめておく。流域には26か所以上の遺跡がある。

旧石器時代の遺物は採集されていないが、縄文時代の遺物はすべての遺跡で出土している。上流域の山形村淀の内遺跡（38）は、6次にわたる調査で、中期初頭3軒、同中葉22軒を含む、前期初頭から中期後葉の竪穴建物跡62軒と多数の土坑・ピットを発掘した。近隣の洞遺跡（36）にも中期中葉2軒を含む後葉までの竪穴建物跡が21軒ある。名籠遺跡（49）では、早期押型文土器が出土しているほか、前期末葉から中期初頭5軒を含む中期後葉までの竪穴建物跡9軒、袋状を含む土坑100基以上があった。中流域では、ヨシバタ遺跡（51）で前期後葉から末葉4軒を含む竪穴建物跡6軒、鳴音川対岸の殿村遺跡（52）では、中期中葉10軒を含む後葉までの竪穴建物跡29軒が発掘され、前期末葉から中期初頭の土器も出土している³。また、中島遺跡（47）でも中期前葉の竪穴建物跡を2軒発掘している。さらに、下流域の松本市川西開田遺跡（56）の下層では、中期初頭から中期中葉の竪穴建物跡が30軒みつかっており、この流域は、前期から中期後葉まで、断続的ながらも比較的長期間利用された集落遺跡が一定数存在する。

弥生時代は、中期前半の竪穴建物跡10軒、平地建物跡2軒、掘立柱建物跡9棟などが発見された境窪遺跡（54・55）や、後期後半の方形周溝墓がみつかった殿村遺跡、同時期の竪穴建物跡3軒を発掘したヨシバタ遺跡が代表例となる。続く古墳時代には殿村古墳があるが、これは後で述べる。

古代は、上流域の洞遺跡で竪穴建物跡4軒、下耕地遺跡（37）で1軒、淀ノ内遺跡で2軒と、いずれも小規模な集落遺跡がある。中流域には、ヨシバタ遺跡で竪穴建物跡18軒、掘立柱建物跡1棟と鍛冶遺構が、殿村遺跡からは竪穴建物跡13軒と掘立柱建物跡1棟、土坑墓1基などがみつかっており、9世紀前半から11世紀後半までの比較的中規模の集落遺跡がある。さらに下流では、川西開田遺跡では竪穴建物跡95軒と掘立柱建物跡15棟、松本市三間沢川左岸遺跡（59）では竪穴建物跡291軒と掘立柱建物跡15棟が確認されており、松本盆地南西部を開発した拠点的な大集落が存在する。

中世に入ると、一転して、集落遺跡の状況は不明瞭になるが、名籠遺跡や山形村中町立道西遺跡（50）、殿村遺跡、川西開田遺跡で多くの土坑墓や火葬墓がみついているほか、三間沢川左岸遺跡と神林川西遺跡（60）の境界付近から、重要文化財に指定された孔雀文馨と瀬戸美濃産鉄釉茶入れが出土している（松本市教委2017）。

唐沢川流域 唐沢川は山形村と松本市（旧波田町）境の山間部を源流とし、同村下竹田で三間沢川と合流する⁴。同村上竹田の唐沢集落辺りを境にして、上・中流は山間部を北東へ流れ、下流は東側に広大な扇状

註3 殿村遺跡は、当初、唐沢川扇状地上の遺跡と認識していたが、直井雅尚氏のご教示により、殿村遺跡やヨシバタ遺跡の発掘調査報告書を確認し、三間沢川支流の鳴音川流域と判断した。

註4 山形村には唐沢川の源流や流域距離等の公式データがないため、元山形村教育委員会和田和哉氏からご教示いただいた。

地を形成している。この地域の遺跡は、ほとんどこの扇状地上に立地するが、三夜塚遺跡（70）を貫く「旧唐沢川」（山形村教委 1981）を含むいくつかの埋没谷に依拠した遺跡が分布していると考えられ⁵、流域には 22 か所以上の遺跡がある。

旧石器時代は、三夜塚遺跡で採集したという局部磨製石斧が紹介されているだけである。縄文時代の遺物は、松本市和田太子堂遺跡（73）、古神遺跡（79）を除き、ほぼすべての遺跡で出土している。唐沢扇状地の扇頂部に近い、山形村美野里ヶ丘遺跡（61）や唐沢遺跡（62）、北唐沢遺跡（65）、神明遺跡（66）、松本市鼠海渡遺跡（80）、唐沢遺跡（83）では、前期後半から中期の遺物が出土している。前期末葉から中期初頭の竪穴建物跡はまだみつかっていないが、一帯を当該期の広大な集落遺跡群として注視しておきたい。扇央の三夜塚遺跡では、5 次にわたる調査で、前期末葉から中期中葉 4 軒を含む後葉までの竪穴建物跡 26 軒が、多くの土坑や集石などとともに発掘されている。また、松本市麻神遺跡（76）でも、前期末葉 1 軒、中期中葉 2 軒を含む後葉までの竪穴建物跡 25 軒がみつまっている。さらに、山形村下原遺跡（71）や波田下原遺跡（72）には、中期中葉から後葉にかけての竪穴建物跡があり、時期が下るにつれ、集落遺跡の分布域が扇頂から扇央へ動いているようである⁶。

弥生時代は、唐沢遺跡、北竹原遺跡（68）、麻神遺跡、古神遺跡などで、土器や石器が出土しているが、遺構はみつかっていない。

古墳時代も集落遺跡はみつかっていないが、唐沢川の扇頂には、大久保 1 号古墳（84）、同 2 号古墳（85）、大久保古墳（86）、八幡大門古墳（87）があり、殿村古墳（88）を加えて終末期の古墳が集中している。殿村古墳からは「錦織部」の墨書土器が出土したことで注目されたが、この地域に、8 世紀前半代の開発集団が一時期占拠していたであろうことが想像できる。

古代は、三間沢川流域ほど大規模な集落遺跡はみつかっていないが、山形村本郷遺跡（67）、和田太子堂遺跡で建物跡が数軒程度発掘されているほか、最上流部の清水寺遺跡（113）にも 10 世紀末葉の竪穴建物跡がある。

小曾部川流域 小曾部川は、奥寺山を源流とし、塩尻市広丘で奈良井川と合流する、延長約 15km の河川である。全体に狭隘な谷地形を形成し、流域に平坦部は少ない。この流域は、塩尻市中村遺跡（89）より南の小曾部谷上流部にある 3 か所の散布地を加えて、15 か所程度と遺跡数は少ない。

旧石器時代は、塩尻市岩垂原遺跡（100）で槍先形尖頭器が採集されている。

縄文時代は、入花見遺跡（90）や芦ノ田遺跡（94）などを除く、ほとんどの遺跡で遺物が採集されているが、小段遺跡（96）、権現堂遺跡（97）、山ノ神遺跡（98）以外は、いずれも散布地である。小段遺跡は 3 次にわたる調査で中期中葉 3 軒を含む後期前葉までの建物跡 16 軒のほか、前期末葉の土器も出土している。山ノ神遺跡は、前期の竪穴住居址 5 軒や前期末葉の土器を発掘した。

弥生・古墳時代の遺跡はこの流域にはなく、中村遺跡や芦ノ田遺跡、藤塚遺跡で古代の遺物が採集されているだけで、集落遺跡はみつかっていない。中世は小曾部館跡（93）と妙義山城跡（132）がある。

2 西洗馬地区の変遷

氏神遺跡は、朝日村内の地区としては「西洗馬」に含まれるので、同地区の歴史については、遺跡周辺の歴史的環境を整理するために必要である。よって、詳しく記述されている『朝日村誌』を参照しながら、

註5 中央自動車道長野線の発掘調査報告書（『総論編』）は、梓川と奈良井川の間に、いくつかの小凸地と谷地形が複合していることや、それらの形成過程について解説している。それによると、唐沢扇状地には縄文時代中期に離水したと推定する小凸地 I が発達していたことがわかる（長野県埋文センター 1990）。

註6 唐沢扇状地の扇端でも、三間沢川流域の川西開田遺跡のような深層の縄文集落が、今後見つかる可能性は捨てきれない。

旧石器時代以来の変遷を辿ってみる⁷。

西洗馬地区は、村の東から南東を占め、西側は同村小野沢地区、北は古見地区、北東は松本市今井地区、東は塩尻市洗馬地区と境をなしている。地区内には、上組、中組、三ヶ組、下洗馬、原新田地籍があり、氏神遺跡は上組地籍に属する。地区の西側には天狗山（標高 1,698 m）方面を源流とする外山沢が、ほぼ中央部には大矢倉方面を源流とする内山沢が、北北東へ流れている。外山沢は峡谷を形成し、小野沢地区との境で鎖川右岸の段丘を削りながら合流している。一方、内山沢は上組付近で両岸に狭い段丘地形をなし、中組付近から鎖川が形成した岩垂原の扇状地上に小扇状地を形成して、鎖川に達している。

旧石器・縄文時代 縄文時代前期以前については、向原遺跡（13）で早・前期の土器片、本遺跡（14）で有舌尖頭器や前期末葉の土器が採集されており、遺跡は内山沢の狭い段丘上に立地している。中期になると、これらに加えて、大日遺跡（15）、中村遺跡（16）、山鳥場遺跡（17）、三ヶ組遺跡（18）など、内山沢の小扇状地上に集落遺跡が展開する。なかでも三ヶ組遺跡は「広い範囲より縄文時代中期中葉を中心にした土器や石器が多数採集されてきており、熊久保遺跡に匹敵する集落が営まれていたことは确实」[12頁1行]と評価されているが、残念ながら、2006年と2017年の発掘地点は集落の中心部を外れていたらしい（朝日村教委2006、長野県埋文センター2019）。大日遺跡では後期の土器、山鳥場遺跡では後・晩期の遺構・遺物が出土しており、時期が下るにつれて、内山沢の下流域に遺跡が残る。

弥生時代から奈良時代 弥生時代は、本遺跡と中村遺跡から磨製石鏃が採集されているが、朝日村全体でも5か所しか遺跡がない⁸。また、古墳時代は遺構・遺物が皆無で、奈良時代に入ってもほとんど変化がないと思われる。前項で示した通り、三間沢川や唐沢川の流域の一部を除いて、松本盆地南西部には弥生時代から古墳時代の遺跡はほとんどない。なお、奈良井川以西の大規模開発は8世紀の後半段階であると、多くの発掘事例が物語っている（長野県埋蔵文化財センター1990 松本市教委2017）。

平安時代 平安時代に入ると、向原遺跡⁹、氏神遺跡、大日遺跡、中村遺跡で灰釉陶器を含む遺物が採集されているほか、三ヶ組北西遺跡（19）からは竪穴建物跡のカマドが検出されている。朝日村全体を見ても、駒込遺跡、熊久保遺跡、本郷遺跡など計10遺跡から平安時代の遺物が出土しており、当該期の遺跡数の増加をみると、この時代に、朝日村での人々

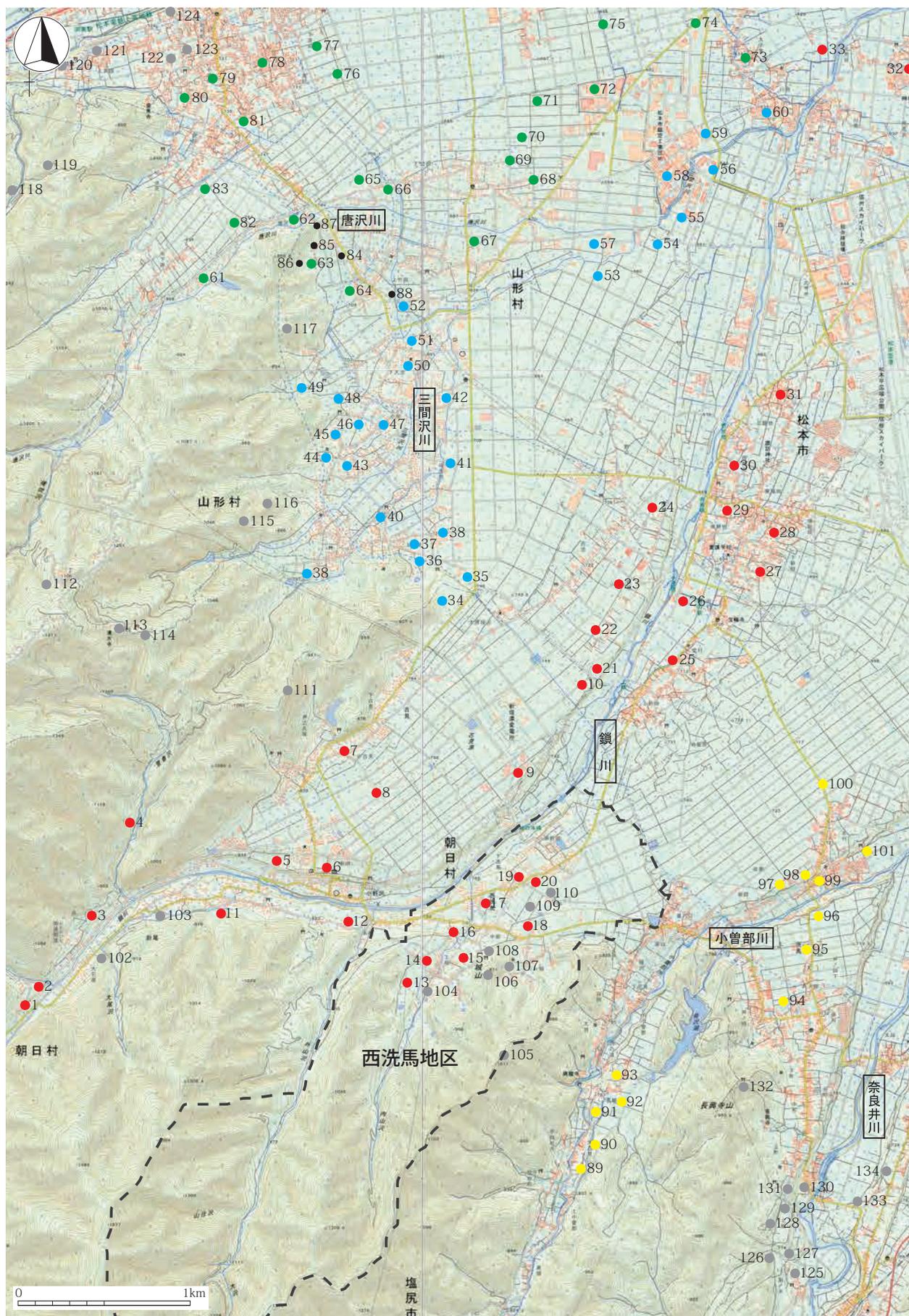


向陽台団地第3期造成竣工写真（北東より）

註7 本項中「」で括った文言は『朝日村誌下巻』から抜粋したものである。抜粋した箇所を〔〕内に示した。

註8 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上の第160図35の石包丁は、朝日村氏神としている。

註9 三村直氏が所蔵する氏神遺跡等採集の遺物を実見する機会を得た。その中に、向原遺跡より南の内山沢最奥部にあたる西洗馬1991番地周辺の畑地（『朝日村誌』下巻 地区誌編にいう「切野」に該当すると思われる）から採集した灰釉陶器等が含まれていた。



第5図 松本盆地南西部の遺跡地図

水系	遺跡番号	遺跡名	市町村	地区	種類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	特記事項	文献
鎖川	1	こまごめ 駒込	朝日村	古見	集落跡		○			○	○	平安の甕を採集	
鎖川	2	あなざわほら 穴沢原	朝日村	古見	集落跡		○						
鎖川	3	みどうかいと 御道開渡	朝日村	古見	散布地								
鎖川	4	そくらさわ 曾倉沢	朝日村	古見	散布地		○						
鎖川	5	いぬがほら 犬が原	朝日村	古見	散布地		○				○		
鎖川	6	くまくぼ 熊久保	朝日村	古見	集落跡		○	○		○		10次の調査で、縄文中期初頭8、中期中葉25を含む竪穴120軒と土坑145基以上を発掘 3次では、灰釉陶器を伴う土坑を発掘	樋口昇一・小松虔・横山正 1964 朝日村教委2003
鎖川	7	あしのくぼ 芦ノ久保	朝日村	古見	集落跡		○	○			○		
鎖川	8	きょうづか 経塚	朝日村	古見	散布地		○						
鎖川	9	とうでんみなみ 東電南	朝日村	古見	散布地		○	○					
鎖川	10	じょうさい 城西	朝日村	古見	散布地		○						
鎖川	11	いちのさわ 一の沢	朝日村	針尾	散布地		○						
鎖川	12	ほんごう 本郷	朝日村	小野沢	散布地						○	平安の灰釉陶器を採集	
鎖川	13	むかいほら 向原	朝日村	西洗馬	集落跡		○			○		1985年の試掘調査で縄文前期を含む早・中期の土器・石器と土師器・灰釉陶器を発掘	
鎖川	14	うじがみ 氏神	朝日村	西洗馬	集落跡		○	○		○		2020年以前に、有舌尖頭器、縄文前期末葉・中期中葉土器、土偶、石鎌・打製石斧・石皿・石棒、弥生の磨製石鎌、土師器・須恵器・灰釉陶器を採集	
鎖川	15	だいにち 大日	朝日村	西洗馬	散布地		○			○		大場磐雄氏は「大日、氏神等から釉薬がついた灰釉陶器が出土」と講演	東筑摩郡郷土史料編纂会1952
鎖川	16	なかむら 中村	朝日村	西洗馬	集落跡		○	○		○		土師器を採集	
鎖川	17	やまどりば 山鳥場	朝日村	西洗馬	集落跡		○						長野県埋文センター2019
鎖川	18	さんがくみ 三ヶ組	朝日村	西洗馬	集落跡		○			○		縄文中期中葉の土器を採集。村誌は、西洗馬最大の遺跡で「熊久保遺跡に匹敵する集落が営まれていたことは確実」と評価	朝日村教委2006 長野県埋文センター2019
鎖川	19	さんがくみほくせい 三ヶ組北西	朝日村	西洗馬	集落跡					○		1998年の試掘調査で平安の竪穴のカマド周辺部のみ発掘	朝日村教委2003
鎖川	20	しゃぐうじ 社宮司	朝日村	西洗馬	散布地		○						
鎖川	21	いまいやよいさかうえ 今井弥生坂上	松本市	今井	集落跡		○			○			
鎖川	22	こいけほら 古池原	松本市	今井	集落跡		○						
鎖川	23	いまいやはぎ 今井矢はぎ にしはらなかこうち 西原、中耕地を含む	松本市	今井	集落跡		○	○		○		西原で尖頭器とナイフ、中耕地で縄文土器を採集	
鎖川	24	のぐちしんでん 野口新田	松本市	今井	集落跡		○			○			
鎖川	25	いまいかみしんでん 今井上新田 どうむら 堂村を含む	松本市	今井	集落跡		○			○		堂村で縄文中期の土器と石器および古代の遺物を採集	

第3表 松本盆地南西部の遺跡一覧表(1)

第2章 遺跡の位置と環境

水系	遺跡番号	遺跡名	市町村	地区	種類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	特記事項	文献
鎖川	26	かみいまい 上今井 なかむら 中村を含む	松本市	今井	集落跡		○			○		中村で縄文中期の土器・石器を採集	
鎖川	27	いまいしんでんほら 今井新田原 なかざわ 中沢を含む	松本市	今井	集落跡		○					中沢で縄文中期の土器・石器を採集	
鎖川	28	いまいしもしんでん 今井下新田	松本市	今井	集落跡		○						
鎖川	29	いまいみなみこうち 今井南耕地	松本市	今井	集落跡					○		平安初期の双面硯が出土	
鎖川	30	ぼた こぶし畑	松本市	今井	集落跡		○	○		○	○	縄文中期初頭の遺物と古代の竪穴3軒を発掘	松本市教委1974
鎖川	31	いまいきたこうち 今井北耕地	松本市	今井	集落跡		○			○	○	平安の竪穴2軒と掘立1棟を発掘	松本市教委1998
鎖川	32	みなみあらい 南荒井	松本市	神林	集落跡		○						
鎖川	33	にかいどう 二階道	松本市	和田	集落跡			○		○		平安の竪穴6軒と掘立4棟、柱列4か所ほかを発掘	松本市教委2017
三間沢川	34	むぎくぼ 麦ヶ窪	朝日村	古見	散布地		○						
三間沢川	35	よこてがざき 横手ヶ崎	山形村	上大池	散布地		○						
三間沢川	36	ほら 洞	山形村	上大池	集落跡		○	○		○		縄文中期中葉2を含む竪穴21軒と平安の竪穴4軒を発掘	山形村教委1971
三間沢川	37	しもこうち 下耕地	山形村	上大池	集落跡		○			○		縄文中期と平安の竪穴各1軒を発掘	山形村教委1998a
三間沢川	38	よどのうち 淀ノ内	山形村	上大池	集落跡		○	○		○		6次の調査で、縄文中期初頭3、中期中葉22を含む前期初頭から中期中葉の竪穴62軒と前期末葉から中期中葉の土坑多数、平安の竪穴2軒を発掘	山形村教委1997 1998a 1999 2001a 2010a
三間沢川	39	まめさわ 豆沢	山形村	上大池	散布地		○						
三間沢川	40	くぼ 窪	山形村	上大池	散布地		○						
三間沢川	41	のぎわ 野際	山形村	中大池	集落跡		○			○		須恵器を採集	
三間沢川	42	なかほら 中原	山形村	小坂	散布地		○						
三間沢川	43	しみず 清水	山形村	小坂	散布地		○						
三間沢川	44	てらばやし 寺林	山形村	小坂	散布地		○			○		土師器を採集	
三間沢川	45	どうむら 堂村	山形村	小坂	散布地		○					縄文中期初頭土器を採集	
三間沢川	46	いしほらだ 石原田	山形村	小坂	散布地		○						
三間沢川	47	なかじま 中島	山形村	小坂	集落跡		○			○		縄文中期前葉の竪穴2軒、土坑17基を発掘 土師器・須恵器を採集	山形村教委2008
三間沢川	48	みやむら 宮村	山形村	小坂	散布地		○						
三間沢川	49	なろう 名竈	山形村	下大池	集落跡		○				○	縄文前期末葉から中期初頭5を含む中期後葉までの竪穴9軒と袋状を含む土坑100基弱を発掘	山形村教委2007
三間沢川	50	なかまちたてみちにし 中町立道西	山形村	下大池	集落跡		○	○		○	○	縄文前期末葉から中期前葉の土坑3基、平安(11C)の竪穴1軒を発掘	山形村教委1998b
三間沢川	51	ヨシバタ	山形村	下大池	集落跡		○	○		○		縄文前期後葉から末葉4を含む竪穴6軒と前期後葉から末葉50を含む土坑60基弱、平安の竪穴18軒(9C前半2・9C後半6・11C前半6・11C後半3・時期不明1)と掘立1棟(9C)、鍛冶遺構を発掘	山形村教委2012

第4表 松本盆地南西部の遺跡一覧表(2)

水系	遺跡番号	遺跡名	市町村	地区	種類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	特記事項	文献
三間沢川	52	とのむら殿村	山形村	上竹田	集落跡		○	○		○	○	縄文中期中葉10(沼沢3・藤内Ⅱ～井戸尻Ⅱ7)を含む中期後葉までの竪穴29軒と前期末葉から中期初頭までの土器、平安の竪穴13軒(9C前半4、9C後半5、10C末～11C初1、不明3)、掘立1棟と土坑墓1基須恵器を採集	山形村教委1987
三間沢川	53	みまざわがわがわが三間沢川右岸	山形村	下竹田	散布地		○			○		須恵器を採集	
三間沢川	54	さかいくぼ境窪	山形村	下竹田	集落跡			○		○		平安2(9C初1・9C中頃1)の竪穴を発掘	山形村教委1999 2001b
三間沢川	55	さかいくぼ境窪	松本市	神林	集落跡			○		○		弥生中期前半の竪穴10軒、平地2軒、掘立9棟、土坑墓2基等を発掘。当該期の集落・遺物研究の基準資料	松本市教委1998
三間沢川	56	かわにしがいでん川西開田	松本市	神林	集落跡		○			○	○	5次の調査で、縄文中期初頭～中葉の竪穴30軒と平安の竪穴95軒、掘立15棟ほかを発掘。導水目的の区画溝と大型住居を中心とした集落	松本市教委1998 2001 2002 2003
三間沢川	57	みまざわがわがわが三間沢川左岸	山形村	下竹田	集落跡					○		古代の土器が出土	
三間沢川	58	わたにしほらみなみ和田西原南	松本市	和田	集落跡		○	○		○		縄文中期中葉の竪穴1軒を発掘 西原地籍で灰釉陶器や緑釉陶器を採集	
三間沢川	59	みまざわがわがわが三間沢川左岸	松本市	和田 神林	集落跡		○			○		8次の調査で、平安の竪穴291軒、掘立15棟、道路状遺構8本、土坑墓5基ほかを発掘 遺構群の中央部を貫く長大な水路や、集落の北縁を画す溝とそれを渡る通路状遺構、大型の金床石を据えた鍛冶遺構らしきものなども確認	松本市教委2001 2017
三間沢川	60	かんぼやしかわにし神林川西	松本市	神林	集落跡		○	○		○	○	縄文中期初頭の土器と平安の灰釉陶器や須恵器、土師器を採集 孔雀文馨(重文)が古瀬戸の茶入と伴出	松本市教委1987
唐沢川	61	みのりかおか美野里ヶ丘	山形村	下竹田	散布地		○						
唐沢川	62	からさわ唐沢	山形村	下竹田	集落跡		○	○				縄文前期末葉の土器が出土	山形村教委1971
唐沢川	63	あなかんのん穴観音	山形村	上竹田	散布地		○						
唐沢川	64	よつや四ツ谷	山形村	上竹田	散布地		○						
唐沢川	65	きたからさわ北唐沢	山形村	下竹田	散布地		○					縄文中期初頭の土器と集石炉2か所を発掘	山形村教委1983
唐沢川	66	しんめい神明	山形村	下竹田	散布地		○	○				縄文前期末葉の土器が出土	山形村教委1982
唐沢川	67	ほんごう本郷	山形村	上竹田	散布地		○			○		縄文中期初頭の集石と平安の掘立1棟を発掘	山形村教委1999 2000
唐沢川	68	きたたけほら北竹原	山形村	下竹田	散布地		○	○					
唐沢川	69	ほりのうち堀ノ内	山形村	下竹田	散布地		○			○		平安の灰釉陶器が出土	山形村教委1983
唐沢川	70	きんやづか三夜塚	山形村	下竹田	集落跡	○	○	○		○		5次にわたる調査で、縄文中期中葉の竪穴3軒や前期末葉から中期中葉の土坑多数を発掘	山形村教委1981 1982 2002 2009b 2010b
唐沢川	71	しもほら下原	山形村	下竹田	集落跡		○			○		縄文中期中葉2を含む中期後葉までの竪穴22軒を発掘 平安時代の灰釉陶器が出土	山形村教委2009b
唐沢川	72	はたしもほら波田下原	松本市	和田 波田	集落跡		○			○		3次の調査で、縄文中期中葉から後葉の竪穴25軒と平安の溝を発掘	松本市教委2015
唐沢川	73	わたたいしどう和田太子堂	松本市	和田	集落跡			○		○		2次の調査で、平安の竪穴3軒ほかを発掘	松本市教委2017

第5表 松本盆地南西部の遺跡一覧表(3)

第2章 遺跡の位置と環境

水系	遺跡番号	遺跡名	市町村	地区	種類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	特記事項	文献
唐沢川	74	わだしもしはら 和田下西原	松本市	和田	集落跡		○						
唐沢川	75	わだなかにしはら 和田中西原	松本市	和田	集落跡		○						松本市教委2015
唐沢川	76	おがみ 麻神	松本市	下波田	集落跡		○	○				3次の調査で、縄文前期末葉1、中期中葉2を含む中期後葉までの竪穴25軒を発掘	波田村教委1972 1973 松本市教委2020
唐沢川	77	ごんげん 権現	松本市	下波田	散布地		○					縄文中期初頭の土器を採集	
唐沢川	78	ごじゅうごね 五十畝	松本市	下波田	散布地		○						
唐沢川	79	こがみ 古神	松本市	中波田	集落跡			○					
唐沢川	80	ねずみがいと 鼠海渡	松本市	中波田	散布地		○					波田町誌は「縄文時代中期初頭の単純遺跡か」と評価	
唐沢川	81	ひらぼやし 平林	松本市	下波田	散布地		○	○		○		平安の土師器を採集	
唐沢川	82	ちゅうげはら 中下原	松本市	中波田	集落跡		○						波田町教委1984
唐沢川	83	からさわ 唐沢	松本市	中波田	散布地		○					縄文前期末葉の土器を多量に採集	
その他	84	おおくぼ1ごうこふん 大久保1号古墳 ぎょうにんづか (行人塚古墳)	山形村	上竹田	古墳				○			終末期古墳	山形村教委1971
その他	85	おおくぼ2ごうこふん 大久保2号古墳	山形村	上竹田	古墳				○			終末期古墳	山形村教委1971
その他	86	たけだあなかんのんこふん 竹田穴観音古墳	山形村	上竹田	古墳				○			終末期古墳	山形村教委1971
その他	87	はちまんだいもんづかこふん 八幡大門塚古墳	山形村	上竹田	古墳				○			伝承	
その他	88	どのむらこふん 殿村古墳	山形村	上竹田	古墳				○			終末期古墳 「錦織部」 墨書土器が出土	
小曾部川	89	なかむら 中村	塩尻市	下小曾部	散布地		○			○	○	土師器を採集	
小曾部川	90	いりけみ 入花見	塩尻市	下小曾部	散布地								
小曾部川	91	こそほはいくえん 小曾部保育園	塩尻市	下小曾部	散布地		○					縄文中期初頭の土器を採集	
小曾部川	92	ながさき 長崎	塩尻市	下小曾部	散布地		○						
小曾部川	93	こそぶやかたあと 小曾部館跡	塩尻市	下小曾部	館跡						○		
小曾部川	94	あしのた 芦ノ田	塩尻市	芦ノ田	散布地					○		須恵器の壺を採集	
小曾部川	95	ふじづか 藤塚	塩尻市	芦ノ田	散布地		○			○		縄文中期中葉の土器と古代の土師器・灰釉陶器を採集	
小曾部川	96	こだん 小段	塩尻市	芦ノ田	集落跡		○					縄文中期中葉3を含む後期前葉までの竪穴16軒や前期末葉の土器も出土	塩尻市教委1979 1993 2008
小曾部川	97	ごんげんどう 権現堂	塩尻市	岩垂	集落跡		○						
小曾部川	98	やまのかみ 山ノ神	塩尻市	岩垂	集落跡		○					縄文前期の竪穴5軒を発掘。前期末葉の土器も出土	
小曾部川	99	わでむら 上手村	塩尻市	岩垂	散布地		○						
小曾部川	100	いわだれはら 岩垂原	塩尻市	岩垂	散布地	○							
小曾部川	101	どうだいら 堂平	塩尻市	岩垂	散布地		○						
その他	102	とりであと 砦跡	朝日村	針尾	城館跡						○		
その他	103	こうだいてらあと 広大寺跡	朝日村	針尾	社寺跡						○		
その他	104	ふるいやかたあと 古い館跡	朝日村	西洗馬	城館跡						○	朝日村誌は地形と地字「古屋敷」「横道」「立小路」から考証	
その他	105	かさねじょうあと 重ね城跡	朝日村	西洗馬	城館跡						○	武居城の詰め城か	
その他	106	たけいじょうせき 武居城跡	朝日村	西洗馬	城館跡						○	長野県史跡	三島正之2013
その他	107	やくしどう 薬師堂	朝日村	西洗馬	社寺跡						○	薬師如来や日光・月光菩薩を所蔵。伝世の経緯は不明	長野県教委1977

第6表 松本盆地南西部の遺跡一覧表(4)

水系	遺跡番号	遺跡名	市町村	地区	種類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	特記事項	文献
その他	108	ふるいやしろあと 古い社跡 ごしゃじんじや (現五社神社)	朝日村	西洗馬	社寺跡						○	鉄鉦と鉄鐸を所蔵。伝世の経緯は不明	三村邦雄1966
その他	109	しもむらのやかたあと 下村の館跡	朝日村	西洗馬	城館跡						○	朝日村誌は地形と地字「古屋敷」「屋敷添」「そり畑」等から考証	三村邦雄1975
その他	110	ごうじり 郷尻かいと	朝日村	西洗馬	その他						○	埋蔵銭が出土	三村邦雄1975
その他	111	あさひじょうあと 旭城跡	朝日村 山形村	古見 上大池	城館跡						○	朝日村史跡	
その他	112	かんこうぞうりん 官行造林	山形村	清水高原	散布地		○	○					
その他	113	きよみずでら 清水寺	山形村	清水高原	社寺跡		○			○	○	平安(10世紀末)の竪穴1軒を発掘	山形村教委2009
その他	114	おおじょうあと 大城址	山形村	清水高原	城館跡						○		
その他	115	おさかじょうあと 小坂城址	山形村	小坂	城館跡						○		
その他	116	いけのいりじょうあと 池ノ入城址	山形村	小坂	城館跡						○		
その他	117	あきばじょうあと 秋葉城址	山形村	下大池	城館跡						○		
その他	118	にやくたくじあと 右澤寺跡	松本市	波田水沢	社寺跡						○		波田町教委2005 2007
その他	119	はたやまじょうあと 波多山城跡	松本市	波田水沢	城館跡						○		
その他	120	てらやま 寺山	松本市	上波田	散布地		○			○		縄文中期中葉の土器、平安の土師器・須恵器・灰釉陶器を採集	
その他	121	さいこうじ 西光寺	松本市	上波田	集落跡		○						
その他	122	なかはたほり うち 中波田堀の内	松本市	中波田	散布地		○						
その他	123	ふるじょう 古城	松本市	中波田	散布地		○	○		○	○	縄文中期中葉の土器、平安の土師器・須恵器を採集	
その他	124	あわじじょうあと 淡路城跡	松本市	波田淡路	城館跡						○		
その他	125	はちまんぐうきた 八幡宮北	塩尻市	洗馬上組	散布地					○			
その他	126	やくしめん 薬師免	塩尻市	洗馬上組	散布地		○						
その他	127	なしのき 梨ノ木	塩尻市	洗馬上組	散布地		○	○				縄文中期中葉の土器を採集	
その他	128	からさわ 瀬沢	塩尻市	洗馬上組	散布地		○					縄文前期末葉の土器を採集	
その他	129	かみたけ 上竹	塩尻市	洗馬上組	集落跡		○			○		縄文前期末葉から中期初頭の竪穴3軒と平安の竪穴3軒を発掘	塩尻市教委1992
その他	130	でんこう 云光	塩尻市	洗馬上組	散布地		○			○	○	縄文中期中葉の土器と平安の土師器・灰釉陶器が出土	塩尻市教委1992
その他	131	しもだいら 下平	塩尻市	洗馬上組	散布地					○		須恵器を採集	
その他	132	みょうぎさんじょうせき 妙義山城跡	塩尻市	洗馬元町	城館跡						○		
その他	133	びわぼし 琵琶橋	塩尻市	洗馬上組	散布地		○	○					
その他	134	なかはら 中原	塩尻市	洗馬上組	散布地		○						塩尻市教委1999

第7表 松本盆地南西部の遺跡一覧表(5)

の動きが再び活発になったといえる。こうしたなかで、西洗馬には10か所中5か所の遺跡が集中している。『朝日村誌』は、『小右記』の記事を典拠に「洗馬の牧に関係した人々の集落であった可能性」[47頁10行]を指摘している。

鎌倉・室町時代 西洗馬地区には、城山の武居城跡(106長野県史跡)があり、三ヶ組遺跡内の郷尻かいと(110)からは1964(昭和39)年に古銭が870枚余出土している¹⁰。また、『朝日村誌』には、重ね城跡(105)や天ヶ城、古い館跡(104)、下村の館跡(109)といった城館跡についての記載がある¹¹。さらに、1323(元亨3)年に妙海によって造像された日光月光菩薩像(長野県宝)と鎌倉時代末期の作という薬師如来(村有形文化財)を本尊として祀っている薬師堂(107)や、鉄鉾や鉄鐸(村有形文化財)を所蔵する「五社または、その前身の社が11世紀ころにはあった」[109頁10行]とみている(108)。城館跡については地名と伝承によって考証しており、仏像や鉄製品は伝世の由来が定かではないが、城山山麓に中世の匂いが漂っている点に留意しながら、今後の考古学的な調査を待ちたい。

江戸時代以降 西洗馬の地名は1578(天正6)年に書写した「春秋之宮造宮之次第」が初出で、行政区画として成立したのも、同時期の天正検地による¹²。1690(元禄3)年の検地帳に掲載されている地名は、「今日まで使われているものも数多い」[641頁14行]とのことから、江戸時代前期には、現在の集落の原形がつくられていたと考える。元禄検地の結果、西洗馬は田が1078畝に対して畑が922畝で、田の面積が畑地を上回っているが、所得評価は田が121石に対して畑が446石で、畑作による所得の方が高かったという[181頁表13]。新田の開発にあたり、外山堰や内山堰が開削され、小和田堤などのため池が作られるまでは、雑穀を主体とする畑作や山林を利用した生業が、平安時代以来連綿と営まれてきたと考える。現代でこそ林業の衰退は著しいが、幕末から昭和初期にかけて養蚕のための桑栽培が行われ、戦後は西洋野菜の生産へと変化するなど、西洗馬地区では畑作を中心とした生業が現代も続いている。一方で、昭和時代後期の大規模な土地区画整理事業や平成時代の住宅団地造成事業などによって、在来の景観は変貌しつつある。

註10 三村邦雄氏によると、最新の古銭は、初鑄年代が1240～1245年の「景定元宝」という(三村1975)。長野県埋文センターが発刊した山鳥場遺跡・三ヶ組遺跡の発掘調査報告書は、『朝日村誌下巻』51頁を引用して「38種282枚の銅銭が出土したとの記録が残る」としているが、三村氏は「破損品2枚を加えて総計870であった。(中略)なお発見者の話によると、発見の際鏝に当たって飛び散って拾わなかったのがあったが後にそれを探して拾った者があった由であるから、実際に埋蔵されていた数は、前記した数よりも少し多かったはずである」と記している。雑誌『中信史学』の探索にあたり、小林康男、小松芳郎、直井雅尚、原田健司の各氏にお世話になった。

註11 三村邦雄氏は、前掲書の中で、「下村の屋敷跡」とする辺りに、「郷尻かいと」「将監屋敷」「古屋敷」などの屋敷群が「太子堂」「市道」「蓮台場＝墓地」などとともにあったと考証している(三村1975)。

註12 朝日村誌によると、「春秋之宮造宮之次第」は、1488(長享2)年の写しを、1578年、再び写した文書であるという。「写し」の内容が正確ならば、遅くとも15世紀末までには「西洗馬」という地名が使用されていたということになる。村誌は「戦国時代の中頃には中心が芦ノ田(今の本洗馬)に移っていった。西はずれの洗馬という意味で、(中略)西洗馬の名が起ったと考えられる」としている。

第3章 調査の方法

第1節 発掘作業の方法

1 遺跡記号と調査区の設定

調査は、県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に則して実施している。

(1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称は、村教委によって登録されている埋蔵文化財包蔵地名で、遺跡記号は、氏神遺跡(UJIGAMI):「EJG」である。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で表したもので、1文字目の「E」は長野県内を10地区に区分し、東筑摩郡・塩尻市・松本市・安曇野市に付与した名称、2文字目と3文字目は遺跡名のローマ字表記2文字を選択したものである。各種記録類や遺物の注記に遺跡記号を用いた。

(2) 調査区(グリッド)の設定と呼称(第2・6図)

氏神遺跡における調査範囲の内、発掘調査区は、宅地造成に伴い敷設される5本の道路部分が対象となるため、対象地を、北東から南西に1～5トレンチと呼称した。

測量基準点は、世界測地系を用い、国家座標がわかる3級基準点A1等から4級基準点測量を行い、発掘調査区の周辺に6点(U-1～6)を設定したほか、測量水準点も3点(UH-1～3)設けた。

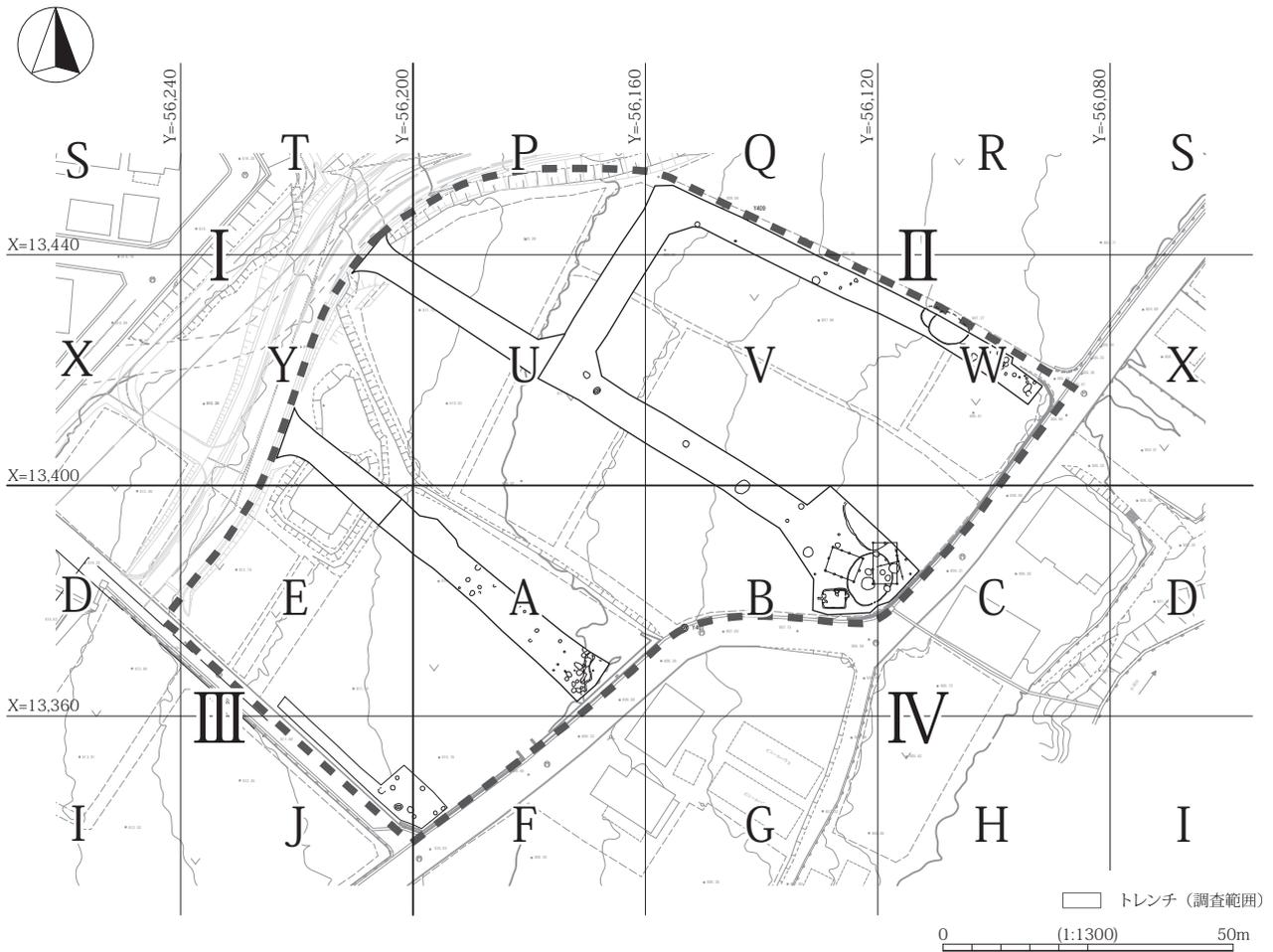
調査範囲は、国土地理院の平面直角座標第Ⅷ系の原点(東経=138°30'0"、北緯=36°0'0")を基点に、200の倍数値を選んで測量基準線を設け大々地区としたほか、第7図のとおり大地区から小地区を設定した。氏神遺跡の調査位置は東経137°52'34"、北緯36°07'08"、調査範囲南隅の3級基準点A1の標高は810.849mである。

次章以降では、検出した遺構のうち、土坑や焼土跡はトレンチごとに記述し、一覧表では小地区で位置を示したが、それ以外の遺構は中地区単位に位置を記述している。

2 表土の掘削と遺構の検出

発掘調査区内を重機により、基本層序Ⅳ層下部まで掘削し、手作業により遺構検出を行った。遺構検出は、3トレンチの一部を除き、基本層序Ⅴ層上面で実施した。縄文時代の遺構は黒褐色土が、平安時代の遺構は黒色土が落ち込む状況で確認した。調査範囲東側ほど地層の堆積状況は良好で、西側に向かうほど削平を大きく受け、2トレンチ及びそのほかのトレンチの西端は現耕作土(基本層序Ⅰ層)直下がⅤ層であった。また、検出面には、耕作に伴うトレンチャーによるかく乱が2トレンチを除くすべてのトレンチにおいて認められた。出土遺物は、遺構が明確となった場所では遺構ごとに、かく乱から出土した遺物はトレンチごと一括し、その他はトレンチごと一括して取り上げた。

基準線と地区(グリッド)の設定



大々地区(200×200mグリッド) : I・II・III・IV

例 : IVC06-13 グリッドの座標位置

A	B	C	D	E	200m
F	G	H	I	J	
K	L	M	N	O	
P	Q	R	S	T	
U	V	W	X	Y	
					40m

大地区(40×40mグリッド) : IVA…IVY

IVC06-01	IVC06-02	IVC06-03	IVC06-04	8m
IVC06-05	IVC06-06	IVC06-07	IVC06-08	
IVC06-09	IVC06-10	IVC06-11	IVC06-12	
IVC06-13	IVC06-14	IVC06-15	IVC06-16	
				2m

小地区(2×2mグリッド) :
IVC06-01…IVC06-13…IVC06-16

01	02	03	04	05	40m
06	07	08	09	10	
11	12	13	14	15	
16	17	18	19	20	
21	22	23	24	25	
					8m

中地区(8×8mグリッド) : IVC01・IVC02…IVC06…IVC25

第6図 調査範囲及びトレンチ、グリッドの配置図

3 遺構の認定と精査

(1) 遺構の認定

氏神遺跡では、V層上面の遺構検出で確認した落込みをすべて遺構と認め、埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。アラビア数字は4桁とし、千の位に検出したトレンチ番号を、それ以下の位は、各トレンチにおける遺構の種類ごとの通し番号を付けた。

SB：2mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘込み。

SK：単独、もしくは他の掘込みとの関係が認められないSBより小さな掘込み。

SA：SBより小さな掘込みが列として配置するもの。

ST：SBより小さな掘込みが一定間隔で方形に配置しているもの。

SF：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの及び、炭化物の集中範囲。

竪穴建物跡は、整理作業の結果、新たに遺構の切り合いや拡張が認められたものは、遺構番号の次に小文字のアルファベットを付けた。また、土坑と認定して調査を進めたものの、段下げや半裁による観察によって人為的な掘り込みと認めがたいとしたものや、掘立柱建物跡の柱穴に組み込まれたものは欠番とした。詳細については、個別遺構の調査経過に記してある。

(2) 遺構の精査

竪穴建物跡は、検出面で遺構の形状を確認後に埋土の堆積状況、床面の状況及び深度を確認するため、トレンチの断面やセクションベルトを利用し、その脇に先行トレンチを設定して掘削した。埋土の堆積状況及び床面を観察後、遺構全体をセクションベルトの区割単位に層位ごと床面まで掘削し、埋土の堆積状況を記録した。遺構埋土の掘削は移植ゴテ及び両刃鎌を用いた。埋土の堆積状況を記録後にセクションベルトを外し、壁面及び床面を精査し、炉跡、カマド、壁溝、柱穴等の施設を検出した。炉跡及び壁溝は精査でプランを確認後に完掘し、柱穴は柱痕を確認するための段下げを行いで完掘記録を行った。柱穴は、半裁とセクションの記録、掘方調査を行った。なお、掘方の半裁は、断面形及び埋土の観察・記録を正確に行うため、床面ごと掘削したものもある。カマドは、焚口部と煙道部の中央を結ぶラインと、それに直交し、両袖部の中央を結ぶライン及び壁面の煙道取付け部分にセクションラインを設定し、6分割しながら精査とセクションの記録をした。燃焼部と両袖部を残し、煙道部を掘削した状態で完掘記録を採り、最終的に燃焼部と袖部も掘削しながら、セクションを追記した。なお、炉跡については、科学分析のために炭化物採取及び微細遺物の採取を目的として、すべてフルイにかけた。採取した炭化物は年代測定を行った（第5章第4節）。

掘立柱建物跡及び杭列は、柱痕の有無を確認するため段下げを行い、柱痕を確認した場合は、その個所をさらに段下げし、掘立柱建物跡及び杭列の完掘状況写真を撮影した。その後、掘立柱建物跡のピットは四分分割、杭列のピットは半裁し、断面記録作成後に完掘して、完掘状況を記録した。

土坑の精査は、段下げまたはトレンチ跡を先行して掘削し、検出面で確認した黒褐色土または黒色土が人為的な掘り込みか否か、遺構の切り合い関係、柱痕の有無を確認した。その後、遺構と認定したものは形状を確認後に半裁し、埋土の堆積状況を記録後に完掘してプラン全体を記録した。小形のものには断面形及び埋土の観察・記録をより正確に行うため、断ち割りを行った。陥し穴等の深度が深く、調査時に土砂崩落等の危険が伴う遺構は、安全に掘削できる深度まで通常の土坑と同じ手順で調査した。遺構上部のプラン及びセクションを記録した後に断ち割りを行い、遺構下部を半裁した。セクション記録後に完掘し、完掘状況写真の撮影及び底面のプランを記録した。

竪穴建物跡内の遺物は、原則として、セクションベルトを境界とした4分割単位に、出土層位別に取り上げた。SB1001の埋土中の遺物やSB3001のカマド周辺の遺物は、接合・復元が可能な遺物が多かったた

め、写真撮影または図化記録を作成し、出土地点の記録が必要な場合は遺構ごとの遺物番号を付けて取り上げた。人骨は検出状況を図及び写真で記録後、発泡ウレタンで保護して取り上げた。

4 記録作成

図化記録は、原則として、地形図、トレンチ配置図、遺構平面図及び遺物出土状況図は業務委託による単点測量及び3D用写真撮影を行い、基本層序図、遺構断面図は職員及びその指示のもと発掘作業員が手測量（遣り方測量）で行った。

竪穴建物跡の平面図は完掘段階（掘方掘削前）に、土坑は埋土除去後に業者が単点測量し、単点図は職員が結線した。ただし、S B 1001 や S B 3001 のカマド周辺遺物出土状況等は、コンパクトデジタルカメラで撮影した画像を、業者が3D画像として処理し、3D画像と遺構を照合して図面を完成させた。なお、遺構図は1/20の縮尺を基本とし、必要に応じて1/10の縮尺で測量した。また、調査範囲図、地形測量図は、業務委託で1/100を基本として作成した。

写真記録は、一眼レフデジタルカメラを使用して撮影した。データはLAW・JPEGで保存した。遺跡の全景写真は、業務委託でラジコンヘリコプターを使用して撮影した。

第2節 整理作業の方法

1 整理等作業

(1) 基礎整理

基礎整理は、発掘作業中に実施する内容を含んでいるが、記述の便宜上、本節で取扱うことにする。基礎整理の内容は、出土品及び記録類の点検、整備である。

出土品について

発掘作業ではポリ袋に出土場所や層位、出土年月日を記載して、おおまかに土器類と石器類に分別して取上げたため、まず、明らかな記載ミスや分別を訂正しながら、テンバコに収納して「遺物台帳」を作成した。テンバコは、土器類が54箱、石器・金属器類23箱のほかウレタン梱包した骨類が1梱包あり、計78箱を埋蔵物発見届の「出土遺物」として届け出た。このほかに、炉跡の埋土をフルイに掛け取り出した炭化物等や土壌サンプルがある。

続いて、テンバコごとに遺物洗浄と遺物注記を行った。ただし、土器は1cm角以下程度の微細な資料、石器は注記により観察が難しくなる資料及び1cm角以下程度の微細な資料は、ポリ袋にまとめて収納した。注記は、遺跡記号と出土遺構記号・番号のほかに次の表記を用いた。

遺構外→Z	埋土→表示しない	攪乱→カクラン	床面→床	炉跡→炉
ベルト→ベルト	1区→1区	2層→2層	ピット→ピット	トレンチ→Tr

記録類について

図面類は、記載漏れや明らかな記載ミスを補足、訂正したうえで、トレンチごとに図面番号を「遺構台帳」に登録した。続いて、コピーした平面図と断面図を使用して図面の照合を行い、修正箇所は赤字で記入した。これを第二原図とし、原図と同じ図面番号を付けて収納した。断面図の土層説明は、図面編集の便を図るため、すべてエクセル表に転記した。

発掘作業中に撮影した写真は、「撮影記録簿」に撮影日、撮影番号、撮影内容を記載した。「撮影記録簿」をもとに、「写真台帳」を作成した。写真は、LAW データ・JPEG データを記録し、ハードディスクに保

管した。

発掘作業中に記録した遺構調査に関わる記録類は、第二原図や写真と照合しながら「遺構所見整理カード」にまとめた。カードには、調査経過、遺構の構造、遺物等の所見を記載した。記載に当たっては、精査の目的や発掘作業中に試行錯誤した過程、結論を導くに至った事象に留意するよう心掛けた。併せて、「遺構台帳」に竪穴建物跡と掘立柱建物跡、杭列、土坑の主軸方位、規模、平面形と断面形、出土品のコンテナ番号を記入した。

(2) 出土品整理

遺物の数量把握と管理台帳へ登録

土器類については、テンバコ単位、ポリ袋単位に破片数と重量を計測し、「遺物台帳」へ記載した。計測後、遺構あるいはトレンチ単位に土器接合を行い、接合可能な土器のメモ写真を撮影した。この段階で遺構の時期と性格を決定した。資料化が必要と判断した遺物を選別（一次選別）し、トレンチごとに通し番号を付して「遺物管理台帳」に登録した。台帳には出土場所、器種や部位、形態や文様などを記載した。登録遺物数は448個体である。

土製品も土器類と同様に「遺物管理台帳」に登録した。登録遺物数は11個体である。

石器類については、加工が認められるすべての石器、黒曜石産地推定試料全点について、トレンチ単位に通し番号を付し「遺物管理台帳」に登録した。台帳には出土地点、器種、遺物の属性などを記載した。登録遺物数は242個体である。さらに、器種分類を行い、管理番号を付けた石器類は法量と重量、それ以外の石器は器種及び石材別に点数及び重量を計測した。

科学分析

発掘調査当初から、放射性炭素年代測定と黒曜石産地推定を計画し、分析試料のサンプリングを行った。分析業務委託は令和2年度の基礎整理と令和3年度の本格整理で実施した。

年代測定は、遺構の埋没時期や土器型式と整合を見極めるため、土器付着炭化物を対象に行う予定であった。しかし、良好な土器付着炭化物が採取できなかつたため、縄文時代の竪穴建物跡S B 3002は炉跡出土炭化物を、平安時代の竪穴建物跡S B 3001はカマド石に付着した炭化物を試料として用いた。

黒曜石原産地推定は、縄文時代中期初頭の竪穴建物跡及び、中期中葉の竪穴建物跡から出土した黒曜石製石器のうち、石鏃等の器種を目安にそれぞれ50点、計100点の試料を抽出して行った。

発掘調査において、氏神遺跡は火山灰の堆積が良好であることが判明した。火山灰の供給源や堆積年代を把握し、遺跡の立地する地形形成過程をより精緻に理解するために、火山灰層（基本層序V～IX層）を層単位にサンプリングし、火山灰分析を行った。

土器の接着・補強と遺物の拓本・実測

遺物の実測作業と写真撮影の際に、接着が必要なものは接着した。その際に補強が必要なものは石膏等を用いて補強を行った。接着の結果、完形とほぼ完形に復元できた29個体の遺物は、業務委託による実測を行った。破片資料は拓本及び断面実測を基本としたが、拓本では土器の特徴が表現できないものは実測を行った。実測、拓本作業では土器の外形や断面を正確に測ることはもちろん、施文具や施文の切り合い、輪積痕が残るものはそれがわかるよう図化することに留意した。

(3) 図面整理

遺構図の整理は、セクションポイントやセクション名、水準線、炉跡、かく乱、その他を青書補足した第二原図をもとにイラストレーターを用いてデジタルトレースを行った。デジタルトレース図と業者に委託した地形図や基準線図を合成して、遺構全体図と割付図を作成した。第二原図以外、整理作業の過程で作成した遺構図等は保管対象としていない。

遺物図はトレンチ単位に図面番号を付け、遺物図作成台帳に記録した。原図をもとにデジタルトレースを行った。

(4) 遺物写真撮影・整理

遺物写真は、委託によりデジタル写真撮影を行った。土器の特徴を最も反映する面を正面として撮影したが、正面だけでは土器の特徴を表現できないものは展開写真を撮影した。この時、石膏で補強した箇所は補彩した。撮影 No. をファイル名とした撮影台帳を作成し、撮影日、撮影番号と内容を記した。デジタル写真データは JPEG・TIFF・LAW のデータ単位で撮影番号順にハードディスクと DVD に記録した。

2 報告書作成と資料収納

(1) 報告書作成

原稿と図版の作成

第1章「発掘調査の経過」は、県教委や村教委等の協力を得ながら、調査前の調整や手続について触れたのち、作業別に発掘調査の経過を記載した。

第2章「遺跡の位置と環境」は、氏神遺跡が立地する鎖川左岸の地形を理解するために、段丘面の形成過程と年代、火山灰の供給源を概観した。また、調査成果を地域史の中に位置づける作業を補助する意味で、遺跡が位置する朝日村西洗馬地区の歴史の変遷を辿るとともに、松本盆地南西部の遺跡を概観した。

第3章「調査の方法」は、基本的に県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に沿って行った調査の方法と、氏神遺跡で採用した調査方法については、あえてそれらとの重複を厭わずに記述した。

第5章「調査の成果」は、原則として、発掘作業や整理作業を通じて確認した事実関係を中心に記載することを心掛けた。

遺構のうち、竪穴建物跡や掘立柱建物跡、杭列については個別図版を作成し、原稿は「遺構所見整理カード」に記載した内容を中心に記述した。とくに調査目的や方法に力点を置き、「調査経過」の中で詳細に記載した。また、本文中にスナップ写真を入れ、読者の理解に供するよう努めた。土坑は、トレンチごとの割付図で位置関係を示すとともに、平面と断面の形状や出土遺物等で特徴的なものを抽出して個別図を掲載し、説明を付けた。なお、遺構一覧表に規模等を記載した。

遺物のうち、土器は拓本・実測を行ったものを分類し、完形もしくは完形に近いものや形態・文様等に特徴のあるものを選別（第二選別）して図版を作成し、遺構ごとに記述した。人骨については、京都大学名誉教授茂原信生氏による鑑定内容を編集者が記した。また、自然科学分析については、委託業者の報告書を参照しながら、分析目的や方法、結果の要点を記述するとともに、考古学的な調査所見との整合性等について簡潔にまとめた。なお、業務委託を行った測量と科学分析の成果は、光ディスクに収録した。

報告書の編集と刊行

報告書の本格的な編集作業は、2021年度から着手した。報告書作成に当たり、2021年4月28日と6月30日、11月8日に編集会議を行った。会議で指摘を受けて遺構図・遺物図の表現方法や章立てについて検討を行い、報告書の内容を練り上げていった。

縄文時代と平安時代は別の章立てとし、それぞれの時代の特徴が理解しやすいように工夫し、要点が把握しやすいよう章始に概要を設けた。また、カラー写真を挿入した「発掘調査の概要」を設け、専門的な報告書の内容を広く地元住民に理解してもらえるよう試みた。

報告書は県内外の埋蔵文化財関係機関、大学、地域の図書館等に配布するほか、奈良文化財研究所の「全国遺跡報告総覧」に登録する予定である。

(2) 資料収納

土器・石器等の人工遺物は、材質、種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構、グリッド等の地点別にテンバコに収納し、「遺物収納台帳」を作成した。

実測図類は、遺構実測図、遺物実測図別に、通し番号（図面番号）を付けて「図面収納台帳」に登録し、図面ファイルに収納した。

遺構・遺物写真は整理段階でアルバムに収納し、台帳を作成した。写真のデジタルデータは、整理等作業時から使用しているハードディスクに収納した。

第4章 朝日村氏神遺跡の調査概要

氏神遺跡は長野県東筑摩郡朝日村西洗馬 1845 - 1 ほかにも所在する。朝日村向原地域道路等整備事業に伴い、令和2年4月から8月にかけて発掘調査が実施され、2,000㎡の範囲を調査した。その結果、縄文時代中期初頭と中期中葉の竪穴建物跡や陥し穴、土坑等、後期後葉の陥し穴、また平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、墓坑、土坑等の遺構を調査した。これらの遺構に伴い、縄文時代草創期の石器、前期末葉の土器、中期初頭、中期中葉の土器と石器、後期後葉の土器、また平安時代の灰釉陶器や土器、鉄製品が出土した。

第1節 氏神遺跡の位置と環境

氏神遺跡は、鎖川の支流である内山沢左岸の標高約 810 m の段丘上（波田面）に立地する。内山沢流域には、この遺跡の他に、山鳥場遺跡や中村遺跡、大日遺跡、向原遺跡、また鎖川流域には熊久保遺跡等、多数の縄文時代の遺跡が分布する。



写真1 遺跡から松本盆地を望む（南西から）



写真2 遺跡から向陽台第1・2期住宅団地と熊久保遺跡を望む（南東から）



第2節 縄文時代

縄文時代でも、約 5500 年前の中期初頭と、約 5000 年前の中期中葉の時期の遺構と遺物が出土した。

中期初頭の遺構は、竪穴建物跡 3 軒、陥し穴 1 基、貯蔵穴や墓坑の可能性のある土坑 32 基を検出した。竪穴建物跡は、いずれも楕円形を呈し、最大径が 9 m を越える大形のものとして推定する。これらの遺構から、長野県のみならず、南関東や山梨県、北陸まで分布が広がる五領ヶ台Ⅱ a 式と呼ばれる土器の他、長野県の在地の土器である踊場系、関西地方の土器や岐阜県下呂市が原産地の下呂石でできた石器が出土した。これらの遺構と遺物は、縄文時代中期初頭における人の移動や物の流通を研究するために非常に重要なもので



写真3 縄文時代中期初頭の竪穴建物跡 (SB3002)
(西から)



写真4 竪穴建物跡 (SB3002) 出土遺物



写真5 縄文時代中期初頭の竪穴建物跡 (SB3003)
(南東から)



写真6 竪穴建物跡 (SB3003) 出土遺物



写真7 縄文時代中期初頭の竪穴建物跡 (SB4001)
(北西から)



写真8 竪穴建物跡 (SB4001) 出土遺物



写真9 縄文時代中期
初頭の土坑 (SK4032)
遺物出土状況
(南西から)

写真10 縄文時代中期
初頭の土坑 (SK3025)
遺物出土状況 (南から)



写真11 縄文時代中期初頭の土坑から出土した遺物

中期中葉の遺構は、竪穴建物跡2軒、貯蔵穴の可能性のある土坑3基を検出した。SB1001の竪穴建物跡は楕円形を呈し、最大径6m45cmを測る。遺物の出土状況が特徴的で、「吹上パターン」と呼ばれる、完形の土器や石器が投げ捨てられたような状況で出土している。土器は藤内I式を主体とし、平出第Ⅲ類Aと呼ばれる土器を伴っている。これらの土器は長野県の在地の土器で、遠隔地のものはみいだせない。中期初頭とは人や物の動きが異なっていたことが予測できる。



写真12 竪穴建物跡 (SB1001) (北西から)



写真13 竪穴建物跡 (SB1001) 遺物出土状況 (南から)



写真14 竪穴建物跡 (SB1001) 出土遺物

第3節 平安時代

平安時代は、今から1000年ほど前の10世紀中葉から後葉の時期の遺構と遺物が出土した。竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡2棟、墓坑1基、土坑14基を検出した。SB3001の竪穴建物跡は方形を呈し、最大長は4mである。東に出入口、西にカマドが作られる。この竪穴建物跡は、人為的に埋められ、カマドは壊されたものと推定する。カマドからは多量の土器が出土した。掘立柱建物跡は竪穴建物跡の周囲に作られており、竪穴建物跡と共に集落を構成していたと推定する。この集落から40mほど離れて、墓坑を発見した。松本盆地において、この時期の墓坑の調査例は少なく、氏神遺跡は、集落と墓坑の関係を研究するための希少な例である。



写真15 平安時代の掘立柱建物跡(ST3001) (南東から)



写真16 平安時代の竪穴建物跡と掘立柱建物跡 (北西から)



写真17 平安時代の竪穴建物跡 (SB3001) (東から)



写真18 SB3001のカマド (東から)



写真19 SB3001の遺物出土状況 (東から)

写真20 竪穴建物跡 (SB3001) 出土遺物



第5章 調査の成果

第1節 遺跡の概要と基本層序

1 遺跡の概要 (口絵1、第8図)

氏神遺跡は、内山沢川左岸の北東向き緩斜面の段丘上にあり、遺跡の範囲は、北東と南東側が段丘端部、北西側が、向陽台団地の造成に伴って新設した村道西洗馬 87 号線の東側に展開する。遺跡範囲の南西側には、向原遺跡が隣接しているものの、境界は不明瞭である。村道西洗馬 7 号線を境界とすると、遺跡全体の面積はおよそ 47,000㎡となる。今回の調査地点は、遺跡範囲の中央部よりやや北側にあり、向陽台住宅団地 3 期造成工事によって敷設される村道部分 (2,000㎡) が対象になる。

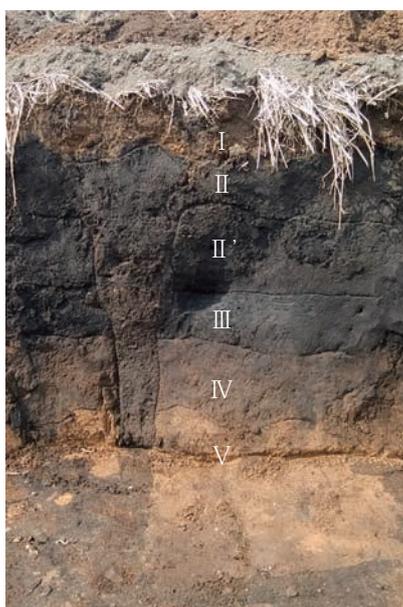
氏神遺跡の発見は昭和 20 年代に遡り、縄文時代草創期の有舌尖頭器、縄文時代前・中期の土器、土偶及び石器、弥生時代の磨製石鏃、平安時代の灰釉陶器や土師器などが採集されている (朝日村村誌刊行会 1991)。今回の氏神遺跡における初の発掘調査によって、縄文時代前・中・後期の遺物と縄文時代中・後期の遺構、弥生時代の遺物、平安時代の遺構・遺物を確認することができた。

2 基本層序 (第7図)

氏神遺跡は、砂岩及び泥岩を主体とする混在岩を基盤として、御嶽乗鞍火山帯を供給源とするロームが厚く堆積し、表層を腐植土が覆っているとみられる。

1 及び 3 トレンチの層序断面を観察したところ、腐植土を 1 層 (Ⅲ層)、ロームを 5 層 (Ⅴ～Ⅸ層)、腐植土とロームの漸移層を 1 層 (Ⅳ層) を確認することができた。Ⅰ層は耕作土、Ⅱ 及び Ⅱ' 層は現代のゴミ等が混入する客土である。Ⅲ層には平安時代の遺物が包含され、同時期の遺構はⅣ層上面で確認することができるが、その面では遺構のプランが不明瞭であったため、今回は、3 トレンチの一部を除いて、Ⅴ層上面で検出した。また、縄文時代の遺物が包含されているのはⅣ層で、同時代の遺構はⅤ層上面で検出できる。

パリノ・サーヴェイ株式会社による火山灰分析 (詳細は添付 DVD を参照) によれば、Ⅴ層には始良 Tn テフラに対比される、T-T f (把ノ沢火山灰層) に由来するバブル型火山ガラスが含まれるとの分析結果を得た。Ⅴ層は漸移層を挟んで腐食土のⅢ層に移行するため、遺跡が立地する河成段丘に降下した最終のロームと考えられる。したがって、この層は約 30,000 年前からロームの降下を終了するまでの、長期間に形成されたと推定できる。Ⅵ層はⅤ層とⅦ層の漸移層と考えられる。Ⅶ層には、木曾御岳火山を供給源とする、U p. S L (ニセスコ

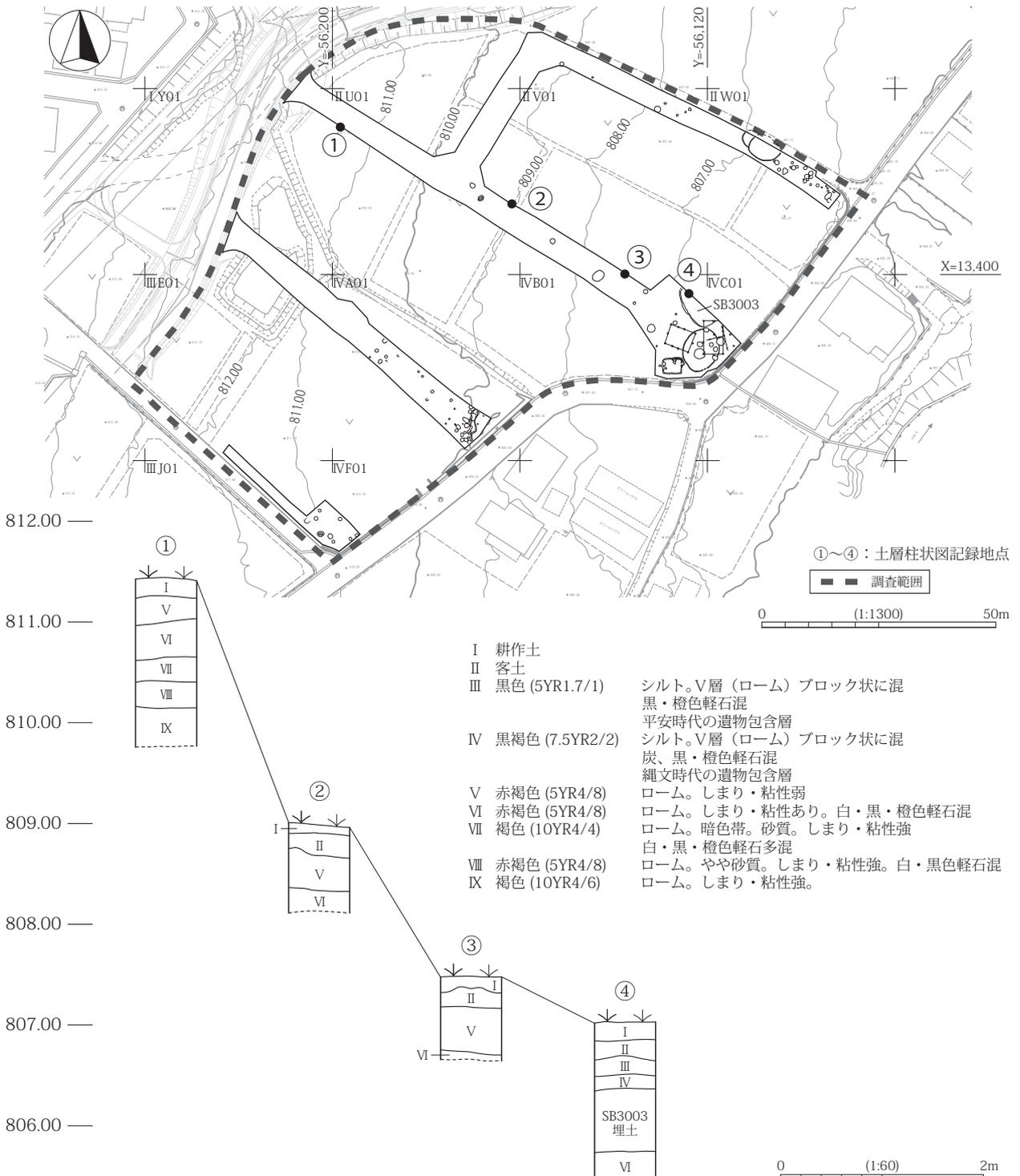


1 トレンチ北西土層断面

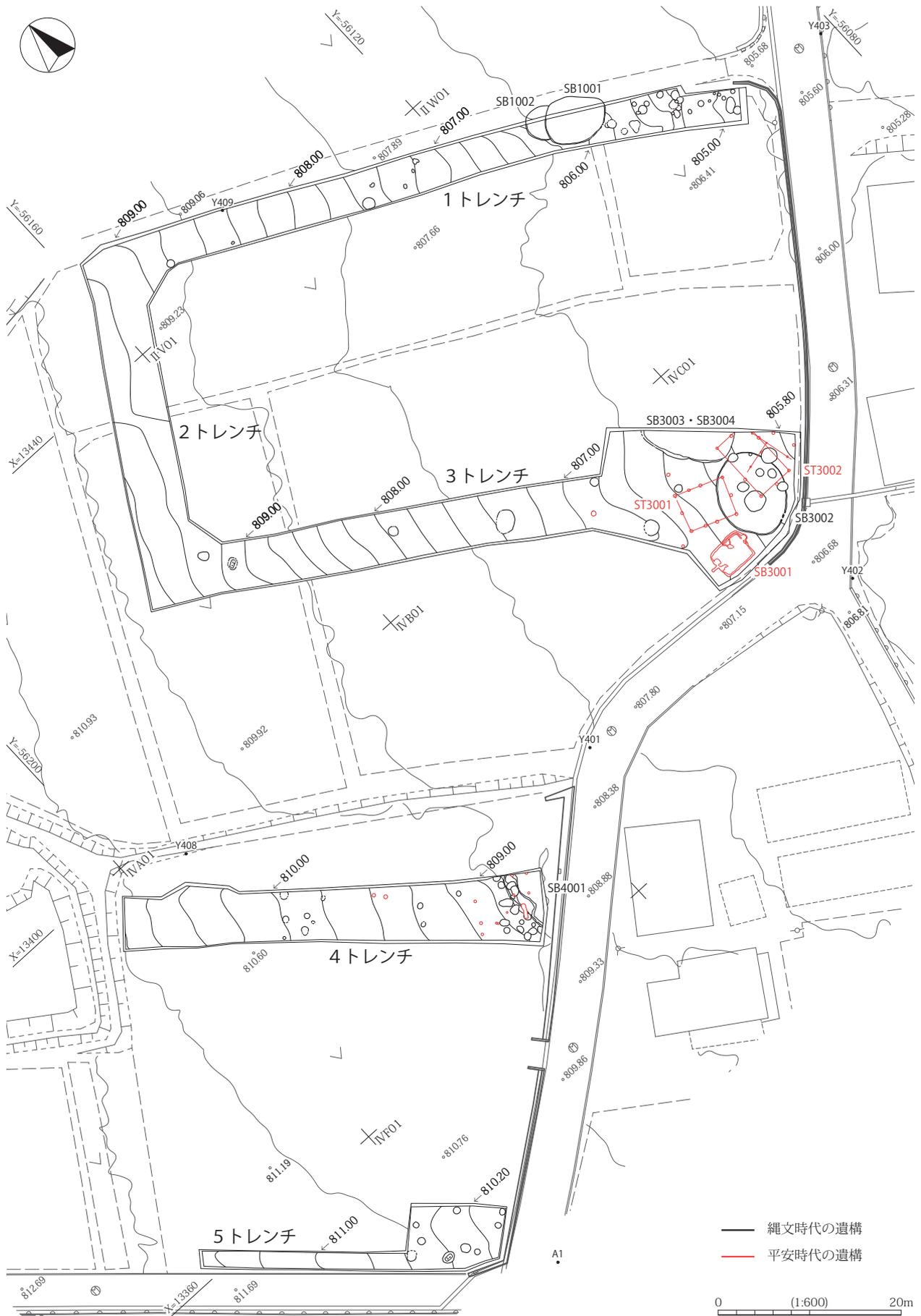


3 トレンチ④土層断面

ラピ)の降下堆積物に対比されるブロック状堆積物が認められる。噴出年代は約40,000年前と推定する。Ⅷ層はⅦ層とⅨ層の漸移層である。Ⅸ層ではDKP(大山倉吉テフラ)に由来する碎屑物が含まれていると推定する。DKPの噴出年代は55,000年以上前とされる。波田面の形成はDKP等の軽石層の降下前後(60,000~40,000年前)であり、森口面はDKP等の軽石層に覆われないと指摘されている(小口1988)。遺跡周辺の段丘面については第5図を参照されたい。火山灰分析の結果と、小口氏の先行研究を総合すれば、氏神遺跡が立地する段丘面は、波田面であることが確認され、波田面はⅨ層が堆積した前後に形成された段丘面であることも明らかとなった。



第7図 基本層序図



第8図 遺構全体図

第2節 縄文時代

1 概要

氏神遺跡で確認した縄文時代の遺構は、竪穴建物跡5軒、土坑81基、焼土跡1基で、縄文時代中期初頭、中期中葉、後期後葉に属すると推定する。1トレンチで2軒、3トレンチで2軒、4トレンチで1軒の竪穴建物跡を確認した。標高808.8m付近にある竪穴建物跡S B 4001が最も高く、806.0m付近のS B 1001が最も低い。いずれも、各トレンチの中では標高の低い東側に偏在する。土坑は、2トレンチを除くすべてのトレンチで確認した。標高810.6m付近のS K 5001が最も高く、805.0m辺りのS K 1030が最も低い。竪穴建物跡と同様に、各トレンチの東側に集中する傾向があるものの、西側へも広がる。焼土跡は1トレンチで確認した。なお、土坑は、平面や断面の形状や埋まり方等によって用途を類推できるものがあり、それによって分布範囲は異なるが、詳細は2項で後述する。

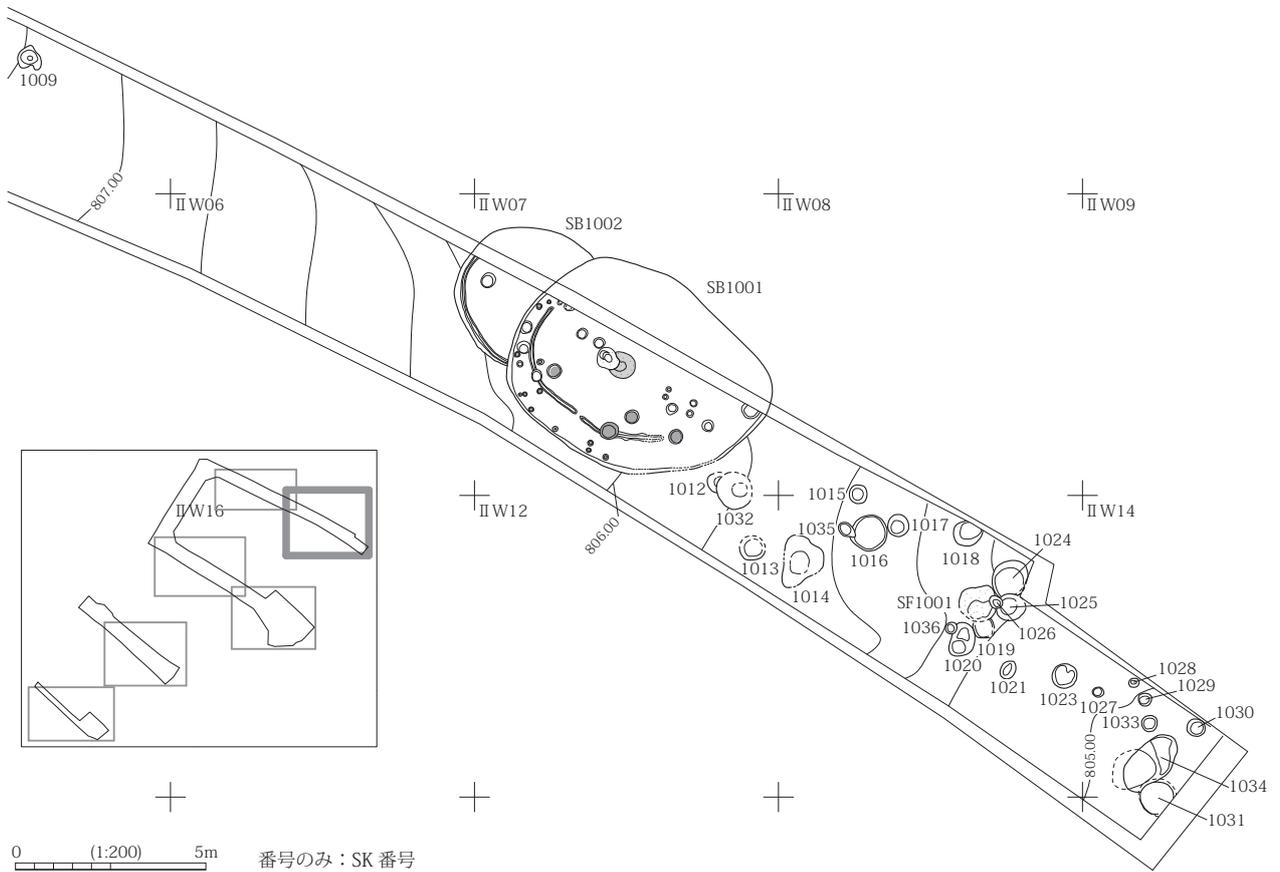
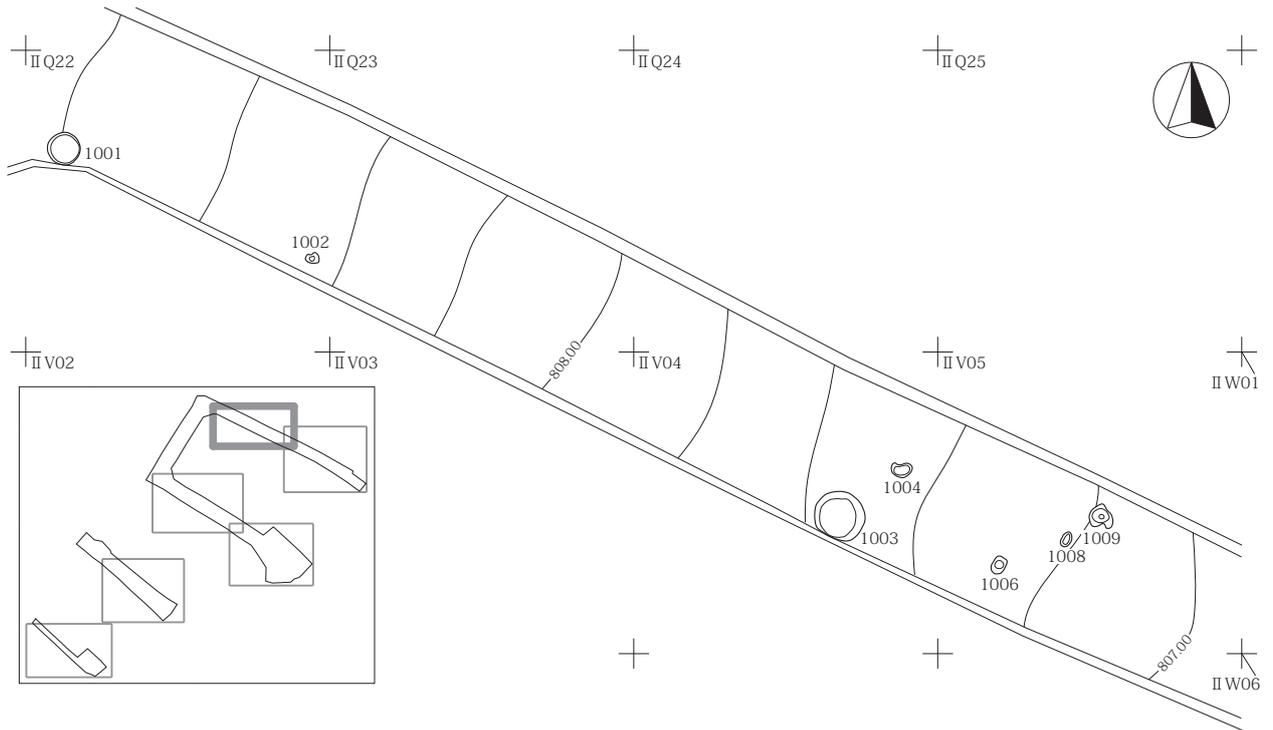
縄文時代の遺物として草創期と推定する有舌尖頭器、中期の土器片、詳細な時期が不明な石器や、装身具、土偶の採集が報告されている（朝日村村誌刊行会1991）。今回の発掘調査により、草創期、前期末、中期初頭、中期中葉、後期後葉の土器片11,260片（総重量約146kg）、石器1,423点（総重量約134kg）、土製品12点の遺物を確認した。

草創期の遺構は検出されなかったが、SK4025から出土した尖頭器（427）の破片が、当該期の有舌尖頭器の先端部である可能性がある。

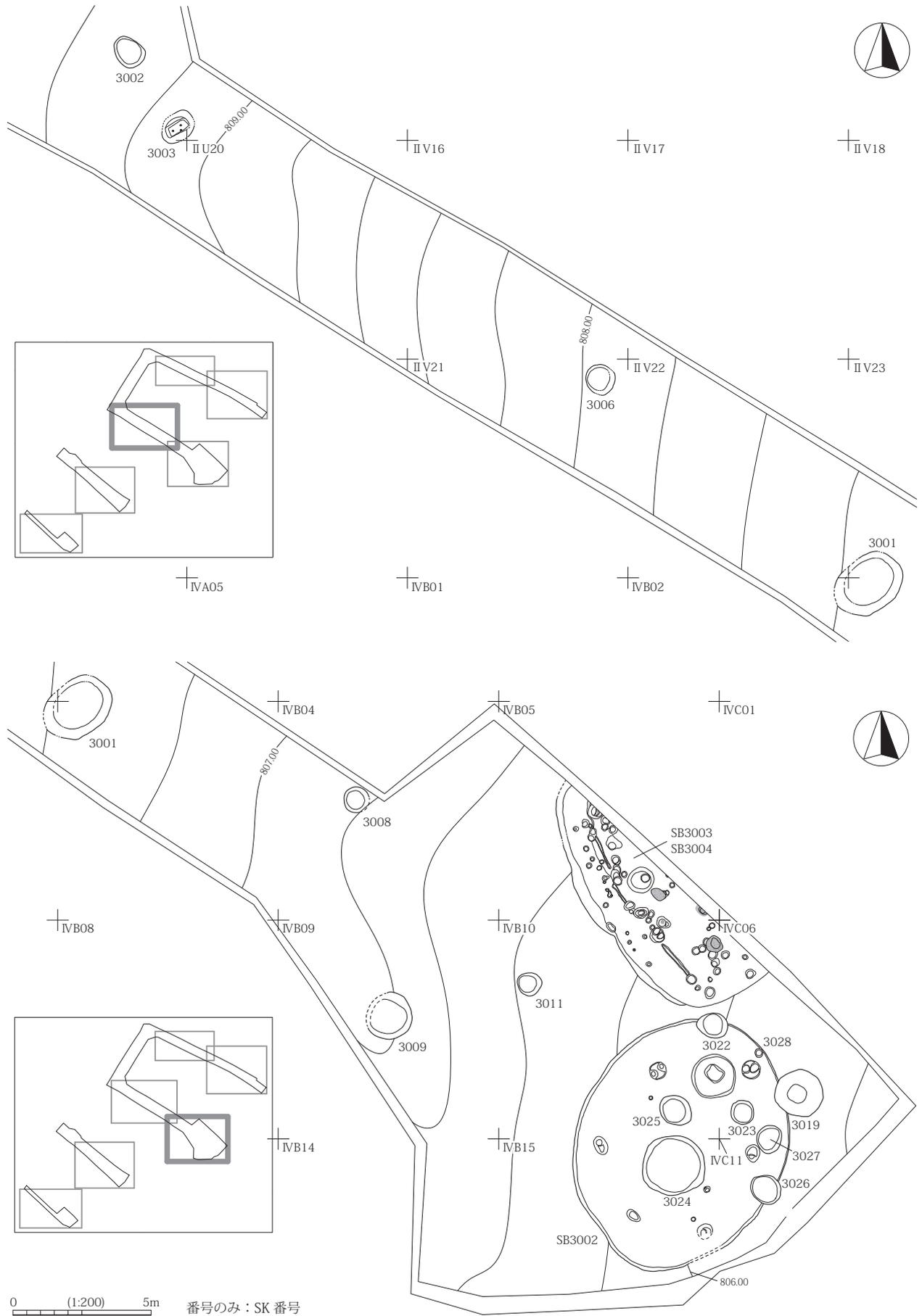
前期末の遺構は検出されなかったが、土器片が出土している。これらの土器片は、中期初頭に属する遺構（S B 3002、3003、4001、S K 3025）の埋土から出土した。十三菩提式に並行する土器（166）や三角印刻文を有する土器（164、398等）、浮線文系の土器（167、168、169、301等）が認められる。

中期初頭の遺構は、竪穴建物跡3軒（S B 3002、3003、4001）、陥し穴1基（S K 5002）、貯蔵穴及びその可能性がある土坑18基（S K 1031、1034、3022～3025、4024～4026、4028、4029、4034、4038、4039、4041、4045、5003～5005）、墓坑の可能性がある土坑3基（S K 4032、4042、4043）用途不明の土坑11基（S K 3001、3009、4012、4020、4035～4037、5006～5009）を確認した。中期初頭の土坑は、同時期の竪穴建物跡の周辺及び1トレンチの南東隅に集中して分布する。したがって、これらの遺構の周囲に立地する時期不明の土坑も同時期に属する可能性が高い。これらの遺構から五領ヶ台Ⅱa式土器及びそれに並行する時期の土器群が出土した。在地の土器の他、北陸系（102、177、178、308、309、310、311）や東海系（179）、関西系（103、104、105、180、181、182、312、313、314）と考えられる遠隔地の土器片も出土した。出土状況で特筆すべきは、墓坑の可能性があるS K 4032、4042からほぼ完形の深鉢形土器（437、461、462）が出土したことである。これらの遺構と土器群の絶対年代は、土器に付着する炭化物及び、竪穴建物跡の炉埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定により、5,584～5,051calBPという暦年較正值が得られた。これらの土器に伴い出土した石器は、中期初頭の石器群と位置付けた。器種は石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、ピエス・エスキュー、打製石斧、敲石、凹石、石皿、台石、砥石等が認められる。石鏃、石錐、ピエス・エスキューは黒曜石が主体的に用いられ、産地推定分析の結果95%が諏訪エリアの星ヶ台群、5%が和田エリアの鷹山群と小深沢群であることが分かった。その他の石器には遺跡近隣で採取可能なチャートや砂岩、泥岩が主体的に用いられている。また、岐阜県南部で産出する石材である、下呂石製の剥片および二次加工ある剥片（123、124、416）が出土している。

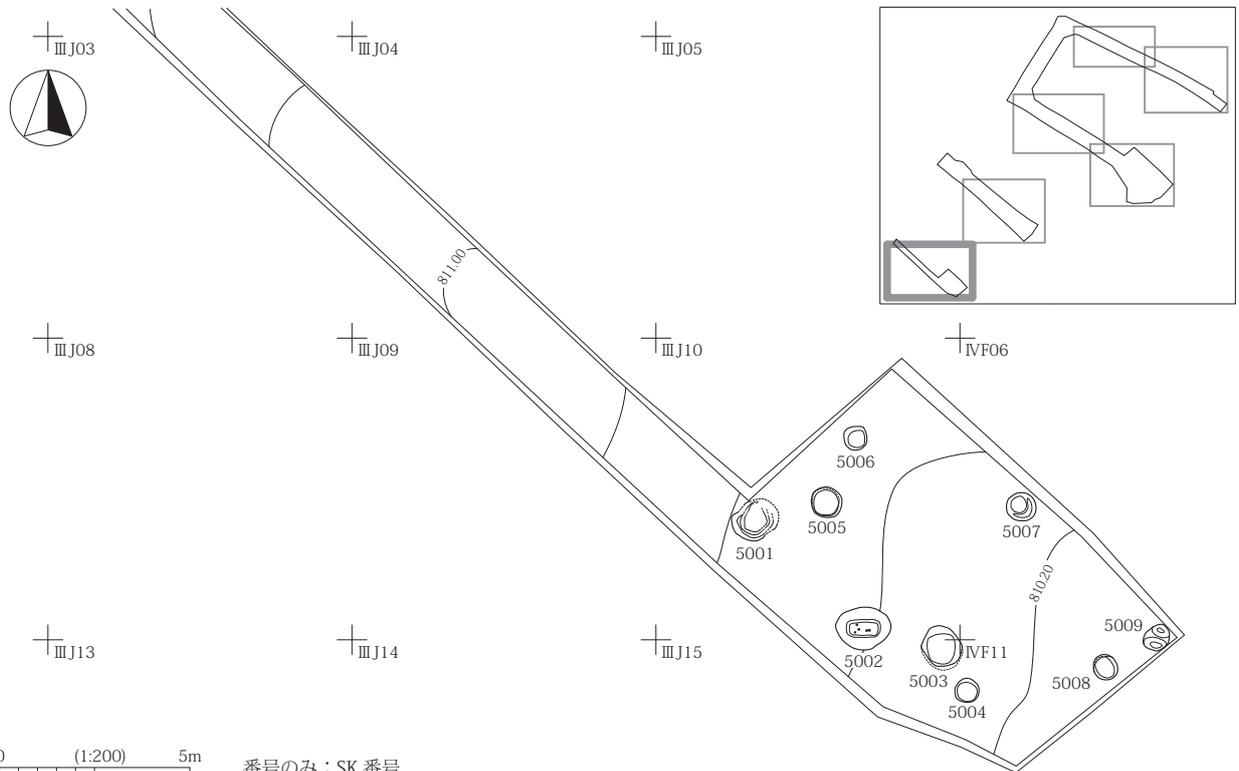
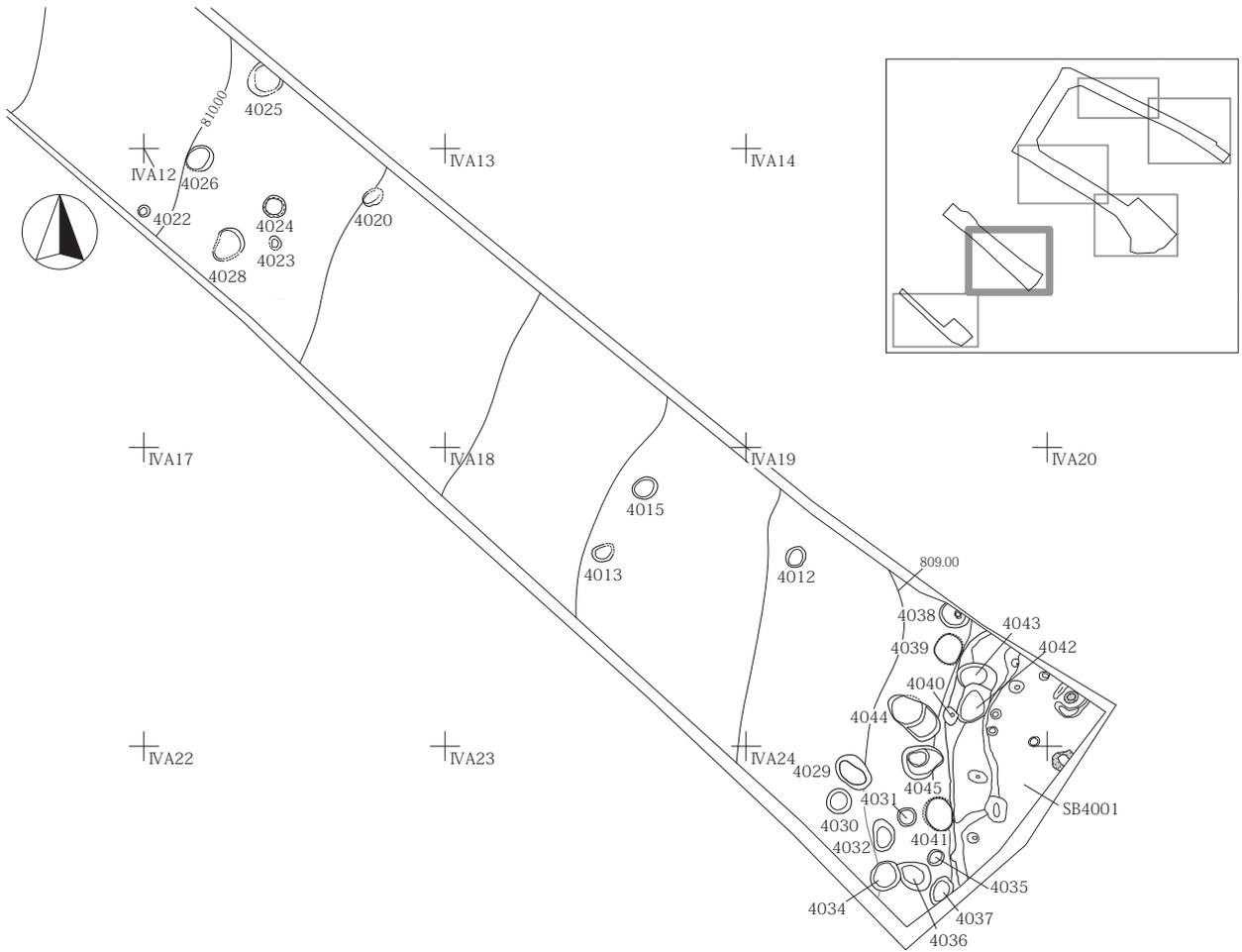
中期中葉の遺構は、竪穴建物跡2軒（S B 1001、1002）、貯蔵穴の可能性がある土坑3基（S K 1016、1024、1025）を確認した。中期中葉の遺構は1トレンチの東側（グリッドⅡW 07、ⅡW 08、ⅡW 17、Ⅱ



第9図 遺構分布拡大図(1) 1トレンチ



第10図 遺構分布拡大図(2) 3トレンチ



0 (1:200) 5m

番号のみ：SK 番号

第 11 図 遺構分布拡大図 (3) 4・5トレンチ

W 18) に集中して分布しており、この周囲に位置する時期不明の土坑も同時期に属する可能性が高い。これらの遺構から、藤内 I 式 (8 ~ 12、18 等) に平出第Ⅲ類 A 土器 (35) を伴う土器群が出土した。中期初頭と異なり、遠隔地の土器片が認められないことが特徴としてあげられよう。出土状況で特筆すべきは、S B 1001 B の炉跡に蓋をするような状況で、完形と完形に近いの深鉢形土器 (1、2) が出土したこと、同じ竪穴建物跡の埋土から、完形や完形に近いの土器及び大形の土器片 (4 ~ 20、22 ~ 37) が、いわゆる「吹上パターン」¹ の様相を呈して出土したことである。これらの遺構および土器群の絶対年代は、土器に付着する炭化物の放射性炭素年代測定により、5,265 ~ 4,877calBP という暦年較正值が得られた。これらの土器に伴い出土した石器を、中期中葉の石器群と位置付けた。器種は石鏃、石錐、スクレイパー、ピエス・エスキュー、打製石斧、砥石等が認められる。石材利用形態は中期初頭と同一であるが、下呂石等の遠隔地石材が出土しないということが分かった。

後期後葉の遺構は、陥し穴 1 基 (S K 3003) を確認した。埋土から加曾利 B 式土器 (358) が出土した。3 トレンチの北西端に位置し、中期の竪穴建物跡や土坑が集中する範囲から外れる。中期と後期では、空間利用が異なっていたと推定されよう。

註1 竪穴建物廃棄後に埋没過程で土器が一括遺棄される状況

2 遺構 (第9・10・11・12 図)

各トレンチから検出した遺構の種類と数は、下記のとおりである。

1 トレンチ：竪穴建物跡 2、土坑 31、焼土跡 1

3 トレンチ：竪穴建物跡 3、土坑 15

4 トレンチ：竪穴建物跡 1、土坑 26

5 トレンチ：土坑 9

(1) 竪穴建物跡

S B 1001 A・B、S B 1002 (第9・12・13 図、写真図版 2)

検出位置 II W 07 (1 トレンチ)

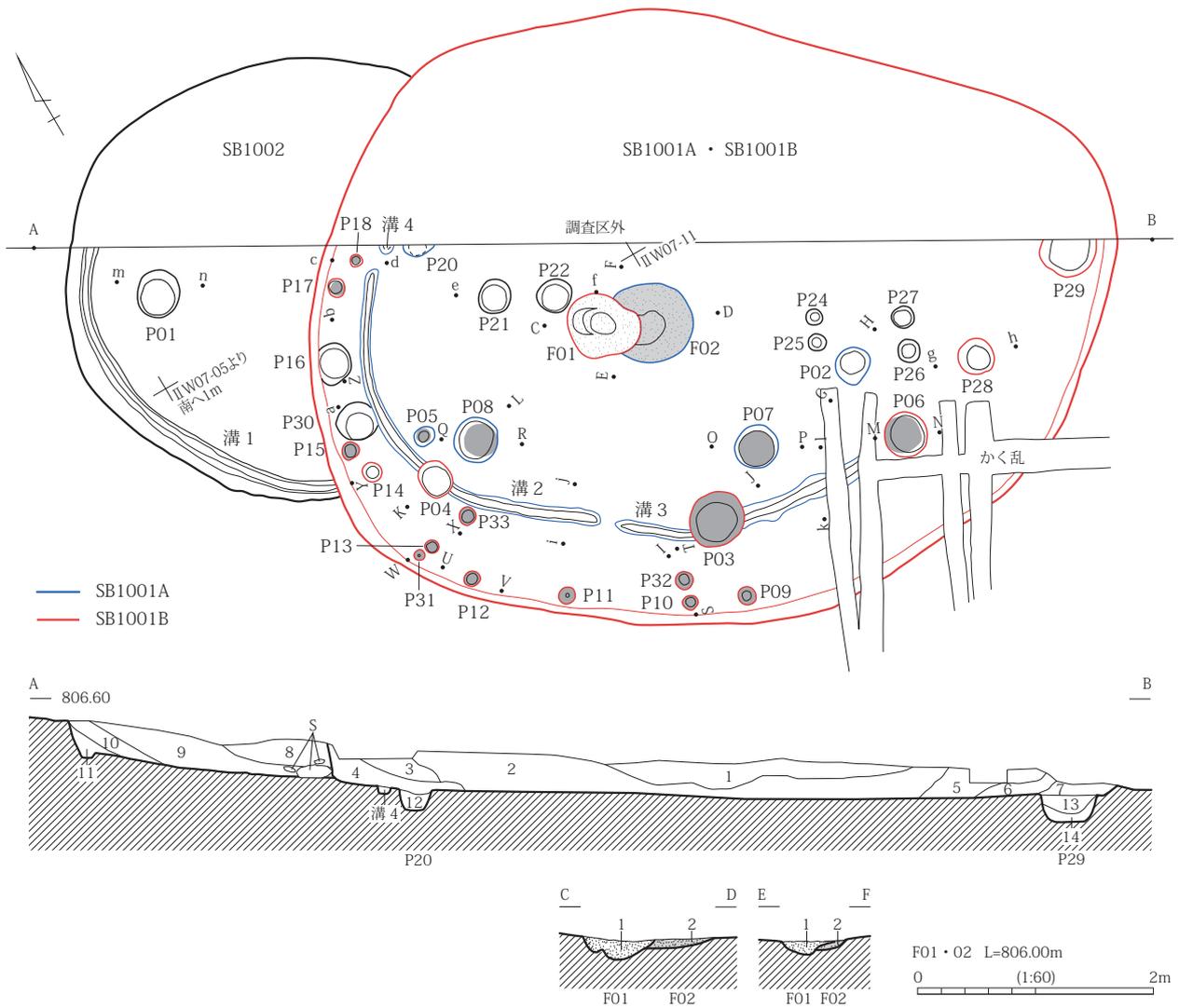
調査経過 1 トレンチを東端から重機で掘削したところ、東端から 15 m 付近のⅣ層下部から縄文時代中期中葉の土器片が比較的多く出土した。当該箇所付近の北壁際から中央部にかけて土器片が集中するため、竪穴建物跡の存在を推定した。Ⅴ層上面で遺構検出を行い、黒褐色及び極暗赤褐色土が半円形に重なる状態を確認できたため、2 軒重複する竪穴建物跡の落ち込みと認定した。ただし、この時点で遺構番号は S B 1001 だけ付けた。

1 トレンチの北壁沿いに幅約 45cm の先行トレンチ 1 を設定して掘削に入り、Ⅴ層を基調とする床面を検出する。先行トレンチ 1 内を東からおおむね 3 分割し、出土遺物は分層せずに区画ごと一括で取り上げた。壁際に「三角堆積」¹ があることや、埋土内にブロックの混入が少ないことから、自然堆積と判断した。この時点では、重複する竪穴建



S B 1001・土坑検出状況 (南東より)

註1 竪穴建物跡の壁際に見られる堆積層



SB1001・1002

- 1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや弱いシルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
- 2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱い粘土質シルト Φ1～50mm のローム偽礫と炭混在
- 3 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強いシルト Φ3mm のローム偽礫と炭混在
- 4 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1～5mm のローム偽礫と炭混在
- 5 暗褐色 (10YR3/4) 締りが強い粘土質シルト
- 6 褐色 (10YR4/4) 締りが弱い粘土質シルト
- 7 暗褐色 (10YR3/3) 締りがやや弱い粘土質シルト Φ3mm のローム偽礫混在
- 8 褐色 (5YR2/2) 締りがやや弱いシルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
- 9 暗褐色 (10YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ300mm の礫とΦ3～10mm のローム偽礫、炭混在
- 10 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや強い粘土質シルト 炭混在
- 11 暗赤褐色 (5YR3/6) 締りがやや強い粘土質シルト 炭混在

SB1001 P20

- 12 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強いシルト Φ1mm のローム偽礫が混在

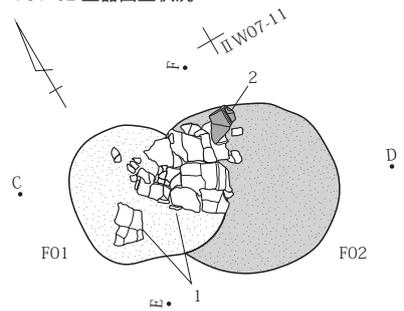
SB1001 P29

- 13 暗褐色 (10YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ5mm のローム偽礫が混在
- 14 暗褐色 (10YR4/4) 締りが強い粘土質シルト

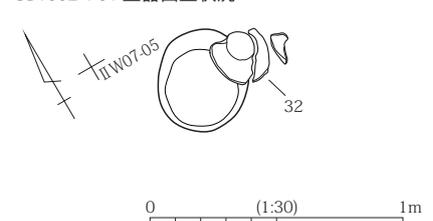
SB1001 F01・02

- 1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1～10mm のローム偽礫と、遺構埋土より多量の炭混在
- 2 暗赤色 (10YR3/6) 締りが非常に強いシルト Φ1～20mm のローム偽礫と、遺構埋土より非常に多量の焼土・炭混在

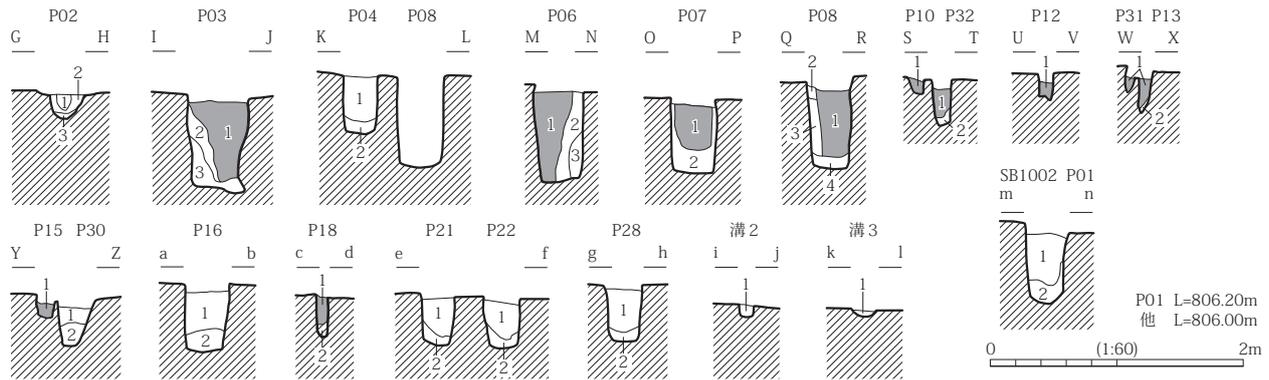
F01・02 土器出土状況



SB1002 P01 土器出土状況



第12図 縄文時代の遺構図(1) SB1001A・B、1002(1)



- P02**
- 1 黒褐色 (5YR2/2) 縮りが強いシルト Φ1～20mm のローム偽礫と炭混在 柱痕か
 - 2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 縮りが強いシルト
 - 3 極暗赤褐色 (5YR2/3) 縮りが強いシルト Φ1～20mm のローム偽礫混在
- P03** P06 と同一
- 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 縮りがやや弱いシルト Φ3～10mm のローム偽礫混在 柱痕
 - 2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 縮りが弱いシルト Φ3～10mm のローム偽礫と炭混在
 - 3 暗褐色 (10YR3/4) 縮りが強い粘土質シルト Φ1～10mm のローム偽礫混在
- P04** P28 と同一
- 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 縮りが弱いシルト Φ5mm のローム偽礫混在 柱痕か
 - 2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 縮りが弱いシルト Φ3～10mm のローム偽礫と炭混在
 - 3 暗褐色 (10YR3/4) 縮りが強い粘土質シルト Φ1～10mm のローム偽礫混在
- P07**
- 1 黒褐色 (10YR2/2) 縮りが非常に弱い粘土質シルト Φ60mm の中礫とΦ5～30mm のローム偽礫、炭混在 柱痕
 - 2 黒褐色 (10YR2/2) 縮りが非常に弱いシルト Φ5mm のローム偽礫混在
- P08**
- 1 黒褐色 (10YR2/3) 縮りがやや弱いシルト Φ5～30mm のローム偽礫と炭混在 柱痕
- P10** 杭痕 P09・11・12・15・17・31・33 と同一
- 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 縮りが弱い粘土質シルト
- P13** 杭痕 P05・18・32 と同一
- 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 縮りが弱いシルト Φ3～5mm のローム偽礫と炭混在
 - 2 暗赤褐色 (5YR3/6) 縮りがやや弱い粘土質シルト 炭混在
- P16** P21・22 と同一
- 1 黒褐色 (5YR2/2) 縮りがやや弱いシルト Φ1～5mm のローム偽礫と炭混在
 - 2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 縮りが強い粘土質シルト
- P24** P25・26・27 と同一
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 縮りが強い粘土質シルト Φ1～3mm のローム偽礫混在
- P30** SB1002 P01 と同一
- 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 縮りがやや弱いシルト Φ1～5mm のローム偽礫と炭混在
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 縮りが強いシルト Φ3～10mm のローム偽礫混在
- 溝2・3・4**
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 縮りが強いシルト Φ5mm のローム偽礫混在

第13図 縄文時代の遺構図(2) SB1001 A・B、1002(2)

物跡の壁の立ち上がりや床面のレベル差を明確に判別できず、新旧関係は不明であった。続いて、先行トレンチ1のほぼ中央部から直交する先行トレンチ2の掘削に入る。先行トレンチ2から出土した遺物も分層せず一括で取り上げた。なお、遺物が集中して出土する層は、床面直上ではなく、遺構埋土の1、2層である。

その後、層位別に竪穴建物跡の埋土掘削を開始する。1層と2層の上位から多量の土器片が出土し、土器片が比較的少ない2層下部を挟んで、非常に硬い床面に達する。掘削中の埋土観察では、新旧の遺構境が明確に捉えられなかったため、出土遺物は、原則としてSB1001の区画ごと層位別に取り上げた。なお、土器片は投棄の方向などを把握できる状況ではないため、遺物出土状態は図化せず、写真撮影に留めた。また、完形に近い土器の取り上げは、接合作業の便を考慮してメモ



SB1001 遺物出土状況(北東より)

写真を撮影した。2層上面から出土する土器は、ほかの層から出土した土器よりも、ほぼ完形に復元できる土器が多いと思われる。

床面精査により、本遺構の南東側の半円部分の床面は、北西側より一段低い位置で検出できた。したがって、この段差より南東側の部分をS B 1001、北西側をS B 1002と認定した。S B 1001の床面ほぼ中央部から炉跡を検出したほか、複数のピットと二重の壁溝が見つかる。内側の壁溝は竪穴拡張前のS B 1001 (S B 1001 A)と想定し、これを切るP 03・04は、土質の違いから拡張後(S B 1001 B)の柱穴と判断し、P 06も埋土の特徴及び配置からP 03・04同様拡張後(S B 1001 B)の柱穴と判断した上で、床面施設の検出状況と遺物出土状況を撮影した。1トレンチ北壁面で改めて埋土の観察を行い、S B 1001がS B 1002を切ることを確認できた。

埋土の掘削後、炉跡、ピット、壁溝を調査した。炉跡の直上からは、ほぼ完形に復元できる土器が出土したため、出土状況を図化した。土器を取上げ、炉を4分割し区画ごとに埋土のサンプリングを行いながら長軸方向と短軸方向で断面写真と図面の記録を取り、完掘する。断面観察の結果、切り合いを確認し、南東側の炉跡(F 02)が北西側の炉跡(F 01)へ作り替えていると把握した。どちらの炉跡も底面はよく熱を受け、赤化及び硬化する。埋土には多量の炭が混じる。ピットは、段下げを行った結果、床面の凹凸と誤認したP 01・23・34・35と、位置関係や形状から壁溝と判断したP 19を欠番とし、32基を認定した。壁溝はベルトを2か所設定し、埋土及び断面の写真・図化記録を作成した上で完掘した。

竪穴建物跡完掘状況写真撮影後、段下げのままであったピットの掘削を再開した。大形のピットは半裁、小形のピットは床面ごと断ち割り、埋土を観察し、断面写真及び図化記録を作成した。埋土の状況とピットの切り合いや位置関係から、P 07・08はS B 1001 Aの柱穴、P 16・21・22・30はS B 1002の柱穴であると判断した。また、P 07・08の埋土断面では柱の抜き取り痕跡を確認した。

ピットの埋土をすべて掘削した上で完掘状況写真を撮影し、オルソ画像による平面図、単点による断面図を作成した。

さらに、1トレンチ脇に側溝を設置する工事に伴い、S B 1001・1002の北東側範囲を確認した。平面図に竪穴建物跡の範囲を記録し、検出状況を撮影した。出土した遺物は地表面からの深さを記録して取り上げた。なお手掘りによる遺構埋土掘削は実施できなかった。

遺構の構造 S B 1001 A・Bは、長軸6.45 m、短軸4.95 mの規模で、北西から南東方向軸が長い楕円形を呈する。S B 1002は直径3.60 mの円形を呈す



S B 1001・1002 土層堆積状況 (南西より)



S B 1001 炉跡 F 02 断面



S B 1001 壁柱穴 P 09 断面

ると推定し、東側半分はS B 1001 A・Bに切られる。竪穴建物跡全体は、西から東に向かい緩やかに傾斜する地形に構築されている。そのため、西側の壁面は遺存状況がよいが、東側に向かい掘り込みが徐々に浅くなる。壁面は全体的に垂直に近いが、わずかに外傾している。

壁溝は1条確認した。幅は10cm程度、深さは深いところで8cm程度、浅いところでは5cm未満で、掘り込みが確認できない箇所もある。この壁溝はS B 1001 Aのもので、S B 1001 BにはP 09・15・17・18・31・32の壁柱穴が穿たれている。これらは直径15cm以下と小さく、深さは7cmから35cmで、底部先端がV字を呈するものが多い。構造物を支える柱ではなく、壁板を支える杭の跡と推定する。

床面は全体に硬化するが、東側はわずかに軟らかくなり、凹凸が残る箇所もある。この凹凸を柱穴と誤認したものがある。

炉跡を2基検出した。F 01はF 02を切るため、S B 1001 AにF 02、同BにF 01が伴うものと推測する。

柱穴は32基検出した。S B 1001 Aの柱穴はP 07・08である。いずれも、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で硬い。柱穴では柱痕を確認した(P 03・06・07・08)。位置と埋土から、P 02・05やP 20もS B 1001 Aの柱穴であった可能性がある。S B 1001 Bの柱穴はP 03・04・06・28・29であろう。S B 1001 Aの壁溝を切るものがあり、埋土もほぼ同じ土質である。形態や規模はS B 1001 AのP 07・08と変わらない。

床の寸法は、S B 1001 Aが北西-南東方向で約5.5m、S B 1001 Bは北西-南東方向で約6.9mである。**遺物出土状況等** 床面直上から出土した遺物は少ないが、F 01直上にはほぼ完形に復元できる土器(1、2)が出土したほか、床面や壁溝から石鏃が3点(39、41、43)出土した。

床面からやや浮いた埋土2層上面からは18個体分、1層から7個体、遺構検出面からは有孔鏢付土器(36)やミニチュア土器(37)を含む11個体が、いわゆる吹上パターンの様相を呈して出土した(4~20、22~37)。それぞれの土器は、ほぼ横倒しの状態で欠損部分があり、直立や倒立したものはない。また、石鏃は8点(38、40、42、44~48)、石錐は2点(49、50)、スクレイパー3点(51~53)、ピエスエスキュー3点(内2点掲載:54、55)、打製石斧11点(内5点掲載:56~60)、凹石3点(内2点掲載:61~62)、石錘(64)なども出土した。

炉跡の埋土は3mmメッシュのフルイにかけ、炭化物と土器・石器片を確認した。

調査所見 平坦な床面と複数の柱穴を有し、中央に炉跡があることから判断して、S B 1001 AもBも竪穴建物跡と判断できる。内側の壁溝とそれに伴う柱穴、F 02を含むS B 1001 Aから、壁、壁柱穴とそれに伴う柱穴、F 01を含むS B 1001 Bへ拡張した。炉跡直上から出土した土器から判断して、S B 1001 Bの廃絶は縄文時代中期中葉と判断している。検出面から出土した29に付着した炭化物の放射性炭素年代測定により、暦年較正年代で5054-4954cal BP(2σ 69.6%)という結果を得ている。ほかのトレンチで検出した竪穴建物跡は、いずれも縄文時代中期初頭と想定しており、S B 1001はそれらより新しい。埋土中の土器出土状況から、竪穴建物の廃絶後、一定期間を経て遺物の廃棄場所として再利用したことがわかる。本遺構の周辺には土坑が多く分布するが、S B 1001 BやS B 1002を避けるように分布するため、土坑と竪穴建物跡は同時期に機能していたものと想定する。

S B 3002 (第10・14・15図、写真図版3)

検出位置 IV B 10・B 15・C 06・C 11 (3トレンチ)

調査経過 3トレンチの東端から重機で掘削したところ、トレンチの東寄りのIV層から縄文中期初頭の土器片が出土した。当該箇所近辺のV層上面で黒褐色土の円形の落ち込みを確認できたため、縄文時代の竪穴建物跡の存在を想定し、遺構番号S B 3002を付けた。なお、本竪穴建物跡の検出面において、平安時代の竪穴建物跡(S B 3001)の埋土と酷似するピットを複数検出した。これらのピットは平安時代の掘立

柱建物跡（S T 3001）の柱穴と想定した。

S B 3002 を十字に切るようにセクションポイント（以下「S P」）を設定し、S P A - B ベルトと S P C - D ベルトを設け、ベルト脇に先行トレンチを設定して床面まで掘削する。落ち込みの範囲が広いので2軒以上の重複を想定したが、検出段階では判断できなかったため、1軒の竪穴建物跡として掘削を行った。先行トレンチ断面および床面の精査中に、本遺構の埋土を掘り込む土坑を7基確認し、S K 3019、3022～3027の遺構番号を付けた。また、S T 3001のピットが本遺構の埋土を掘り込み構築されていることも確認した。

埋土の堆積状況を記録し、埋土を掘削する。埋土は、上下2層に分かれ、1層は径30～400mm程度の礫と径1～3mm程度のローム偽礫を含む締まりが強い黒褐色シルト土、2層は1層よりやや大きめな径5～10mmのローム偽礫を含む締まりが強い暗褐色シルト土で、いずれも炭化物が混在している。

床面精査により、柱穴状の落ち込み6か所とそれより小形の落ち込み4か所、中央が被熱により赤化している大形の落ち込みを1か所確認する。それぞれP 01～06、P 08～10、P 07と番号を付けた。最終的に、埋土の状況、床面の状態、柱穴の位置から、1軒の竪穴建物跡と判断した。なお、P 04の一部は風倒木痕によりかく乱されている。

S B 3002 を切る土坑（S T 3001、S K 3019、3022～3027）とP 08～10を完掘後、P 01～06は柱痕を検出するため5cm程度段下げした。P 07は上面が赤化しているため、検出状態のまま清掃し、完掘状況を撮影した。P 01～06は平面で柱痕を確認することができなかったため、埋土の状況等を観察するため半裁した。いずれも立ち上がりはほぼ垂直で、底面は二段になる特徴があり、明瞭に下端と中段を構成するものと、凹凸のように、わずかに高低差のあるものに分かれる。柱痕は確認できなかったものの、位置関係や断面形状等から判断して柱穴と考えた。断面を記録後に完掘した。P 07はごく浅いが、上面に火床と考えられる被熱面があるため、埋土をすべてサンプリングし3mmメッシュのフルイに掛けた。結果、炭化物や土器片を確認した。

遺構の構造 S B 3002 は長軸9.00 m、短軸7.25 mの規模で、南北方向に長い楕円形を呈する。壁は外湾気味に立ち上がる。検出面からの掘り込みは浅く、西側は立ち上がりが良く残るが、東側はわずかしこ確認できない。検出面から床面まで深いところで30cm、浅いところは5cm程度である。

本遺構はV層中まで掘込まれており、あまり踏み固められていないためか硬化していない。P 07 上面の被熱箇所以外に火床がないため、これをS B 3002の炉跡と想定できる。P 07は直径165cmの円形で、1層が被熱により赤化し、わずかに硬化している。全体はごく浅い掘り込みで、底面近くの3層は極暗赤褐色の締まりが強い粘土質シルトである。底面にはわずかな凹凸があるが、被熱は認められない。

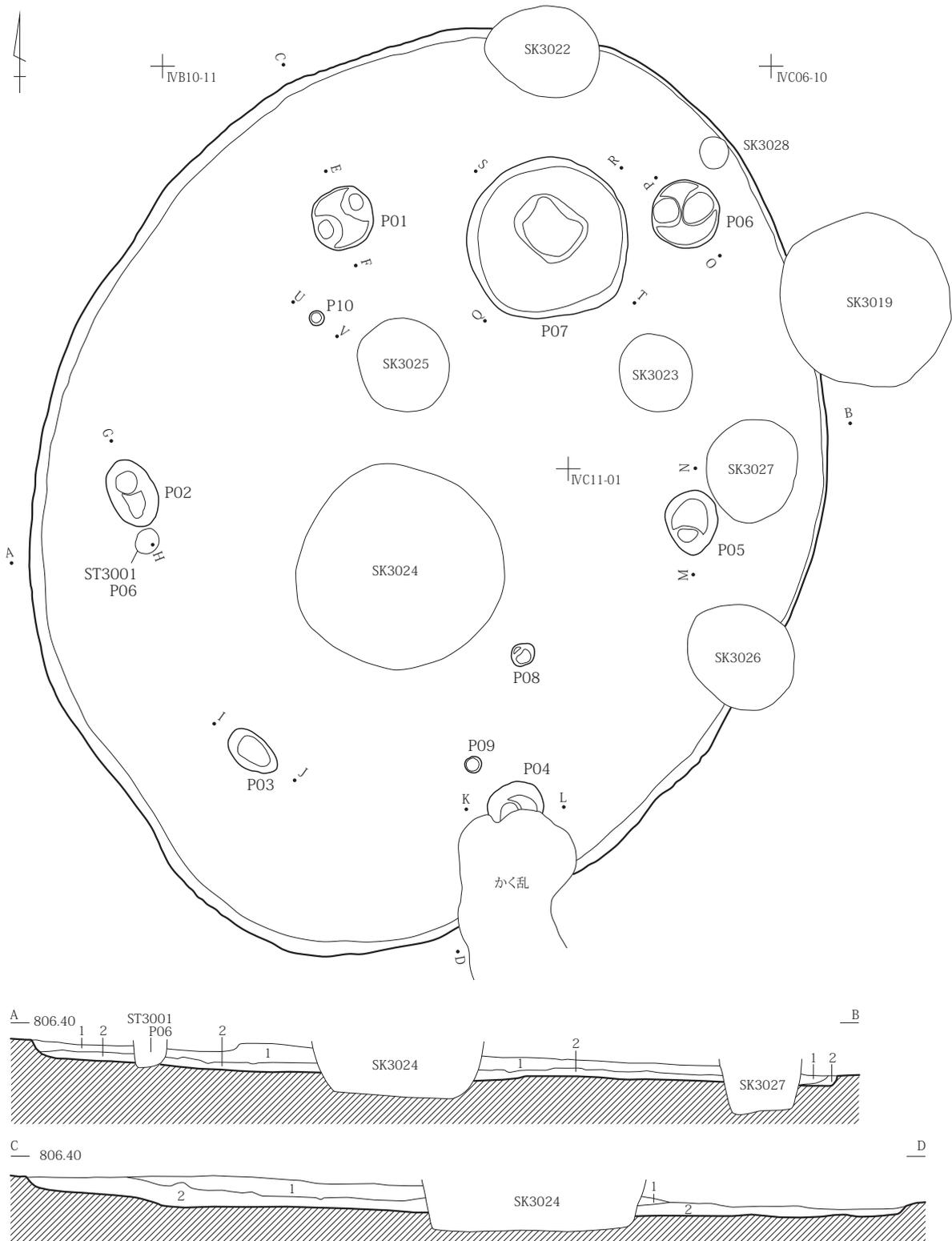
柱穴はP 01からP 06の6か所確認した。平面は楕円形、立ち上がりはほぼ垂直で、底部が二段になる。床の寸法は、P 07の火床中心を通る北北東-南南西の長軸方向が9.30 m、これに直交する短軸方向が



S B 3002 検出状況（北西より）



S B 3002・S K 3024 土層断面（南より）



- 1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ30～400mm の礫とΦ1～3mm のローム偽礫、炭混在
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ400mm の礫とΦ5～10mm のローム偽礫、炭混在

第14図 縄文時代の遺構図(3) SB 3002(1)

7.45 mである。

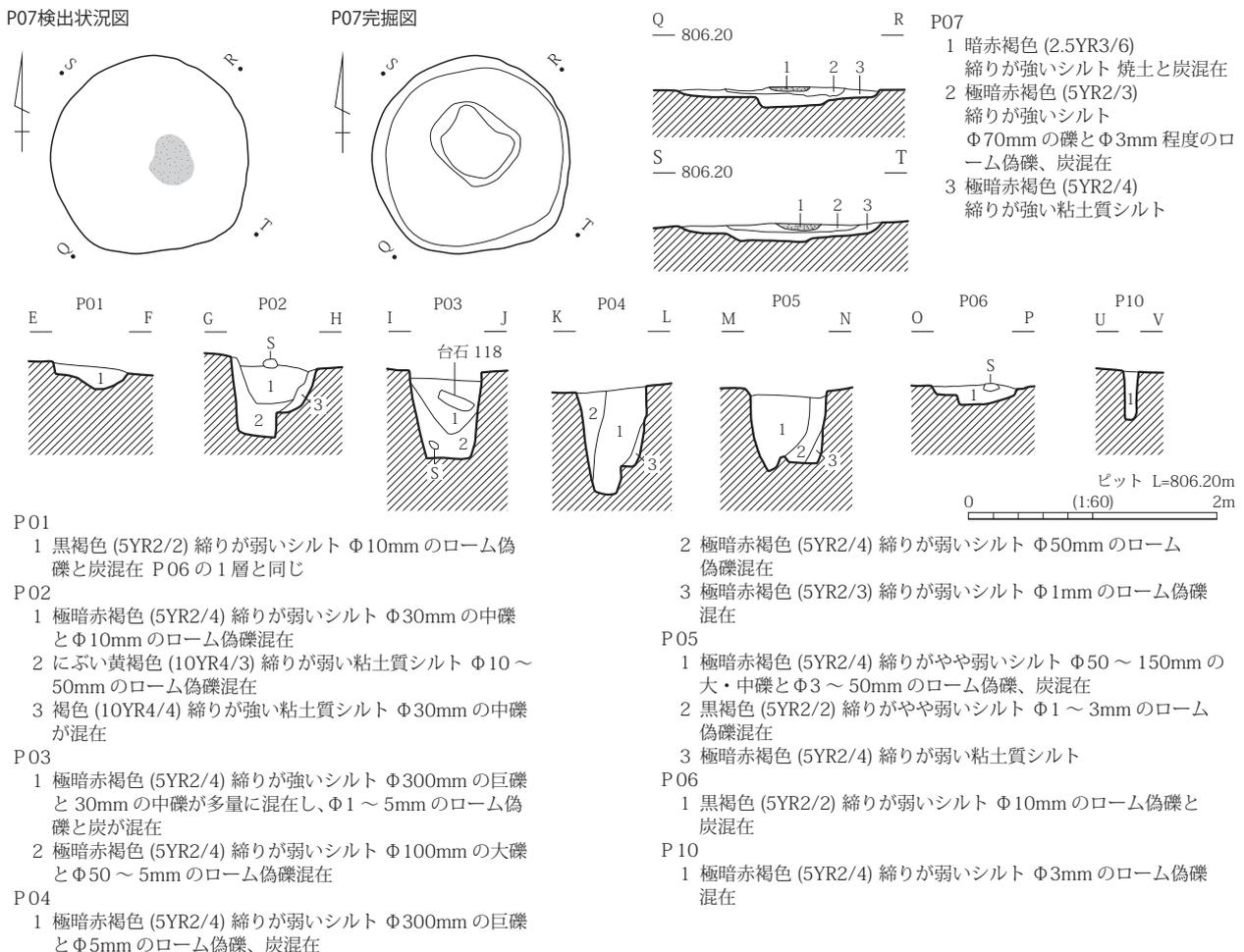
遺物出土状況 埋土から縄文時代中期初頭の土器片や石器、石英原石が出土したが、全体として出土量は少ない。土器の中には、前期末葉的な特徴や近畿方面の特徴をもつもの(101、103～105)がある。P 07の2層出土の土器(79)やP 04・06埋土出土の土器(76、91、96)により、S B 3002の時期は縄文時代中期初頭と考える。

石器は、床面から石鏃2点(108、109)、柱穴P 03の1層から台石(118)が出土した以外は、特徴的な出土状況を見出せなかったため、地区(北東区、北西区、南東区、南西区)及び層位ごとに一括して取り上げた。

調査所見 明確な6本柱で上屋を架けた縄文時代中期初頭の竪穴建物跡である。炉跡はP 07としたが、S K 3024をはじめとした土坑に壊されているのかもしれない。柱穴の配置はS B 1001と異なるが、上屋の構築方法の違いを反映しているものと考ええる。本遺構とはほぼ同一時期の竪穴建物跡にS B 3003とS B 4001があるが、いずれも構造が異なる。S B 3001と4001に比べると本遺構は大形ではあるが、床面は比較的軟らかく、遺物の出土量は少ない。建物の機能や使用頻度に違いがあったと推定する。



上空からみたS B 3002(北西より)



第15図 縄文時代の遺構図(4) S B 3002(2)

なお、P 07 の埋土中から出土したクルミ属の炭化物の放射性炭素年代を測定したところ、暦年較正年代で 5414-5323cal BP (2 σ 61.6%) の結果を得た。

S B 3003・3004 (第 10・16・17 図、写真図版 4)

検出位置 IV B 05・B 10・C 01・06 (3 トレンチ)

調査経過 3 トレンチの東端から重機で掘削したところ、トレンチの東寄りから縄文中期初頭の土器片が出土し、後に S B 3002 とする黒褐色土の円形の落ち込みを広範囲に確認した。この落ち込みの北側が 3 トレンチの外まで広がると考えられるため、朝日村と協議の上で 3 トレンチ北側を 5 m 拡張したところ、新たに、暗赤褐色土の半楕円形の落ち込みを捉えることができた。

落ち込み範囲内に、幅約 45cm の先行トレンチ 1 を設定して掘削を開始した。これに直交するベルト S P C - D および S P E - F を設定し、その脇の先行トレンチ 2 と先行トレンチ 3 を掘削した。先行トレンチ 1 内の出土遺物は、北西端からベルト S P C - D までを先行トレンチ 1 西、ベルト S P C - D から S P E - F までを先行トレンチ 1 中、ベルト S P E - F から南東端までを先行トレンチ 1 東として、層位ごとに取り上げた。

検出時に確認した半楕円形の落ち込みは、北西側よりも南東側の方が暗い状況であった。北西側が南東側を切る 2 遺構の存在を想定し、S B 3003、3004 の遺構番号を付けた。しかし、先行トレンチ 1～3 の断面には、北西側の竪穴建物跡の壁に相当する明確な立ち上がりは確認できなかった。検出面下 60cm 程度で V 層を基調とする極めて硬い床面を検出したが、北西側と南東側は連続しており、段差等はなかった。

続いて、北西端からベルト S P C - D までを 1 区、ベルト S P E - F から南東端までを 3 区、ベルト間を 2 区として、埋土の掘削に入った。ベルトを残して埋土全体が床面近くまで下がったため、改めて先行トレンチ 1 の北壁とベルトの断面を観察してみたが、遺構の重複について明確な根拠を見出すことはできず、残存長 9.70 m をはかる大型の竪穴建物跡と認定した。

ベルトを除去して床面を精査したところ、床面から炉跡 3 か所、円形に近い落ち込みと、西壁 100cm 程度内側で壁溝を検出した。検出した落ち込みは残らずピットと推定し、P 90 まで番号を付けた。ピットは 5 cm 程度段下げし、その状態で完掘写真を撮影した。その後、直径 15cm 以上のピットは半裁、それ以下のものは床面とともに断ち割り、本遺構に関連する施設か否かを判断して断面を記録した。

3 か所ある炉跡のうち F 01 と F 03 は下部にピットがあり、大小のピットは相互に重複しているものが多い。また、西壁の内側で検出した壁溝を切る柱穴状のピットもあることから、本遺構は複数の竪穴建物跡が拡張を繰り返したものと推定した。

ピットの段下げと半裁を終了した時点で、P 30・36・37・39・42・44～60・63～68・70～74・84・85・87 は床面の凹みを誤認したことが分かり、欠番とした。また、整理作業の中で、当初の遺構番号を以下のように変更した。

P 61 → P 30 P 62 → P 36 P 69 → P 39
P 86 → P 84 P 88 → P 86 P 89 → P 37 P 90 → P 42

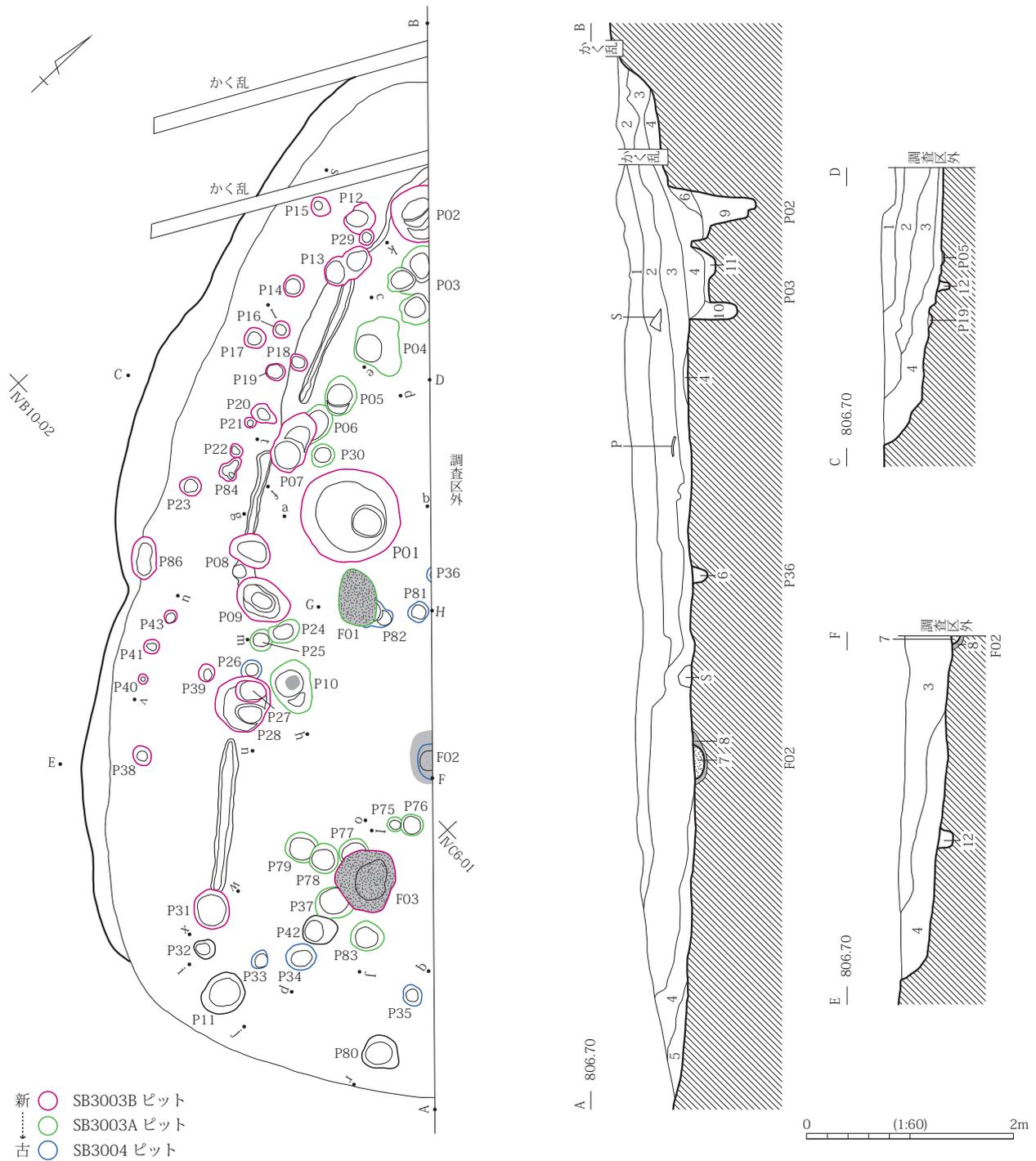
最後に、施設をすべて完掘した後、平面の単点測量及び 3 D 撮影を行い、平面図を作成した。

なお、出土遺物は、調査過程で重複する竪穴建物跡を想定したことにより「S B 3003」、「S B 3004」あるいは「S B 3003・3004」と記載したが、注記段階で「S B 3003」に統一した。

遺構の構造 長軸 9.70 m、短軸 3.25 m の規模で、



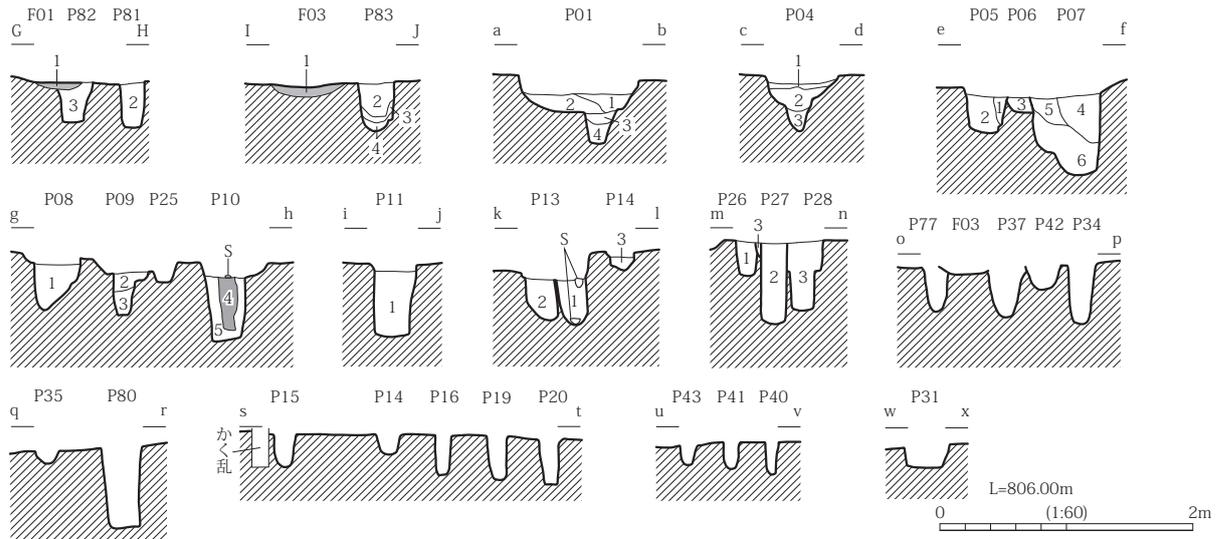
S B 3003 検出作業風景 (南東より)



- 新 ○ SB3003B ピット
- SB3003A ピット
- 古 ○ SB3004 ピット

- 1 暗赤褐色 (5YR3/2) 粘土質シルト Φ1～3mm のローム偽礫と炭混在
- 2 にぶい赤褐色 (5YR4/4) シルト 粘性なし Φ5～10mm のローム偽礫少量と炭混在
- 3 暗褐色 (10YR3/4) シルト Φ10～30mm のローム偽礫と炭混在
- 4 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘土質シルト Φ5～10mm のローム偽礫と炭が多量に混在
- 5 黄褐色 (10YR 5/6) 粘土質シルト 暗褐色シルト質土塊と炭混在
- 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト 多量のローム塊と炭混在
- 7 暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト F01 埋土とΦ30mm の円礫が多量に混在している点に特徴あり P81 の埋土に類似している他にローム偽礫と炭混在
- 8 赤褐色 (5YR4/6) F01 の火床 ローム (V層) が被熱して非常に硬い
- 9 褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト P02 埋土 多量のローム粒が混在
- 10 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト 締りが強い 分級よい
- 11 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト Φ5～10mm のローム偽礫と炭が多量に混在し、暗褐色シルト質粘土も混在
- 12 壁溝の埋土

第 16 図 縄文時代の遺構図 (5) S B 3003・3004 (1)



- F 01・P 81・82
 1 赤褐色 粘土質シルト F 01 火床 ローム (V層) が被熱し非常に硬い
 2 暗褐色 粘土質シルト 円礫が多量に混在している点に特徴あり F 02 の埋土 7層に類似している 他にローム偽礫が混在する
 3 暗褐色 シルト Φ5～20mm のローム偽礫が多量に混在
- F 03・P 83
 1 赤褐色 粘土質シルト F 03 火床 ローム (V層) が被熱し非常に硬い
 2 黒褐色 シルト
 3 にぶい黄褐色 シルト
 4 黒褐色 シルト
- P 01
 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強いシルト Φ50mm のローム偽礫と炭混在
 2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強い粘土質シルト Φ5mm のローム偽礫と炭混在
 3 黒褐色 (5YR2/1) 締りがやや弱いシルト 炭混在
 4 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強い粘土質シルト Φ30mm のローム偽礫が2層より多量に混在
- P 04
 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや弱いシルト Φ5mm のローム偽礫と炭混在
 2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや弱いシルト Φ3～30mm のローム偽礫と炭混在
 3 未注記
- P 05～07
 1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや強い粘土質シルト P 05 埋土
 2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mm のローム偽礫と炭混在 P 05 埋土
 3 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mm のローム偽礫と炭混在 P 06 埋土
 4 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mm のローム偽礫と炭混在 P 07 埋土
- 5 暗赤褐色 (5YR3/2) 締りが強いシルト Φ1～5mm のローム偽礫と炭混在 P 07 埋土
 6 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強いシルト Φ50mm のローム偽礫と炭混在 P 07 埋土
- P 08～10・25
 1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mm のローム偽礫と炭混在 P 08 埋土
 2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mm のローム偽礫と炭混在 P 09 埋土
 3 暗赤褐色 (5YR3/2) 締りが強いシルト Φ10mm のローム偽礫と炭混在 P 09 埋土
 4 黒色 (5YR1.7/1) 締りが弱いシルト Φ100mm の大礫およびΦ5mm のローム偽礫が混在 柱痕 P 10 埋土
 5 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mm のローム偽礫と炭混在 P 10 埋土
- P 11
 1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mm のローム偽礫と炭混在
- P 13・14
 1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mm のローム偽礫と炭混在 P 13 埋土
 2 暗赤褐色 (5YR3/2) 締りが強いシルト Φ3mm のローム偽礫混在 P 13 埋土
 3 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強いシルト Φ50mm のローム偽礫混在 P 14 埋土
- P 26～28
 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強いシルト Φ50mm のローム偽礫混在 P 26 埋土
 2 黒色 (5YR1.7/1) 締りが弱いシルト Φ5mm のローム偽礫が混在 P 27 埋土
 3 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ3～5mm のローム偽礫と炭混在 P 28 埋土

第 17 図 縄文時代の遺構図 (6) S B 3003・3004 (2)

北西から南東軸が長い楕円形と推定する。本遺構は、S B 3004→S B 3003の順番に構築されたと推定する。さらにS B 3003は、ピットに切り合うものが多く認められ、建て替えの可能性を想定できる。建て替え前をS B 3003 A、建て替え後をS B 3003 Bとする。

壁は、北西側から西側にかけての掘り込みが比較的深く60cm程度あるが、南側に向かい浅くなり、南東側では掘り込みを確認することができない。壁溝は、壁の内側約100cmのところ断続的に延びている。北西側の壁と壁溝の間にテラス状の高まりが残ること、いくつかのピットに壊されていることから、壁溝は、S B 3003 Aの施設と考える。

床面は、壁溝から中心部にかけてほぼ平坦で、踏み固められかなり硬化する。一方、壁溝の外側は、北西側のテラス状の高まり部分を含めて軟らかい。

炉跡は、F 01とF 02、F 03の3か所検出した。いずれも長径60cm内外の不整形円形である。F 02は、

7層に赤褐色シルトが充満し、底面は被熱し非常に硬い。F 01の底面でP 82を、F 03の底面でP 77・78の落ち込みを検出したため、両者は新しく構築されたS B 3003の炉跡であったと推定する。配置や炉跡に切られるピットとの関係からF 01はS B 3003 Aの炉跡、F 03がS B 3003 Bの炉跡と想定する。また、F 02の7層には径30mm前後の円礫が多量に混在し、P 81の2層と共通する。



S B 3003 台石出土状況

柱穴は、53か所認定した。P 14～23・29・38～41・43・84・86は、平面・断面の形状と検出位置

から判断して、S B 3003 Bの壁柱穴と考えた。壁溝を切るP 02・07～09・13・27～29・31とP 11・80は、極暗赤褐色の締まりが弱いシルトが埋土である点が共通しており、S B 3003 Bに伴う柱穴と想定した。壁溝の内側に並ぶP 03～06・10・24・25・30とP 75・76、P 77～79、P 37・42・83は、S B 3003 Bの柱穴の埋土とも共通する要素が多いが、位置関係から判断して、一段階古い竪穴建物跡S B 3003 Aの柱穴と考えた。さらに、P 26、P 33～36、P 81・82は、最古段階の竪穴建物跡S B 3004に伴うと想定した。

なお、床面の寸法は、最終段階のS B 3003 Bの場合、北西—南東の長軸が9.70 m（推定）である。

F 01の北西隣で検出したP 01は、直径95cmの円形を呈し、底面東寄りに柱穴状の落ち込みがある。埋土は、S B 3003 Bの柱穴に埋まる土と共通するため、同遺構の埋没とともに埋まったと考える。ピット底面から深鉢形土器の口縁部が潰れた状態で出土した。

遺物出土状況 北西部のテラス上から台石（195）、F 01の上面から凹石（194）、P 01から深鉢形土器口縁部（166）、P 07・11・86や壁溝から土器片（134、136、139、150、154）が出土した。また、埋土中からは小さな焼成土塊（203）や棒状土製品2点（201、202）が出土したほか、石鏃2点（内1点掲載：183）、打製石斧6点（内4点掲載：186～189）、凹石・敲石9点（内5点掲載：190～194）等の石器が出土している。F 01～03の埋土は3mmメッシュのフルイにかけ、炭化物と土器・石器片を確認した。

調査所見 本遺構は、検出時に竪穴建物跡が重複していると想定して調査を行ったが、埋土の断面観察や床面精査等では明確に遺構の範囲を確定することができなかった。最終的には、整理作業において、竪穴建物全体の形状、壁溝や柱穴、壁柱穴の位置から、S B 3004→S B 3003 A（ほぼ同一場所での建て替え1回）→S B 3003 B（ほぼ同一場所での建て替え1回）という変遷を想定した。3か所で検出した炉跡は、F 02が位置関係からS B 3004に伴い、F 01がS B 3003 A、F 03はS B 3003 Bに構築されたと想定した。いずれにせよ、柱穴と炉跡を伴うことから、縄文中期初頭の竪穴建物跡と考えることができる。2区3層から出土した土器片（180）に付着した炭化物の放射性炭素年代測定により、暦年較正年代で5584-5476cal BP（2σ 95.4%）という結果を得た。

なお、出土遺物は、調査経過でも触れたとおり、遺構調査の段階で、S B 3003に伴うものか、あるいはS B 3004か確定できず「S B 3003・04」等として取り上げてきたが、一部の施設から出土したものを除き、最終段階のS B 3003 Bに帰属するものとした。

S B 4001（第11・18図、写真図版5）

検出位置 IV A 19・A 20・A 24・A 25（4トレンチ）

調査経過 4トレンチの東端から重機で掘削したところ、極暗赤褐色土の中から縄文中期初頭の土器片が出土した。周辺を精査したところ、IV A 24から頭骨片が出土（のちに古代の墓坑S K 4007と認定）した

ほか、土坑（S K 4021～4028）を検出した。これらの土坑の半裁を進める中で、土坑壁外に縄文土器片があることを確認できたため、IV A 19・A 20・A 24・A 25 辺りは縄文中期初頭の竪穴建物跡の埋土で、それを切る古代の土坑が複数存在すると判断した。S K 4007 の頭骨を取り上げて周辺を再精査し、竪穴建物跡を認定し、S B 4001 の遺構番号を付けた。

4 トレンチの北壁に沿って本遺構の先行トレンチ1を、東壁に沿って先行トレンチ2を設定し、掘削を行った。先行トレンチ内の遺物は、本遺構の埋土を覆うIV層中からの出土が多く、埋土からの出土は比較的少ない。先行トレンチ1及び2から出土した遺物の多くは、IV層中のものと考えてよい。

続いて、本遺構内を北側から1mごとに1～4区と任意の区割をし、区画ごとに掘削を行ったところ、西壁側に北から南にかけてテラス状の高まりを確認できた。埋土3層にはローム偽礫が混在し、炭化物が多量に混在している。これは埋戻しかもしれないが、1層は自然堆積と推定する。南壁際の3層は三角堆積を呈する。

埋土掘削中に、1区のテラス部分から大型の土器片2個体（461・462）と石棒（458）が出土した。土器片周辺とそれ以外の埋土との比較から、不確定ながら、土器片はS B 4001内の埋土ではなく、別の遺構に伴うのではないかと想定し、周囲を再度精査した結果、S B 4001を切る土坑2基を認定し、S K 4042とS K 4043の遺構番号を付けた。発掘と整理作業時の検証により、大形土器片はS K 4042に、石棒はS K 4043に伴うと判断した。また、いずれも土坑底面がS B 4001のテラス床面を掘り抜いていた。

続いて床面を精査し、炉跡を1か所（F 01）検出したほか、ほぼ円形の落ち込みを10か所（P 01～10）確認したが、整理作業時の検証により、P 09を炉跡（F 02）に変更した。すべての落ち込みについて、柱痕の有無を確認するため約5cm段下げしたが、明らかに柱痕と認定できるものはなかった。

最後にP 1～P 10を半裁し、埋土の精査を行った上で断面撮影と断面図作成を行い完掘する。竪穴建物跡全体の単点測量を行い、平面図を作成した。

遺構構造 長軸5.30m、短軸3.70mの規模である。楕円形を呈すると推定する。西壁はテラス床面から緩やかに立ち上がる。S K 4040やS K 4042・S K 4043と重複する箇所の上り上がりは緩やかである。南端（S P C-DのD寄り）壁面の立ち上がりは明瞭である。

壁溝はない。西壁に沿って幅50～100cmのテラスがある。テラスの床面はV層が露出するが軟らかく、東に向けて緩やかに傾斜している。床面とは、約10cmの比高差がある。

床面は全体に平坦で凹凸は少ない。P 01・P 03～P 05・P 07に囲まれた範囲は極めて硬い。

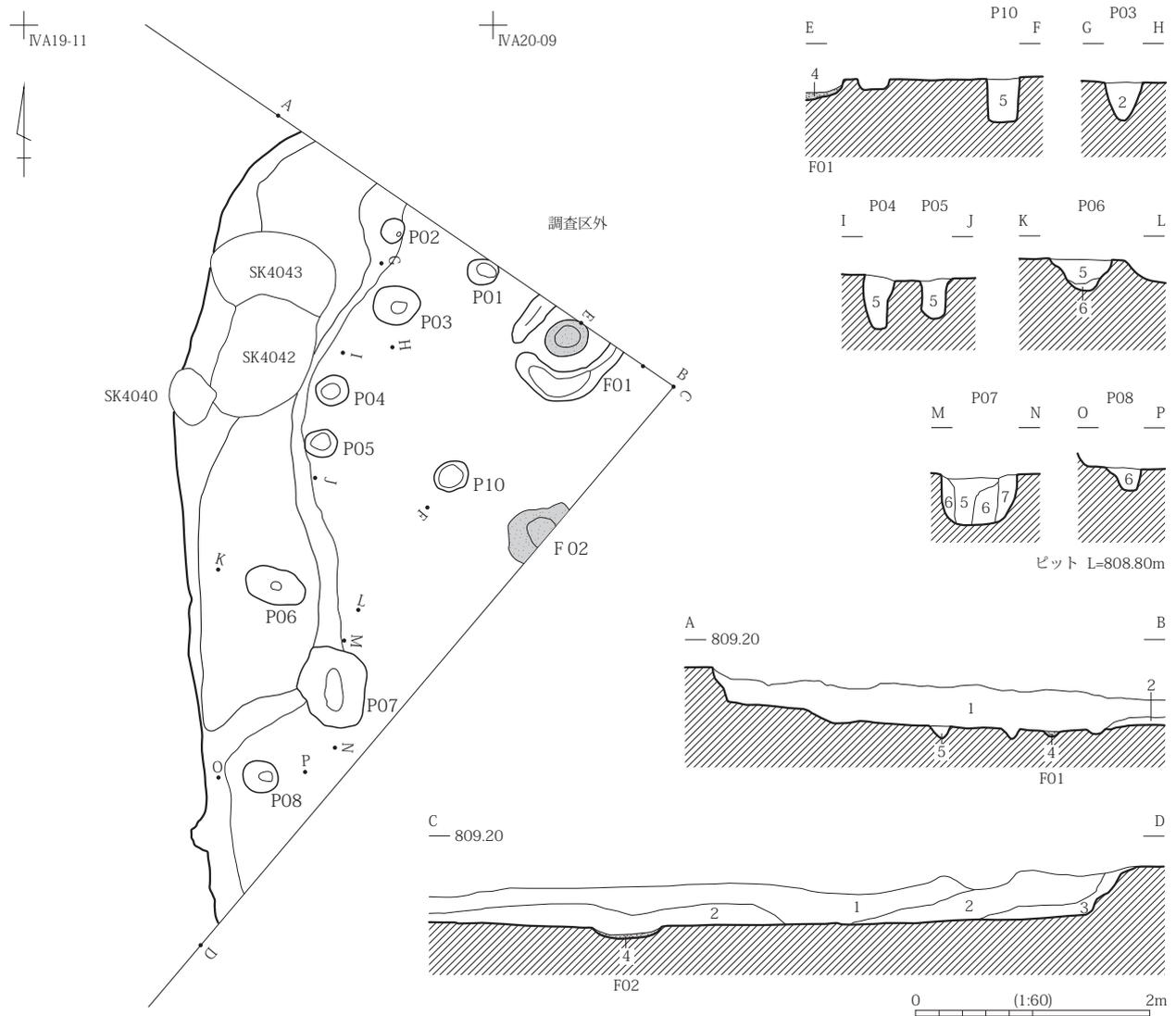
炉跡F 01は、短径30cm程度の楕円形で、掘り込みの底面が被熱する。炉跡の周囲に幅約20cm、深さ約10cmの溝が巡っている。付近に該当する礫がまったくないことから、炉跡辺石の抜取り痕跡ではないと考える。しかし、溝の機能・用途を明らかにすることはできなかった。炉跡F 02は長径65cmの不正楕円形で、深さは10cm程度である。

P 03～05・07・10は、断面形状や埋土の共通性、深さから柱穴と考えるが、P 10は位置的に不自然ではある。P 01・02・08は、深さから柱穴には不向きであり、テラスで検出したP 06も、位置や深さから柱穴とは認定できない。

遺物出土状況等 調査経過で述べたとおり、ほとんどの遺物が埋土上層の包含層から出土しており、床面直上や施設内から出土したものはない。



S B 4001 4 トレンチ東壁土層堆積状況（北西より）



- | | |
|---|------------------------------|
| 1 暗赤褐色 (5YR3/2) シルト Φ1～3 のローム偽礫と炭混在 | 5 暗褐色 シルト Φ3mm のローム偽礫混在 |
| 2 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト Φ1～3mm のローム偽礫と多量の炭混在 | 6 褐色 シルト Φ1～10mm のローム偽礫多量に混在 |
| 3 褐色 (10YR4/6) シルト Φ1～10mm のローム偽礫が多量に混在 | 7 暗灰黄色シルト Φ1～3mm のローム偽礫混在 |
| 4 暗赤褐色 (5YR3/2) シルト Φ1～3mm のローム偽礫と炭混在 | |

第18図 縄文時代の遺構図(7) S B 4001

埋土からは、漆付きの土器(237)や種実圧痕が付く土器片(285)が出土した。その他、ミニチュア土器2点(298・299)、スクレイパー3点(320～322)、石匙3点(317～319)、打製石斧12点(内8点掲載:325～332)、凹石・敲石10点(内2点掲載:334、335)、石皿・台石(336、337)等が出土した。

炉跡F01の埋土は、3mmメッシュのフルイにかけ、炭化物と極小の土器・石器片を確認した。

調査所見 柱穴や炉跡があることから、上屋を架けた縄文中期初頭の竪穴建物跡と考える。埋土から出土した土器片(257)に付着した炭化物の放射性炭素年代測定により、暦年較正年代で5193-5051cal BP (2σ 68.7%)という結果を得た。

西壁際でみつかった土坑のうち、S K 4040～4043はS B 4001より新しい。

(2) 土坑 焼土跡 (第9表)

81基を検出した土坑の方向は長径の向きを示し、北から東へ傾く場合はNE-SW、西に傾く場合はNW-SEとした。長径及び短径は、それぞれ平面図上端実線の最大及び最小値である。底面の長さは、下端の最大値を記し、深さは、断面図の上端測点間を結んだ線分から底面までの垂線の最大値とした。なお、計測が困難な場合は、想定する最大・最小値をカッコ内に記した。また、平面形と断面形は、以下の基準に従って分類した。

1 トレンチ SK 1001～1004・1006・1008・1009・1012～1021・1023～1036 SF 1001

(第9・19・20図、写真図版6)

調査経過 重機でIV層下部まで掘削し、V層上面で遺構検出を行い、土坑と判断したものにSK 1001～1036、焼土跡にSF 1001の遺構番号を付した。土坑については5cm程段下げを行い、その結果SK 1005・1007・1010・1011・1022は遺構ではないと判断して欠番とした。

各土坑の埋土を半裁し、断面観察の後撮影した。これらの断面測量が終了した順に完掘した。が、SK 1016は土坑が埋まる過程で土器が遺棄されたと想定できたため、遺物出土状況を撮影した。

最後に、委託測量による単点図から平面図を作成し、調査を完了した。

SK 1003・1016・1020・1024・1025・1032 平面は円形、楕円形、卵形とさまざまだが、短径60cm以上、深さ30cm以上で、断面が箱形ないし台形の土坑である。SK 1020は底面に段差がある。埋土は、SK 1025を除き2～3層で、いずれも基本層序IV層の土を基調にしている。礫やローム偽礫が混在する点はSK 1031・1034と同様である。

SK 1031・1034 平面形はSK 1031が円形、SK 1034は楕円形と異なるが、両者とも断面形が袋形を呈する。埋土は複層で、いずれもIV層の土を基調としている。礫やローム偽礫、混在する炭の大きさや量の違い、色調の違いから分層を行った。また、ほとんどの層は、混在するローム偽礫の大きさが20mm未満と小さく、淘汰が良いため、自然に堆積したものと想定する。

SF 1001 平面形は長径102cm、短径100cmの不整形で、深さは12cmである。浅い土坑に、炭化物が多量に混じる極暗赤褐色土が堆積したものであろう。調査では焼土跡としたが、埋土に炭化物が混じることを除けば、ほかの断面形が台形を呈する土坑と大きな違いはない。

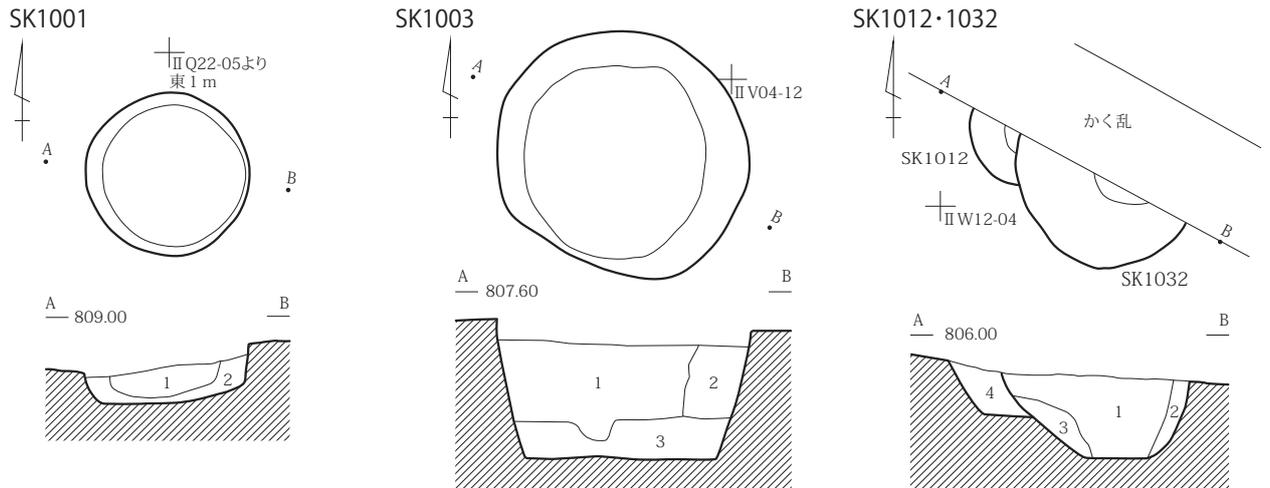
遺物出土状況等 遺物の多くは、埋土からの出土であり、底面から出土した遺物は少ない。土器は、SK 1016から中期中葉の深鉢の破片(342)、SK 1031、SK 1034から中期初頭の深鉢の破片(353、355)が出土している。SK 1024の出土の土器片(351)は、SK 1025(352)の土器片と接合した。石器は、SK 1021から打製石斧(349)、



SK 1031 埋土断面



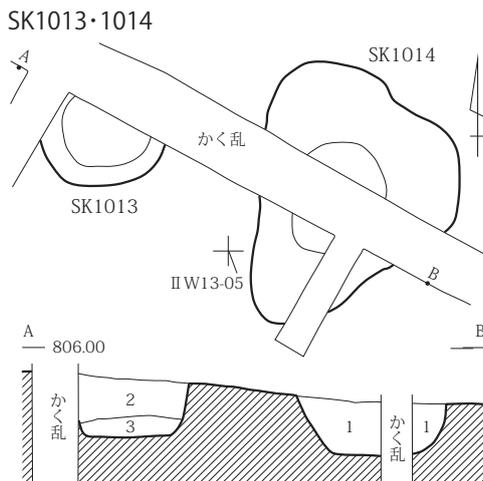
SK 1016 1層土器出土状況



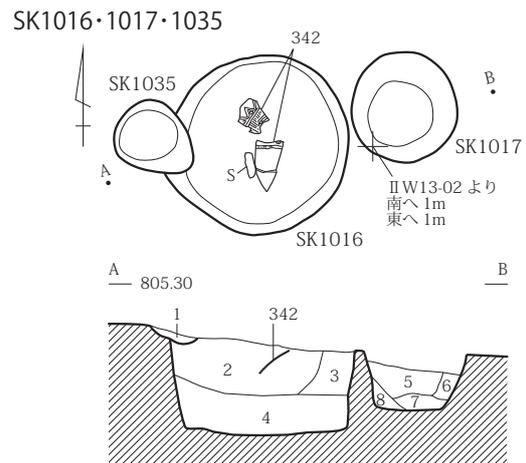
- 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
 2 暗赤褐色 (5YR3/2) 締りが強い粘土質シルト Φ1～3mm のローム偽礫混在 (1層より少ない)

- 1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや弱いシルト Φ3～10mm のローム偽礫と炭混在
 2 黒褐色 (5YR2/2) 締りが弱いシルト Φ1～5mm のローム偽礫混在
 3 暗赤褐色 (5YR3/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ5mm 程度のローム偽礫混在

- 1 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ5～50mm のローム偽礫と炭混在
 2 褐色 (10YR4/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ5～50mm のローム偽礫混在
 3 褐色 (10YR4/4) 締りがやや強い粘土質シルト炭混在
 4 褐色 (10YR4/4) シルト Φ3～50mm のローム偽礫と炭混在



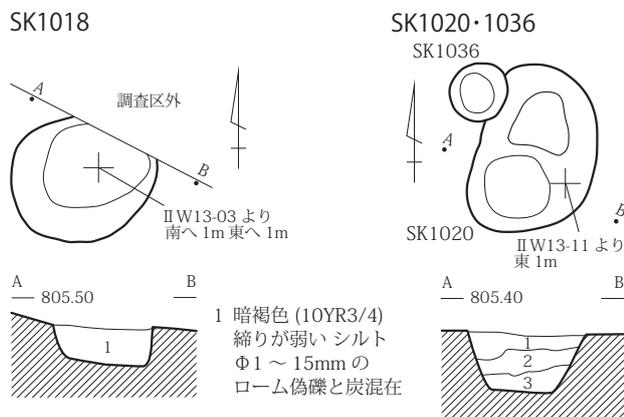
- 1 5YR2/3 極暗赤褐色 Φ3～10mm ローム偽礫を含む締りがやや強いシルト 炭混在
 2 5YR2/4 極暗赤褐色 Φ1～3mm ローム偽礫を含む締りがやや弱いシルト 炭混在
 3 5YR2/3 極暗赤褐色 Φ1～3mm ローム偽礫を少量含む締りが強いシルト 炭混在



- SK1035
 1 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りがやや弱い粘土質シルト 1～20mm のローム偽礫と炭混在

- SK1016
 2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ6mm の礫と Φ1～20mm のローム偽礫と炭混在
 3 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りがやや弱い粘土質シルト Φ6mm の礫と Φ3～10mm のローム偽礫と炭混在
 4 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りが強い粘土質シルト Φ40mm の礫と Φ1～20mm のローム偽礫と炭混在

- SK1017
 5 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや強いシルト Φ4mm の礫、Φ1～20mm のローム偽礫と炭混在
 6 暗赤褐色 (5YR3/6) 締りがやや弱い粘土質シルト Φ20mm の礫と Φ5mm のローム偽礫混在
 7 黒褐色 (5YR2/2) 締りが強いシルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
 8 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや強い粘土質シルト



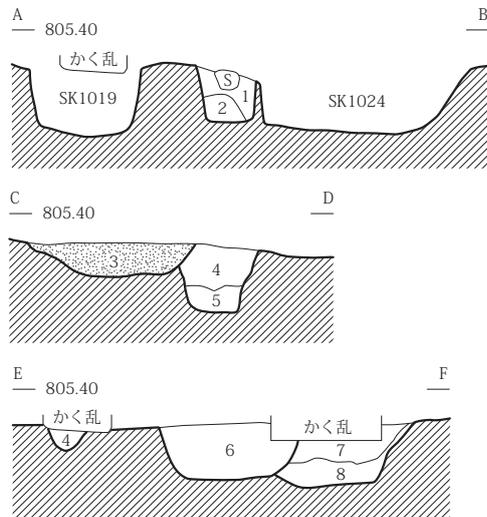
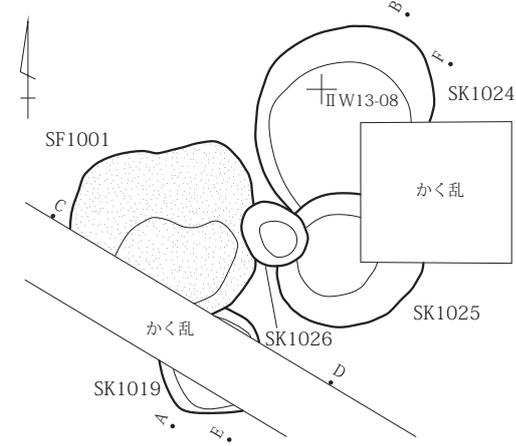
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 締りが弱いシルト Φ1～15mm のローム偽礫と炭混在

- SK1020
 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) シルト Φ10mm の礫と Φ1～5mm のローム偽礫、炭混在
 2 暗褐色 (10YR3/4) 締りが強い粘土質シルト Φ3～30mm のローム偽礫と炭混在
 3 黒褐色 (10YR2/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ5mm のローム偽礫混在

0 (1:40) 1m

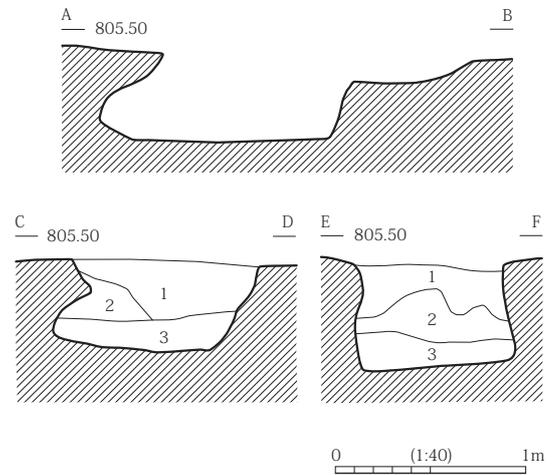
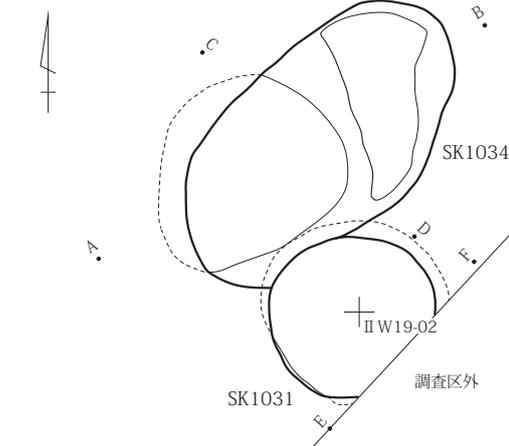
第19図 縄文時代の遺構図(8) 1トレンチSK(1)

SK1019・1024・1025・1026 SF1001



- 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強いシルト Φ140mmの大礫、Φ1～10mmのローム偽礫と炭混在
- 2 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強いシルト Φ1～3mmのローム偽礫と炭混在
- 3 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強いシルト Φ1～10mmのローム偽礫と多量の炭混在
- 4 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強い粘土質シルト Φ30mmの礫、Φ1～20mmのローム偽礫と炭混在
- 5 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが弱いシルト Φ3～5mmのローム偽礫少量と炭混在
- 6 暗褐色 (10YR3/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1～20mmのローム偽礫と炭混在
- 7 暗赤褐色 (5YR3/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1～15mmのローム偽礫と炭混在
- 8 暗褐色 (10YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ3～20mmのローム偽礫と炭混在

SK1031・1034



- SK1034
- 1 黒褐色 (5YR2/2) シルト Φ1～3mmのローム偽礫と炭混在
- 2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強い粘土 Φ5～20mmのローム偽礫と炭混在
- 3 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ5～10mmのローム偽礫と炭混在
- SK1031
- 1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ10mmの礫とΦ5～10mmのローム偽礫、炭混在
- 2 黒褐色 (5YR2/1) 締りがやや弱いシルト Φ5～10mmのローム偽礫と炭混在
- 3 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ5～20mmのローム偽礫と炭混在

第20図 縄文時代の遺構図(9) 1トレンチSK(2)

SK 1019・1021 から石鏃 (346、347)、SK 1031 から台石 (354) が出土した。

調査所見 SK 1031・1034 は、土坑の規模や断面形が袋状を呈することから貯蔵穴と考える。SK 1003・1016・1020・1024・1025 も、土坑の規模や形状から貯蔵穴と想定する。埋土から大形の土器片が出土したSK 1016 と3トレンチで検出したSK 3025 は、土坑の規模と形状、遺物の出土状況が類似する。

3 トレンチ SK 3001 ~ 3003・3006・3008・3009・3011・3019・3022 ~ 3027 (第10・21 ~ 23 図、写真図版7)

調査経過 トレンチの西側からIV層下部まで重機による掘削を行い、V層上面で検出を行った。土坑状の落ち込みは、5cm程度下げを行って確認し、土坑と認定できたものに、SK 3001 ~ 3022 の遺構番号を付けた。ただし、SK 3004・3005・3020 は、平面形が不整形で、埋土は再堆積のロームと、その間に黒色土が流れ込み、地山との境界が不明瞭であったため風倒木、SK 3010・3012・3016 は、遺構と地山との境界が不明瞭であったため土坑ではないと判断し、欠番とした。また、SK 3015・3021 はST 3002 の柱穴に組み込み、SK 3007・3013・3014・3017・3018 は埋土の特徴から古代の土坑と認定した。その後、SB 3002 の先行トレンチ断面及び床面で、SB 3002 の埋土上から掘り込まれた土坑5基を確認し、SK 3023 ~ 3027 を付けた。

続いて、大形の土坑は半裁し、半裁が難しい小形の土坑は断ち割り、埋土観察及び断面図作成と撮影を行った。SK 3003 は、掘り込みが深いので、上半部を記録後、周囲を重機で断ち割って作業スペースを確保してから、底面までの調査を行った。

SK 3001 長径270cm、短径195cmの楕円形を呈する大形の土坑だが、掘り込みは浅く、検出面からの深さは12cm程度である。壁は緩やかに外湾するように立ち上がる。底面はあまり硬化していない。

SK 3002・3006・3008・3011・3023 平面形は、SK 3002 が長径120cm、短径90cmの卵形、その他は直径80 ~ 100cm前後の円形を呈する。検出面から底面までの深さは、SK 3002 が19cm、その他は35 ~ 48cmである。壁の立ち上がりは、直線的でわずかに外に開く。底面は、平坦で硬く締まっている。SK 3002 が浅いのは、上部を削平されたためであり、これらの土坑は規模や形状がよく似る。

SK 3003 平面形は長径133cm、短径は推定95cmの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは118cmで、底面から中端までは垂直に立ち上がり、中端から上端までは直線的に外に開くように立ち上がる。底面は平坦で硬く締まっており、直径5cm程、深さ15 ~ 30cmの逆茂木痕が3か所ある。

SK 3009 平面形は、直径174cmの円形を呈する。やや大形の土坑である。検出面からの深さは28cmで、壁は外湾するように立ち上がる。底面は平坦で硬く締まっている。

SK 3013 平面形は、直径37cmの円形を呈する。検出面からの深さは16cmで、壁は外湾するように立ち上がる。

SK 3019 平面形は、直径175cmの円形を呈する。大形の土坑である。検出面からの深さは50cmで、壁は外に大きく開くように立ち上がる。底面は平坦で硬く締まっている。

SK 3022・3025・3026・3027 平面形は、長径100 ~ 120cm前後、短径80 ~ 100cm前後の卵形を呈する。検出面からの深さはSK 3026 が25cmと浅く、それ以外は40 ~ 70cm程である。SK 3026 がほかよりも浅いのは、上部が削平されているためと考える。壁は直線的にわずかに外に開くように立ち上がる。SK 3025 の埋土からは土器片や石器が、他の土坑に比して多量に出土しており、投棄を思わせる状況である。

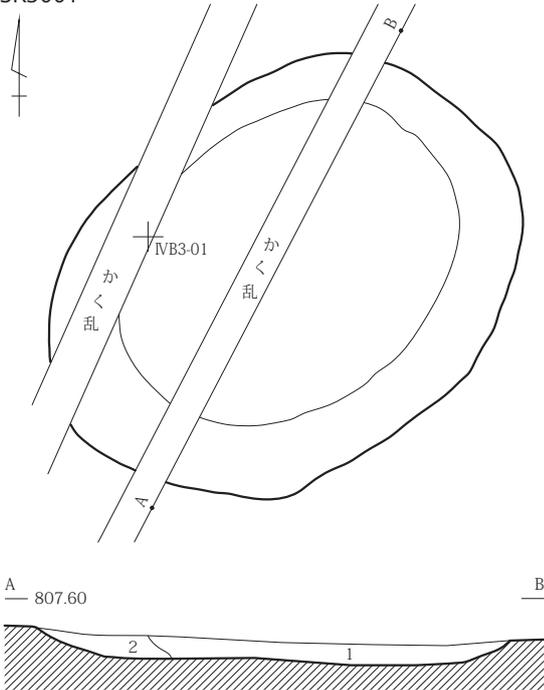


半裁したSK 3003 底面に残る逆茂木痕



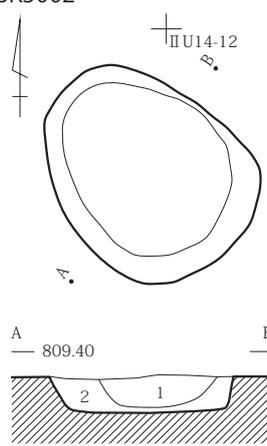
SK 3025 5層土器出土状況

SK3001



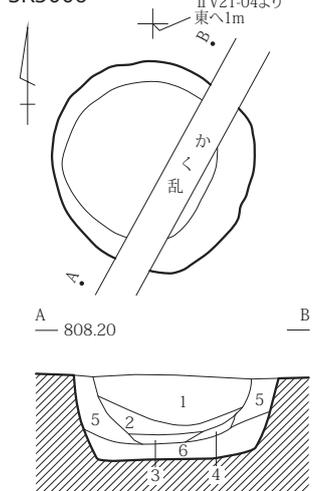
- 1 暗赤褐色 (5YR3/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1～3mm のローム偽礫少量と炭混在
- 2 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫が少量混在

SK3002



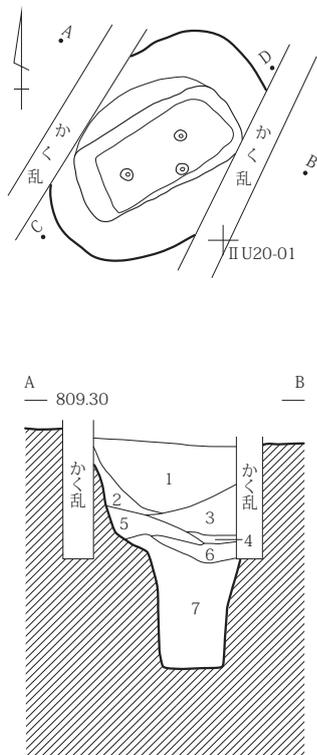
- SK3002
- 1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
- 2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1～5mm のローム偽礫と炭混在

SK3006



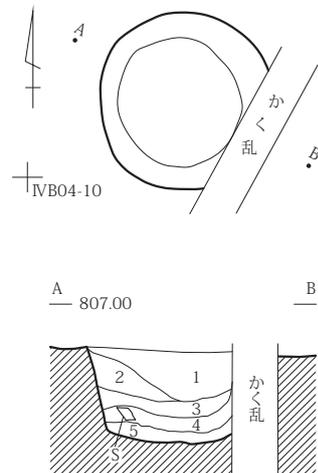
- SK3006
- 1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
- 2 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ3mm の礫とΦ1mm のローム偽礫、炭混在
- 3 黒色 (5YR1.7/1) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫が少量混在
- 4 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫が少量混在
- 5 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強い粘土質シルト
- 6 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが非常に強いシルト Φ3mm のローム偽礫混在

SK3003



- 1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
- 2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが強い粘土質シルト
- 3 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや弱いシルト Φ1～5mm のローム偽礫と炭混在
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト
- 5 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1～5mm のローム偽礫が少量混在
- 6 黒褐色 (5YR2/2) シルト
- 7 暗褐色 (10YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト
- 8 極暗赤褐色 (5YR2/4) ローム質粘土しまりが弱い

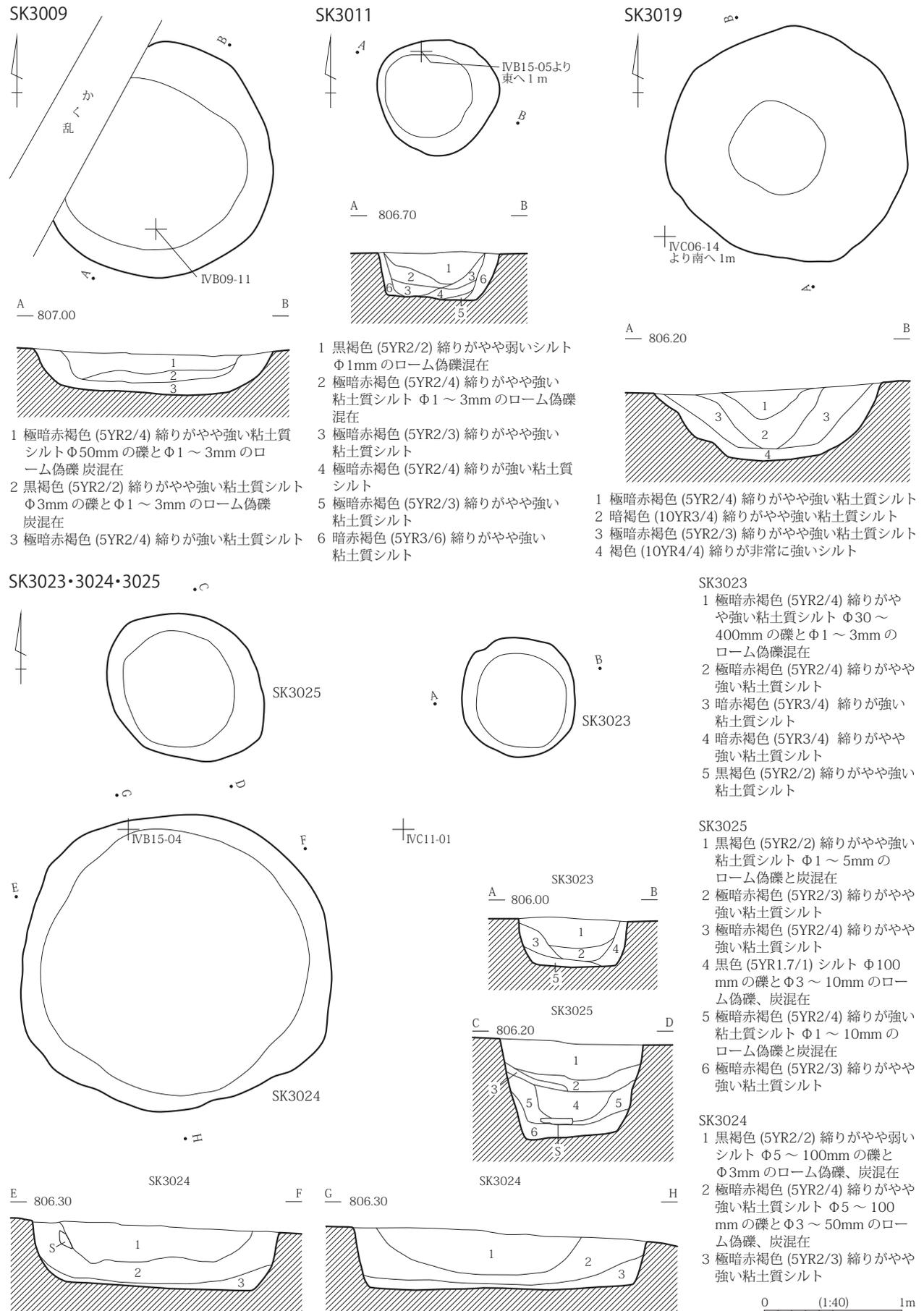
SK3008



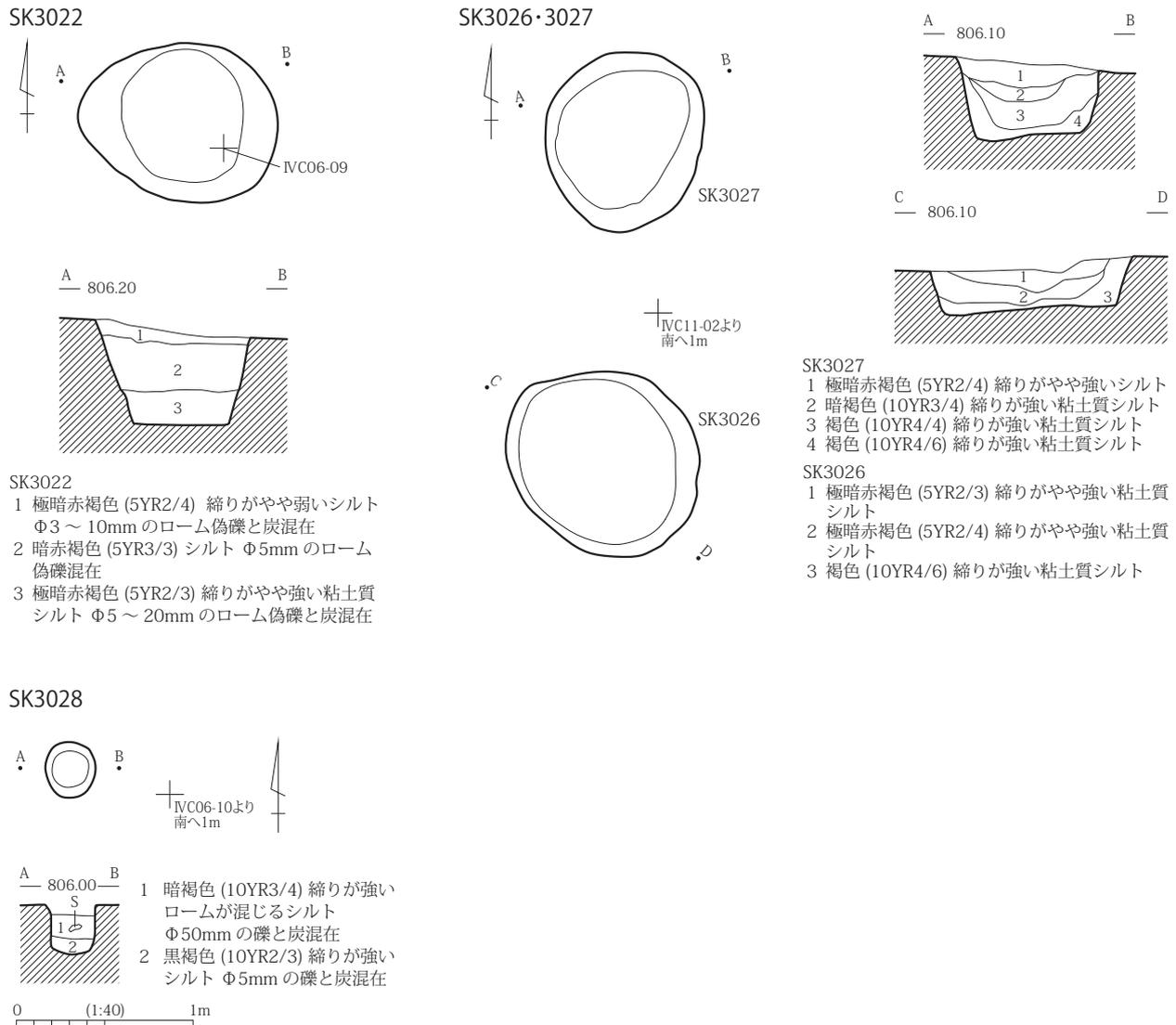
- 1 黒色 (5YR1.7/1) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫混在
- 2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが強い粘土質シルト Φ1～3mm のローム偽礫混在
- 3 黒色 (5YR1.7/1) 締りがやや弱いシルト Φ1～5mm のローム偽礫混在
- 4 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫混在
- 5 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りがやや強い粘土質シルト Φ3～10mm のローム偽礫混在

0 (1:40) 1m

第21図 縄文時代の遺構図(10) 3トレンチSK(1)



第22図 縄文時代の遺構図(11) 3トレンチSK(2)



第23図 縄文時代の遺構図(12) 3トレンチSK(3)

SK 3024 平面形は、直径225cm程度の円形を呈する。検出面からの深さは42cm、底面は平坦で硬く締まっている

SK 3028 平面形は、直径31cmの円形を呈する。検出面からの深さは31cmで、壁は外湾気味に立ち上がる。**遺物出土状況等** SK 3001から特殊凸帯文と、底部に5か所の押圧がある鉢形土器の、胴部から底部破片が出土した(357)。SK 3024の埋土からは、縄文時代中期初頭の深鉢形土器胴部破片(368～385)と、SB 4001の埋土から出土したものと同様の焼成土塊8点(389～396)が出土したほか、石鎌3点(内2点掲載:386、387)が出土している。また、SK 3025からは縄文時代中期初頭の土器を主体としながら、三角印刻文や竹管を用いた文様をもつ前期的な土器が出土した(397～413)。ほかに石皿(415)や敲石(377)も出土した。

調査所見 以上の土坑埋土はIV層を基調とするため、縄文時代に帰属すると判断する。縄文時代の遺構埋土にはローム偽礫や炭が混じるものが大半であるが、ローム偽礫は小さく、炭自体は基本層序にも多く混じっている。また、埋土は比較的淘汰が良く、「三角堆積」があることから、自然に埋没したものと推定する。ただし、SK 3025のように埋土中に土器片が投棄されたようなものは、人為的に埋め戻された可能性もある。

SK 3003は、断面形や深さ、底面の逆茂木痕により、陥し穴と判断する。加曽利B式土器が出土しており、

後期後葉に埋没したものであろう。S K 3006・3008・3011・3022～3027 は、土坑の規模や形状から貯蔵穴と想定している。平面形の大きさに対して、深さが浅いS K 3001・3009・3019 の機能・用途は明らかにできなかった。

4 トレンチ S K 44024～4026・4028～4032・4034～4045 (第11・24・25 図、写真図版8)

調査経過 4 トレンチの東端から重機で掘削した。これらの土坑は、のちに平安時代の土坑と判明する(第2節で詳述)。

V層上面で再検出を行い、縄文時代のS B 4001 及びS K 4022～4026・4028～4038 を確認した。続いて、S B 4001 の埋土掘削中にテラス部分の埋土中から大型土器片2個体分と石棒が出土し、精査によりこれらを伴うS K 4040・4042・4043 を検出した。さらに、S B 4001 西壁外の検出面を精査し、S B 4001 に隣接するS K 4039・4041～4045 を確認した。S B 4001 と接するS K 4041 は側面が底面に向けて外側に膨らんでいるが、精査の結果、最大径の上部にあるS B 4001 の床面は貼り床ではないため、S B 4001 の方が古いと判断した。

S K 4024～4026・4028・4029・4034・4038・4039・4041・4044・4045 平面形は円形、隅丸方形、楕円形、卵形と多様だが、楕円形ないし卵形が多い。断面形はS K 4024・4039・4044 が袋状を呈する。また、S K 4045 は底面に段差がある。直径は最大がS K 4044 の153cmで、最小はS K 4024 の60cm、深さは28～67cmとさまざまである。埋土は底面や壁際は自然堆積と推定するが、S K 4039 の2層は、ローム偽礫や炭が多量に混在しており、埋め戻されたと考える。

S K 4032・S K 4042・S K 4043 平面形は楕円形ないし卵形を呈する。S K 4032 は南側の底面に段差がある。深さは全体に20cm以下と浅い。しかし、S K 4042 とS K 4043 はS B 4001 の埋土中で確認しており、掘り込み面は、本来もう少し高い位置にあったと考える。

遺物出土状況等 S K 4024～4026・4028・4029・4032・4034・4038・4039・4041・4042・4044・4045 から中期初頭の土器片が出土している。S K 4032 では、中期初頭深鉢形土器の完形品(437)が口縁を北向きに横倒しの状態で出土している。また、S K 4042 からは同時期の破片(461、462)が出土したほか、砥石(463)が出土した。また、S K 4025 から石匙(428)と尖頭器の先端部(427)等、S K 4028 から敲石(434)と石錐(433)、S K 4029・4039・4041・4044 では敲石・凹石(436、460、469)、S K 4043 から敲石(467)と石棒(468)、S K 4045 から打製石斧(472)と磨製石斧(473)が出土した。

調査所見 S K 4024・4028・4039・4041・4044 は、土坑の規模や断面形が袋状を呈することから貯蔵穴と判断する。S K 4025・4026・4029・4034・4038・4045 は、土坑の規模や形状から貯蔵穴と想定する。S K 4032・4042・4043 は、土坑の形状や深さ、遺物とその出土状況が、他の土坑に比べ特殊である。墓坑の可能性も想定する。

5 トレンチ S K 5001～5009 (第11・26 図、写真図版8)

調査経過 5 トレンチの東端から重機で掘削したところ、IV層中から縄文中期初頭の土器片が出土した。精査したところ、V層上面において黒褐色

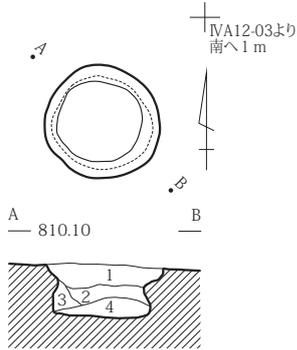


S K 4039 埋土断面



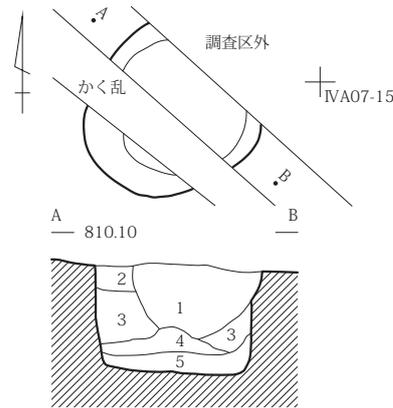
S K 4042・4043 遺物出土状況

SK4024



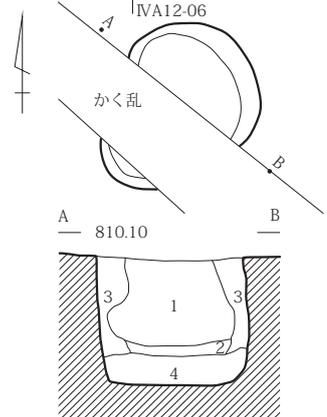
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ローム偽礫が多量に、炭が僅かに混在
- 2 暗褐色 (10YR3/4) ローム偽礫、炭混在
- 3 褐色 (10YR4/6) ローム偽礫が多量に、炭が僅かに混在
- 4 暗赤褐色 (5YR3/2) ローム偽礫混在

SK4025



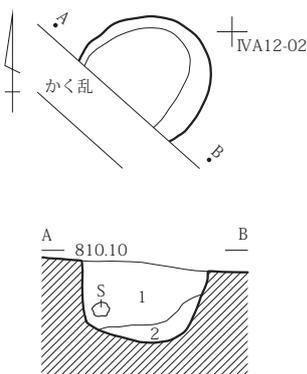
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ローム偽礫・炭粒混じる
- 2 褐色土 (10YR4/6)
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) ローム偽礫多量に混じる
- 4 暗褐色土 (5YR3/2)
- 5 黒褐色土 (5YR3/1) 粘性あり

SK4028



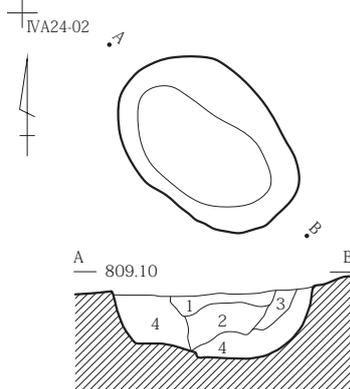
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ1～10mm のローム偽礫と炭混在
- 2 暗褐色 (10YR3/4) シルト Φ1～10mm のローム偽礫と炭混在
- 3 褐色 (10YR4/6) シルト Φ1～10mm のローム偽礫と炭混在
- 4 暗赤褐色 (5YR3/2) やや粘性のあるシルト Φ1～10mm のローム偽礫と炭混在

SK4026



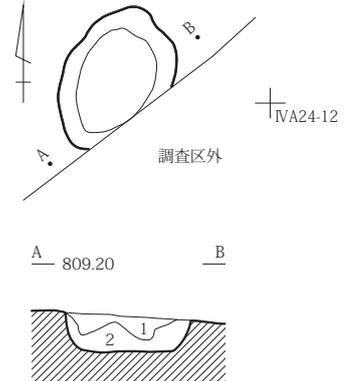
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ10～30mm のローム偽礫と大礫が混在
- 2 黒褐色 (5YR2/2) 粘土質シルト

SK4029



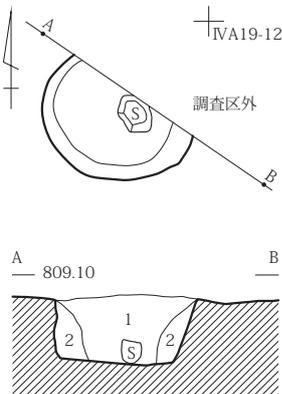
- 1 暗褐色 (10YR3/4) シルト 炭混在
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ10～30mm のローム偽礫混在
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) さらさらしたシルト
- 4 褐色 (10YR4/6) やや粘性のあるシルト

SK4037



- 1 暗褐色 ローム粒・炭粒混
- 2 暗黄褐色 ローム粒多混

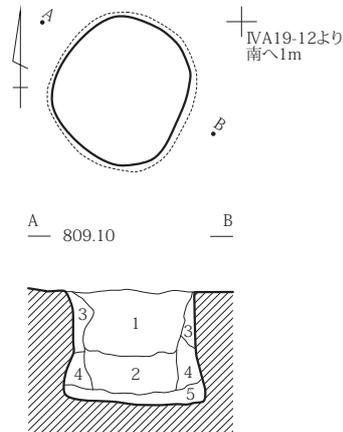
SK4038



SK4038

- 1 暗褐色 SB4001 の2層より色調は暗いシルト ローム偽礫や炭化物が混在する
- 2 暗黄褐色 シルト ローム偽礫が多量に混在するが、炭化物は少ない

SK4039



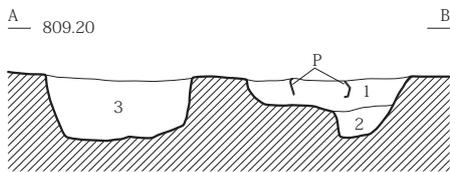
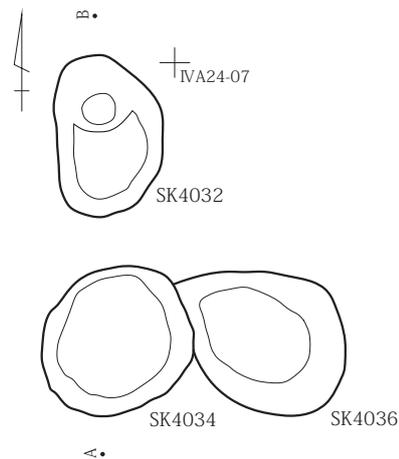
SK4039

- 1 暗褐色 (10YR3/4) シルト Φ1～10mm のローム偽礫と炭が多量に混在
- 2 暗赤褐色 (5YR3/2) 全体にしっとりした感じのシルト 少量の炭が混在
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ10mm のローム偽礫が多量に混在
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 3層に似た土質だがローム偽礫が少ないため色調はやや暗い
- 5 明黄褐色 (10YR6/6) 4層以上にしっとりした感じのシルト 炭が僅かに混在

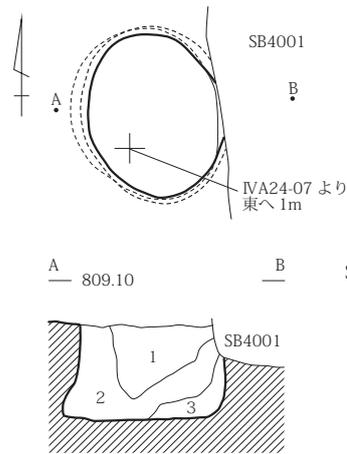
0 (1:40) 1m

第24図 縄文時代の遺構図 (13) 4トレンチSK (1)

SK4032・4034



SK4041



SK4041

- 1 黒褐色 (5YR3/1) シルト Φ10～30mmのローム偽礫が少量混在
- 2 暗褐色 (10YR3/4) やや粘性のあるシルト Φ10～30mmのローム偽礫が多量に混在 SB4001埋土にはない土
- 3 褐色 (10YR4/6) サラサラした質感のシルト Φ10～30mmのローム偽礫が少量混在

SK4032

- 1 暗褐色 (10YR3/4) シルト 炭混在
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ10～13mmのローム偽礫混在

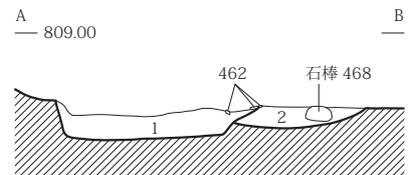
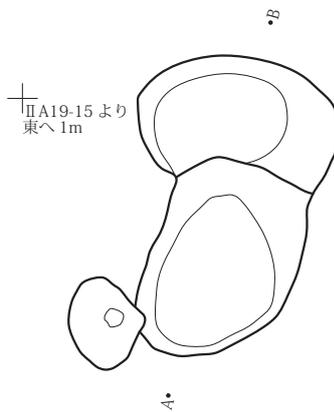
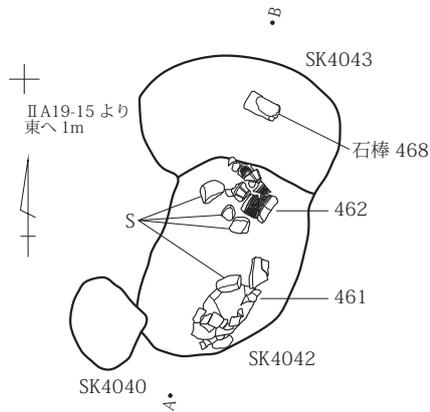
SK4034

- 3 暗褐色 (10YR3/4) シルト 炭混在

SK4042・4043

遺物出土状況

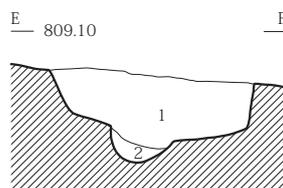
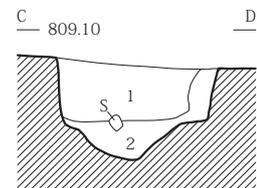
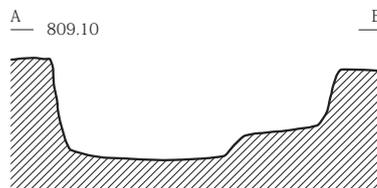
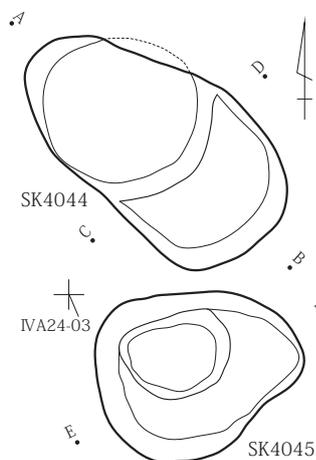
完掘状況



SK4042・4043

- 1 暗褐色 (10YR3/4) サラサラした質感のシルト
- 2 暗赤褐色 (5YR3/2) 全体にしっとりした感じのシルト Φ1～3mmのローム偽礫が少量と炭混在

SK4044・4045



SK4044・4045

- 1 暗褐色 (10YR3/4) シルト Φ10mmのローム偽礫と炭混在
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ10～30mmのローム偽礫混在

0 (1:40) 1m

第25図 縄文時代の遺構図(14) 4トレンチSK(2)

の落ち込みを確認し、S K 5001～5004の遺構番号を付けた。S K 5002～5004を半裁し掘り下げ、S K 5002は深さ125cmの陥し穴であると判断した。この土坑はトレンチ外に続いていたので、平面図および断面図作成後に5トレンチ北側を5m拡張し、上部を地山ごと掘削したのちに下端の検出を行った。また、拡張部のV層上面で、新たに黒褐色土の落ち込みを確認した。最後に、S K 5002の北側を、下部まで重機で断ち割り、断面及び底面を精査した。底面で逆茂木痕を5基検出した。

S K 5002 平面形は、南北113cm、東西146cmの楕円形を呈する。深さは125cmである。壁は、底面から50cmまではほぼ垂直に立ち上がり、そこから上端に向けて内湾しながら広がる。底面は、平坦で非常に硬い。底面のほぼ中央に3基、短軸西壁寄りに2基の逆茂木痕がある。逆茂木痕は直径7～12cmで、深さは28cm～40cmあり、先端はとがっている。埋土は全体に締まりがなく、ローム偽礫や炭粒が混在しているものの大きな塊はないことから、自然堆積と考えた。

S K 5003・5004・5005 平面形は、直径80～110cm程度の円形を呈する。いずれの土坑も壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、S K 5003・5005は底面付近がやや膨らみ、S K 5005は上端がやや広がる。深さはS K 5003が65cm、S K 5004は70cm、S K 5005は96cmで、底面は平坦でやや硬い。大礫や比較的大きなローム偽礫を含むS K 5003の3層や、S K 5005の1・3層は人為的に埋め戻した可能性がある。

S K 5007 平面形は、直径75cmの円形を呈する。深さは13cm、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況等 S K 5002～5004から縄文土器片(474～484、488～492)が出土したほか、S K 5004から敲石・凹石(487)、打製石斧(486)、S K 5005から打製石斧(493)、S K 5009から石錘(508)が出土した。また、S K 5007からは完形に近い縄文土器(501)やミニチュア土器の口縁部(503)などが出土した。
調査所見 S K 5002は、断面形状や深さ、底面の逆茂木痕により、陥し穴と判断できる。出土した土器から中期初頭に帰属するのであろう。また、S K 5003・5005は、土坑の断面形が袋形を呈することから貯蔵穴と考えられる。S K 5004も規模や形状から貯蔵穴と考える。S K 5002は、隣接する貯蔵穴(S K 5003～5005)と同時期と考えることは難しいが、遺構の切り合いがなく、遺物はほぼ同時期のものが出土しているため、新旧関係を明らかにすることはできなかった。

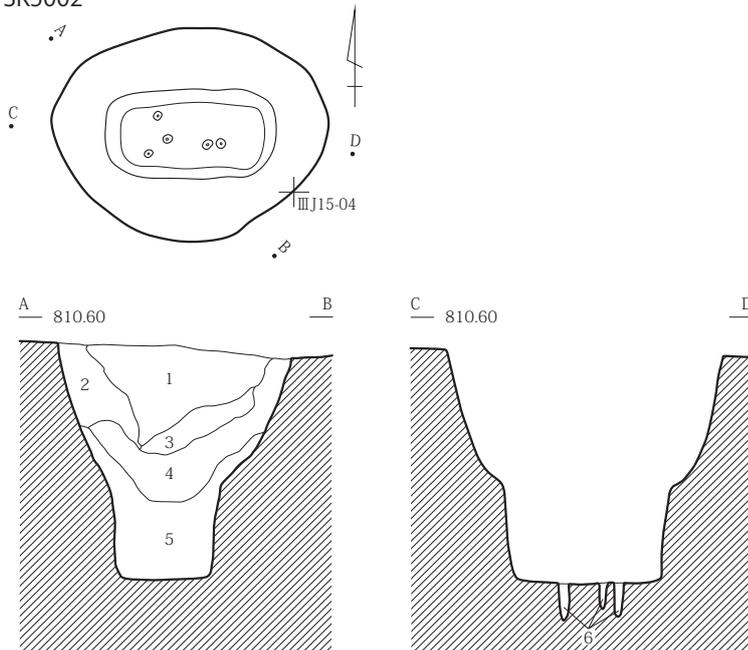
土坑のまとめ

縄文時代の土坑81基を、形状、埋土、出土遺物等から、分類すると、陥し穴2基、貯蔵穴9基、貯蔵穴の可能性のあるもの21基、墓坑の可能性のあるもの3基である。

陥し穴のうちS K 5002からは縄文中期初頭の特徴を示す深鉢形土器の口縁部破片が出土しているため、同遺構はそれ以前に構築されたものと考えられる。S K 3003は、断面形や底面の造りはS K 5002に類似するが、出土遺物は内面の口縁近くに平行沈線が巡る加曾利B式土器である。したがって2基の陥し穴は、それぞれ異なる時期に構築されたと判断した。今回の調査範囲内でみるかぎり、SK3003は、集落が放棄された後の構築と考えられるが、中期初頭と中葉の竪穴建物跡等の遺構が集中していた領域の北端に位置する。陥し穴が毘鹿に利用される遺構であると仮定すれば、獣道に設置されることが一般的である。集落が立地する平坦地ではなく、獣道として利用された緩斜面地に設置した結果であろう。S K 5002は中期初頭と中葉の竪穴建物跡等の遺構が集中していた領域の西端に位置する。出土遺物からは中期初頭の集落と同時期に存在した可能性もあるが、常識的には、人間が生活している集落の真横に獣道があるとは考え難い。したがって、中期初頭の集落跡が造営される直前、あるいは放棄直後に設置された陥し穴だったと考える。

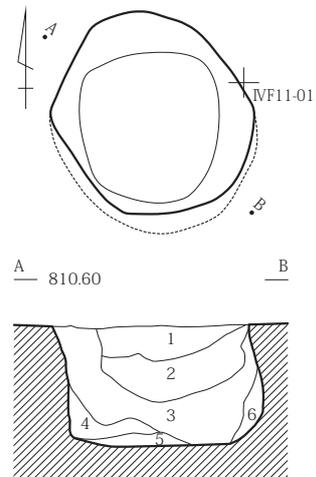
貯蔵穴は、その可能性があるものを含めると30基にのぼる。これらの分布状況をみると、1トレンチのS B 1001の南西側、3トレンチのS B 3003・3004の南側(S B 3002の上面)、4トレンチの中ほどとS B 4001の西側、5トレンチの南東部の5つのまとまりがある。このうち、3か所は竪穴建物跡に近接した場所にある。今回は、調査範囲が限られているため、縄文時代の集落全体を把握することは困難だが、中

SK5002



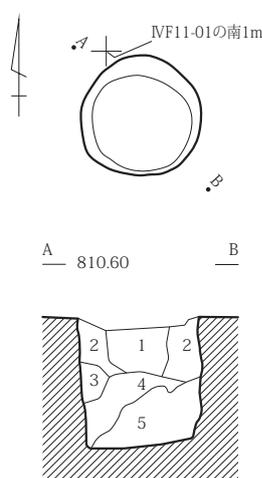
- 1 黒色 (7.5YR2/1) 締りが弱いシルト Φ40mm の礫、Φ1mm のローム偽礫と炭混在
- 2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱い粘土質シルト
- 3 黒色 (7.5YR2/1) 締りが弱いシルト Φ1mm のローム偽礫と炭混在
- 4 極暗赤褐色 (5YR2/3) 締りが弱いシルト Φ1～5mm のローム偽礫混在
- 5 極暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱い粘土質シルト 2層によく似る
- 6 極暗赤褐色 (5YR2/4) ローム質粘土 しまりが弱い

SK5003



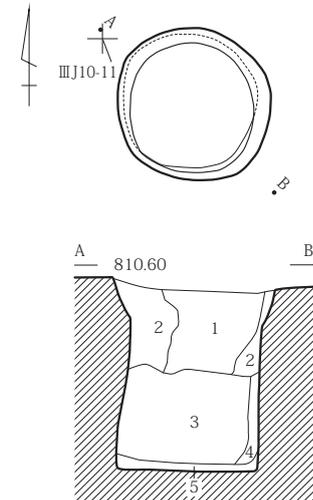
- 1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1～5mm のローム偽礫と炭混在
- 2 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや弱いシルト Φ1～5mm のローム偽礫 (1層より少ない) と炭混在
- 3 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りがやや弱いシルト Φ1～30mm のローム偽礫、大礫と炭混在
- 4 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1～5mm のローム偽礫と炭混在
- 5 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りが強い粘土質シルト Φ5～10mm のローム偽礫混在
- 6 暗赤褐色 (5YR2/4) 締りが弱いシルト Φ1～5mm のローム偽礫混在

SK5004



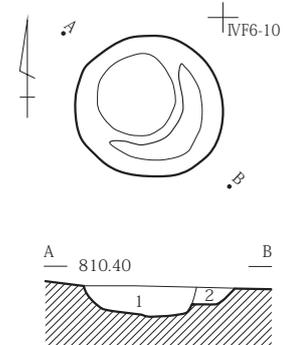
- 1 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや弱いシルト Φ1～5mm のローム偽礫と炭混在
- 2 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りが弱いシルト Φ1～5mm のローム偽礫と炭混在
- 3 暗赤褐色 (5YR3/4) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1～30mm のローム偽礫混在
- 4 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト
- 5 黒褐色 (5YR2/2) 締りがやや強い粘土質シルト Φ1～5mm のローム偽礫混在

SK5005



- 1 暗褐色 (10YR3/4) 締りが弱いシルト Φ50mm の礫と炭混在
- 2 褐色 (10YR4/6) シルト Φ1～3mm のローム偽礫が多量に混在
- 3 黒褐色 (5YR2/2) シルト Φ50mm のローム偽礫と炭ブロックが多量に混在
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Φ1～3mm のローム偽礫と炭混在
- 5 褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト Φ1mm のローム偽礫 (4層より少ない) と少量の炭混在

SK5007



- 1 暗褐色 (10YR3/4) 締りが弱いシルト Φ50mm の礫と炭混在
- 2 褐色 (10YR4/6) シルト Φ1～3mm のローム偽礫が多量に混在

0 (1:40) 1m

第26図 縄文時代の遺構図 (15) 5トレンチSK



S K 5002 底面に残る逆茂木痕と断面

期初頭から中葉の貯蔵穴が竪穴建物に近接して設けられたとするならば、4トレンチ中央部や5トレンチ南東部にある土坑群の近くにも、竪穴建物跡が存在する可能性はある。

墓坑の可能性のある土坑は、3基ともS B 4001辺りにある。氏神遺跡の縄文集落には、ほかに墓の可能性のある土坑はないが、S K 4042と4043は、竪穴の埋土を掘り込むように構築されている点に留意しておきたい。



S K 5005 埋土断面

遺構番号	小地区	図番号		図版番号		方向	規模			形	柱穴	炉	時期	重複遺構 (▼古 △新)
		遺構	遺物	遺構	遺物		長軸 m	短軸 m	深さ m					
SB1001A ・B	II W07	9 12 13	27~ 34	2	11~ 18	NW-SE	6.45	4.95	0.32	楕円	P07 ・08 ・16 ・21 ・22 ・30	F01 F02	中期中葉	▼SB1002
SB1002	II W06 II W07					-	3.60	3.60	0.32	円	P01	-	中期中葉	△SB1001A・B
SB3002	IVB10 IVB15 IVC06 IVC11	10 14 15	35~ 37	3	19~ 21	NE-SW	9.00	7.25	0.32	楕円	P01 ~06	P07	中期中葉	△SK3019、 3022~3027 △ST3001
SB3003A ・B・ 3004	IVB05 IVB10 IVC06	10 16 17	38~ 41	4	22~ 25	NW-SE	9.70	3.25	0.60	楕円	P02・07 ~09・ 11・13・ 27~29・ 31・80 P03~ 06・10・ 24・25・ 30・37・ 42・75~ 79・83 P26・33 ~36・ 81・82	F01 ~ 03	中期中葉	△ST3002
SB4001	IVA19 IVA20 IVA24 IVA25	11 18	42~ 49	5	26~ 32	NE-SW	5.30	3.70	0.38	楕円	P03 ~05 ・07 ・10	F01	中期中葉	△SK4040 ~ 4043

第8表 縄文時代竪穴建物跡一覧表

遺構 番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径 cm	短径 cm	形	深さ cm	底長 cm	形	
SK1001	ⅡQ22-05	9 19				-	87	86	円	26	76	B	
SK1002	ⅡQ22-12	9				E-W	36	28	不整	32	0	F	
SK1003	ⅡV04-07・11・12	9 19		6		NW-SE	135	130	円	70	95	B	貯蔵穴か
SK1004	ⅡV04-08	9				E-W	55	35	不整	23	0	E	
SK1006	ⅡV05-09	9				NE-SW	50	34	不整	15	0	E	
SK1008	ⅡV05-10	9				NE-SW	41	26	卵	10	0	E	
SK1009	ⅡV05-11	9				E-W	66	65	不整	18	44	B	
SK1012	ⅡW07-16	9 19				-	(56)	(56)	円	24	0	E	
SK1013	ⅡW12-04	9 19	50		33	-	(68)	(68)	円	28	(50)	A	
SK1014	ⅡW13-01・05	9 19	50		33	NE-SW	135	116	不整	32	0	E	
SK1015	ⅡW08-13・14 ⅡW13-01・02	9				-	50	46	円	29	32	A	
SK1016	ⅡW13-01・02	9 19	50		33	-	95	94	円	48	83	B	貯蔵穴か
SK1017	ⅡW13-02	9 19				-	59	56	円	30	35	A	
SK1018	ⅡW13-03	9 19	50		33	-	77	70	円	20	42	B	
SK1019	ⅡW13-07	9 20	51		34	NW-SE	(60)	54	隅丸長方	35	47	B	
SK1020	ⅡW13-07・11	9 19				N-S	90	62	楕円	30	34	A	貯蔵穴か
SK1021	ⅡW13-11・12	9	51		34	NE-SW	50	38	楕円	30	0	F	
SK1023	ⅡW13-12	9				-	65	65	円	27	50	B	
SK1024	ⅡW13-03・04 ⅡW07-08	9 20	51		34	N-S	(100)	90	卵	32	88	B	貯蔵穴か
SK1025	ⅡW13-07・08	9 20	51		34	E-W	77	70	卵	30	50	B	貯蔵穴か
SK1026	ⅡW13-07	9 20				NW-SE	38	30	卵	28	20	A	
SK1027	ⅡW14-09	9				-	30	28	円	6	0	D	
SK1028	ⅡW14-09	9				-	27	25	円	23	0	F	
SK1029	ⅡW14-09	9				-	35	34	円	33	19	A	
SK1030	ⅡW14-10・14	9				-	45	45	円	33	0	F	
SK1031	ⅡW14-13・14 ⅡW19-01	9 20	51	6	34	-	(100)	(97)	円	55	80	G	貯蔵穴

第9表 縄文時代土坑一覧表

遺構 番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径 cm	短径 cm	形	深さ cm	底長 cm	形	
SK1032	ⅡW07-16 ⅡW12-04	9 19				-	100	(95)	円	44	62	A	
SK1033	ⅡW14-09・13	9				-	44	43	円	24	34	B	
SK1034	ⅡW14-13・14	9 20	51	6	34	NE-SW	180	98	楕円	48	82	G	貯蔵穴
SK1035	ⅡW13-01	9 19				NW-SE	52	35	不整	39	25	C	
SK1036	ⅡW13-07	9 19				-	31	31	円	40	21	C	
SF1001	ⅡW13-07	9 20		6		-	102	100	不整	18	40	A	
SK3001	ⅡV22-16 ⅡV23- 13	11 21	52	6	35	NE-SW	270	195	楕円	12	0	D	
SK3002	ⅡU14-11・12	11 21				NW-SE	122	90	卵	19	80	B	
SK3003	ⅡU14-16 ⅡU15- 01	11 21	52	6	35	NE-SW	133	(95)	隅丸方	118	33	H	陥し穴
SK3006	ⅡV21-04	11 21				—	105	105	円	45	84	B	貯蔵穴か
SK3008	ⅣB04-06・10	11 21		6		NW-SE	100	(86)	楕円	48	67	B	貯蔵穴か
SK3009	ⅣB09-06・07・10・11	11 22	52		35	—	174	(165)	円	28	105	A	
SK3011	ⅣB10-01・05	11 22				NW-SE	87	86	卵	35	65	B	貯蔵穴か
SK3019	ⅣC06-10・14	11 22				—	175	171	円	50	65	A	
SK3022	ⅣB10-08・12 ⅣC06-05・09	11 22	52		35	E-W	123	90	卵	58	68	A	貯蔵穴か
SK3023	ⅣC06-13	11 22	52		35	—	88	83	円	36	66	B	貯蔵穴か
SK3024	ⅣB10-16 ⅣB15-03・04・08	11 22	53		36	—	224	218	円	42	190	B	貯蔵穴か
SK3025	ⅣB10-16	11 22	54		37	NW-SE	128	105	卵	70	65	A	貯蔵穴か
SK3026	ⅣC11-01・02・05・06	11 23				NW-SE	118	100	楕円	25	93	B	貯蔵穴か
SK3027	ⅣC06-13・14 ⅣC11-01・02	11 23				N-S	104	79	卵	40	73	B	貯蔵穴か
SK3028	ⅣC06	11 23				—	33	33	円	31	21	C	旧ST3001 P05
SK4012	ⅣA19-05	11	55		38	—	54	53	円	22	0	E	
SK4013	ⅣA18-06・07	11				NE-SW	(58)	48	楕円	13	0	D 底面段差	
SK4015	ⅣA18-03	11				NE-SW	68	59	楕円	15	0	D	
SK4020	ⅣA20-03・04	11	55		38	NE-SW	(60)	44	—	23	24	A	
SK4022	ⅣA11-04 ⅣA12-01	11				—	32	31	円	28	0	F 底面段差	

第9表 縄文時代土坑一覧表

遺構 番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径 cm	短径 cm	形	深さ cm	底長 cm	形	
SK4023	IVA12-06	11				—	(38)	30	卵	23	0	F	
SK4024	IVA12-02	11 24	55		38	—	60	60	円	28	48	G	貯蔵穴
SK4025	IVA07-10・14	11 24	55		38	NE-SW	(120)	90	楕円	56	70	B	貯蔵穴か
SK4026	IVA07-13 IVA12-01	11 24	55		38	—	(90)	70	楕円	45	50	B	貯蔵穴か
SK4028	IVA12-05・06	11 24	55		38	NE-SW	97	78	卵	66	66	G	貯蔵穴
SK4029	IVA24-02	11 24	55		38	NW-SE	110	74	楕円	35	80	B	貯蔵穴か
SK4030	IVA24-02	11				—	66	65	円	25	0	E	
SK4031	IVA24-03・07	11				—	51	50	隅丸方	25	41	B	
SK4032	IVA24-06	11 25	56	7	39	N-S	87	56	楕円	15	67	B 底面段差	墓か
SK4034	IVA24-06・07	11 25	56		39	NE-SW	85	75	楕円	32	63	B	貯蔵穴か
SK4035	IVA24-07	11	56		39	NW-SE	45	42	卵	28	37	B	
SK4036	IVA24-07	11 25	56		39	—	102	70	円	21	0	D	
SK4037	IVA24-07	11	56		39	—	74	(74)	不整	17	58	B	
SK4038	IVA19-11	11 24	56		39	—	80	(80)	円	38	62	B	貯蔵穴か
SK4039	IVA19-11	11 24	56		39	NE-SW	74	68	隅丸方	67	56	G	貯蔵穴
SK4040	IVA19-15	11				N-S	50	(37)	楕円	18	0	E	
SK4041	IVA24-03・07	11 25	56	7	39	N-S	105	86	楕円	50	62	B	貯蔵穴
SK4042	IVA19-15・16	11 25	57		40	N-S	(110)	(76)	楕円	20	82	B	墓か
SK4043	IVA19-11・12・15・16	11 25	57		40	E-W	(106)	(75)	卵	12	0	D	墓か
SK4044	IVA19-14・15	11 25	58	7	41	NW-SE	153	85	卵	45	68	G	貯蔵穴
SK4045	IVA24-03	11 25	58		41	E-W	110	90	不整	42	0	E 底面段差	貯蔵穴か
SK5001	ⅢJ10-10	11				NE-SW	(125)	100	楕円	28	52	A	
SK5002	ⅢJ10-15・16 ⅢJ15-03	11 26	58	7	41	E-W	146	113	楕円	125	60	H	陥し穴
SK5003	ⅢJ10-16 ⅢJ15-04 ⅣF11-01	11 26	58		41	NW-SE	112	92	楕円	65	83	G	貯蔵穴
SK5004	ⅢJ15-04 ⅣF11-01	11 26	58		41	—	64	63	円	70	52	C	貯蔵穴か
SK5005	ⅢJ10-11	11 26	59	7	42	—	83	80	円	96	71	G	貯蔵穴

第9表 縄文時代土坑一覧表

遺構 番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径 cm	短径 cm	形	深さ cm	底長 cm	形	
SK5006	ⅢJ10-07	11	59		42	—	63	60	円	38	46	B	
SK5007	IVF06-09	11 26	59		42	—	78	75	円	13	62	D 底面段差	
SK5008	IVF11-02・03	11	60		43	NW-SE	70	63	楕円	32	0	E	
SK5009	IVF06-15 IVF11-03	11	60		43	NE-SW	73	60	不整	20	47	B	

第9表 縄文時代土坑一覧表

3 遺物

氏神遺跡から出土した縄文時代の遺物は、前期末～中期初頭及び中期中葉に属する。完形またはほぼ完形に復元できるものを含めた土器片が11,260点、総重量約146kg、石器が1423点、総重量約134kg、土塊、紐状土製品等の土製品が12点出土した。中期初頭の遺物は五領ヶ台式土器及びそれに並行する時期の土器群、星ヶ台産の黒曜石を主石材とした石鏃や石錐等の小形剥片石器、遺跡近隣より採取できる砂岩や泥岩、粘板岩を石材とした打製石斧やスクレイパー等の大形剥片石器及び敲石や凹石、台石等の礫石器を中心とする石器群と理解できる。搬入品に、北陸系や東海系、関西系の鷹島式と考えられる土器、岐阜県南部に産出する石材である下呂石の二次加工がある剥片及び剥片が認められる。中期中葉の遺物は藤内I式を主体とし、平出第Ⅲ類A土器が伴う土器群と、中期初頭とほぼ同一内容の石器群と理解できる。遠隔地の土器及び下呂石製石器は認められない。これらの遺物は松本盆地において類例が少なく、中期の編年を検討する上で貴重な土器群であるほか、在地系の遺物に遠隔地の遺物が伴う中期初頭に対して、より在地色が濃くなる中期中葉という時期差を見出すことができるなどの点で、良好な資料と評価できる。

以下、出土遺物を遺構ごとに記述する。

(1) 竪穴建物跡出土遺物

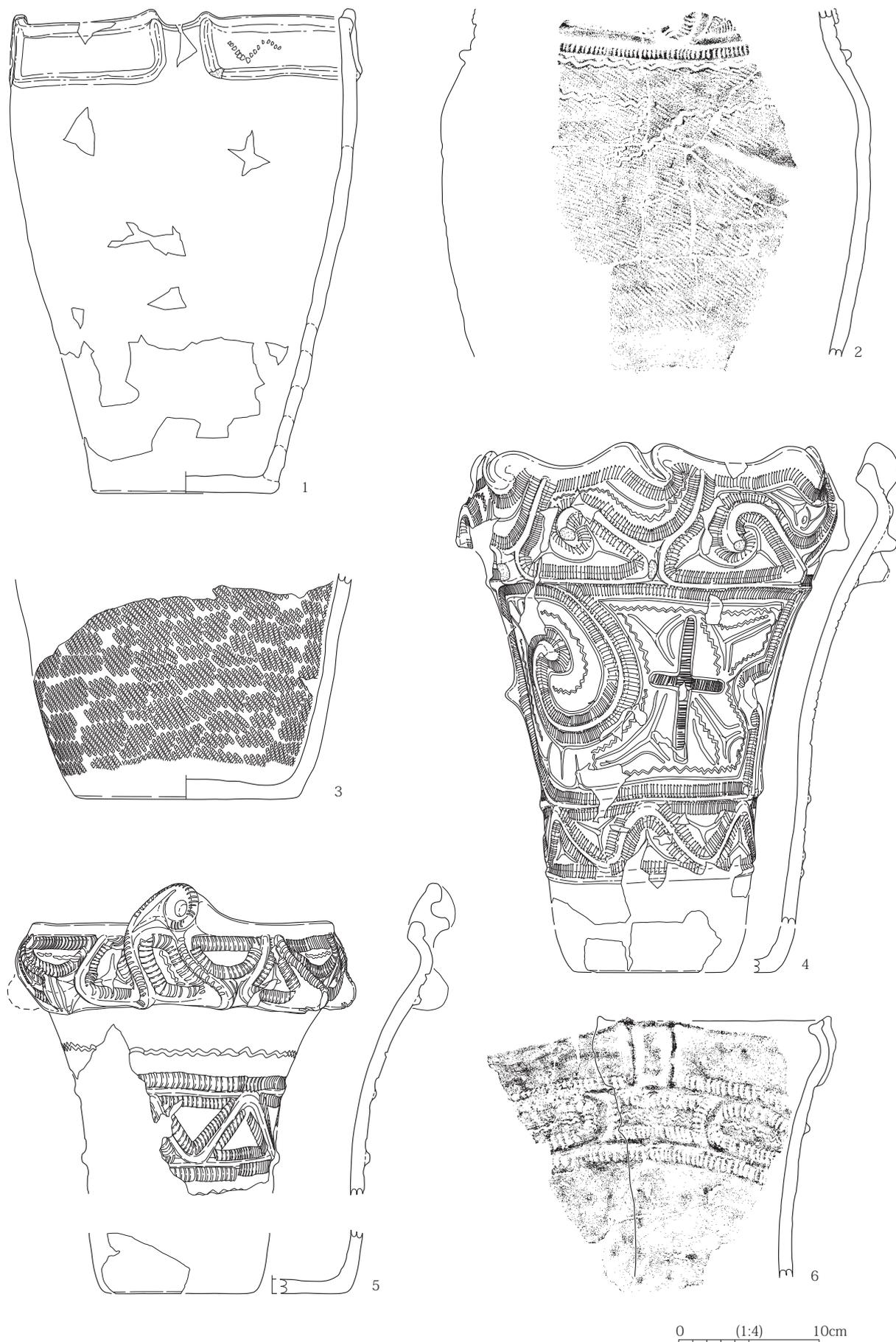
S B 1001 A・B、S B 1002 (第27～34図、第10表、PL11～18)

土器 S B 1001 A・B、S B 1002からは、3581点の土器(総重量66.21kg)が出土した。藤内I式を主体とする完形及びほぼ完形の土器が19個体出土したほか、平出第Ⅲ類A土器(35)と有孔罎付土器(36)、ミニチュア土器(37)が出土した。これらの土器は1～3を除き、遺構埋土から、いわゆる「吹上パターン」の様相を呈して出土した。出土土器は、藤内I式に平出第Ⅲ類A土器が伴い、櫛形文土器が認められないことから、中期中葉に属すると考えた。1と2は、炉跡に蓋をするような状態で出土した土器である。1はほぼ完形に復元できる。口縁部文様帯に隆線による方形区画と、そこから続く2個1対の突起が口唇部に4単位付く。方形区画内の一部に波状の刺突文がみられる。2は口縁部文様帯下部から胴部文様帯にかけての破片である。口縁部文様帯には横位に、刻みの入る隆線と半隆起の平行沈線による三角区画文が連続すると推定する。胴部文様帯はRLの縄文を地文とし、波状の沈線が巡る。3は、S B 1002の柱穴(P01)の1層最上面から出土した深鉢の底部である。RLの縄文を地文とし、底部側面にケズリが施され、底面は磨かれる。4～20は、完形またはほぼ完形に復元できる。12は鉢で、ほかは深鉢である。4～6は両脇に押引文が施文される隆線による模様をもつ。4は波状口縁で、波頂部に特徴的な模様が施される。口縁部文様帯は両脇に押引文をもつ隆線による連続三角区画が施され、同様の隆線により胴部文様帯上半は渦巻文が、胴部文様帯下半は連続三角区画が施される。5は口唇部に渦巻き状の突起を有し、口縁部文様帯には両脇に爪型文を付けた隆線による三角区画が横方向に連続する。胴部にも同様の隆線による三角区画文が巡る。6は口唇部及び口縁部文様帯に1と類似する隆線による2個1対の突起と方形区画が施されるほか、その直下には隆線の両側に幅広の爪形押引文が付く楕円区画文が巡る。7の器形はキャリパー状を呈し、口縁部文様帯に刻みの入る隆線で緩い連続渦巻文を描く。胴部文様帯はY字状の平行沈線を地文とし、2本1組の隆線でV字状の模様が3単位施される。底部文様帯にはV字の尖底部より2本の隆線が左側は波状に、右側は直線状に垂下する。8～10は特徴的な区画文を有する。8は口縁に渦巻文をもつ突起が1つ付く。口縁部文様帯は横位の交互刺突文、胴部文様帯は刻みをもつ隆線を垂下させ2単位に分けられており、それぞれ刻みをもつ隆線をしの字状に貼り付けた模様、区画内に横位の沈線を施した縦位の区画文がみられる。9は口縁に4単位の突起を有すると推定する。文様は半隆起する平行沈線による縦帯区画文を中心とする。10は7単位の波状口縁をもち、1単位に渦巻き文が付く。波状口縁には縦位の沈線が施文され、断面は内湾する。胴部文様

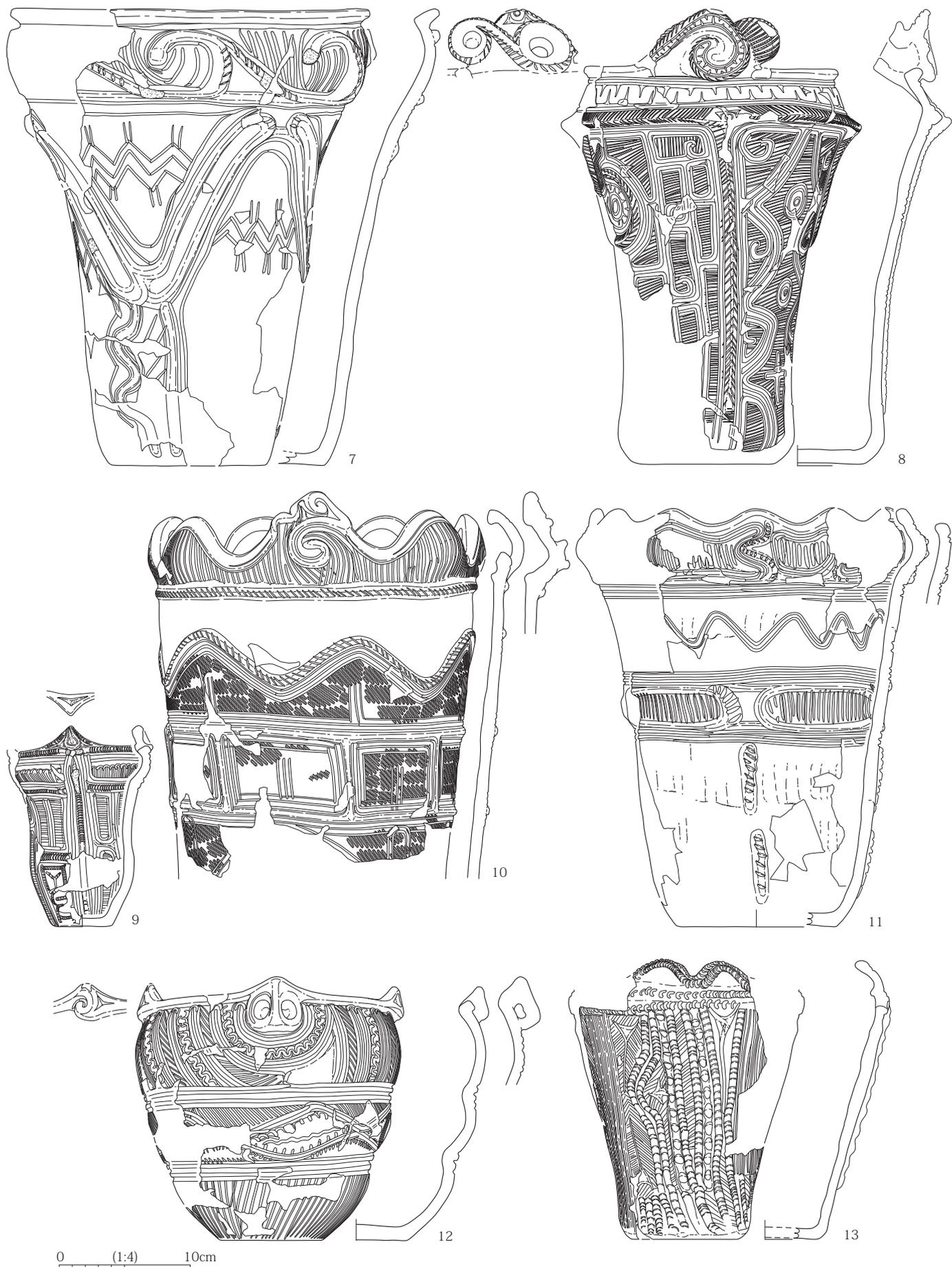
帯上部には横位に刻みを入れた波状隆線が1条巡り、下部には縄文を地文とする矩形の区画文が施される。11、12は半隆起線により文様帯が3単位に区画され、区画内の施文は沈線文を中心とする。11は波状口縁である。口縁部模様帯は半隆起線による横位の区画内に、縦位の沈線を施す。胴部は横位に施文される2条1組の半隆起線により3単位の文様帯に分けられ、上段は平行沈線による波状文、中段は隆線による楕円区画内に縦位の沈線が施文され、下段は刻みをもつ縦位の隆線が貼り付けられる。12は内湾する口縁部文様帯にメガネ状の把手が1対付く。口縁部文様帯、胴部文様帯、底部文様帯は半隆起線により区画され、区画を境界に器形が屈曲し、段を形成する。13～16は鎖状隆線が貼り付けられる。13は波状口縁である。口縁部文様帯には押引文が施され、胴部文様帯は鎖状隆線を縦位に貼り付けや縦位の沈線、押引文などが施される。14は4単位の波状口縁をもつ。口縁部文様帯には波状のそれぞれ頂部から鎖状の隆線が垂下し、地文に縦位の沈線文が施文される。口縁部文様帯と胴部文様帯の境界にも同様の隆線が1条巡る。15はキャリパー形の土器で、RLの縄文を地文に、鎖状の隆線を貼り付ける。16は口唇部に2個1対の突起を持ち、口縁部文様帯と胴部文様帯の境界がくの字状に屈曲する。口縁部文様帯には鎖状の隆線による楕円区画文が巡る。胴部文様帯上部はRLの縄文を地文とし、胴部文様帯下部には鎖状の隆線が横方向に弧が連続する。17、18は口縁部文様帯に波状の隆線が貼り付けられ、地文は縄文である。17は口縁部文様帯に幅広の爪形文を施文する波状隆線を1条巡らせ、胴部文様帯はRLの縄文を施文する。底部文様帯には、隆線の両側に幅広の爪形押引文が付く楕円区画文が巡る。18は口縁部文様帯に隆線を波状に巡らせ、胴部文様帯から底部文様帯にかけてLの縄文を施文する。19はキャリパー形の土器で、器面全体にRLの縄文を施文する。20は円筒形を呈する。無文である。21、22は深鉢の口縁である。21は口唇部に突起をもち、口縁部文様帯に縦位の隆線及び半隆起の平行沈線による方形区画が巡ると推定する。22は口唇部に刻みをもち、そこから刻みを施された鎖状の隆線が口縁部文様帯と胴部文様帯は垂下する刻みを施された鎖状の隆線で区画され、口縁部文様帯は縦位、横位、弧状の平行沈線が施文される。23～25は深鉢の口縁から胴部である。23はメガネ状把手から両脇に爪形文が押引かれた隆線が垂下し縦位に区画する。区画内には幼虫状の文様が付される。24は口縁部文様帯に縦位の沈線が施文される。25はLRの縄文を地文とし、口唇直下に直線と波状の2本の沈線が施される。26、27は深鉢の胴部である。26はいわゆる「山椒魚模様」をもち、内部は爪形文で充填される。隆線脇にはキャタピラ文を施文する。器面には輪積み痕が残る。27は樽形を呈すると推定する。隆線による模様が施される。28～32は深鉢の胴部下半から底部である。28は胴部文様帯に楕円区画文が横位に連続すると想定する。底部文様帯は両脇にキャタピラ文が施文される刻み入りの隆線による抽象文が施文される。29は区画内に横位の沈線を施文し、30は区画内に斜行沈線を施文した縦位の区画文が施される。31はRLの縄文を地文とする。半隆起の平行沈線により縦位に区画され、区画内に蛇行沈線が施文される。32は底部から胴部に向かい外側に大きく開くように立ち上る。RLの縄文を地文とする。なお、29に付着した炭化物の年代測定を行い、暦年較正值(2 σ) 5,265～4,877calBPの結果を得た。33、34は深鉢の底部である。33は両脇に押引文をもつ隆線による模様が施される。隆線上には細い波状沈線が見られる。底部側面及び底面は磨かれる。34は底面に網代圧痕が認められる。35は深鉢である。平出第Ⅲ類A土器に比定する。口縁部模様帯に口唇部直下に刻みの入る隆線の垂下と横方向に2重に巡る波状の平行沈線が施文され、その下部全体に縦位の平行沈線を施文する。36は有孔罌付土器である。欠損部が大きく文様は確認できず、孔擦れ痕跡も認められない。器形は胴部が張り出す樽形を呈すると推定する。器面は表裏とも磨かれている。37はミニチュア土器である。口唇部に5つの突起が付き、内1つは欠損する。

石器 石英の原石1点を含み216点(総重量14,401.0g)が出土した。詳細は第10表のとおりである。

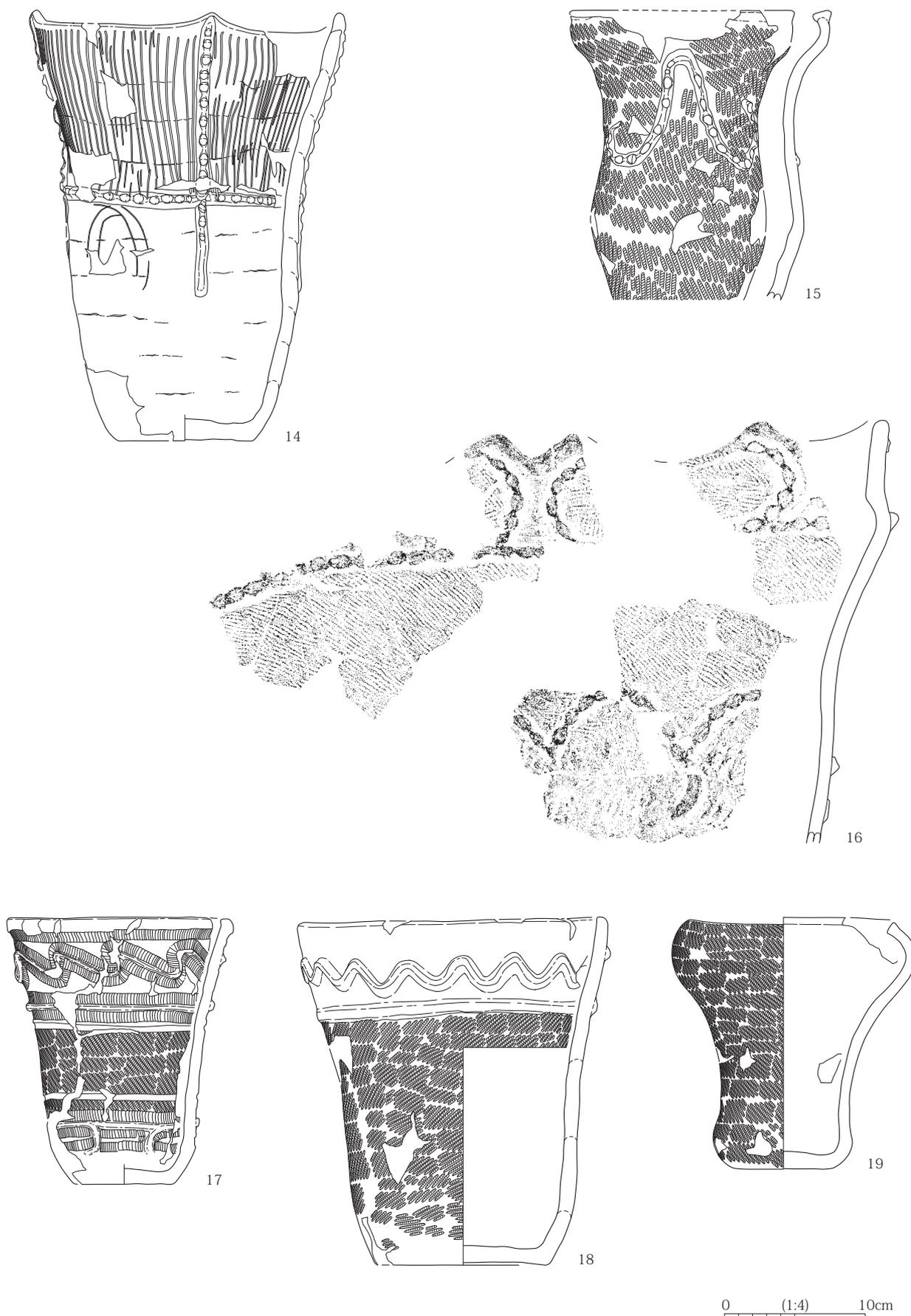
38～48は黒曜石製の石鏃である。38～44は基部から先端までの長さが基部幅の約1.5倍～2倍あり、基部の挟りが浅いもの(38～40)と深いもの(41～44)がある。45と46は基部から先端までの長さが、基部幅と



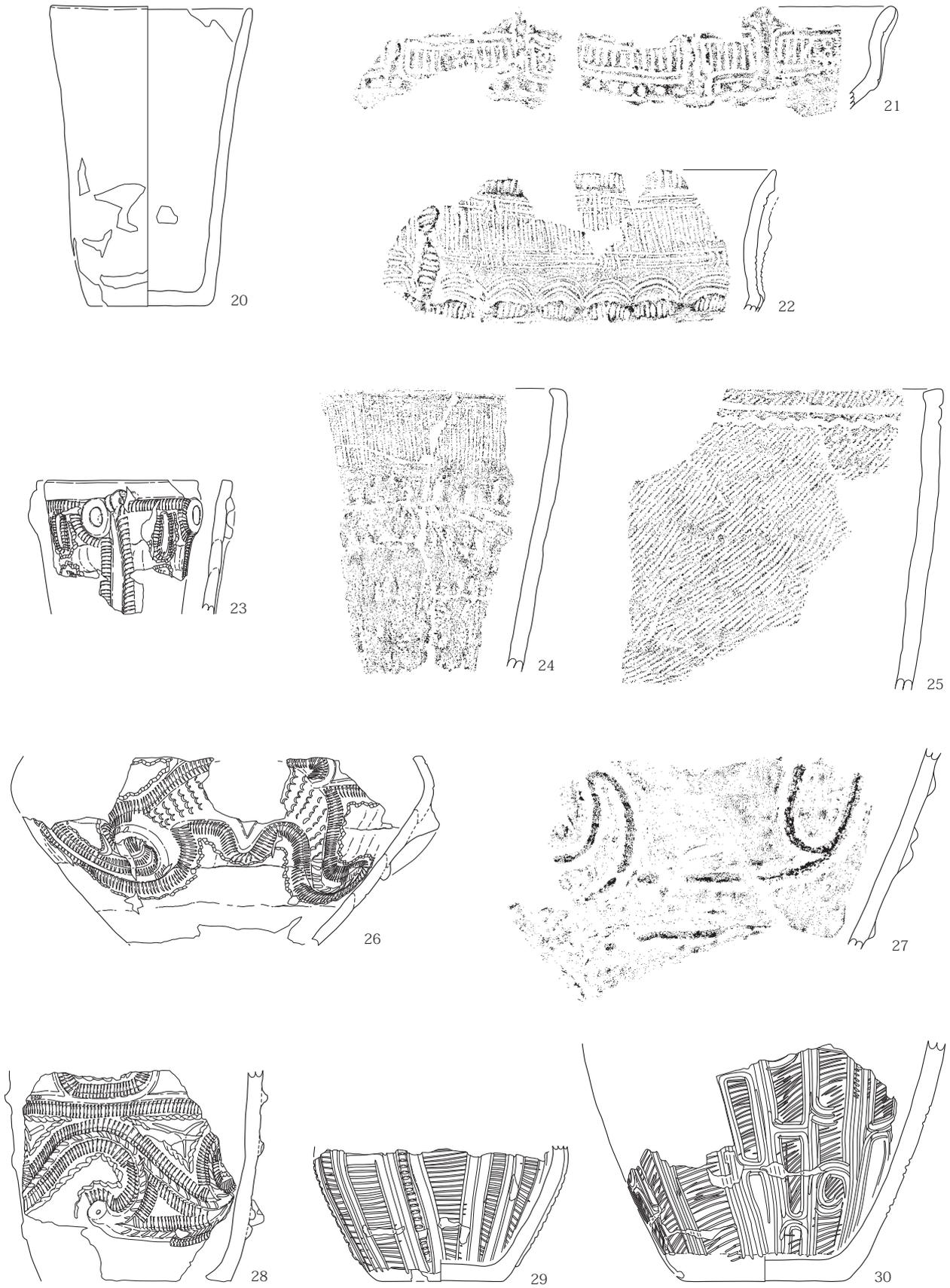
第27図 縄文時代の遺物図(1) S B 1001 A・B、1002 (1)



第28図 縄文時代の遺物図(2) S B 1001 A・B、1002(2)

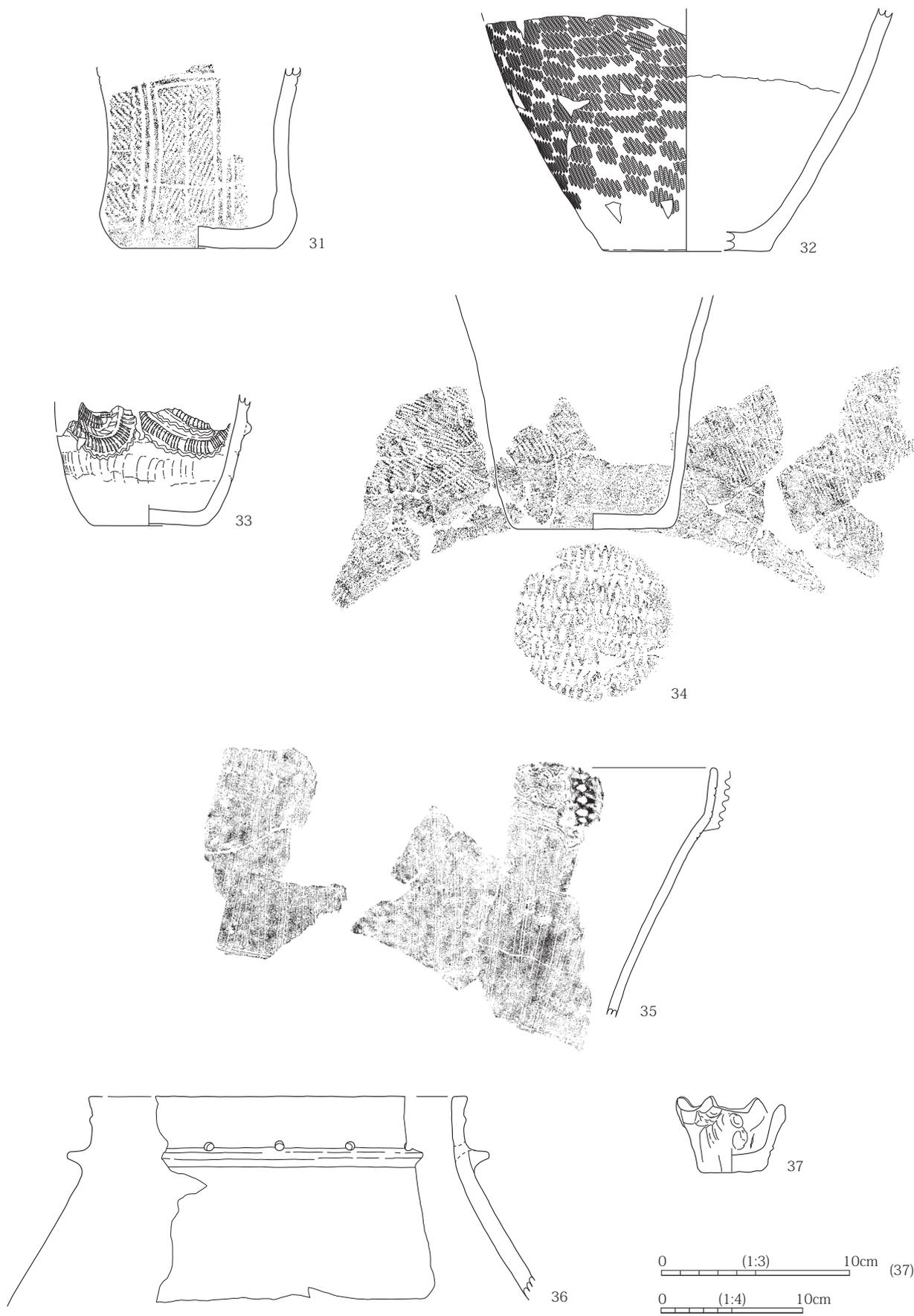


第29図 縄文時代の遺物図(3) S B 1001 A・B、1002(3)



0 (1:3) 10cm (24・25)
0 (1:4) 10cm

第30図 縄文時代の遺物図(4) S B 1001 A・B、1002(4)



第31図 縄文時代の遺物図(5) S B 1001 A・B、1002 (5)

ほぼ等しく、正三角形状となる。こちら基部の抉りが浅いもの(45)と深いもの(46)がある。47は基部から先端までの長さが、基部幅よりも短く、基部の抉りが深い。形状はプーメラン状を呈する。48は失敗品と考える。49、50は黒曜石製の石錐である。49はいわゆる「ズリ」¹を素材とし、先端部に加工が施され、断面形は菱形を呈する。50は剥片を素材とし、背面側の両側辺と腹面側の一側辺に加工が施される。先端部の断面形は菱形を呈する。51～53はスクレイパーである。51は黒曜石製で、剥片の周縁を腹面側から打撃して、弧状を呈する片刃の刃部を形成する。52は安山岩製で、大形の剥片を素材とし、腹面側からの打撃により直線状の片刃の刃部が形成される。53は砂岩製で、大形の剥片を素材とする。直線状の片刃である。刃部には使用によると思われる微細な剥離と摩耗が認められる。54、55は黒曜石製のピエス・エスキューである。54は上下方向、55は上下方向と左右方向からの剥離痕がみられる。56～60は打製石斧である。56は泥岩製で、板状の剥片を素材とする。57、59は凝灰岩製である。57は両面の刃部や背面側の器体中央に摩耗面がみられ、腹面側の器体中央に敲打痕がみられる。磨製石斧の転用品の可能性もある。59は刃部及び基部は摩滅を受けている。左側辺にツブレがみられる。58は安山岩製である。右側辺にツブレがみられる。60は砂岩製である。板状の剥片を素材とし、表裏面とも摩耗がみられる。先端、基部とも折れている。61、62は砂岩製の凹石である。61は表面に2か所以上、裏面に1か所、62は表裏面ともに2か所の敲打による凹みが認められる。63は砂岩製の砥石である。大形の砂岩で、表面1面が使用面で非常に平滑である。64は砂岩製の石錘である。上下に抉り部が形成される。65、66は黒曜石製の二次加工ある剥片である。67は黒曜石製の微細剥離ある剥片である。68は黒曜石製の削片とした。背面下部にみられる剥離により直線状の稜線を形成し削出されたものである。

	石 織	石 錐	スク レイ パー	ピ エ ス・ エ スキ ュー	打 製 石 斧	凹 石	台 石	砥 石	石 錘	石 核	剥 片	二 次 加 工 あ る 剥 片	微 細 剥 離 あ る 剥 片	削 片	砕 片	原 石	計															
黒曜石	11	8.6	2	2.1	3	3.4	4	4.7			3	21.9	122	129.2	4	14.4	10	13.6	1	1.1	17	1.8		175	200.8							
流紋岩								2	148.4																2	148.4						
安山岩				1	271.3		1	104.0																	2	375.3						
チャート											3	46.1													3	46.1						
凝灰岩							2	211.9																	2	211.9						
砂岩			1	57.8		5	373.0	4	1788.3	2	1705.0	2	6857.6	1	37.6	1	1440.0	8	454.6						24	12713.9						
泥岩						3	208.9							2	210.1										5	419.0						
礫岩								1	73.0																1	73.0						
結晶片岩														1	36.0										1	36.0						
石英																									1	176.6						
計	11	8.6	2	2.1	3	332.5	4	4.7	13	1046.2	5	1861.3	2	1705.0	1	37.6	4	1461.9	136	876.0	4	14.4	10	13.6	1	1.1	17	1.8	1	176.6	216	14401.0

左側：個数、右側：重量 (g)

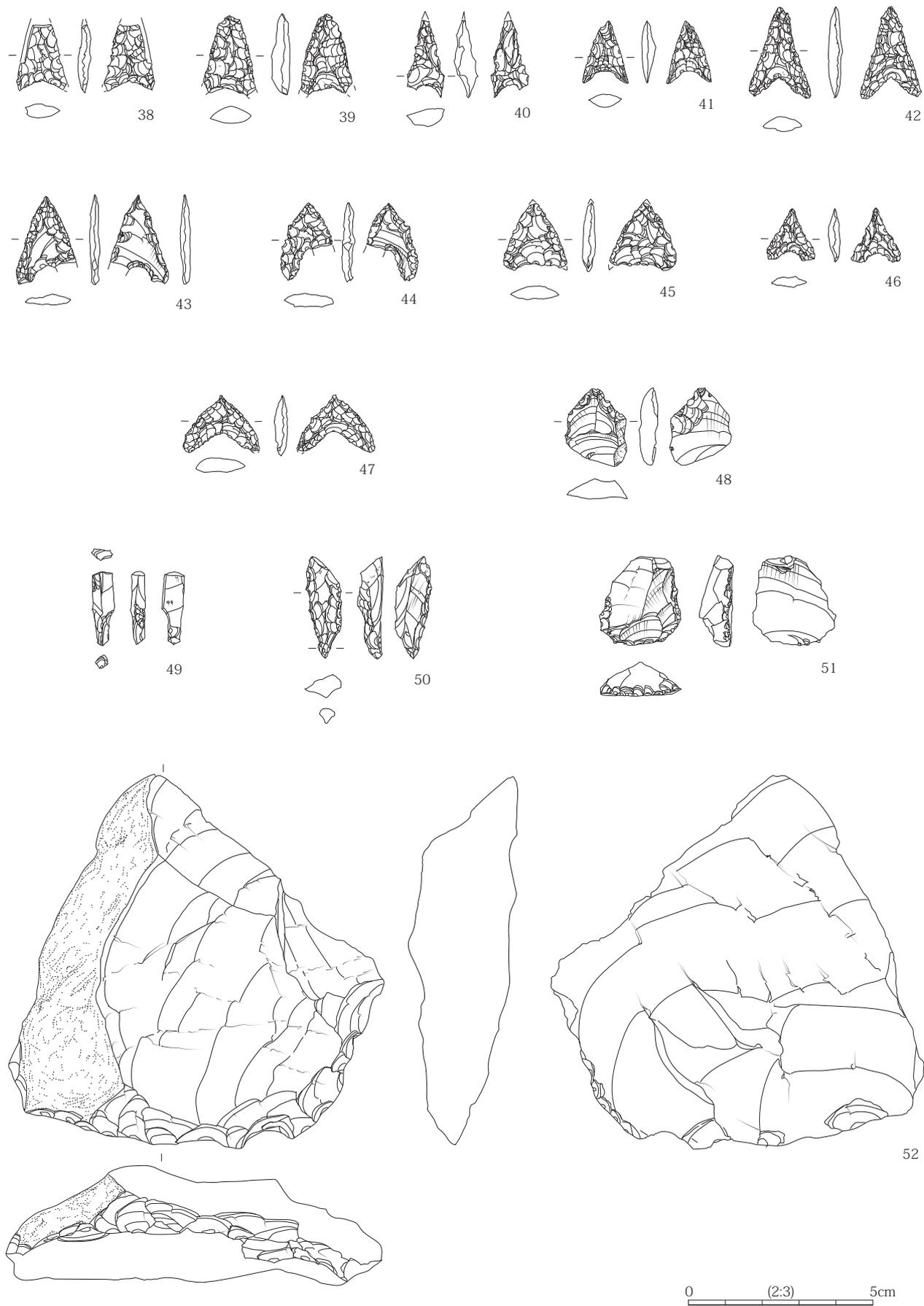
第10表 S B 1001 A・B、S B 1002 出土石器組成表

S B 3002 (第35～37図、第11表、PL19～21)

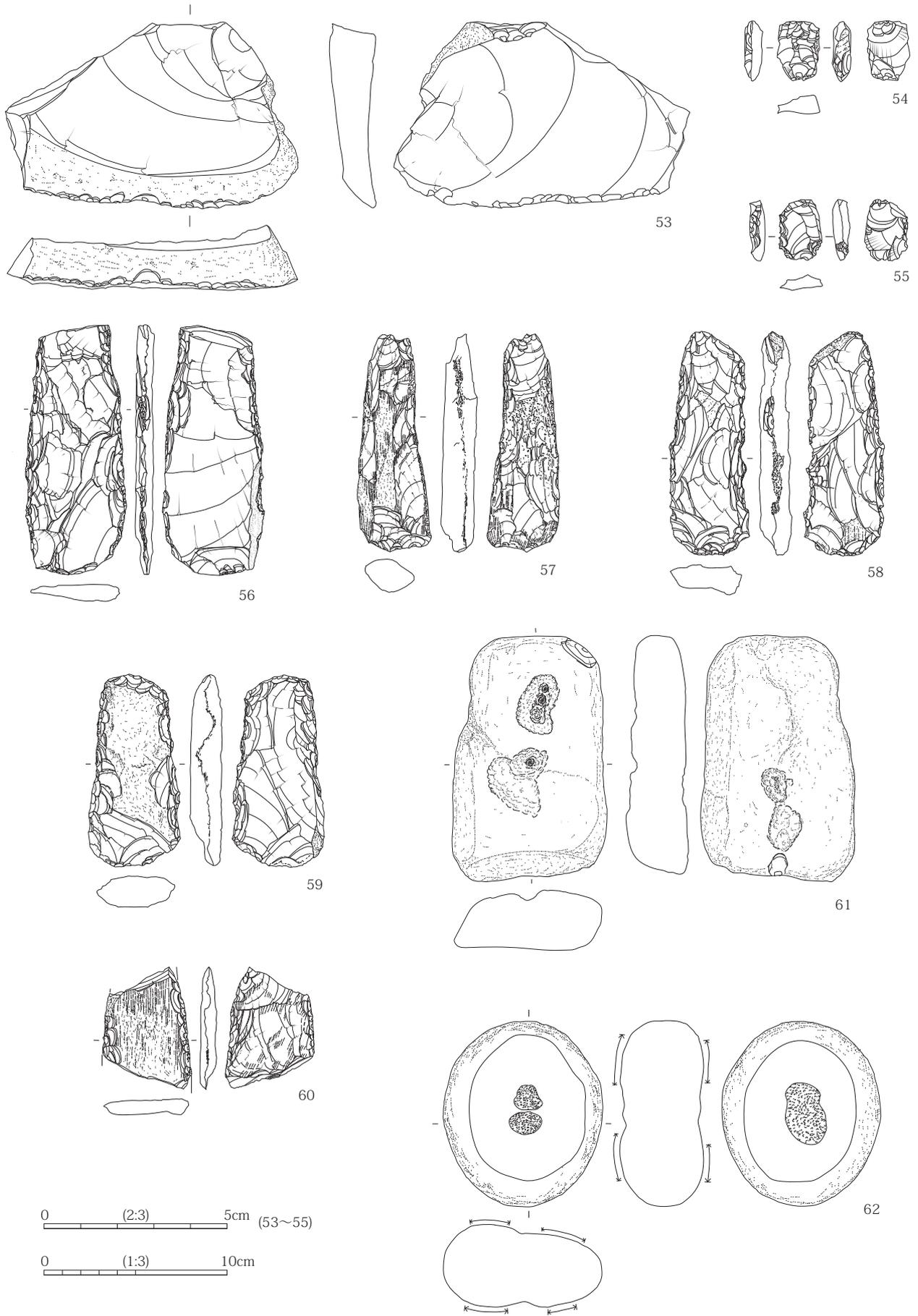
土器 S B 3002からは1014点の土器片(総重量9,650g)が出土した。土器は五領ヶ台Ⅱa式及びそれに並行する時期と考える中期初頭に比定でき、前期末の土器片がわずかにみられる。完形に復元できるものはない。在地の土器の他、北陸系や、関西系の鷹島式と思われる土器が出土した。100が浅鉢、それ以外は深鉢である。100がS B 3003・3004から出土した162と遺構間接合した。

中期初頭 69～87は口縁部である。69～72は把手をもつ。69、70は動物の頭を思わせる意匠の把手が、71は橋状把手が、72は耳状の突起が付く。73～77は口縁部文様帯を微隆起線により区画する。73～76は口唇部に押引文が施される。73は口唇部から垂下する隆起線による2個1対の突起をもち、区画内は格子目文が施文される。74は区画内を瓦状押引文、75は格子目文、76は斜行沈線で施文し、77の区画内は無文である。78～80は口唇部に刻みをもち、口縁部文様帯は沈線文で施文される。78は等間隔垂下文、79、80は横位の

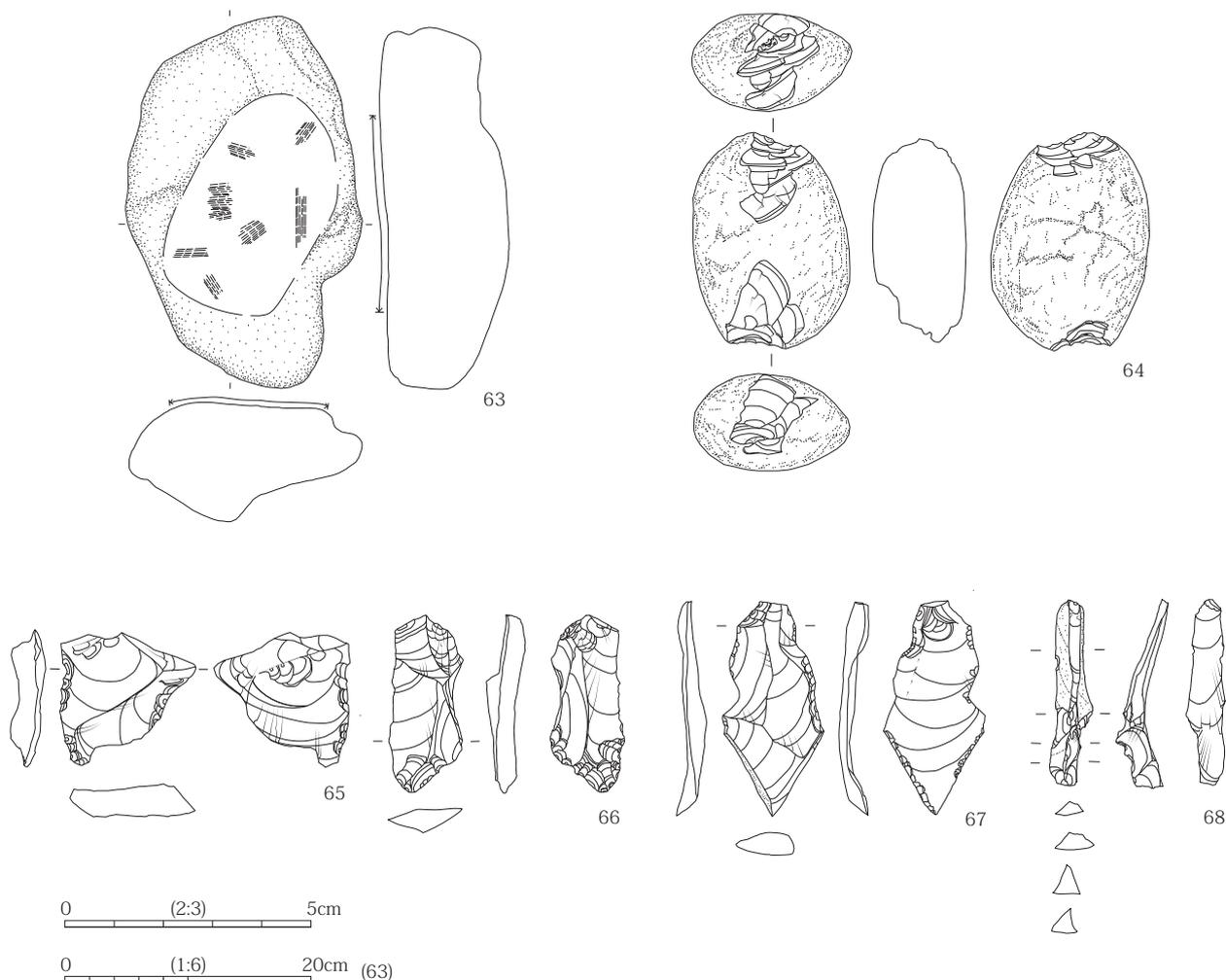
註1 板状または角柱状を呈する小形の黒曜石原石



第32図 縄文時代の遺物図(6) S B 1001 A・B、1002(6)



第33図 縄文時代の遺物図(7) S B 1001 A・B、1002(7)



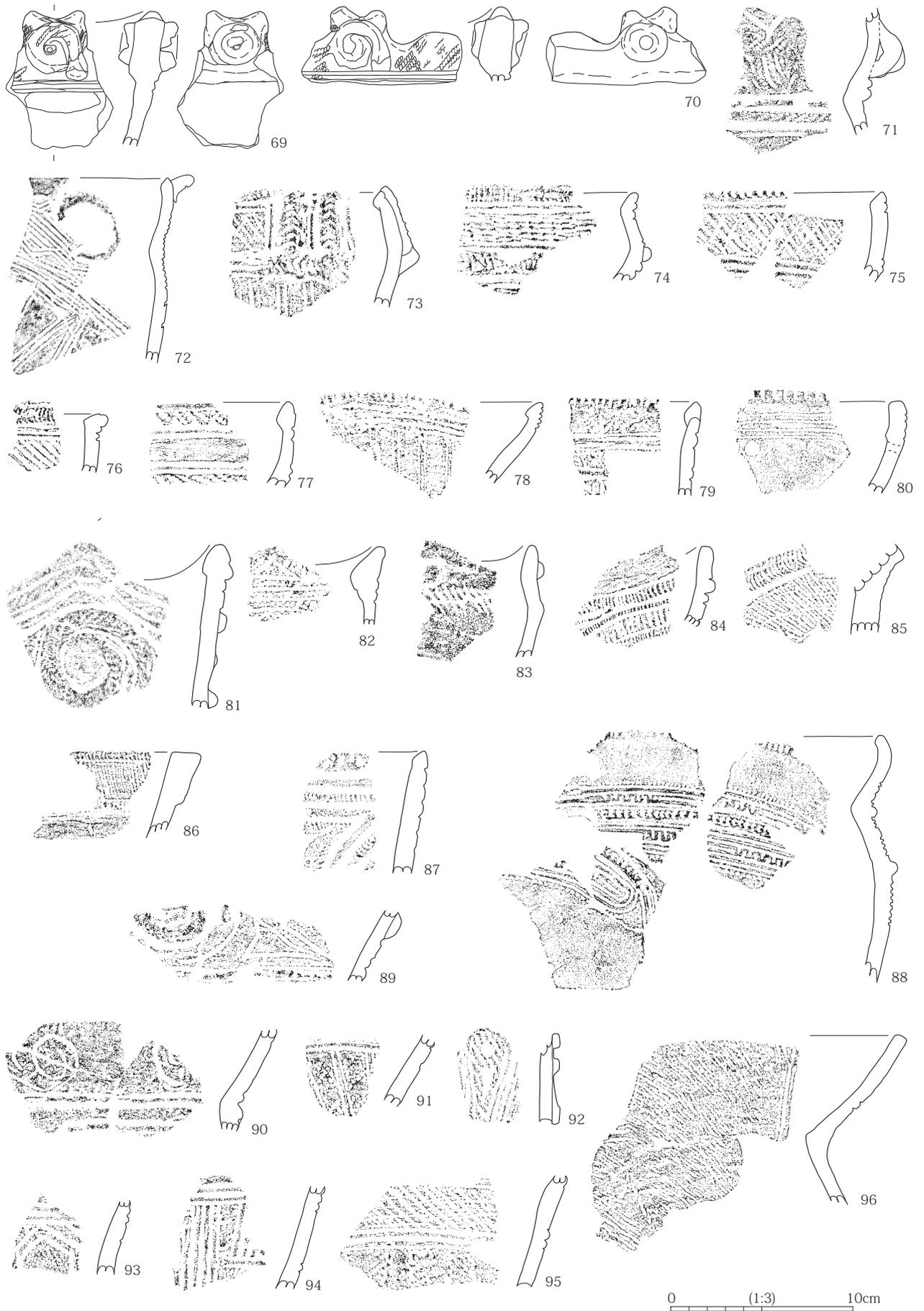
第34図 縄文時代の遺物図(8) S B 1001 A・B、1002(8)

沈線が施される。80には孔がある。81～85は波状口縁である。81は隆線による渦巻文が施される。82は三角形と横位の沈線、83は斜行沈線が施文される。84、85は押引文をもつ半隆起線による区画内を、沈線で施文する。86は押引文をもつ半隆起線による横位の区画内に縦位の細い条線を施す。87は半隆起線による模様が見られる。88は口縁部から胴部である。交互刺突文や刺突文、爪形文をもつ隆線、沈線による模様で構成される。89～91は口頸部である。89は隆線と沈線による渦巻文、90は沈線による渦巻文が施される。91は縄文が地文で、等間隔垂下文が施される。92～97は胴部である。92は円形と三角形の印刻をもつ隆線上に斜行沈線が施文される。93はY字状の沈線文が施される。94は半隆起線が縦位と横位に施される。95は2条1組の半隆起線により区画され、上段は格子目文、下段は結節回転縄文が施文される。96は撚り戻しの縄文による施文の上から結節回転縄文が施文される。97は縄文を地文に縦位の沈線が施される。98、99は底部である。98は刻みをもつ隆線が垂下し、99は底部側面を沈線で区画し、区画内に縦位の沈線が施される。底面は僅かに磨かれる。100は浅鉢の口縁である。内面に列点文と押引文が施文される。外面は無文である。

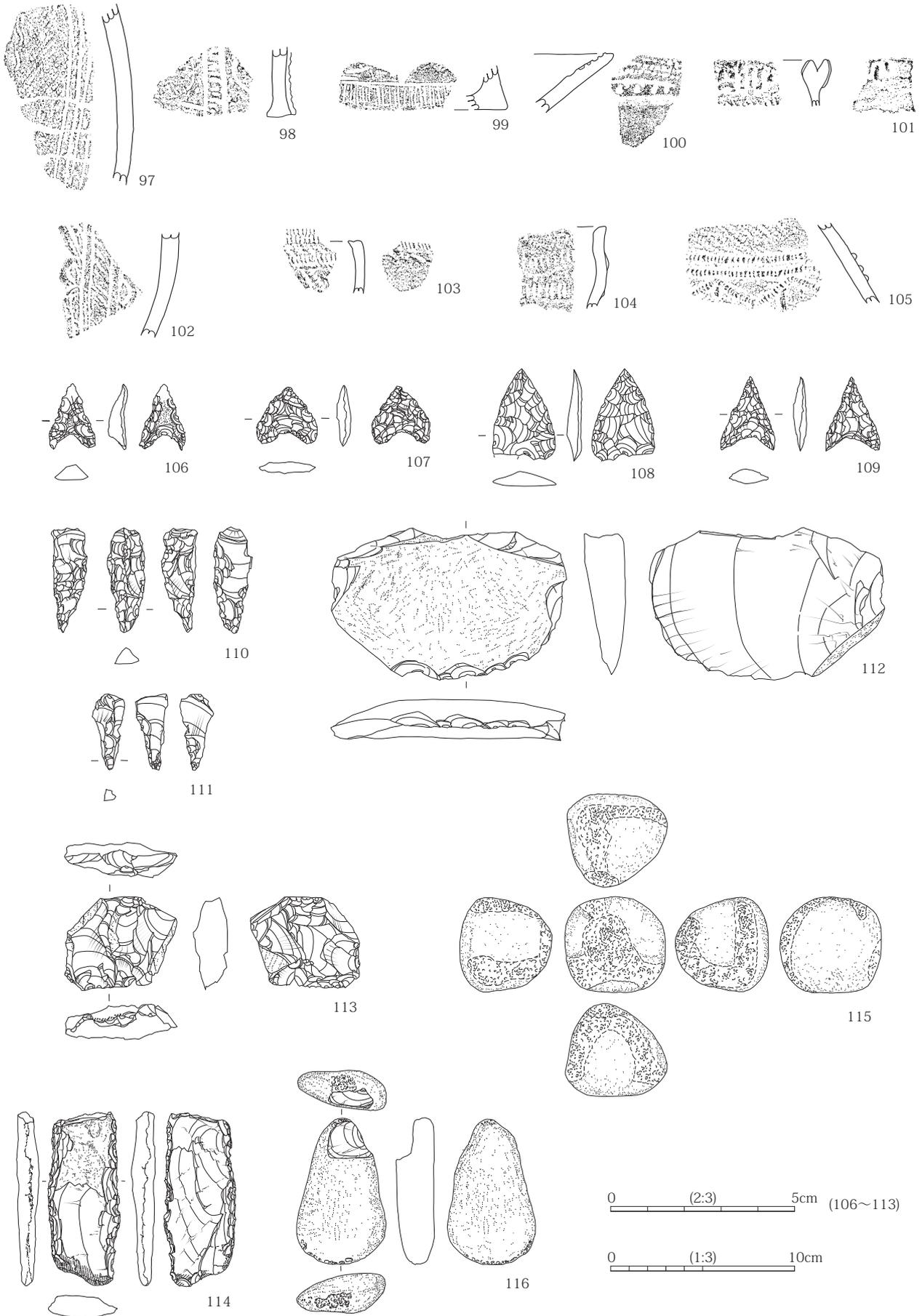
前期末 101は口縁である。口唇部には断面V字の刻みが入り、口縁部文様帯は浮線文が貼り付けられる。

外来系土器 102は北陸系の新保式と思われる胴部である。半隆起線による縦位の意匠が特徴的である。103～105は関西系の鷹島式と考えられる。103、104口縁である。微隆起の上に爪形刺突が施され、103は口唇部にも爪形刺突が見られる。105は縄文を地文とし、凸帯の上に爪形文が連続する。

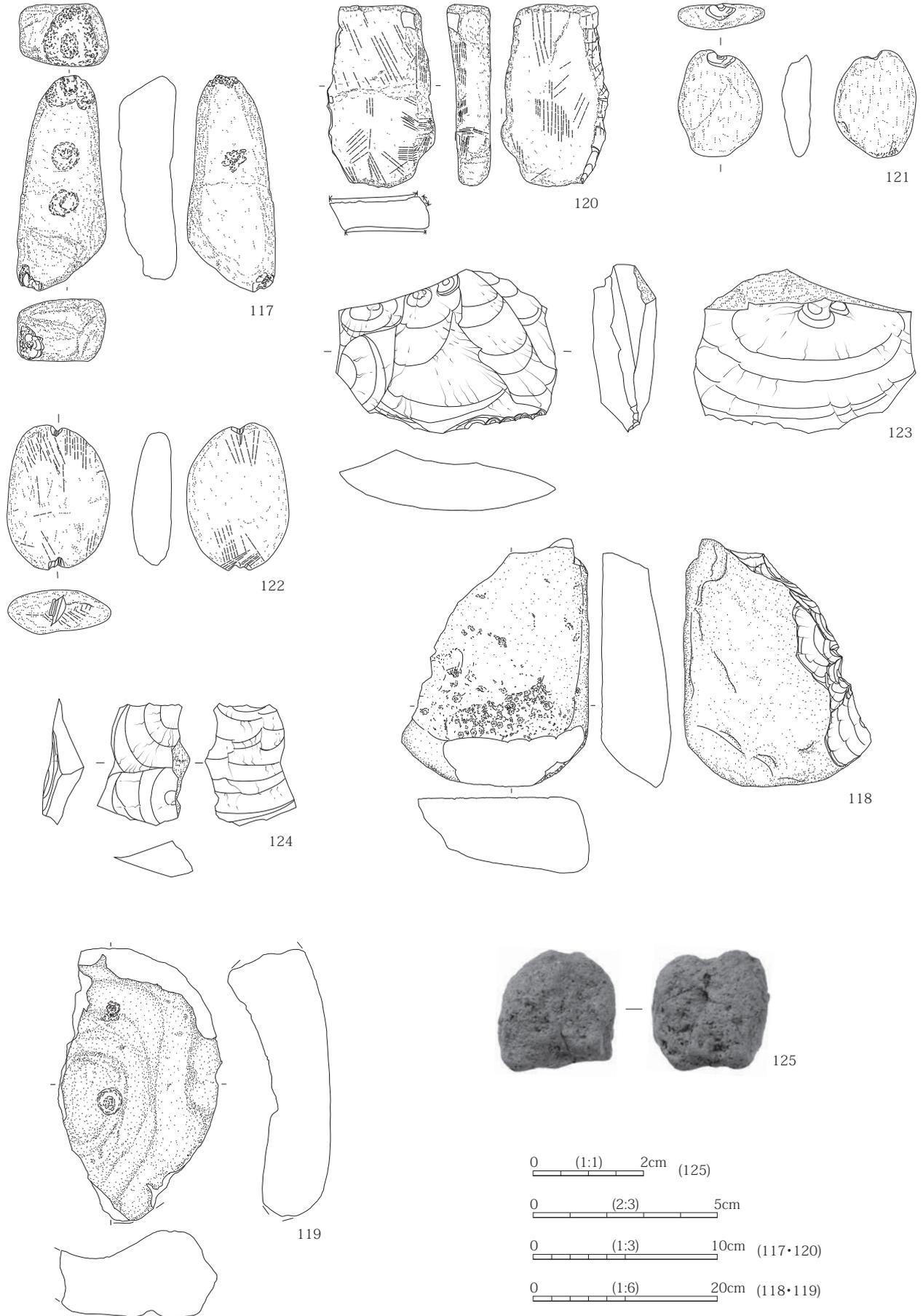
石器 石英の原石1点及び砂岩の礫片6点を含む242点(総重量33,943.2g)が出土した。詳細は第11表のとおりである。



第35図 縄文時代の遺物図(9) S B 3002(1)



第36図 縄文時代の遺物図(10) S B 3002(2)



第37図 縄文時代の遺物図(11) S B 3002(3)

106～109は黒曜石製の石鏃である。106は板状の「ズリ」を、その他は剥片を素材とする。110、111は黒曜石製の石錐である。両者とも剥片を素材とし、先端部の断面は110が三角形、111が四角形を呈する。112は砂岩製のスクレイパーである。素材剥片の側面に腹面側から加工を施し、鋸歯状で片刃の刃部を形成する。113は黒曜石製のピエス・エスキューである。上下及び左右からの剥離痕がみられる。114は泥岩製の打製石斧である。板状の剥片を素材とする。115～117は砂岩製の敲石である。115は自然の稜上ほぼ全周に敲打痕がみられる。116は上下両端に敲打痕、上端に敲打による剥離がみられる。117は上下両端に敲打痕、下端に敲打による剥離がみられる。さらに、表面に2か所、裏面に1か所の凹みが確認できる。118は砂岩製の台石である。表面に打痕が集中し、裏面には表面からの敲打による剥離がみられる。表面下端には火はねも認められる。119は安山岩製の石皿である。表面上端に火はねが認められる。約半分を欠損する。120は砂岩製の砥石である。表裏面と側面に使用による摩耗が認められる。121、122は石錘である。121は砂岩製で、上部に抉り部が形成される。122は凝灰岩製で、上下に磨りによる溝状の加工が施される。123は下呂石製の剥片である。124は下呂石製で、二次加工ある剥片である。

(c) 土製品 125は焼成粘土塊である。重量は6.2gである。不整形であるが、角柱状に近い。模様や加工の痕跡はみられない。

	石鏃	石錐	スクレイパー	ピエス・エスキュー	打製石斧	敲石	凹石	磨石	台石	石皿	砥石	石錘	石核	剥片	二次加工ある剥片	微細剥離ある剥片	砕片	礫片	原石	計																				
黒曜石	3	2	2	6									6	70	134	149	1	4	3	5	6	0	157	241.8																
安山岩										1	6320		1	470		1	37							3	6827.3															
下呂石														1	5	4	34							2	39.7															
チャート														2	72	4								2	72.4															
凝灰岩												1	17		23	1								2	40.1															
砂岩			1	36		8	1759	1	258	1	84	3	10140		3	320	1	5	10	6882	3	29	1484	1	6	2074.5	63	23045.6												
泥岩							48	9								31	6								6	138.0														
粘板岩							46	1								84	8	4							6	237.7														
石英																									1	3300.0														
計	3	2	2	36	6	2	95	8	1759	1	258	1	84	3	10140	1	6320	3	320	6	54	18	7507	176	1935	7	2	38	6	3	5	4	6	0	6	2074.5	1	3300.0	242	33943.2

左側：個数、右側：重量 (g)

第11表 S B 3002 出土石器組成表

S B 3003・3004 (第38～41図、第12表、PL22～25)

土器 S B 3003・3004からは1065片の土器片(総重量11,150g)が出土した。前期末に属する土器、五領ヶ台Ⅱa式及びそれに並行する時期と考える中期初頭の土器である。完形状態に復元できるものはない。在地の土器の他、北陸系の土器や東海系の北浦C式、関西系の鷹島式と思われる土器が出土している。162の浅鉢を除き、いずれも深鉢である。162がS B 3002から出土した土器(100)と遺構間接合した。前期末から中期初頭にかけての土器群である。

中期初頭 126～138は口縁部である。126～128は五領ヶ台式である。126、127は橋状把手をもち、128は細線文と沈線による模様が施される。129の突起は爬虫類の顔面を思わせる形状を呈する。130は交互刺突文と沈線による渦巻文がみられる。131は口縁部文様帯と口頸部文様帯に斜行沈線を施す。132～134は口唇部に半截竹管の押引文をもつ。132、133は押引文を有する隆線による渦巻文をもち、後者の口縁部文様帯の地文には瓦状押引文が施文される。135は波状口縁の頂部に円形の粘土紐を巻き付け、口唇部に刻みをもつ。口縁部文様帯には平行沈線と、その間に刺突文が施される。136は口縁部に瘤を貼り付けその周囲に押引文を有する隆線を貼り付ける。137は押引文を有する隆線を横方向に巡らす。138はRLの縄文を地文とする。139、140は口縁部文様帯の破片で、139は縦位に平行沈線が施文され、140は縦位の条線地文に横位の半隆起の平行沈線が巡る。141、142は口頸部文様帯の破片で、等間隔垂下文が施文される。143は口頸部文様帯から胴部である。口径部文様帯には羽状沈線、胴部文様帯上部には格子目文、下部には縦位の沈線が施文される。144～157は胴部の破片であ

る。144は集合沈線による格子目文が施文される。145、146は爪形文を押引く隆線がみられる。145は平行沈線による三角区画内に、条線の地文と円形の竹管文を施す。147～151は半隆起の平行沈線による区画文で構成される。区画内には縄文や沈線文が施され、147には三角印刻文が見られる。152は交互刺突文をもつ。153は斜行沈線文を地文とし、平行沈線を垂下する。154、155は撚糸文が施文される。154は木目状の撚糸文である。156は結束羽状縄文が施文される。157は結節回転縄文が施文される。158～161は底部である。158は条線が、159と160は結節回転縄文が施文される。161は無文であるが、磨かれ、僅かに光沢をもつ。162は浅鉢の口縁である。口唇部内面に列点文と押引文が施文され、外面は無文である。SB 3002から出土した土器(100)と遺構間接合した。

前期末 163は口唇部に付く筒状の突起である。164～171は口縁部である。164は折り返され空洞となる口唇部に橋状の突起が付く。文様は斜行沈線と三角印刻文を口唇部直下に施し、その下にY字状の沈線を施文する。165は折り返された口唇部である。166は十三菩提式と推定する。縄文を地文とし、横位に押圧隆線を貼り付け、そこから口唇に向けて縦位に粘土紐を貼り付ける。167～169は浮線文により施文される。167、168は縄文を地文とし、169は斜行沈線の上から粘土紐を貼り付ける。170、171は円形竹管刺突文が施文される。170は橋状の把手をもつ。172～176は胴部である。172は細い沈線地文に三角印刻文が施文される。173～176は縄文を地文とし、浮線文が施文される。173、174は細い粘土紐を、175、176は押圧された粘土紐を貼り付ける。

外来系土器 177、178は北陸系の土器と推定する。いずれも非常に細い沈線文をもつ。177は口縁部、178は胴部である。179は東海系の北裏C式と推定する。爪形刺突を施す隆線が貼り付けられる。180～182は関西系の鷹島式と考える口縁部である。いずれも胎土がほかの土器と明瞭に異なり、文様は口唇部と微隆起の上に爪形刺突を施す。180、181は口唇部内面に縄文を施文する。なお、180に付着した炭化物の年代測定を行い、暦年較正值(2 σ) 5,584～5,476calBPの結果を得た。

石器 277点(総重量26,142.1g)が出土した。詳細は第12表のとおりである。

183は黒曜石製の石鏃である。断面は凸レンズ状を呈し、基部は平基である。184、185は黒曜石製のピエス・エスキューである。共に上下方向からの剥離痕をもつ。186～189は打製石斧である。186、188は凝灰岩製、187は泥岩製、189は砂岩製である。いずれも使用によると思われる摩耗がみられる。190、191は砂岩製の敲石である。190は下部を欠損する。敲打痕が上端の広い範囲にみられる。191は上端前面に敲打痕が認められ、敲打による剥離をもつ。192～194は砂岩製の凹石である。192は下部を欠損する。表裏両面の中央に凹みをもつ。193は表裏両面に凹みをもつほか、破碎後に側面を利用し、凹みが形成されている。194は表面に1か所の凹みをもつほか、上端及び側面に敲打痕が認められる。195は砂岩製の台石である。表面には広範囲に多数の敲打痕が確認できる。側面には所々剥離面を有するが、これは台石として使用した結果生じたものと推定する。196、197は黒曜石製の石核である。いずれも小形の不定形剥片を剥離したものと推定する。剥片剥離の結果、かなり小形になるまで消費されており、石鏃や石錐、ピエス・エスキュー等の小形剥片石器の素材供給が難しくなった段階で廃棄されたものと推定する。198、199は黒曜石製の二次加工ある剥片である。198は背面の左上部から側辺にかけて平坦剥離がみられる。石鏃の可能性もあるが、加工が片面のみしか認められないため二次加工ある剥片とした。199は腹面の右側辺にノッチ状の二次加工が施される。200は黒曜石製の微細剥離ある剥片である。背面の左右両側面と腹面の右側辺、左側辺下部に微細剥離が認められる。

(c) 土製品 201、202は紐状の焼成粘土塊である。201が3.8g、202が0.6gである。いずれも前期末の浮線文に貼り付けられる粘土紐よりも太い。203は角柱状の焼成粘土塊である。重量は17.3gである。1面に貫通しない孔がみられる。



第38図 縄文時代の遺物図 (12) S B 3003・3004 (1)



第39図 縄文時代の遺物図(13) S B 3003・3004(2)



第40図 縄文時代の遺物図(14) S B 3003・3004(3)



第41図 縄文時代の遺物図(15) S B 3003・3004(4)

	石鏃	石錐	ピエス・エスキュー	打製石斧	敲石	凹石	台石	石皿	石核	剥片	二次加工ある剥片	微細剥離ある剥片	碎片	計														
黒曜石	2	13.8	1	0.8	2	15.6			13	89.2	197	234.3	7	42.8	6	20.9	6	0.4	234	417.8								
安山岩									1	330.0	1	20.7						2		350.7								
チャート										1	7.7							1		7.7								
凝灰岩				2	221.4													2		221.4								
砂岩				2	161.2	2	408.3	7	2440.9	2	14867.0	1	380.0	3	2533.8	11	3846.9			28	24638.1							
泥岩				1	99.5						4	194.9						5		294.4								
粘板岩				2	166.7						2	40.8						4		207.5								
石英										1	4.5							1		4.5								
計	2	13.8	1	0.8	2	15.6	7	648.8	2	408.3	7	2440.9	2	14867.0	1	380.0	17	2953.0	217	4349.8	7	42.8	6	20.9	6	0.4	277	26142.1

左側：個数、右側：重量(g)

第12表 S B 3003・3004 出土石器組成表

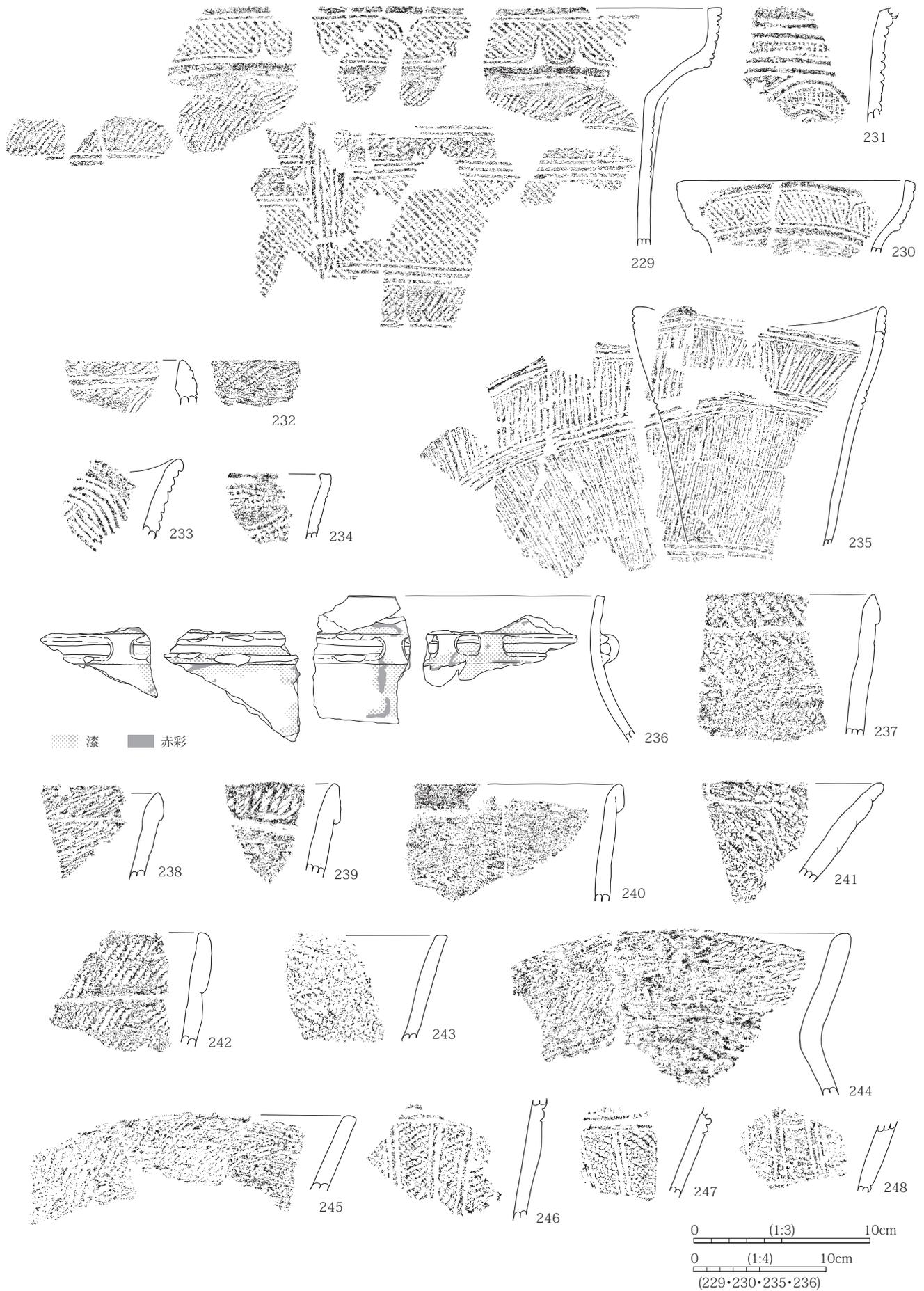
S B 4001 (第42～49図、第13表、PL26～32)

土器 S B 4001からは2171点の土器片(総重量27.11kg)が出土した。五領ヶ台Ⅱa式土器及びそれに並行する時期と考える中期初頭の土器を中心に、前期末の土器がわずかにみられる。完形状態に復元できるものはない。在地の土器の他、北陸系の土器や関西系の鷹島式と考えられる土器が出土した。204、205、272、273、216は鉢、298、299はミニチュア土器、それ以外は深鉢である。

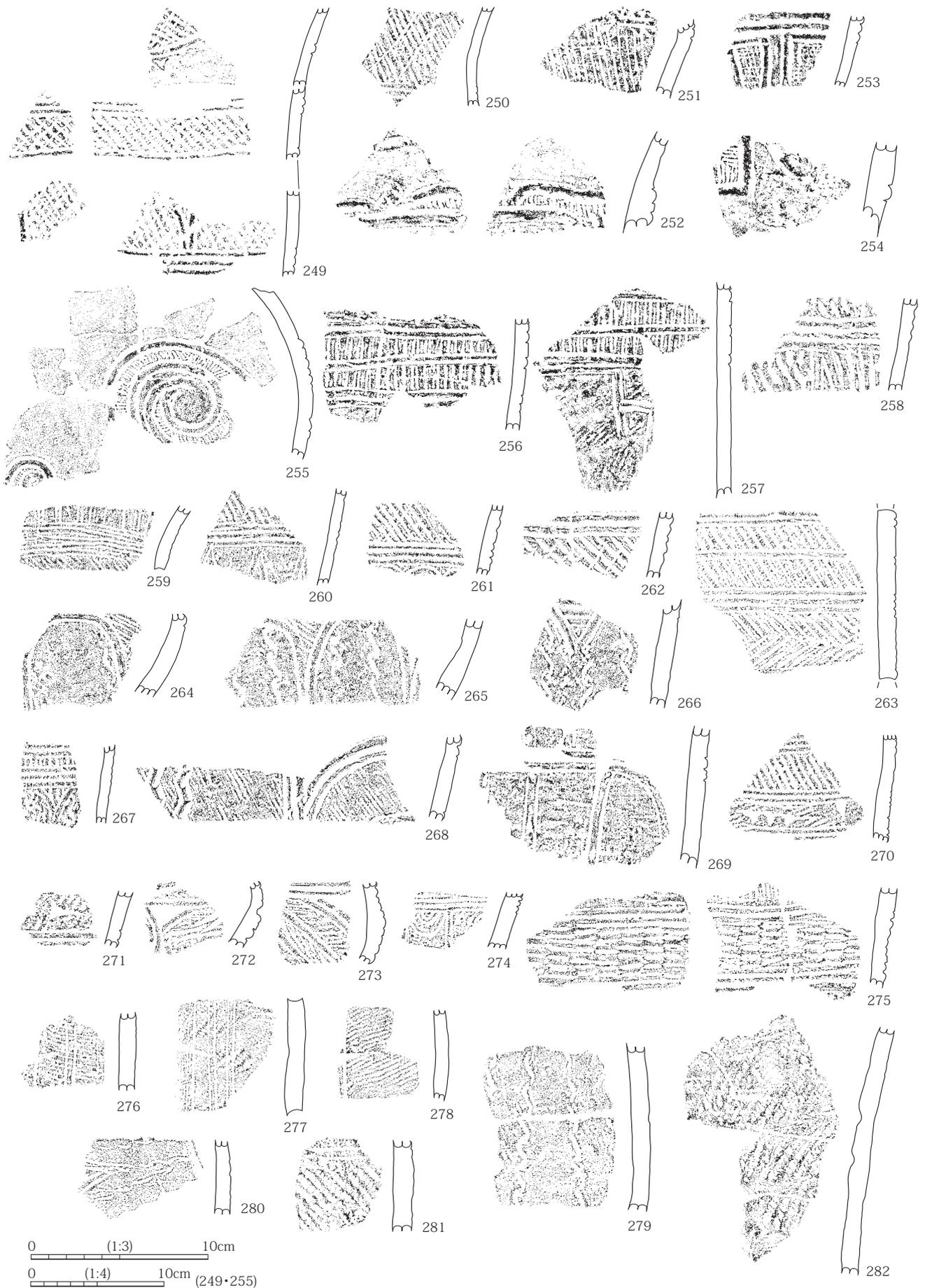
中期初頭 204～245は口縁部である。204～208は五領ヶ台式で、橋状把手をもつ。209は五領ヶ台式土器の状口縁で、波頂部には三角形の孔が開き、口唇部には条線地に三角印刻文が施文される。210は口唇部に突起をもち、口縁部文様帯に半隆起線による区画内に細い条線による格子目文地に三角印刻文が施文される。211～223は口唇部に半截竹管による押引文が施文される。211は蛇体意匠の突起をもつ。口縁部文様帯には斜行沈線が施文される。212～217は口縁部文様帯に集合沈線による格子目文が施文され、212、213には押引文をもつ隆線の貼り付けと、頂部が平坦な突起がみられる。213、215、216は口頸部の地文に縄文を施文し、等間隔垂下文が施す。217は口頸部に斜行沈線が施される。214は口唇部から隆線が垂下する。218～221は口縁部文様帯に瓦状押引文が施文される。218は口唇部から押引文をもつ隆線が貼り付けられ、219には口頸部に斜行沈線が施される。222は波状口縁で、口唇部の内側に粘土を貼り付け肥厚する。口唇部内側の縁辺にも半截竹管による押引文がみられる。223は波状口縁で、口縁部文様帯は半隆起の沈線区画内を斜行沈線で施文する。224、225は口縁部文様帯に隆線を巡らせ、口唇と隆線の間を縦位の沈線で施文する。224は口唇部に深い沈線が施され、隆線に押引文が施される。226、227は文様と胎土がよく似ており、同一個体の可能性が高い。口縁部文様帯は横位の半隆起線間に縦位の沈線と三角印刻文が施される。226には口唇部に橋状把手が付けられる。228、229は口縁部文様帯を半隆起線で区画し、区画内に集合沈線による格子目文を施す。口頸部は縄文を地文とする。胴部は縄文及び格子目文の地文を半隆起線で方形に区画する。230は口縁部文様帯を半隆起線で区画し、斜行沈線を施文する。231、232は半隆起線による幾何学文が施文される。231は半隆起線間に格子目文が、232は縄文を地文とする。233は波状口縁で、半截竹管による半隆起線が集合する。234は口唇部内面に粘土紐を貼り付け、外面には細かな押引き文による弧状の意匠がみられる。235は縦位の沈線を施文後、多重沈線で横位に区画する。236は器形が樽形を呈する。口縁部に2条の隆線を巡らせ、隆線同士が橋状把手でつながれる。237～240は口縁部を外側に折込み肥厚させ、口唇部は尖る。237、238は口縁部および胴部に縄文を、239は捺糸文を施文する。240は無文である。241、242は縄文を地文とし、顕著な輪積痕が認められる。241の口唇部は尖る。243は縄文を地文とする。244、245は無節の捺糸文を施文する。246～248、250、251は口頸部、249は口頸部から胴部である。246～248は等間隔垂下文が施文される。246、247は縄文を地文とする。250は半截竹管による斜行沈線施文後に、ヘラ状施文具で深い沈線を斜位に施し格子目状とする。251は縦位の沈線を施文する。249は半隆起線の区画内に、集合沈線による格子目文が構成されている。口頸部の半隆起線からは三角印刻文が施される。252～286は胴部である。253～275は半隆起線による区画をもつ。252は幾何学形の区画内に、条線が縦位に施文される。253は方形区画内に格子目文、254は半隆起線に直交する方向に沈線が施文される。255は渦巻きの区画内に沈線が施される。256～258は狭い横位の区画内に縦位の沈線が施文される。259は縦位の沈線と斜行沈線、260は斜行沈線、261、262は半截竹管により斜行沈線を施文後、ヘラ状施文具で沈線を斜位に施し格子目文を施文する。263は横位に3単位の区画が認められ、上部2単位は格子目文、下部1単位は沈線が羽状に施文される。264～269は胴部上半をやや弧線化したY字状の半隆起線で区画する。264～266は区画内が斜行沈線で構成され、胴部下半は結節回転縄文を地文とする。268は区画内にRLの縄文がみられる。269の区画内は無文である。270、271は区画内に三角印刻文を施す。272、273は斜位の狭い区画内を横位の沈線で構成する。274の半隆起



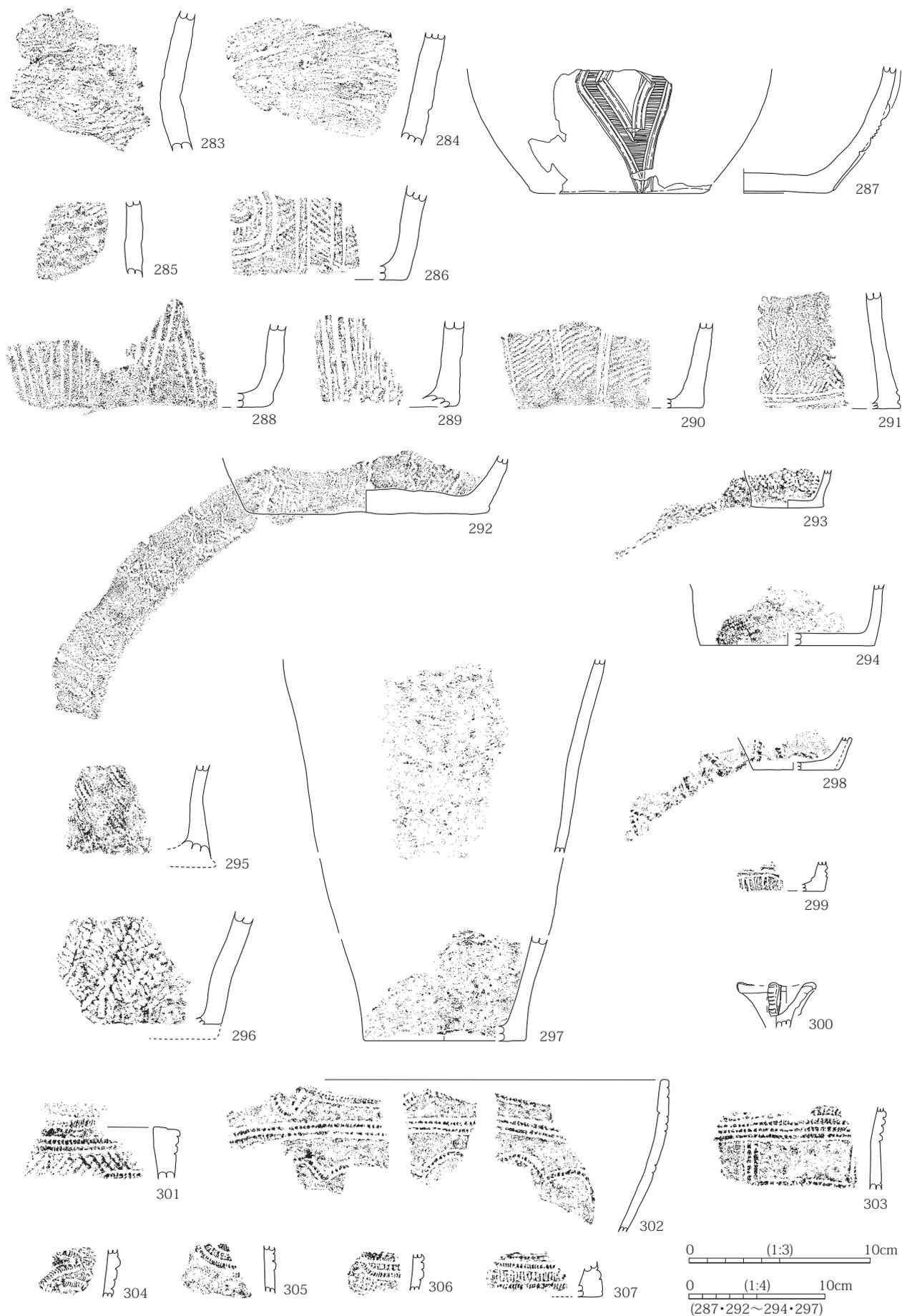
第42図 縄文時代の遺物図(16) S B 4001(1)



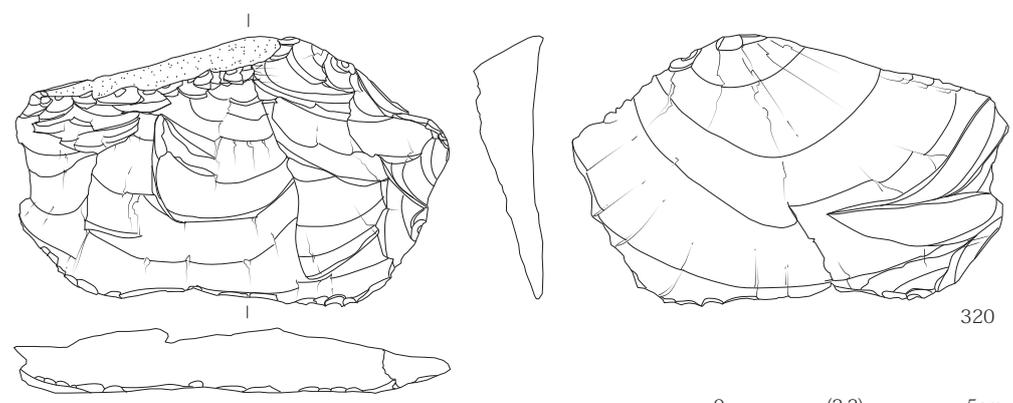
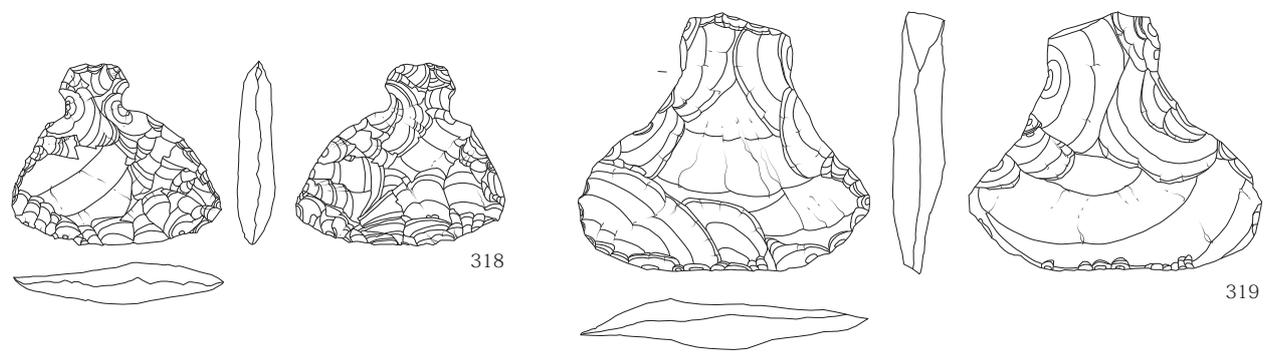
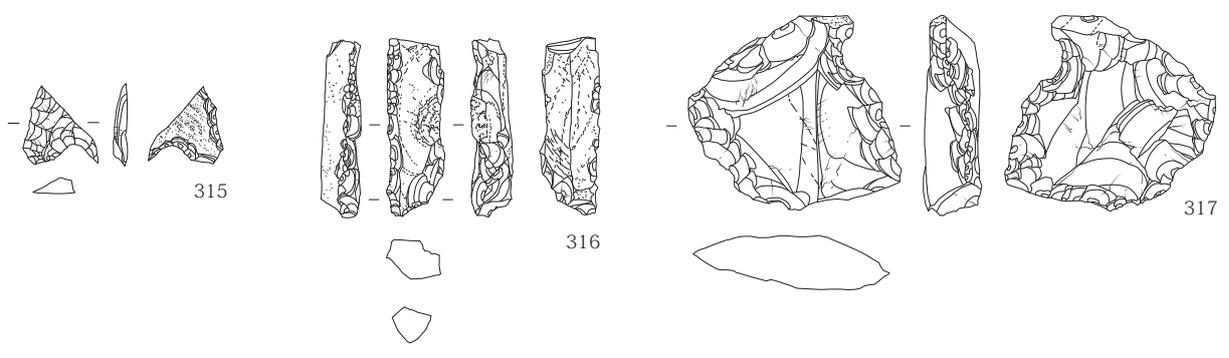
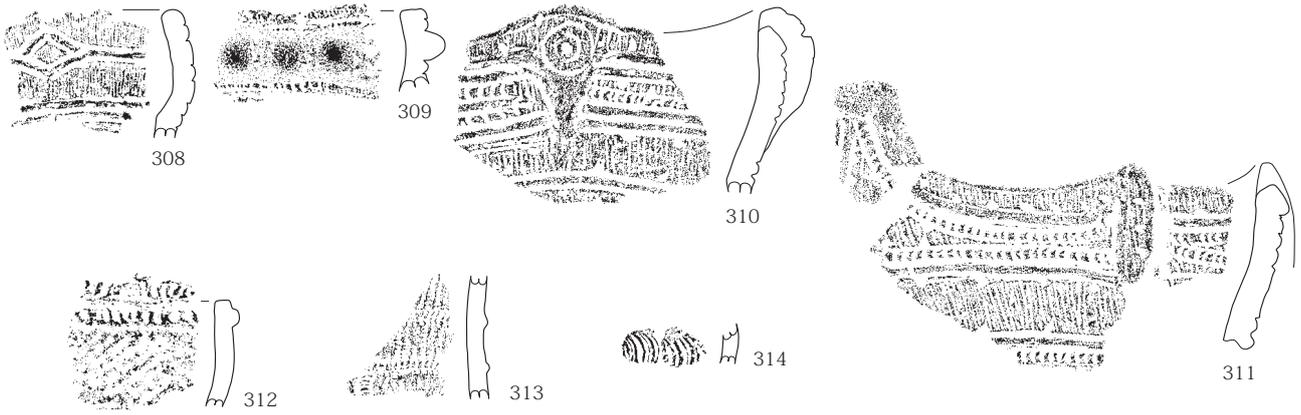
第43図 縄文時代の遺物図(17) S B 4001(2)



第44図 縄文時代の遺物図(18) S B 4001(3)

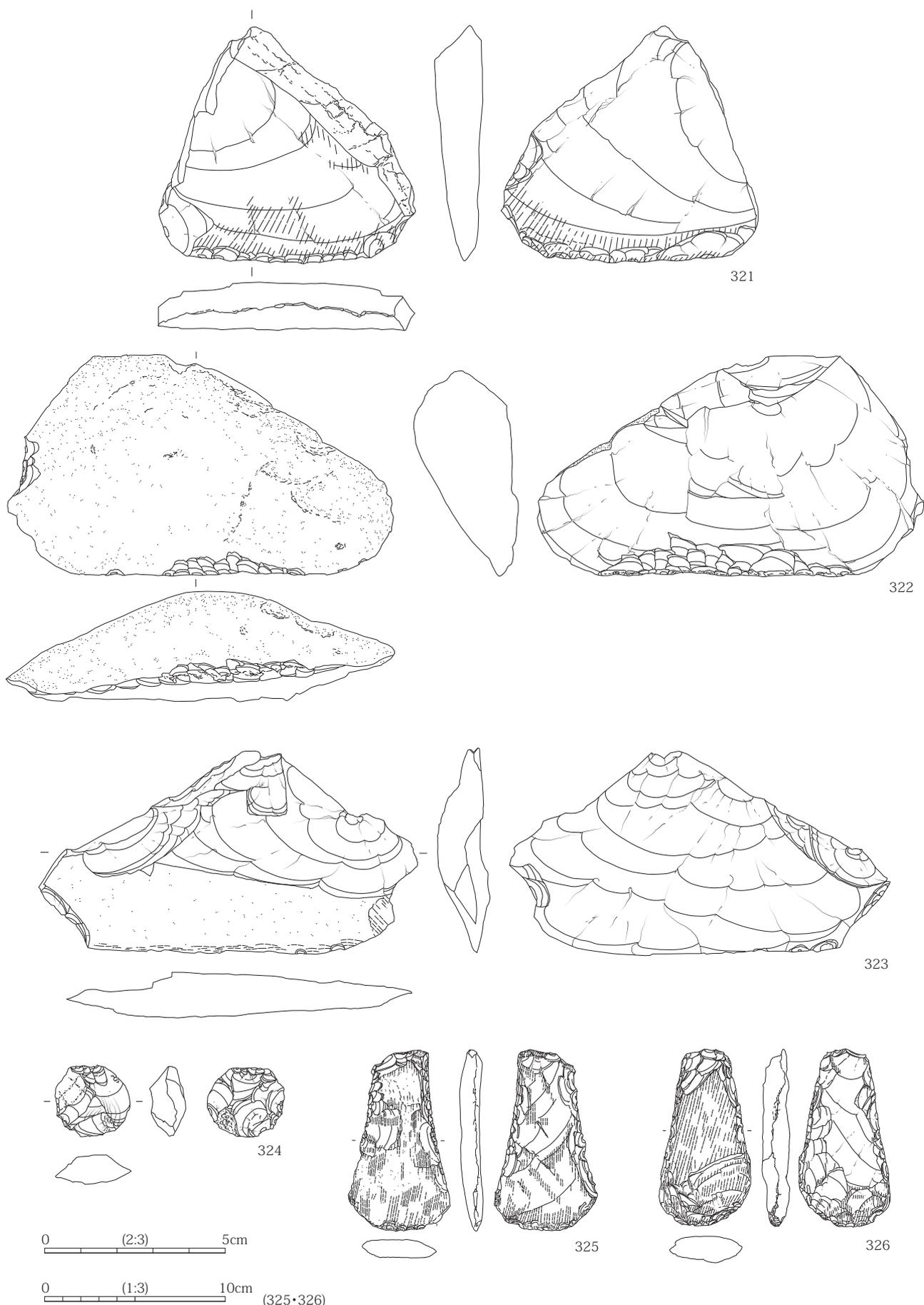


第45図 縄文時代の遺物図(19) S B 4001(4)



0 (2:3) 5cm (315~320)
 0 (1:3) 10cm

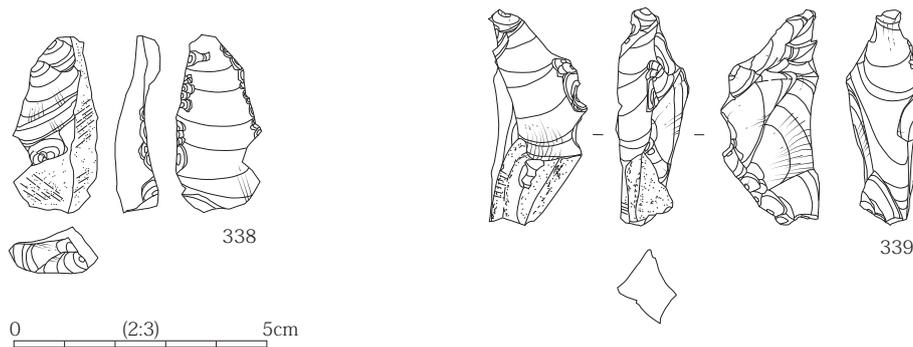
第46図 縄文時代の遺物図(20) S B 4001(5)



第47図 縄文時代の遺物図(21) S B 4001 (6)



第48図 縄文時代の遺物図(22) S B 4001(7)



第49図 縄文時代の遺物図(23) S B 4001(8)

線は非常に細い。275は瓦状押引文が施文される。276は浅い沈線を格子状に施文する。277、278は縄文地文に平行沈線が垂下する。279は縦位、280は横位に結節回転縄文が施文される。281～283は縄文を地文とする。284は無文である。285は種実圧痕を有する。なお、257に付着した炭化物の年代測定を行い、暦年較正值(2σ)5,306～5,051calBPの結果を得た。286～294は底部である。286は半隆起線により区画され、区画内は沈線で構成される。287は半隆起線による幾何学形の区画内に横位の沈線を施文する。288、289は縦位に集合沈線が施文される。290は縄文を地文とし、平行沈線が等間隔に垂下する。291は半隆起線が巡り、三角形を呈すると推測する刻みが垂下する。地文には結節回転縄文が施文される。292は結節回転縄文が施文される。293～296は縄文を地文とする。297は無文である。298、299はミニチュア土器である。298は押引文をもつ半隆起線が施される。

前期末 300は口縁部に付くと推定する突起である。301は口縁部で、半隆起線による区画内に、斜行沈線と浮線文による格子目文が施文される。302～307は押引文をもつ半隆起線による模様が施される。302は口縁部、303～306は胴部、307は底部である。302は口唇部に2個1対の突起が付き、押引文が巡る。半隆起線は弧状化したY字状を呈する。303は半隆起線による方形区画をもつ。304～307は同一個体と推定する。半隆起線により幾何学形の区画をもち、区画内は沈線が施文される。

外来系土器 308～311は北陸系の土器と考える。いずれも口縁部である。308は波状口縁で、波頂部には2個1対の刻みをもつ。非常に細い条線地に半隆起線による意匠がみられる。309は波状口縁で押引文をもつ半隆起線による区画内に瘤を貼り付ける。310、311は文様と胎土がよく似ており、同一個体の可能性がある。口唇部文様帯には縦位の条線と三角印刻文、口縁部文様帯上部には半隆起の押引沈線文間に縦位の細い沈線、下部には半隆起線間に縦位の細い沈線と三角印刻文が施文される。310には円文が付く突起から隆線が垂下する。312～314は関西系の鷹島式と考える。312、313には特殊凸帯文が、314には連続爪形文が認められる。

石器 砂岩の礫片7点を含む242点(総重量13,731.0g)が出土した。詳細は第13表のとおりである。

315は黒曜石製の石鏃である。板状の「ズリ」を素材とする。右上部を大きく欠損する。316は黒曜石製の石錐である。「ズリ」を素材とし、断面形は菱形を呈する。317～319は石匙である。317、319はチャート製、318は頁岩製である。317は失敗品と考える。320～323はスクレイパーである。320、321は砂岩製、322は花崗岩製、323は泥岩製である。いずれも大形の剥片を素材とし、直線状で片刃の刃部をもつ。刃部には使用によると思われる摩耗がみられる。324は黒曜石製のピエス・エスキューである。上下及び左右からの剥離痕がみられる。325～332は打製石斧である。325、326、328、329、332は砂岩製、330は泥岩製、327は粘板岩製、331は流紋岩製である。325、326、328、329、331、332には刃部に使用によると思われる摩耗やツブレがみられる。333、334は砂岩製の敲石である。333は上端に敲打痕と敲打による剥離がみ

られる。下半を欠損する。334は上端の広い範囲に敲打痕がみられる。下半を欠損するが、その剝離面には、一部摩耗が認められる。335は砂岩製の凹石である。表面に1か所凹みが確認できる。凹みがある面には、磨ったような痕跡をもつ溝が数条認められる。凹石の他、砥石として利用した可能性もある。336は砂岩製の台石である。端部や側面に敲打痕や敲打による剝離が認められる。敲打痕が残される部位は敲石によく認められるものであるが、片手に保持して扱うには重量が重すぎるため台石と判断した。337は砂岩製の石皿である。下半を大きく欠損する。338は黒曜石製の微細剝離ある剝片である。腹面の左右両側辺に微細剝離が認められる。339は黒曜石製の削片である。背面に直線状の稜線を作り出し、削出されたものである。

	石鏃	石錐	石匙	スクレイパー	ピエス・エスキュー	打製石斧	敲石	凹石	台石	石皿	砥石	石核	剝片	二次加工ある剝片	微細剝離ある剝片	削片	砕片	礫片	計																			
黒曜石	1	4.2	1	3.7									9	62.7	142	214.4	1	0.8	5	15.3	1	7.6	13	1.0		177	320.7											
流紋岩						2	61.4						1	2.9												3	64.3											
花崗岩				1	168.3			1	411.5																	2	579.8											
チャート			2	40.7									2	20.7												4	61.4											
頁岩			1	104.0																						1	104.0											
砂岩			2	113.4		7	426.6	6	745.9	3	1735.6	3	2667.1	1	3550.0	1	116.9	10	268.9	12	1126.2				7	1338.0	43	12088.6										
泥岩				1	66.6		3	209.7						6	173.9											10	450.2											
粘板岩						1	29.6							1	32.4											2	62.0											
計	1	4.2	1	3.7	3	144.7	4	348.3	4	11.0	13	727.3	6	745.9	4	2147.1	3	2667.1	1	3550.0	1	116.9	10	331.6	164	1570.5	1	0.8	5	15.3	1	7.6	13	1.0	7	1338.0	242	13731.0

左側：個数、右側：重量（g）

第13表 S B 4001 出土石器組成表

(2) 土坑出土遺物

土坑からは、土器が1,386点（15,053g）、石器が277点（41,916.0g）出土した。土坑ごとの石器の種類と出土量は第14表のとおりである。1トレンチの土坑からは縄文時代中期初頭と中期中葉の土器、その他のトレンチからは縄文時代中期初頭の土器が主に出土しており、石器の帰属時期も上記の時期と考える。以下、土坑ごとに出土遺物を記述する。

1 トレンチ

SK 1013（第50図、PL33）

石器 340は黒曜石製の削片である。背面に直線状の稜線を作り出し、削出されたものである。

SK 1014（第50図、PL33）

石器 341は凝灰岩製の打製石斧である。表裏両面は中央から刃部にかけて摩耗しており、裏面の右側辺中央の稜線はややツブれている。

SK 1016（第50図、PL33）

土器 342はほぼ完形の深鉢である。波状口縁で、隆線の貼り付けによる意匠もみられる、口縁部文様帯は平行沈線を垂下し、胴部文様帯上半は押引文をもつ隆線による区画内に三角区画文が巡る。胴部文様帯下半はRLの縄文が施文される。

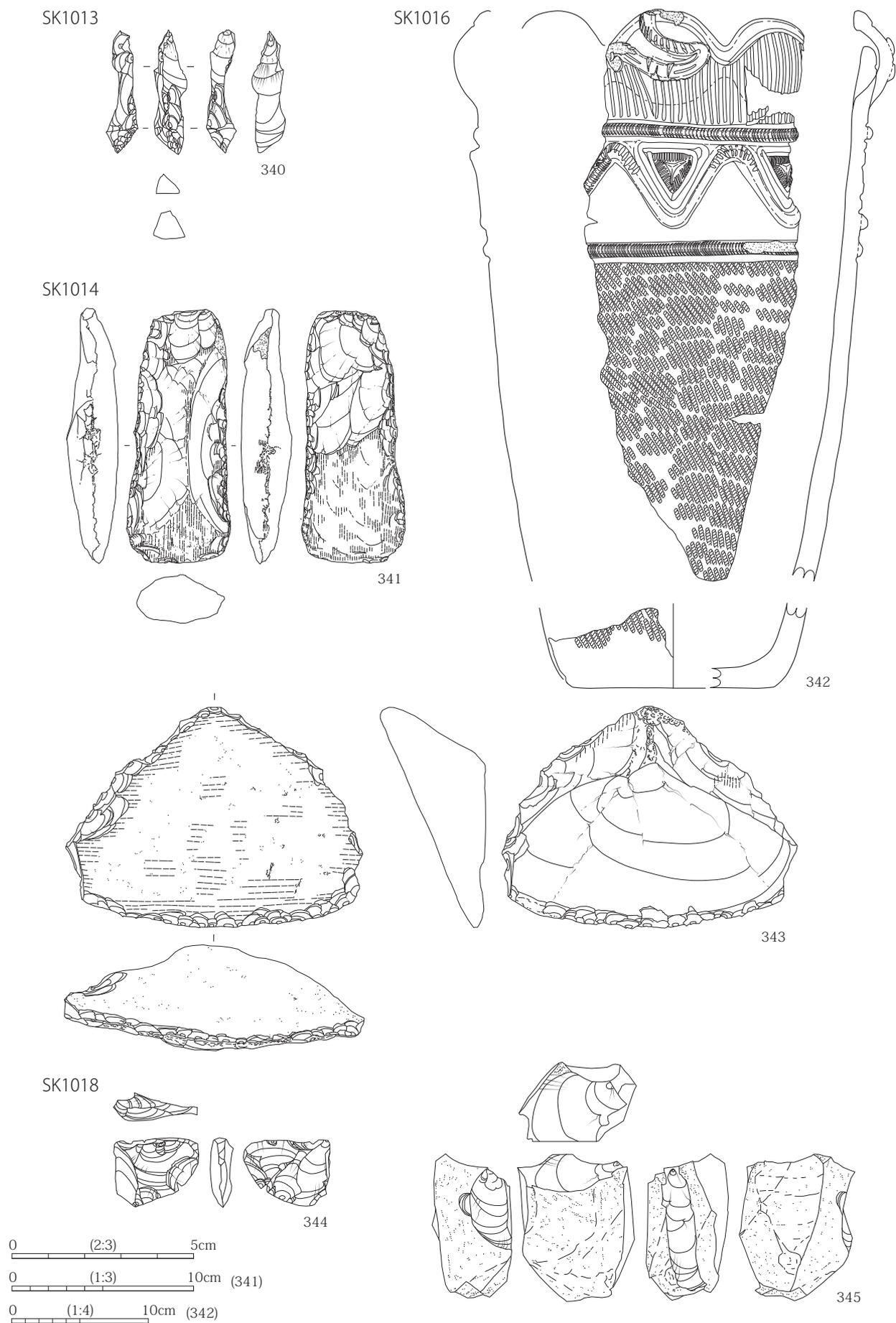
石器 343は安山岩製のスクレイパーである。大形の剝片を素材とし、背面は自然面で構成される。背腹両面からの加工により、両刃で直線状の刃部を形成する。刃部は摩耗しており、基部にはツブレが認められる。

SK 1018（第50図、PL33）

石器 344は黒曜石製のピエス・エスキューである。上下方向からの剝離痕をもつ。345は黒曜石製の石核である。単設の剝離面を打面とし、左右両側面に1面ずつ剝離面が認められる。

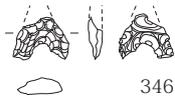
SK 1019（第51図、PL34）

石器 346は黒曜石製の石鏃である。先端を欠損する。



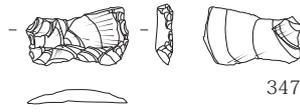
第50図 縄文時代の遺物図(24) 1トレンチSK(1)

SK1019

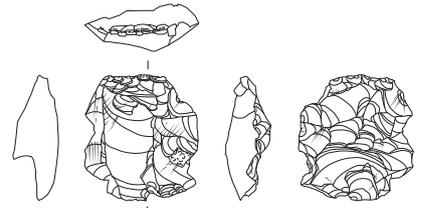


346

SK1021



347

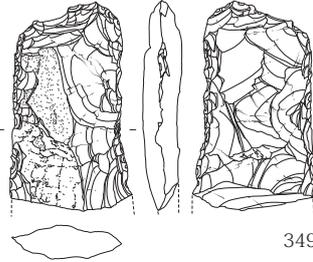


348

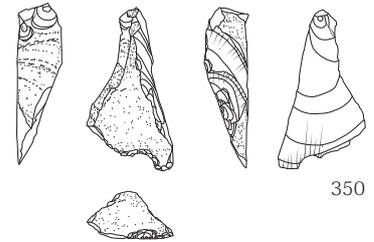
SK1024



351



349



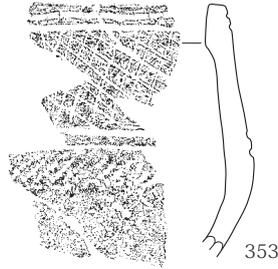
350

SK1025

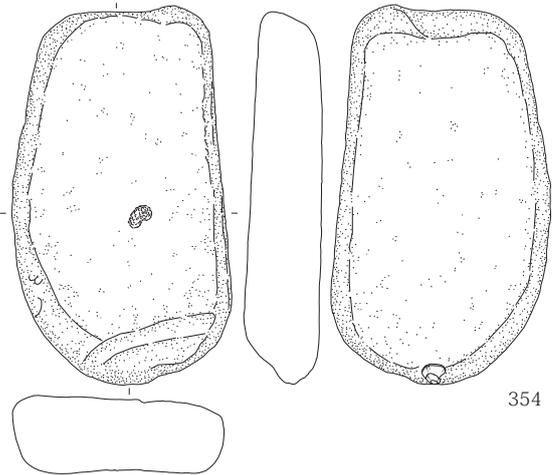


352

SK1031

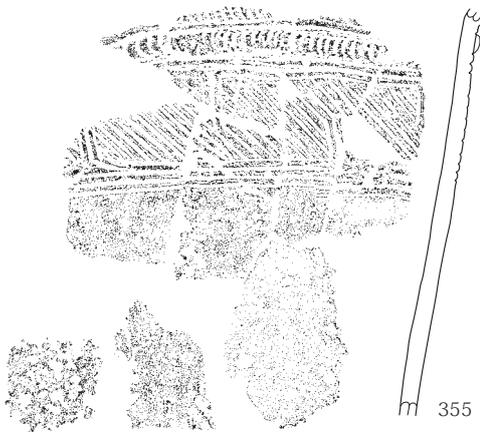


353

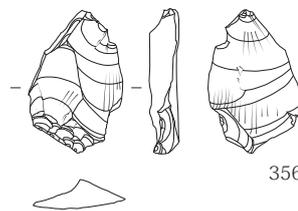


354

SK1034



355



356

0 (2:3) 5cm

0 (1:3) 10cm (349・351~353)

0 (1:4) 10cm (355)

0 (1:6) 20cm (354)

第51図 縄文時代の遺物図(25) 1トレンチSK(2)

S K 1021 (第51図、PL34)

石器 347は黒曜石製の石鏃である。失敗品と考える。背面周縁を調整中に折れたため、製作作業を中断したものと推定する。348は黒曜石製のピエス・エスキューである。上下及び左右方向からの剥離痕をもつ。349は砂岩製の打製石斧である。器体中央から刃部を欠損する。350は黒曜石製の微細剥離ある剥片である。剥片の末端にノッチ状に微細剥離が入る。

S K 1024 (第51図、PL34)

土器 351は深鉢の波状口縁である。弧状の区画が連続し、区画内に縦位の沈線がみられる。S K 1025から出土した352と遺構間接合する。

S K 1025 (第51図、PL34)

土器 352はS K 1024から出土した351と遺構間接合する。

S K 1031 (第51図、PL34)

土器 353は深鉢の口縁から口頸部である。口唇部は平行沈線を巡らせ、口縁部文様帯はヘラ状施文具により格子目文が施される。

石器 354は砂岩製の台石である。表面器体中央に敲打痕がみられる。

S K 1034 (第51図、PL34)

土器 355は深鉢の胴部である。半隆起線による方形区画内に斜行沈線が施文される。

石器 356は黒曜石製のピエス・エスキューである。上下方向からの剥離痕をもつ。

3 トレンチ

S K 3001 (第52図、PL35)

土器 357は深鉢の胴部と底部である。地文は縄文で、特殊凸帯文が施される。関西系の鷹島式と考える。

S K 3003 (第52図、PL35)

土器 358は深鉢の口縁から胴部である。口唇部には突起が付き、口縁は角口縁状となる。断面は薄手である。外面は無文であるが、内面は口縁近くに平行沈線が巡る。加曾利B式の粗製土器と推定する。

S K 3009 (第52図、PL36)

土器 359は深鉢の胴部である。矢羽状の沈線と斜行沈線が施文される。360は深鉢の胴部である。地文は縄文である。

石器 361は黒曜石製で二次加工ある剥片である。背面右側辺と腹面両側辺に二次加工が施される。

S K 3022 (第52図、PL35)

土器 362～364は深鉢の胴部である。362は縦位の沈線が施される。363は2条の半隆起線で横位に区画され、上半は斜行沈線で、下半は縄文が施文される。364は地文は縄文で、平行沈線を垂下させる。

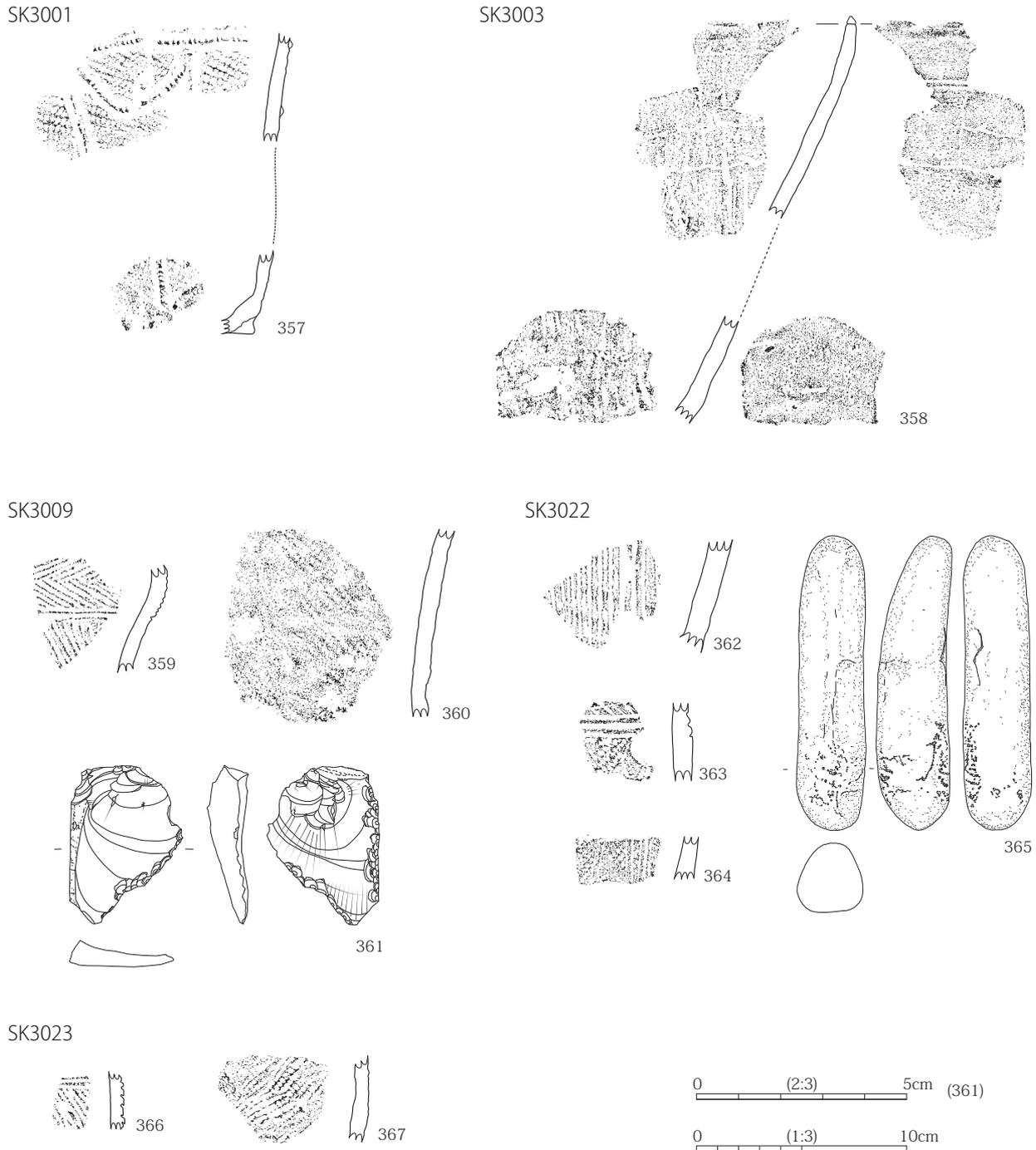
石器 365は砂岩製の敲石である。側辺の一部に敲打痕が認められる。

S K 3023 (第52図、PL35)

土器 366は深鉢の胴部である。横位の半隆起線の下に斜行沈線が施文される。367は縄文を地文とする深鉢の胴部である。

S K 3024 (第53図、PL36)

土器 368は深鉢の口縁である。口唇部外面は細い条線が施文され、内側を削り断面はとがる。口縁部文様帯には半隆起線よる渦巻文がみられる。369～382は深鉢の胴部である。369～371は押引文をもつ隆線または半隆起線が認められる。369は隆線下に押引の平行沈線による意匠が、370は隆線の上に横位の沈線が、371は半隆起線による区画内に縦位の沈線が施文される。372～377は半隆起線による区画をもつ。372～374は三角形と推定する区画内を斜行沈線で構成する。375は区画内に斜行沈線、376は区画内に斜行沈線を



第52図 縄文時代の遺物図(26) 3トレンチSK(1)

施文し、外は縄文を地文とする。377は僅かに弧線化したY字状を呈する半隆起線による三角形区画が連続し、胴部下半は結節回転縄文を施文する。378、379は横位の半隆起線が施文される。378の半隆起線の下部には竹管の腹側により施文された沈線がみられる。379は縄文を地文とする。380は等間隔に平行沈線が垂下する。381は平行沈線を横位に施文する。382は竹管の腹側により施文された沈線が3条垂下する。地文は縄文である。383は深鉢の底部である。文様は確認できない。384、385は北陸系土器の胴部である。384は4条1組の押引文をもつ浮線が上下に認められ、その間を小円貼付文が充填する。北陸地方の縄文前期末に見られる朝日下層系統のものと推定する。385は半隆起線による区画内を非常に細い沈線で施文して格子目とする。

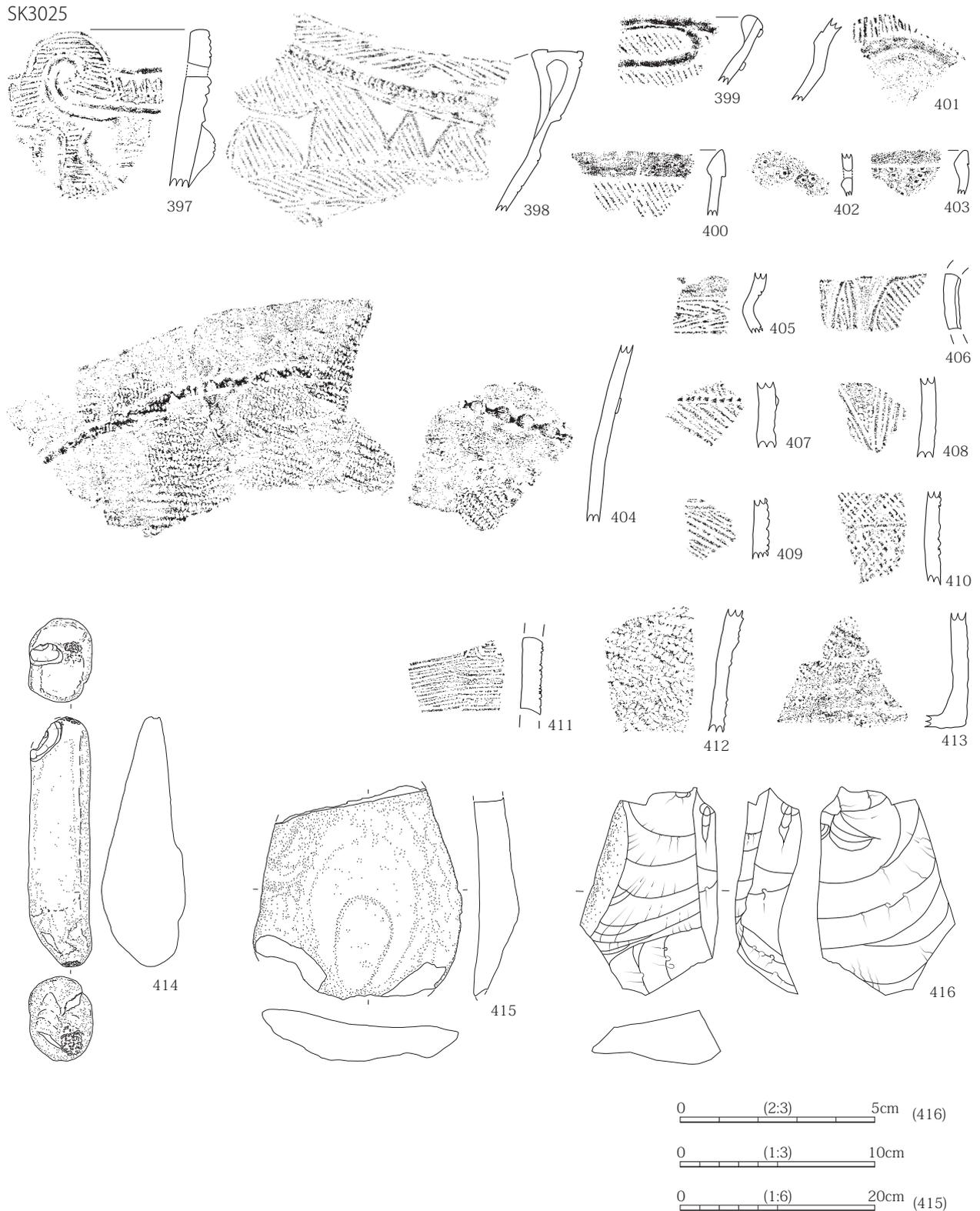
石器 386、387は黒曜石製の石鏃である。387は失敗品と考える。388は黒曜石製の微細剥離ある剝片である。背面右側辺に微細剥離が認められる。

SK3024



0 (1:1) 2cm (389~396)
 0 (2:3) 5cm (386~388)
 0 (1:3) 10cm

第53図 縄文時代の遺物図(27) 3トレンチSK(2)



第54図 縄文時代の遺物図(28) 3トレンチSK(3)

土製品 焼成粘土塊が8点出土した。いずれも不整形で明瞭な加工の痕跡はみいだせない。

SK 3025 (第54図、PL37)

土器 397～404は深鉢の口縁である。397は橋状把手をもつ五領ヶ台式土器である。口縁部文様帯は沈線を地文とし三角印刻文が施される。398は波状口縁で、口唇部を内側に折返し中空とする。斜行沈線を地文とし、三角印刻文が施文される。399～401は沈線を地文とする。399は粘土紐が貼り付けられる。401は口唇部に沈

線がみられる。口唇部を内側に折返すと推定する。402、403 は円形竹管刺突文が施される。402 は口唇部に付く突起である。404 は縄文を地文とし、刻みをもつ粘土紐を巡らせる。405 は深鉢の口頸部である。矢羽状沈線文が施文される。406 ~ 412 は深鉢の胴部である。406 ~ 409 は斜行、または縦位の沈線を地文とする。406 は三角印刻文が施される。407 は押引文をもつ粘土紐が貼り付けられる。410 は沈線による格子目文が施文される。411 は平行沈線を横位に施文する。412 はR Lの縄文を地文とする。413 は深鉢の底部である。縄文を地文とする。石器 414 は砂岩製の敲石である。上下両端に敲打痕が認められ、上端には敲打による剝離もみられる。415 は砂岩製の石皿である。使用面の凹みは浅い。416 は下呂石製の剝片である。

4 トレンチ

S K 4012 (第55図、PL38)

土器 417 は深鉢の胴部である。半隆起線による方形区画内に横位の沈線が施される。

S K 4020 (第55図、PL38)

土器 418 は深鉢の底部である。縄文を地文とする。

S K 4024 (第55図、PL38)

土器 419 ~ 421 は深鉢の口縁である。419 は平行沈線が、420 は竹管の腹側により施文した沈線が施文される。421 は波状口縁で縄文を地文とし、地文が口唇部内側にも施される。422 ~ 424 は深鉢の胴部である。422、423 は半隆起線による三角区画文が横位に連続する。424 は深鉢の底部である。半隆起線による方形区画をもつ。

S K 4025 (第55図、PL38)

土器 425 は深鉢の胴部である。横位の平行沈線下に縦位の平行沈線が施文される。426 は深鉢の底部である。平行沈線を地文とする。

石器 427 は黒曜石製の尖頭器である。剝離面が細長く、斜行するように入る。押圧剝離によるものと思われる。有舌尖頭器の先端部の可能性がある。下半を欠損する。428 はチャート製の石匙である。

S K 4026 (第55図、PL38)

土器 429 は縄文を地文とする深鉢の胴部である。

S K 4028 (第55図、PL38)

土器 430、431 は深鉢の口縁である。430 は口唇部直下に刻みをもつ隆線が2条巡る。431 は半隆起線下に細い沈線による格子目文と垂下する平行沈線がみられる。北陸系土器の可能性はある。432 は深鉢の口頸部である。等間隔垂下文が施文される。

石器 433 は黒曜石製の石錐である。剝片を素材とする。先端部の断面は四角形を呈する。434 は砂岩製の敲石である。自然の稜上に敲打痕が集中してみられる。表面にみられる剝離面は敲打によるものと推定する。

S K 4029 (第55図、PL38)

土器 435 は深鉢の胴部である。地文に結節回転縄文が施文され、平行沈線が垂下する。

石器 436 は砂岩製の敲石である。上下両端と側辺に敲打痕、上端に敲打による剝離がみられる。

S K 4032 (第56図、PL39)

土器 437 は口縁に4つの突起をもつ。口唇部は押引文が施文され、口縁部文様帯は突起から垂下する押引文が施された隆線により4単位に区画され、各区画を交互に瓦状押引文と斜行沈線により施文する。口頸部文様帯は等間隔垂下文、胴部文様帯上半は斜行沈線、胴部文様帯下半は縦位の沈線により施文する。S K 4035 より出土した口縁部4片と遺構間接合した。438 は3条の半隆起線下に沈線による格子目文が施される。

S K 4034 (第56図、PL39)

土器 439 は半隆起線により横位に区画され、上の区画に三角印刻文、下の区画に細い沈線による格子目文が施される。北陸系の土器と推定する。440 は縄文を地文とする深鉢の胴部である。441 は深鉢の底部



第55図 縄文時代の遺物図(29) 4トレンチSK(1)

である。縦位の半隆起線間に横位の沈線が施文される。

S K 4035 (第56図、PL39)

土器 442は深鉢の胴部である。半隆起線間に格子目文が施文される。443は縄文を地文とする深鉢の胴部である。

S K 4036 (第56図、PL39)

土器 444は結節回転縄文が施文される、深鉢の胴部である。

S K 4037 (第57図、PL40)

土器 445は深鉢の胴部である。垂下する平行沈線と結節回転縄文が施文される。

S K 4038 (第56図、PL39)

土器 446は深鉢の波状口縁である。口唇部には太い沈線が施され、口唇部直下には縦位の細線文に三叉文が施文される。

S K 4039 (第56図、PL39)

土器 447、448は深鉢の口縁部である。447は口唇部に縄文を施文し、口縁部文様帯は半隆起線により区画され、格子目文が施される。448は波状口縁で押し引き文をもつ半隆起線による区画内に瘤が貼り付けられる。北陸系の土器と推定する。449は深鉢の口頸部である。半隆起線による区画内に斜行沈線が施文される。450～455は深鉢の胴部である。450は半隆起線間に細い条線、451は半隆起線上に縦位の平行沈線、452は細い沈線による格子目文、453は縦位の平行沈線、454は1条の垂下する平行沈線が施文される。455は縄文を地文とする。

S K 4041 (第56図、PL39)

土器 456、457は半隆起線による区画をもつ深鉢の胴部である。456は逆U字状に区画内に縦位の沈線が施文される。457は横位に区画され、区画内は縄文地と斜行沈線がみられる。458は深鉢の胴部である。Y字状の半隆起線が連続し、下部に細い沈線による格子目文が施される。459はミニチュア土器の口縁部である。細い沈線による抽象的な意匠をもつ。

石器 460は砂岩製の凹石である。表裏左右4面に凹みと磨り面が認められる。

S K 4042 (第57図、PL40)

土器 461は口縁から胴部が接合し、ほぼ完形に復元できる。口縁から口頸部にかけて橋状把手が付く。口径部文様帯は半隆起線で弧状に区画され、区画内は格子目文が施文される。胴部文様帯は半隆起線により上下に区画され、上段は格子目文、下段は方形と弧状に区画され、区画内は格子目文で構成される。462は口縁から胴部が接合し、ほぼ完形に復元できる。口縁部文様帯は隆線による区画内に格子目文が、口頸部文様帯は縄文地に等間隔垂下文が施文される。胴部上半は隆線による区画内に格子目文が施文され、下半は縄文を地文とする。

石器 463は砂岩製の砥石である。表面と右側面に磨り面が認められる。

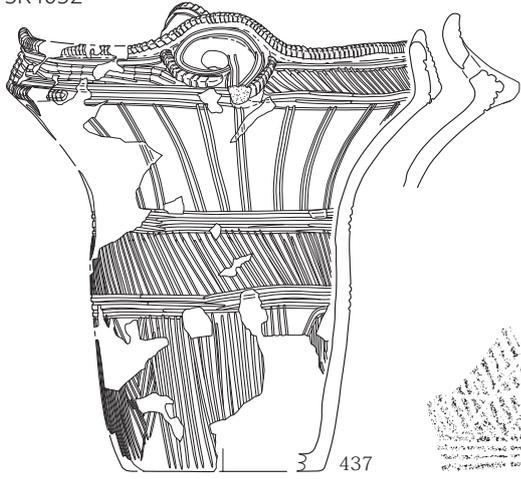
S K 4043 (第57図、PL40)

土器 464、465は口縁部である。464は口唇部に押し引き文を、口縁部文様帯に斜行沈線を施文する。口唇部から押し引き文をもつ隆線を垂下させ、口頸部文様帯は瓦状押し引き文を施文する。465は口唇部に押し引き文を施文し、口縁部文様帯は口唇部から垂下する押し引き文をもつ隆線と半隆起線による方形区画内に細い沈線による格子目文が施文される。北陸系の土器と推定する。

石器 467は砂岩製の敲石である。自然の角部に敲打痕が集中して残る。466は黒曜石製で二次加工ある剥片である。背面左側面に二次加工が施され、背面右側面には微細剥離が認められる。

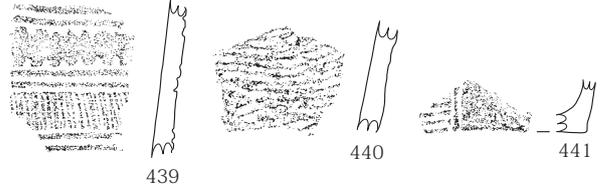
石製品 468は砂岩製の石棒である。上下を欠損する。特に上部は表裏両側に剥離面が認められ、故意に壊したようにも思える。

SK4032



437

SK4034



439

440

441

SK4035



437

438

442

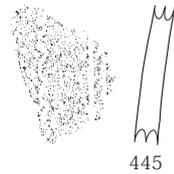
443

SK4036



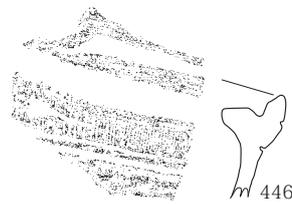
444

SK4037



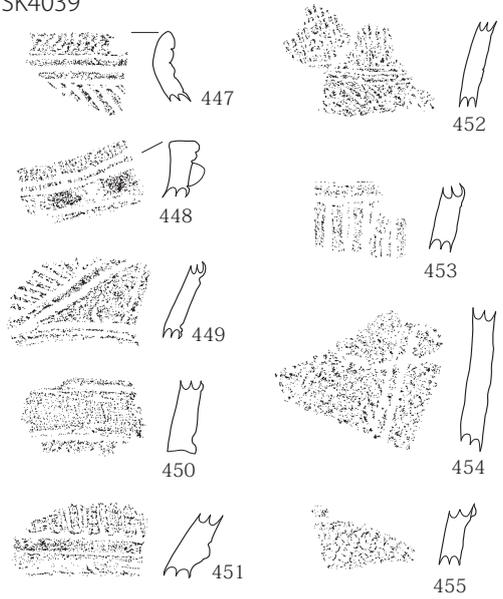
445

SK4038



446

SK4039



447

448

449

450

451

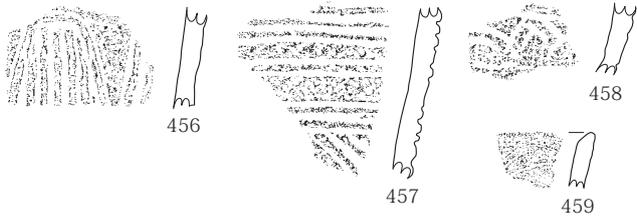
452

453

454

455

SK4041

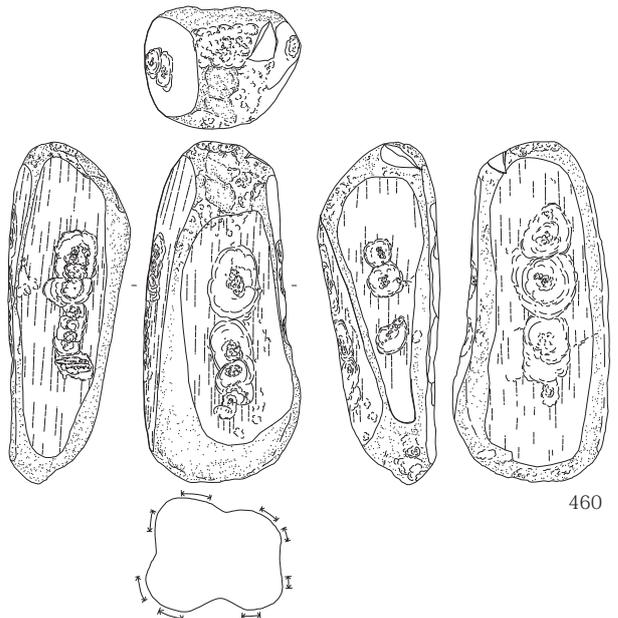


456

457

458

459



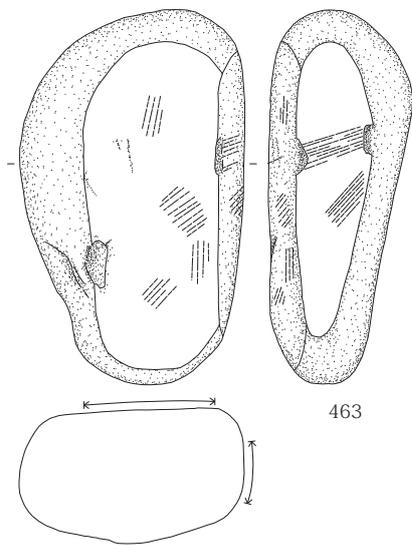
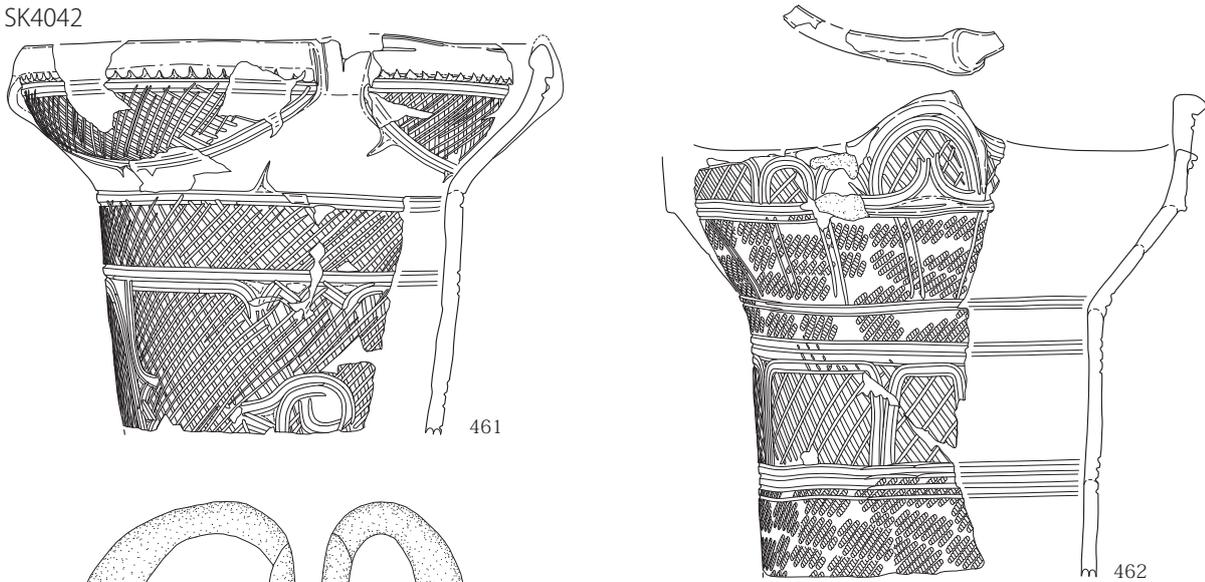
460

0 (1:3) 10cm

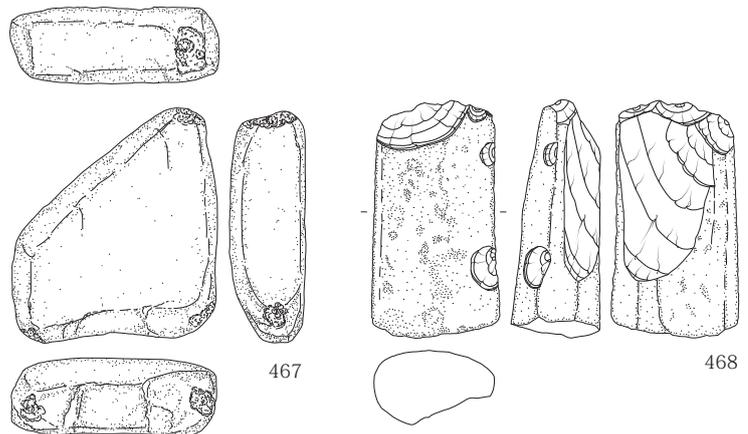
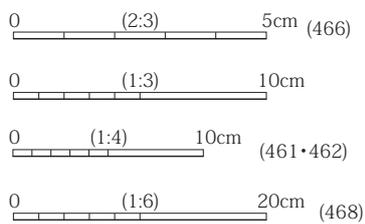
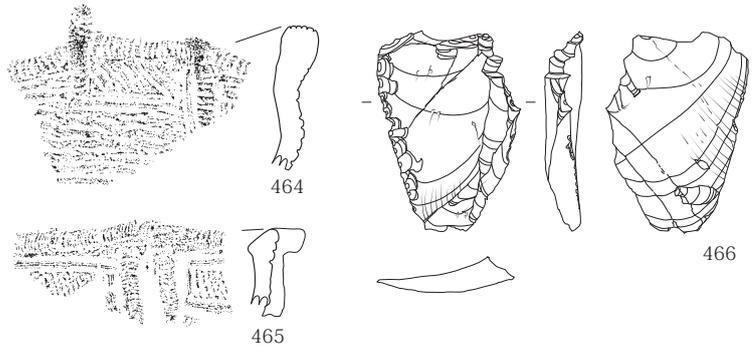
0 (1:4) 10cm (437)

第56図 縄文時代の遺物図(30) 4トレンチSK(2)

SK4042



SK4043



第57図 縄文時代の遺物図(31) 4トレンチSK(3)

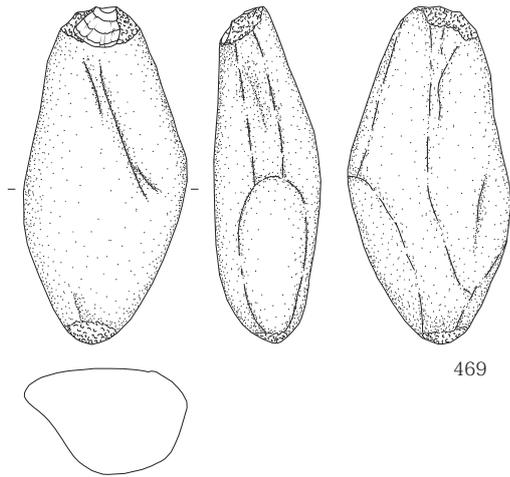
SK 4044 (第58図、PL41)

石器 469は砂岩製の敲石である。上下両端に敲打痕が認められ、上端に敲打による剥離がみられる。

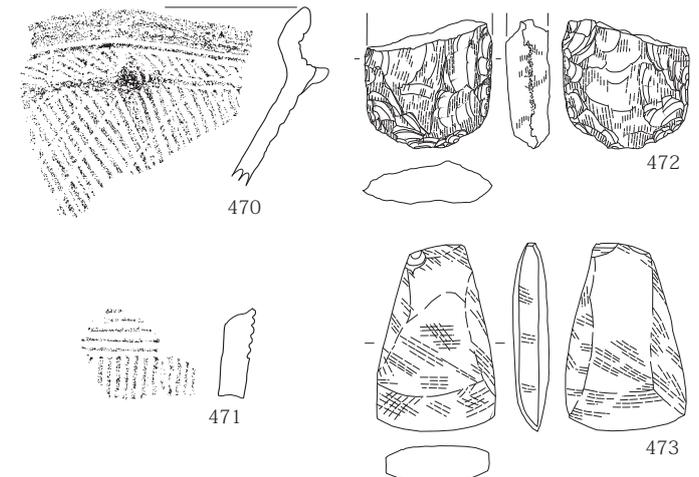
SK 4045 (第58図、PL41)

土器 470は口縁部である。口縁部文様帯は半隆起線下に沈線による格子目文が、胴部は沈線による格子目文が施文される。器形は口縁部文様帯と胴部の境界で屈曲する。471は深鉢の胴部である。横位と縦位の沈線による施文される。

SK4044



SK4045



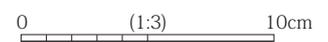
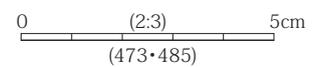
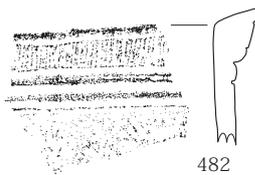
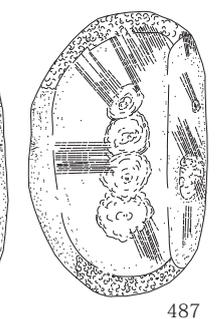
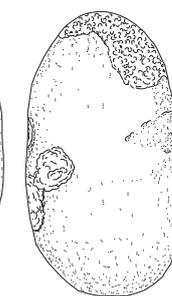
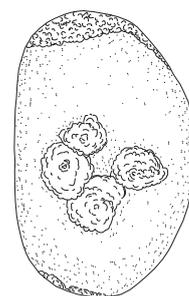
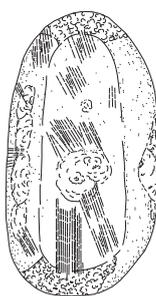
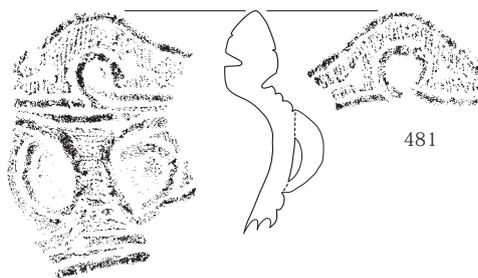
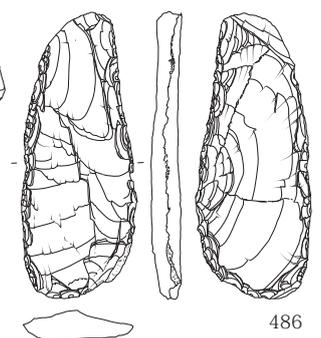
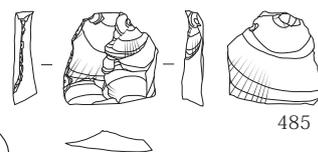
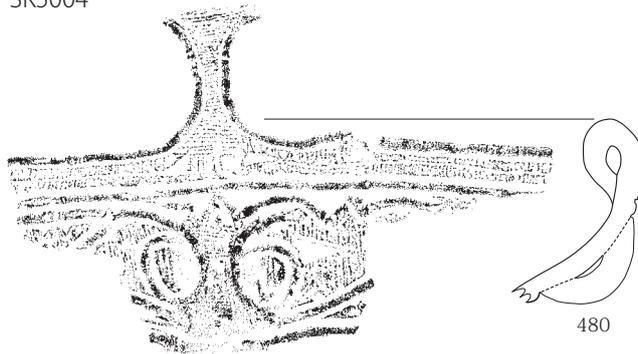
SK5002



SK5003



SK5004



第58図 縄文時代の遺物図(32) 4トレンチSK(4)、5トレンチSK(1)

石器 472は泥岩製の打製石斧である。刃部および器体に摩耗が認められる。上半を欠損する。473は透閃石岩製の磨製石斧である。全面がよく研磨された小形の定角式石斧である。刃部は片刃である。

5 トレンチ

S K 5002 (第58図、PL41)

土器 474は深鉢の口縁である。口唇部に押引文が、口縁部文様帯は半隆起線で区画し、斜行沈線が施される。

S K 5003 (第58図、PL41)

土器 475～478は深鉢の口縁である。475、476は橋状把手をもつ五領ヶ台式である。477は波状口縁で、口唇部に刻みと半隆起線が施され、口縁部文様帯は斜行沈線を地文とし、波状の半隆起線が横位に施文される。478は縄文地文に、指頭圧痕をもつ隆線が貼り付けられる。479は結節回転縄文が施文される、深鉢の胴部である。

S K 5004 (第58図、PL41)

土器 480～482は深鉢の口縁である。480、481は橋状把手をもつ五領ヶ台式である。480は口唇部にも橋状突起が付く。481は口唇部に突起が付き、480と文様がよく似る。482は口唇部に縦位の沈線、口縁部文様帯は2条の半隆起線下に結節回転縄文が施文される。483、484は深鉢の胴部である。483は結節回転縄文、484は縦位の沈線が施文される。

石器 485は黒曜石製のピエス・エスキューである。上下方向からの剝離痕をもち、背面左側辺には微細剝離が連続する。486は安山岩製の打製石斧である。板状の剝片を素材とする。487は砂岩製の凹石である。表裏面と左側面に凹みを有し、上下両端には敲打痕も認められる。さらに裏面と左側面には磨り面も確認でき、凹石の他、敲石、砥石としても利用されたと判断する。

S K 5005 (第59図、PL42)

土器 488～490は深鉢の口縁である。488の口縁部文様帯には橋状把手が付き、胴部は弧状の沈線が施される。489は口縁部文様帯に半隆起線による区画内に斜行沈線が、口頸部は縄文地に等間隔垂下文が施文される。490は沈線を垂下し、半隆起線を横位に1条施す。491、492は深鉢の胴部である。491は沈線を縦位に施し、492は無文である。

石器 493は砂岩製の打製石斧である。背面右側面は折面で、器体の右側を大きく欠損していると推定する。494は黒曜石製の石核である。「ズリ」面を打面に、剝片が複数枚剝離されている。

S K 5006 (第59図、PL42)

土器 495～498は深鉢の口縁である。495は五領ヶ台式土器で、口唇部に隆線を渦巻状に付け、口縁部文様帯は沈線に沿い三角形の刻みが連続する。496は口縁部文様帯に押引文をもつ半隆起線間に横位の半隆起線を巡らす。胴部は縄文地に平行沈線を蛇行させ、隆線による意匠が付く。497は口唇部の外面が肥厚する。地文は縄文である。498は関西系の鷹島式土器である。地紋は縄文で、特殊凸帯文を施文する。499は鉢の口頸部である。口頸部文様帯は半隆起線が1条巡り、その上は条線地に平行沈線による意匠が施される。胴部は条線地に三角印刻文が連続する。500は深鉢の胴部である。上半は半隆起線による区画内に縦位の沈線が、下半は結節回転縄文が施文される。

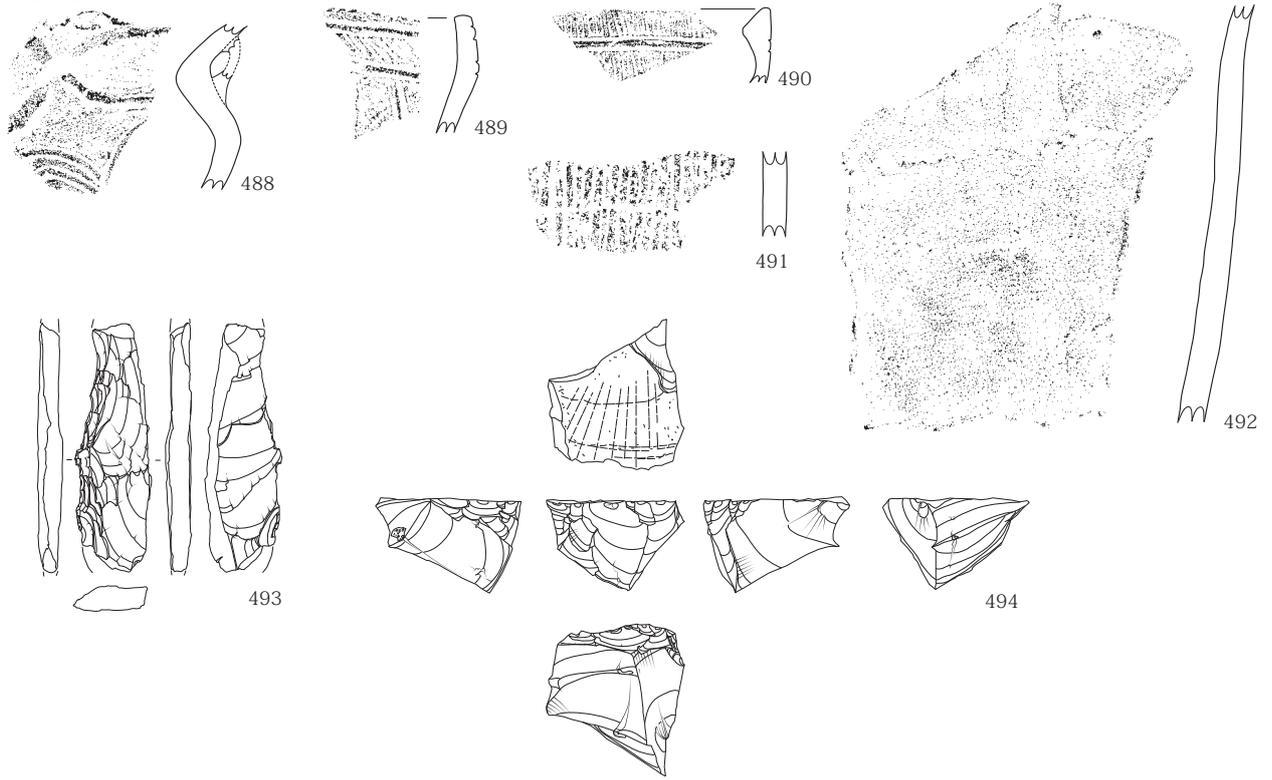
S K 5007 (第59図、PL42)

土器 501は口縁から胴部が接合し、ほぼ完形に復元できる。口縁部文様帯は押引文をもつ半隆起線による山形と蕨手の意匠が、口頸部は縦位の条線地に半隆起線による菱形と渦巻の意匠が施される。胴部は結節回転縄文を地文とし、平行沈線をY字状に施す。502は縦位の沈線を地文とする深鉢の底部である。503はミニチュア土器の口縁部で、口唇部に刻みをもつ。

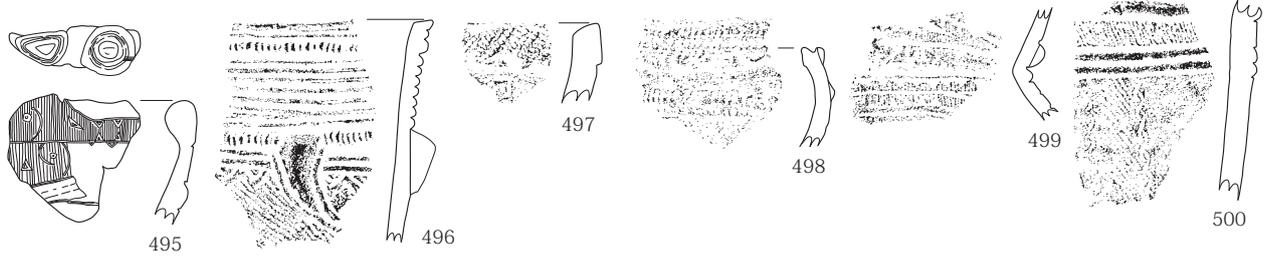
S K 5008 (第60図、PL43)

土器 504は深鉢の口縁である。口唇部は押引文が施文される。口縁部文様帯は条線地に沈線による意匠と三角印刻文が施される。505は縄文を地文とする深鉢の胴部である。

SK5005



SK5006

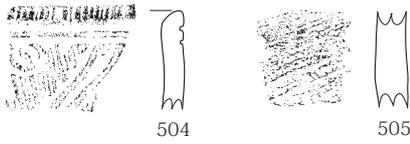


SK5007

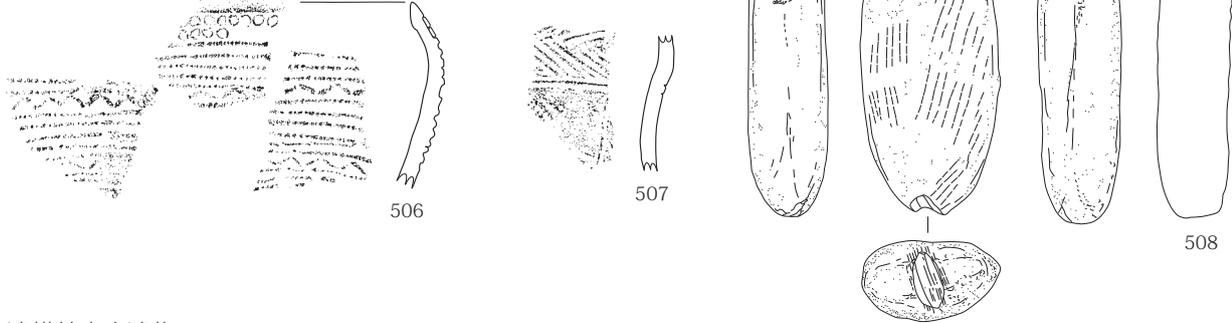


第59図 縄文時代の遺物図(33) 5トレンチSK(2)

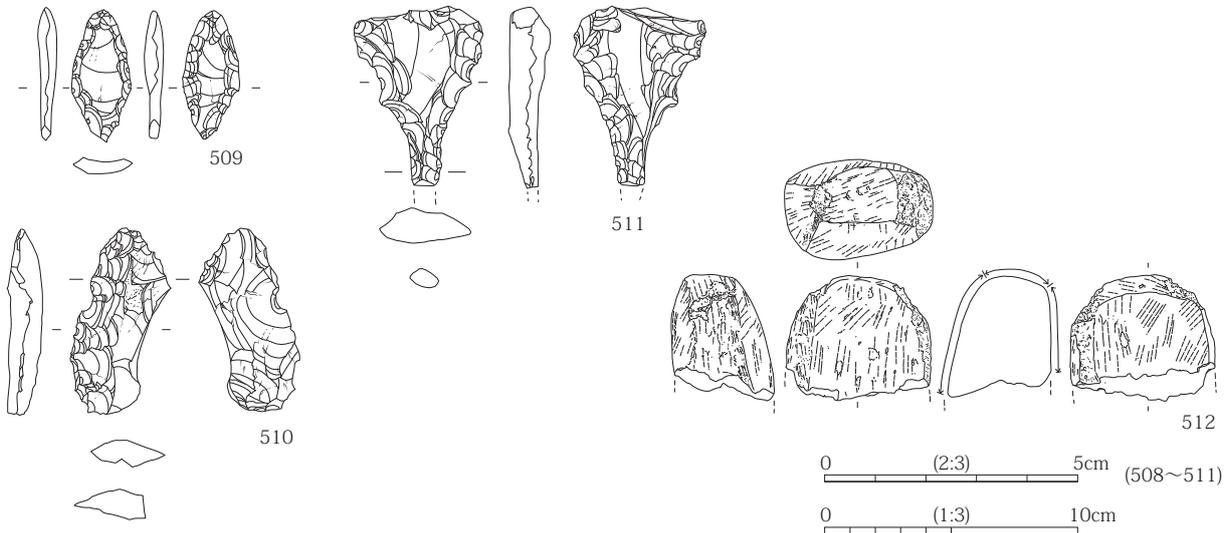
SK5008



SK5009



遺構外出土遺物



第60図 縄文時代の遺物図(34) 5トレンチSK(3)、遺構外出土遺物

SK 5009 (第60図、PL43)

土器 506は鉢の口縁である。押引文をもつ浮線が上下に認められ、その間を小円貼付文が充填する。北陸地方の縄文前期末に見られる朝日下層系統と推定する。507は口縁部から口頸部である。口縁部文様帯は矢羽状に沈線が、口頸部は縄文地に平行沈線が垂下する。

石器 508は砂岩製の石錘である。上下両端に研磨によって作成された溝をもつ。上部の両側辺に敲打痕が認められる。敲石を転用した可能性がある。

(3) 遺構外出土遺物 (第60図、PL43)

遺構外出土遺物は、検出面や壁面精査時に出土したほか、平安時代の遺構や表採、かく乱から出土した縄文時代の遺物を含む。土器が669点(6,588g)、石器が169点(4,356.5g)出土した。石器の詳細は第14表のとおりである。土器、石器ともに竪穴建物跡及び土坑から出土したものと時期や器種がほぼ同一である。そのため、本項では遺構出土遺物では確認できない器種の石器を報告する。509、510はチャート製の尖頭器である。周辺が調整される。510は両面調整の尖頭器を製作中に右側辺および下部を大きく欠損した失敗品と推定する。511は凝灰岩製の石錐である。素材剥片を両面を調整し、断面は菱形を呈する。端部を欠損する。512は安山岩製の磨石である。表裏両面がに磨り面が認められる。磨り面は非常に平滑である。

掲載 番号	図版 番号	出土 Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
38	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	(17.4)	(13.5)	2.8	0.6	122
39	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	21.7	13.8	6.4	1.4	123
40	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	21.6	10.1	5.5	0.8	124
41	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	19.0	12.0	3.5	0.4	127
42	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	24.5	16.2	3.5	0.8	129
43	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	23.1	(16.2)	2.4	0.7	134
44	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	18.5	(14.8)	2.6	0.5	125
45	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	(17.6)	17.3	3.1	0.8	126
46	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	13.8	13.4	2.9	0.3	130
47	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	14.9	20.5	3.1	0.6	133
48	32	1	SB1001	石鏃	黒曜石	20.5	17.2	5.0	1.7	131
49	32	1	SB1001	石錐	黒曜石	(19.5)	6.0	4.0	0.5	128
50	32	1	SB1001	石錐	黒曜石	26.9	11.0	6.9	1.6	149
51	32	1	SB1001	スクレイパー	黒曜石	23.4	21.1	8.5	3.4	140
52	32	1	SB1001	スクレイパー	安山岩	100.9	102.0	31.5	271.3	103
53	33	1	SB1001	スクレイパー	砂岩	51.2	80.4	13.7	57.8	118
54	33	1	SB1001	ピエス・エスキュー	黒曜石	15.5	10.4	4.2	1.0	102
55	33	1	SB1001	ピエス・エスキュー	黒曜石	16.1	11.1	4.1	0.9	147
56	33	1	SB1001	打製石斧	泥岩	135.9	53.8	9.6	93.4	104
57	33	1	SB1001	打製石斧	凝灰岩	117.5	37.8	20.0	98.0	106
58	33	1	SB1001	打製石斧	安山岩	121.0	43.3	16.6	104.0	107
59	33	1	SB1001	打製石斧	凝灰岩	104.9	49.1	17.2	113.9	109
60	33	1	SB1001	打製石斧	砂岩	(66.0)	(47.1)	8.5	36.5	113
61	33	1	SB1001	凹石	砂岩	133.3	84.4	37.0	599.4	105
62	33	1	SB1001	凹石	砂岩	100.7	86.0	44.5	540.9	117
63	34	1	SB1002	砥石	砂岩	350.0	193.0	100.0	6800.0	168
64	34	1	SB1001	石錘	砂岩	42.8	31.7	19.4	37.6	121
65	34	1	SB1001	二次加工ある剥片	黒曜石	28.0	27.0	7.0	3.1	120
66	34	1	SB1001	二次加工ある剥片	黒曜石	37.0	14.5	7.5	3.0	141
67	34	1	SB1001	微細剥離ある剥片	黒曜石	43.8	21.0	6.0	2.5	132
68	34	1	SB1001	削片	黒曜石	38.0	9.0	9.0	1.1	138
106	36	3	SB3002	石鏃	黒曜石	16.4	12.2	4.3	0.5	303
107	36	3	SB3002	石鏃	黒曜石	15.5	16.4	3.2	0.7	304
108	36	3	SB3002	石鏃	黒曜石	24.5	17.2	4.2	1.3	306
109	36	3	SB3002	石鏃	黒曜石	19.6	15.0	3.5	0.6	307

第15表 掲載石器一覧表

掲載 番号	図版 番号	出土 Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
110	36	3	SB3002	石錐	黒曜石	27.7	9.8	9.3	2.0	310
111	36	3	SB3002	石錐	黒曜石	20.1	8.7	7.7	0.8	311
112	36	3	SB3002	スクレイパー	砂岩	63.6	41.0	11.4	36.5	323
113	36	3	SB3002	ピエス・エスキュー	黒曜石	24.5	29.8	9.4	6.5	315
114	36	3	SB3002	打製石斧	泥岩	91.7	38.3	13.5	48.9	308
115	36	3	SB3002	敲石	砂岩	54.9	52.9	48.5	181.5	321
116	36	3	SB3002	敲石	砂岩	78.8	47.6	21.7	86.8	301
117	37	3	SB3002	敲石	砂岩	117.4	47.3	33.0	256.5	326
118	37	3	SB3002	台石	砂岩	273.0	203.0	86.0	5950.0	325
119	37	3	SB3002	石皿	安山岩	(300.0)	(156.0)	109.0	6320.0	327
120	37	3	SB3002	砥石	砂岩	96.3	56.8	23.5	182.7	322
121	37	3	SB3002	石錘	砂岩	27.6	22.4	6.9	5.3	302
122	37	3	SB3002	石錘	凝灰岩	38.9	27.5	11.0	17.6	309
123	37	3	SB3002	二次加工ある剥片	下呂石	44.0	60.0	17.0	34.3	324
124	37	3	SB3002	剥片	下呂石	22.5	32.7	9.5	5.4	305
183	39	3	SB3003・3004	石鏃	黒曜石	21.5	13.0	4.9	13.0	360
184	39	3	SB3003・3004	ピエス・エスキュー	黒曜石	19.5	16.6	3.6	1.2	351
185	39	3	SB3003・3004	ピエス・エスキュー	黒曜石	42.0	33.0	10.9	14.4	358
186	39	3	SB3003・3004	打製石斧	凝灰岩	129.8	47.0	13.5	75.6	328
187	40	3	SB3003・3004	打製石斧	泥岩	105.8	54.4	14.5	99.5	340
188	40	3	SB3003・3004	打製石斧	凝灰岩	129.0	53.1	15.6	145.8	363
189	40	3	SB3003・3004	打製石斧	砂岩	(85.5)	42.9	14.0	58.7	380
190	40	3	SB3003・3004	敲石	砂岩	76.0	55.4	27.6	143.9	364
191	40	3	SB3003・3004	敲石	砂岩	71.0	77.0	37.7	264.3	365
192	40	3	SB3003・3004	凹石	砂岩	(74.0)	100.4	32.0	266.1	335
193	40	3	SB3003・3004	凹石	砂岩	61.5	77.9	66.0	354.1	338
194	40	3	SB3003・3004	凹石	砂岩	111.6	77.8	55.0	542.6	339
195	40	3	SB3003・3004	台石	砂岩	407.0	302.0	97.0	14550.0	330
196	41	3	SB3003・3004	石核	黒曜石	33.7	30.8	15.1	12.5	343

第15表 掲載石器一覧表

掲載 番号	図版 番号	出土 Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
197	41	3	SB3003・ 3004	石核	黒曜石	27.6	30.2	11.1	8.3	354
198	41	3	SB3003・ 3004	二次加工ある剥片	黒曜石	17.9	17.6	5.2	1.5	346
199	41	3	SB3003・ 3004	二次加工ある剥片	黒曜石	29.8	18.6	5.7	2.1	355
200	41	3	SB3003・ 3004	微細剥離ある剥片	黒曜石	29.9	25.0	7.1	3.4	345
315	46	4	SB4001	石鏃	黒曜石	(15.0)	15.0	3.0	4.2	424
316	46	4	SB4001	石錐	黒曜石	34.9	12.2	7.5	3.7	417
317	46	4	SB4001	石匙	チャート	36.1	43.0	9.5	15.2	423
318	46	4	SB4001	石匙	頁岩	36.0	41.0	8.0	104.0	440
319	46	4	SB4001	石匙	チャート	52.0	57.0	10.0	25.5	443
320	46	4	SB4001	スクレイパー	砂岩	53.0	85.3	12.5	53.1	406
321	47	4	SB4001	スクレイパー	砂岩	65.1	71.3	12.5	60.3	430
322	47	4	SB4001	スクレイパー	花崗岩	61.3	107.2	30.0	168.3	431
323	47	4	SB4001	スクレイパー	泥岩	56.4	104.9	12.9	66.6	437
324	47	4	SB4001	ピエス・エスキュー	黒曜石	19.8	10.1	9.6	3.2	416
325	47	4	SB4001	打製石斧	砂岩	97.5	55.4	11.2	67.7	411
326	47	4	SB4001	打製石斧	砂岩	96.6	49.5	14.8	79.9	412
327	48	4	SB4001	打製石斧	粘板岩	102.5	34.9	7.7	29.6	413
328	48	4	SB4001	打製石斧	砂岩	91.0	52.4	16.6	83.2	422
329	48	4	SB4001	打製石斧	砂岩	94.0	39.0	14.0	66.6	428
330	48	4	SB4001	打製石斧	泥岩	(110.0)	60.0	23.0	165.2	429
331	48	4	SB4001	打製石斧	流紋岩	88.8	32.4	14.4	38.2	436
332	48	4	SB4001	打製石斧	砂岩	114.0	48.4	12.0	85.9	444
333	48	4	SB4001	敲石	砂岩	(59.5)	27.5	14.5	26.6	403
334	48	4	SB4001	敲石	砂岩	(65.0)	74.6	54.0	274.6	407
336	48	4	SB4001	台石	砂岩	183.0	69.0	60.0	1280.7	464
335	48	4	SB4001	凹石	砂岩	129.0	12.0	(68.0)	1042.8	401
337	48	4	SB4001	石皿	砂岩	(207.0)	271.0	97.0	3550.0	402
338	49	4	SB4001	微細剥離ある剥片	黒曜石	34.5	18.4	8.5	3.6	419
339	49	4	SB4001	削片	黒曜石	42.5	13.7	18.3	7.6	445
340	50	1	SK1013	削片	黒曜石	34.1	9.4	8.2	1.4	169
341	50	1	SK1014	打製石斧	凝灰岩	136.7	55.5	28.0	244.7	170
343	50	1	SK1016	スクレイパー	安山岩	81.4	64.7	29.0	101.1	171
344	50	1	SK1018	ピエス・エスキュー	黒曜石	17.5	23.3	6.8	2.5	173

第15表 掲載石器一覧表

掲載 番号	図版 番号	出土 Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
345	50	1	SK1018	石核	黒曜石	40.0	32.0	22.0	29.9	172
346	51	1	SK1019	石鏃	黒曜石	(8.2)	10.4	2.1	0.1	174
347	51	1	SK1021	石鏃	黒曜石	19.7	11.5	3.1	0.7	178
348	51	1	SK1021	ピエス・エスキー ユ	黒曜石	24.5	22.2	8.0	3.8	179
349	51	1	SK1021	打製石斧	砂岩	(80.4)	45.9	16.3	75.7	175
350	51	1	SK1021	微細剥離ある剥片	黒曜石	31.6	16.8	9.2	2.8	176
354	51	1	SK1031	台石	砂岩	305.0	169.0	65.0	5600.0	181
356	51	1	SK1034	ピエス・エスキー ユ	黒曜石	27.8	17.5	5.7	2.1	184
361	52	3	SK3009	二次加工ある剥片	黒曜石	39.0	26.0	8.0	5.5	367
365	52	3	SK3022	敲石	砂岩	136.5	32.3	34.1	213.6	368
386	53	3	SK3024	石鏃	黒曜石	18.9	12.8	2.8	0.5	373
387	53	3	SK3024	石鏃	黒曜石	18.2	17.5	5.7	1.1	374
388	53	3	SK3024	微細剥離ある剥片	黒曜石	33.5	11.4	8.3	1.7	375
414	54	3	SK3025	敲石	砂岩	125.9	31.0	43.0	219.2	377
415	54	3	SK3025	石皿	砂岩	(220.0)	215.0	57.0	2579.2	378
416	54	3	SK3025	剥片	下呂石	55.1	34.5	18.0	21.7	376
427	55	4	SK4025	尖頭器	黒曜石	(26.9)	(18.3)	5.0	1.7	450
428	55	4	SK4025	石匙	チャート	34.0	57.0	11.0	20.2	449
433	55	4	SK4028	石錐	黒曜石	31.7	8.0	6.8	1.7	452
434	55	4	SK4028	敲石	砂岩	62.0	62.2	41.4	164.5	451
436	55	4	SK4029	敲石	砂岩	56.8	45.5	32.6	110.9	453
460	56	4	SK4041	凹石	砂岩	133.4	59.6	46.6	487.6	455
463	57	4	SK4042	砥石	砂岩	146.3	86.9	52.0	909.7	456
466	57	4	SK4043	二次加工ある剥片	黒曜石	39.0	25.5	6.5	5.0	459
467	57	4	SK4043	敲石	砂岩	109.6	79.7	29.3	288.1	457
469	58	4	SK4044	敲石	砂岩	131.0	62.0	41.2	356.3	460
472	58	4	SK4045	打製石斧	泥岩	(51.0)	50.4	17.0	57.3	462
473	58	4	SK4045	磨製石斧	透閃石岩	36.7	23.5	7.3	10.3	463
485	58	5	SK5004	ピエス・エスキー ユ	黒曜石	17.2	17.6	3.8	1.2	504
486	58	5	SK5004	打製石斧	安山岩	114.0	46.0	12.0	71.9	503
487	58	5	SK5004	凹石	砂岩	113.0	70.0	58.0	619.2	502
493	59	5	SK5005	打製石斧	砂岩	(98.0)	(29.9)	10.2	31.7	505
494	59	5	SK5005	石核	黒曜石	18.3	28.8	29.9	9.4	506
508	60	5	SK5009	石錘	砂岩	65.7	26.6	15.8	49.1	507
509	60	1	かく乱	尖頭器	チャート	26.1	12.0	3.8	1.4	186

第15表 掲載石器一覧表

掲載 番号	図版 番号	出土 Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
510	60	1	遺構外	尖頭器	チャート	35.9	(19.8)	7.1	4.2	187
511	60	5	遺構外	石錐	凝灰岩	(35.0)	25.6	7.9	5.6	508
512	60	5	遺構外	磨石	安山岩	(48.4)	55.9	39.1	118.4	509

第15表 掲載石器一覧表

掲載 番号	図版 番号	出土 Tr	出土遺構	器種	石材	計測値				管理番号
						長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
468	57	4	SK4043	石棒	砂岩	189.0	101.0	70.0	1730.8	458

第16表 掲載石製品一覧表

4 科学分析

氏神遺跡の縄文時代遺構及び遺物に係る科学分析は、放射性炭素年代測定と黒曜石産地推定を実施した。放射線炭素年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社、黒曜石産地推定は株式会社パレオ・ラボに業務委託して実施した。本項では分析結果の概要について記述し、詳細は付録のDVDに収録した。

(1) 放射性炭素年代測定

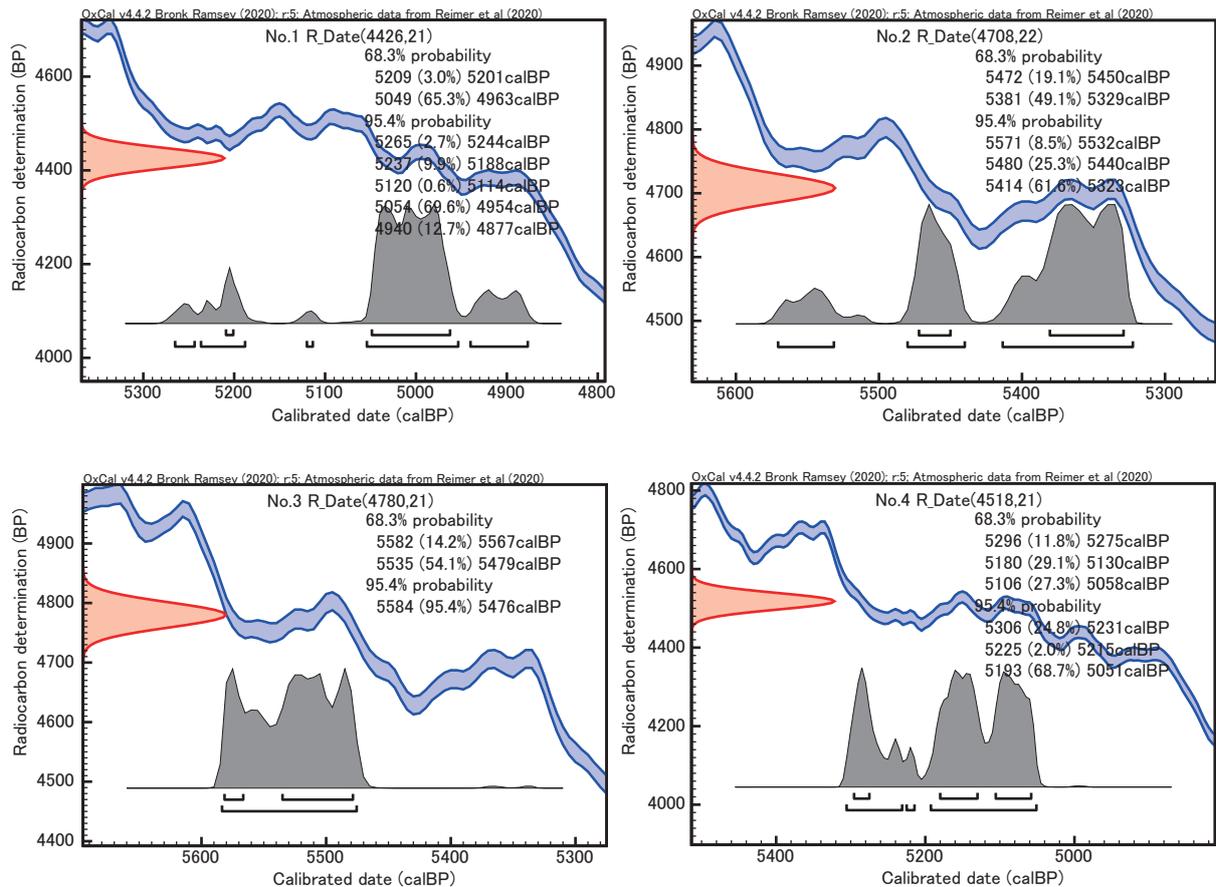
氏神遺跡の縄文時代に属する竪穴建物跡からは、縄文時代中期初頭に位置づけられる土器群及び中期中葉に位置付けられる土器群が出土した。これらの土器群の編年的位置を明らかにするためには、土器の絶対年代を把握して型式組列を検討する必要がある。これらの基礎データを提示するため年代測定を行った。年代測定で放射性炭素年代測定を用いた理由は、試料が得やすく測定精度が高い等を考慮したためである。

土器群の編年や、集落研究に資する年代測定結果を得るためには、出土した土器群や遺構に伴う炭化物を測定試料としなければならない。そこで、今回は竪穴建物跡から出土した土器に付着した炭化物及び炉跡から出土した炭化物を測定試料とした。

測定結果は第17表である。No.1は藤内I式期に属する土器片付着の炭化物、No.2は五領ヶ台II a式並行期に属する竪穴建物跡の炉跡出土炭化物、No.3・4は五領ヶ台II a式並行期に属する土器片付着の炭化物である。同位体補正を行った値は、No.1が $4,425 \pm 20$ BP、No.2が $4,710 \pm 20$ BP、No.3が $4,780 \pm 20$ BP、No.4が $4,520 \pm 20$ BPである。第61図はIntCal20 (Reimer et al.,2020)を用いた暦年較正結果である。暦年較正值(2 σ)は、No.1が5,265～4,877calBP、No.2が5,571～5,323calBP、No.3が5,584～5,476calBP、No.4が5,306～5,051calBPである。小林謙一氏は当該期の絶対年代値を勝坂2式(藤内1式)を5,280～5,220年前calBP、五領ヶ台2式を5,440～5,380年前calBPと指摘する(小林2008)。小林氏の暦年較正值はIntCal04を用いており、若干較正值に相違があると考えられるが、No.1～3は概ね想定通りの年代値が得られた。No.4は想定よりもわずかに新しい年代値となった。

No.	試料名	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代			Code No.		
					年代値		確率%			
1	SB1001 1層出土土器(管理No.1021)付着炭化物	AaA (0.05M)	4425±20 (4426±21)	-28.80 ±0.16	σ	cal BC 3260 - cal BC 3252	5209 - 5201 calBP	3.0	PLD- 42236	pal- 12929
						cal BC 3100 - cal BC 3014	5049 - 4963 calBP	65.3		
					2 σ	cal BC 3316 - cal BC 3295	5265 - 5244 calBP	2.7		
						cal BC 3288 - cal BC 3239	5237 - 5188 calBP	9.9		
						cal BC 3171 - cal BC 3165	5120 - 5114 calBP	0.6		
						cal BC 3105 - cal BC 3005	5054 - 4954 calBP	69.6		
cal BC 2991 - cal BC 2928	4940 - 4877 calBP	12.7								
2	SB3002 炉炭化材(クルミ属)	AAA (1M)	4710±20 (4708±22)	-31.68 ±0.17	σ	cal BC 3523 - cal BC 3501	5472 - 5450 calBP	19.1	PLD- 42237	pal- 12930
						cal BC 3432 - cal BC 3380	5381 - 5329 calBP	49.1		
					2 σ	cal BC 3622 - cal BC 3583	5571 - 5532 calBP	8.5		
						cal BC 3531 - cal BC 3491	5480 - 5440 calBP	25.3		
cal BC 3465 - cal BC 3374	5414 - 5323 calBP	61.6								
3	SB3003 2区5層出土土器(管理No.3150)付着炭化物	AaA (0.05M)	4780±20 (4780±21)	-26.48 ±0.19	σ	cal BC 3633 - cal BC 3618	5582 - 5567 calBP	14.2	PLD- 42238	pal- 12931
						cal BC 3586 - cal BC 3530	5535 - 5479 calBP	54.1		
					2 σ	cal BC 3635 - cal BC 3527	5584 - 5476 calBP	95.4		
						cal BC 3347 - cal BC 3326	5296 - 5275 calBP	11.8		
4	SB4001 埋土出土土器(管理No.4143)付着炭化物	AaA (0.05M)	4520±20 (4518±21)	-27.70 ±0.18	σ	cal BC 3231 - cal BC 3181	5180 - 5130 calBP	29.1	PLD- 42239	pal- 12932
						cal BC 3157 - cal BC 3109	5106 - 5058 calBP	27.3		
					2 σ	cal BC 3357 - cal BC 3282	5306 - 5231 calBP	24.8		
						cal BC 3276 - cal BC 3266	5225 - 5215 calBP	2.0		
cal BC 3244 - cal BC 3102	5193 - 5051 calBP	68.7								

第17表 放射性炭素年代測定結果(1)



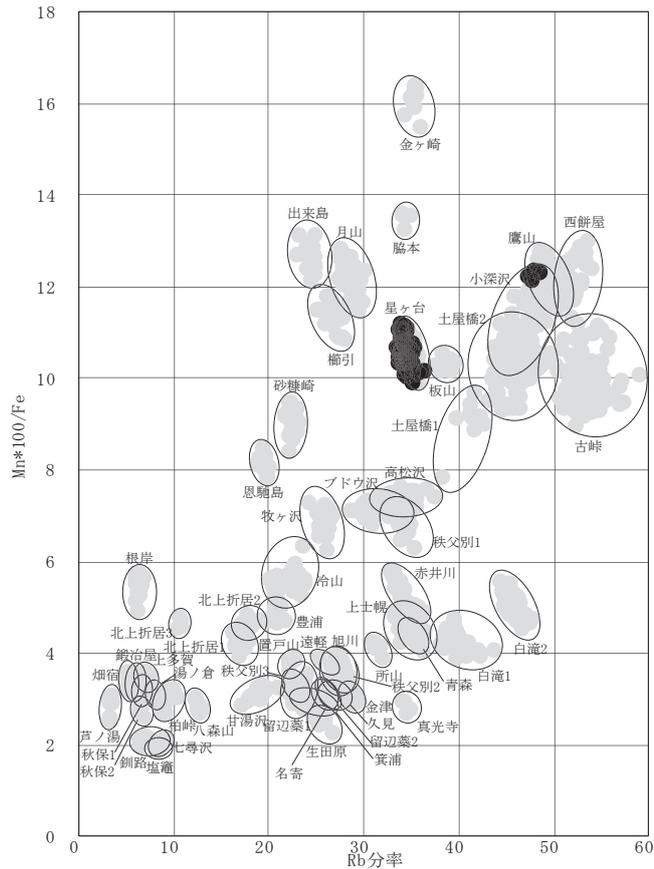
第61図 IntCal20による暦年較正結果(1)

(2) 黒曜石産地推定

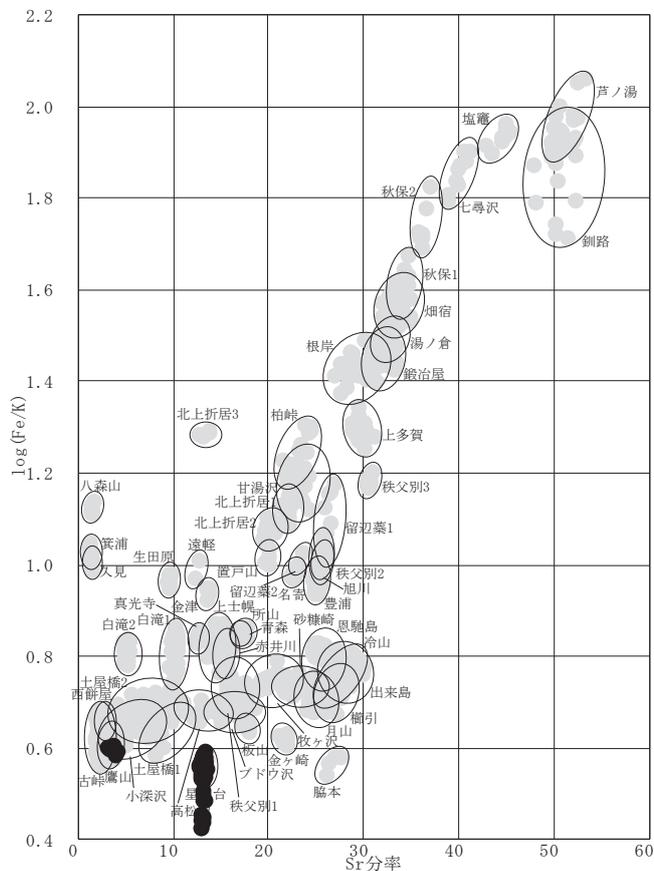
氏神遺跡の縄文時代人における黒曜石の産地別利用形態を理解し、資源獲得領域や他集団との交流圏を推測するための基礎データを得ることを目的に、黒曜石の産地推定を実施した。

本遺跡の縄文時代集落は出土土器や放射性炭素年代測定の結果から、中期初頭と中葉の二時期に分かれる。そのため、今回は遺構出土の黒曜石製石器を、共伴する土器と同時代の所産であると仮定して分析を実施した。遺構の中でも竪穴建物跡は出土土器の同時期性が高いと判断したため、中期初頭の竪穴建物跡(S B 3002, S B 3003・3004, S B 4001)、中葉の竪穴建物跡(S B 1001 A・B)からそれぞれ50点(合計100点)について、石鏃等の器種を中心に、一部剥片を含めて分析試料とした。分析試料の一覧は第18表である。

第19・20表は測定値と、それをもとに算出した指標値、第62図は指標値を黒曜石原石判別図にプロットしたものである。指標値の算出方法は1) Rb分率 = $Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$ 、2) Sr分率 = $Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$ 、3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$ 、4) $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ である。結果、5点が鷹山群と小深沢群(ともに長野県、和田エリア)の重複域、83点が星ヶ台群(長野県、諏訪エリア)の範囲にプロットされた。残りの12点は、第62図-1では星ヶ台群の範囲にプロットされたが、第62図-2では星ヶ台群の範囲の下方にプロットされた。これは、遺物の風化による影響と考えられ、産地は星ヶ台群に属する可能性が高い。第21表は、遺構および器種別の産地を示したものである。今回分析した石器は、100点中95点が諏訪エリア産であり、和田エリア産が5点含まれる程度であった。氏神遺跡における黒曜石の産地別利用形態は、縄文時代中期初頭及び中葉ともに、諏訪エリア産を主体的に用い、和田エリア産が少量利用され、器種による産地の使い分けは認められないことが分かった。



1. 黒曜石製石器の産地推定判別図 (1)



2. 黒曜石製石器の産地推定判別図 (2)

第 62 図 黒曜石製石器産地判別図

時期	遺構	器種	和田	諏訪	合計
			鷹山or 小深沢	星ヶ台	
縄文時代 中期初頭	SB3002	石鏃		4	4
		石錐		1	1
		ピエス・エスキーユ		1	1
		二次加工ある剥片		2	2
		微細剥離ある剥片		3	3
		剥片	1	1	2
小計			1	12	13
SB3003	微細剥離ある剥片			2	2
		剥片		1	1
		小計	0	3	3
SB3003 ・3004	石鏃失敗品			2	2
		石錐失敗品		1	1
		ピエス・エスキーユ		2	2
		二次加工ある剥片	1	5	6
		微細剥離ある剥片		4	4
		剥片		2	2
小計			1	19	20
SB4001	ピエス・エスキーユ			3	3
		二次加工ある剥片		3	3
		微細剥離ある剥片		5	5
		剥片		1	1
		削片		1	1
		石核		1	1
小計			0	14	14
小計			2	48	50
縄文時代 中期中葉	SB1001	石鏃	1	8	9
		石鏃失敗品		2	2
		石錐		1	1
		石錐失敗品		1	1
		スクレイパー		1	1
		ピエス・エスキーユ		3	3
		二次加工ある剥片		4	4
		微細剥離ある剥片		10	10
		剥片	2	15	17
		削片		1	1
石核		1	1		
小計			3	47	50
合計			5	95	100

第 21 表 遺構及び時期別の産地

分析No.	管理No.	地区	出土遺構	出土位置	器種	時期	分析No.	管理No.	地区	出土遺構	出土位置	器種	時期	
1	102	1Tr	SB1001	IV層	ビエス・エスキュー	縄文時代 中期 中葉	51	415	4Tr	SB4001	P5	ビエス・エスキュー	縄文時代 中期 初頭	
2	101			ビット3 1層	剥片		52	416			2区 2層	ビエス・エスキュー		
3	112			サブトレ2	微細剥離ある剥片		53	417			2区 2層	二次加工ある剥片		
4	120			ビット7 1層	二次加工ある剥片		54	418			3・4区 3層	ビエス・エスキュー		
5	122			北壁 2層	石鏃		55	419			3・4区 3層	微細剥離ある剥片		
6	123			壁際溝	石鏃		56	421			サブトレ1	微細剥離ある剥片		
7	124			5区 1層	石鏃失敗品		57	420			3・4区 3層	剥片		
8	125			サブトレ1 西	石鏃		58	424			サブトレ2	二次加工ある剥片		
9	126			サブトレ1 西	石鏃		59	425			サブトレ2	微細剥離ある剥片		
10	127			3区 床面直上	石鏃		60	426			サブトレ2	微細剥離ある剥片		
11	128			5区 1層②	石鏃		61	439			1区 2層	二次加工ある剥片		
12	129			5区 1層①	石鏃		62	441			サブトレ1 2層	石核		
13	130			3層	石鏃		63	442			サブトレ2	微細剥離ある剥片		
14	131			サブトレ1 東①	石鏃失敗品		64	445			東壁 2層	削片		
15	132			3層	微細剥離ある剥片		65	303			SB3002	北西 2層		石鏃
16	133			2層	石鏃		66	304				北西 2層		石鏃
17	134			7区 床面直上	石鏃		67	306				石器No.1 床直		石鏃
18	135			3区 1層	二次加工ある剥片		68	307				石器No.2 床直		石鏃
19	136			3区 1層	微細剥離ある剥片		69	310				南東サブトレ		石鏃
20	137			6区	二次加工ある剥片		70	311				2層		二次加工ある剥片
21	138			1層	削片		71	312				SPA-Bベルト B側1層		微細剥離ある剥片
22	139			4区	微細剥離ある剥片		72	313				北西 2層		二次加工ある剥片
23	140			5区 1層	スクレイパー		73	314				北西 1層		微細剥離ある剥片
24	141			5区 1層	二次加工ある剥片		74	315				南東 1層		ビエス・エスキュー
25	142			6区	ビエス・エスキュー		75	316			南東 2層	微細剥離ある剥片		
26	143			サブトレ1	微細剥離ある剥片		76	317			SB3003 ・3004	ビット7 3区 2層		剥片
27	144			サブトレ1	微細剥離ある剥片		77	318				南東区 2層		剥片
28	145			3層下部	微細剥離ある剥片		78	342				サブトレ1西		石鏃失敗品
29	146			サブトレ1 西	石核		79	343				サブトレ1西		石核
30	147			サブトレ1 西	ビエス・エスキュー		80	344				サブトレ1 東		石鏃失敗品
31	148			サブトレ1 西	微細剥離ある剥片		81	345				サブトレ1東		微細剥離ある剥片
32	149			サブトレ2	石鏃失敗品		82	346				サブトレ2		二次加工ある剥片
33	150			サブトレ2	微細剥離ある剥片		83	347				サブトレ3		微細剥離ある剥片
34	151			3区 1層	微細剥離ある剥片		84	348				1区 1層		微細剥離ある剥片
35	152			3区 1層	剥片		85	349				1区 4層		二次加工ある剥片
36	153			3区 1層	剥片		86	350			2区 1層	石核		
37	154			3区 1層	剥片		87	351			2区 1層	ビエス・エスキュー		
38	155			3区 1層	剥片		88	353			2区 2層	微細剥離ある剥片		
39	156			3区 1層	剥片		89	354			2区 3層	石核		
40	157			3層	剥片		90	355			3区 6層	二次加工ある剥片		
41	158			5区 3層	剥片		91	356			P85	二次加工ある剥片		
42	159			3層	剥片		92	357			P77	二次加工ある剥片		
43	160			2層	剥片		93	358			周溝1	ビエス・エスキュー		
44	161			5区 3層	剥片		94	359			ビット6	二次加工ある剥片		
45	162			3層	剥片		95	331			SB3003	ベルト1 2層		微細剥離ある剥片
46	163			3区 3層	剥片		96	360			SB3003 ・3004	ベルト1 1層		石鏃失敗品
47	164			3区 3層	剥片		97	332			SB3003	ベルト2 5層		微細剥離ある剥片
48	165			3層	剥片		98	361			SB3003 ・3004	2区 3層		剥片
49	166			3層	剥片		99	362			SB3003 ・3004	3区 4層		剥片
50	167			3層	剥片		100	333			SB3003	1区 3層		剥片

第18表 黒曜石産地分析試料一覧

分析 No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100 Fe	Sr分率	log Fe K	判別群	エリア	分析 No.
1	174.2	66.2	649.9	480.6	181.7	237.5	470.7	35.07	10.19	13.26	0.57	星ヶ台	諏訪	1
2	337.4	158.7	1301.3	1770.8	143.4	765.1	1034.6	47.68	12.19	3.86	0.59	鷹山or小深沢	和田	2
3	284.7	110.9	1022.0	777.6	302.1	404.6	811.6	33.87	10.85	13.16	0.56	星ヶ台	諏訪	3
4	223.1	84.9	767.1	620.1	236.8	330.0	652.1	33.72	11.06	12.88	0.54	星ヶ台	諏訪	4
5	335.3	90.4	889.5	700.8	263.4	353.8	722.2	34.35	10.16	12.91	0.42	星ヶ台?	諏訪?	5
6	252.6	94.9	908.2	662.6	254.1	341.9	683.4	34.12	10.45	13.09	0.56	星ヶ台	諏訪	6
7	151.4	54.6	513.7	385.1	148.2	197.1	397.1	34.16	10.63	13.14	0.53	星ヶ台	諏訪	7
8	199.0	79.4	750.9	590.6	226.4	305.3	609.9	34.09	10.57	13.07	0.58	星ヶ台	諏訪	8
9	293.1	113.8	1094.0	837.1	319.7	425.8	840.4	34.55	10.40	13.20	0.57	星ヶ台	諏訪	9
10	136.9	44.2	420.0	340.6	133.2	180.1	349.5	33.95	10.53	13.27	0.49	星ヶ台?	諏訪?	10
11	234.3	92.5	883.2	677.6	260.2	352.1	677.5	34.44	10.47	13.23	0.58	星ヶ台	諏訪	11
12	197.5	97.9	791.3	1152.1	74.8	501.9	678.1	47.87	12.38	3.11	0.60	鷹山or小深沢	和田	12
13	198.2	56.0	550.7	408.9	145.5	191.2	379.6	36.34	10.17	12.93	0.44	星ヶ台?	諏訪?	13
14	300.1	115.3	1045.0	834.8	325.0	438.6	875.0	33.75	11.03	13.14	0.54	星ヶ台	諏訪	14
15	298.7	114.4	1113.6	876.4	333.5	448.5	891.7	34.37	10.27	13.08	0.57	星ヶ台	諏訪	15
16	232.4	89.5	846.9	676.5	260.5	354.3	710.7	33.79	10.57	13.01	0.56	星ヶ台	諏訪	16
17	298.7	116.4	1150.6	833.5	312.7	415.0	813.1	35.10	10.12	13.17	0.59	星ヶ台	諏訪	17
18	172.7	62.6	620.7	440.8	169.7	225.7	451.3	34.24	10.09	13.18	0.56	星ヶ台	諏訪	18
19	214.0	82.3	770.5	629.3	243.5	337.3	670.7	33.46	10.68	12.95	0.56	星ヶ台	諏訪	19
20	270.1	104.1	941.8	760.0	293.8	393.4	804.1	33.76	11.05	13.05	0.54	星ヶ台	諏訪	20
21	61.6	22.3	220.3	134.0	50.7	63.7	125.7	35.81	10.11	13.56	0.55	星ヶ台	諏訪	21
22	234.6	88.3	877.8	667.8	253.5	342.5	671.3	34.51	10.06	13.10	0.57	星ヶ台	諏訪	22
23	411.5	118.1	1095.3	891.8	326.2	441.8	876.6	35.16	10.78	12.86	0.43	星ヶ台?	諏訪?	23
24	242.4	81.6	776.6	607.4	235.2	318.9	630.2	33.90	10.51	13.13	0.51	星ヶ台?	諏訪?	24
25	321.0	124.4	1134.5	899.8	344.6	469.7	927.4	34.07	10.96	13.05	0.55	星ヶ台	諏訪	25
26	283.8	109.1	1026.0	824.6	317.9	425.5	850.6	34.10	10.63	13.15	0.56	星ヶ台	諏訪	26
27	299.8	114.1	1067.3	843.4	325.0	432.5	868.7	34.15	10.69	13.16	0.55	星ヶ台	諏訪	27
28	360.6	105.8	1005.3	819.4	309.6	418.0	827.7	34.51	10.52	13.04	0.45	星ヶ台?	諏訪?	28
29	285.1	109.5	1023.5	799.4	312.0	421.0	820.2	33.98	10.70	13.26	0.56	星ヶ台	諏訪	29
30	256.3	98.9	921.0	726.7	278.9	382.7	773.9	33.61	10.74	12.90	0.56	星ヶ台	諏訪	30
31	225.1	68.2	638.0	546.5	206.3	281.5	546.4	34.57	10.69	13.05	0.45	星ヶ台?	諏訪?	31
32	306.2	118.2	1104.1	848.6	312.5	433.0	855.6	34.64	10.70	12.76	0.56	星ヶ台	諏訪	32
33	310.0	123.5	1144.4	886.8	345.0	460.3	912.3	34.05	10.79	13.25	0.57	星ヶ台	諏訪	33
34	146.2	58.8	556.2	405.7	154.8	202.5	394.4	35.05	10.57	13.37	0.58	星ヶ台	諏訪	34
35	257.3	99.8	955.8	710.1	269.6	360.8	717.2	34.51	10.44	13.10	0.57	星ヶ台	諏訪	35
36	295.9	107.8	1039.5	780.8	297.9	395.7	773.0	34.74	10.37	13.25	0.55	星ヶ台	諏訪	36
37	214.1	79.7	804.1	576.2	216.3	287.5	563.8	35.05	9.91	13.16	0.57	星ヶ台	諏訪	37
38	261.6	98.6	942.4	743.4	275.9	379.7	750.3	34.59	10.46	12.84	0.56	星ヶ台	諏訪	38
39	257.7	96.4	951.3	672.4	246.4	335.6	655.2	35.21	10.13	12.90	0.57	星ヶ台	諏訪	39
40	315.4	121.1	1170.7	882.4	341.4	454.4	892.9	34.32	10.35	13.28	0.57	星ヶ台	諏訪	40
41	297.4	114.0	1095.2	842.0	325.7	432.2	856.5	34.28	10.41	13.26	0.57	星ヶ台	諏訪	41
42	359.8	103.7	983.4	799.7	303.1	414.6	806.0	34.42	10.55	13.05	0.44	星ヶ台?	諏訪?	42
43	226.7	86.4	871.2	612.3	229.8	299.3	602.6	35.11	9.92	13.18	0.58	星ヶ台	諏訪	43
44	190.7	74.1	714.6	572.8	219.9	298.0	593.0	34.02	10.37	13.06	0.57	星ヶ台	諏訪	44
45	230.0	85.4	847.2	601.6	226.0	300.7	582.0	35.18	10.08	13.21	0.57	星ヶ台	諏訪	45
46	288.7	140.1	1138.3	1519.2	100.0	651.7	858.6	48.55	12.30	3.20	0.60	鷹山or小深沢	和田	46
47	276.7	100.3	971.8	756.5	289.3	384.5	766.5	34.44	10.32	13.17	0.55	星ヶ台	諏訪	47
48	278.6	104.1	998.8	739.5	275.9	367.4	739.0	34.85	10.42	13.00	0.55	星ヶ台	諏訪	48
49	272.5	86.3	777.1	641.1	240.5	325.7	648.7	34.54	11.10	12.96	0.46	星ヶ台?	諏訪?	49
50	190.2	71.6	682.2	527.7	202.8	269.8	532.4	34.43	10.50	13.23	0.55	星ヶ台	諏訪	50

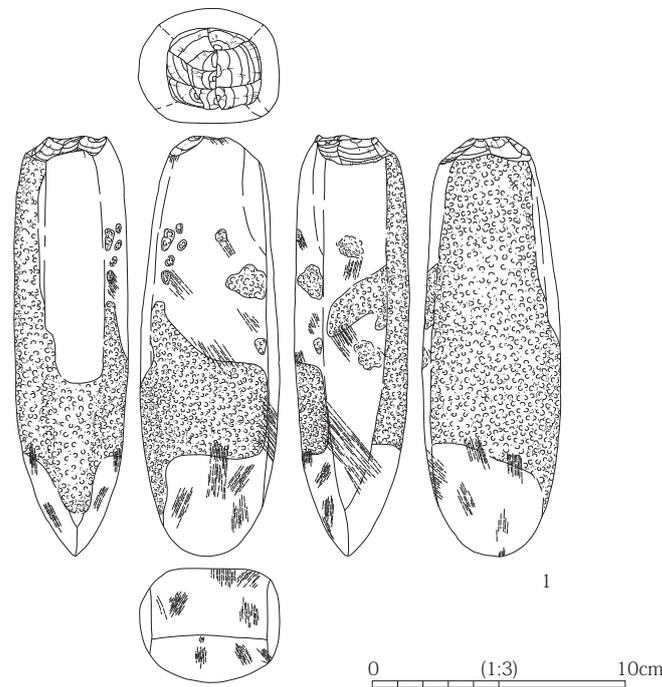
第19表 測定値、指数値及び産地推定結果(1)

分析 No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100 Fe	Sr分率	log ^{Fe} / _K	判別群	エリア	分析 No.
51	258.0	100.9	907.0	695.9	266.9	367.2	729.4	33.79	11.13	12.96	0.55	星ヶ台	諏訪	51
52	310.1	120.7	1083.2	848.5	323.8	439.0	857.2	34.37	11.14	13.12	0.54	星ヶ台	諏訪	52
53	325.4	126.0	1159.2	906.4	347.2	466.0	934.7	34.15	10.87	13.08	0.55	星ヶ台	諏訪	53
54	273.6	104.6	978.4	773.2	298.2	402.1	829.1	33.58	10.69	12.95	0.55	星ヶ台	諏訪	54
55	196.8	74.8	715.9	548.5	212.2	287.9	575.1	33.78	10.45	13.07	0.56	星ヶ台	諏訪	55
56	211.1	77.9	752.2	590.7	230.6	307.1	623.7	33.71	10.36	13.16	0.55	星ヶ台	諏訪	56
57	301.6	112.8	1040.8	792.9	304.5	405.3	798.2	34.46	10.84	13.24	0.54	星ヶ台	諏訪	57
58	267.3	99.7	988.1	743.6	283.1	381.5	756.7	34.35	10.09	13.08	0.57	星ヶ台	諏訪	58
59	288.9	112.3	1080.1	857.5	330.3	448.5	902.7	33.77	10.40	13.01	0.57	星ヶ台	諏訪	59
60	340.6	132.1	1221.0	909.9	347.7	468.5	924.8	34.32	10.82	13.12	0.55	星ヶ台	諏訪	60
61	241.1	92.6	912.6	662.3	249.8	329.4	643.3	35.14	10.14	13.25	0.58	星ヶ台	諏訪	61
62	286.6	109.1	985.9	770.1	295.6	404.9	797.2	33.96	11.06	13.04	0.54	星ヶ台	諏訪	62
63	226.5	85.7	790.1	634.2	248.1	334.0	662.9	33.75	10.85	13.20	0.54	星ヶ台	諏訪	63
64	335.9	127.8	1190.4	906.6	348.1	469.8	924.0	34.23	10.74	13.14	0.55	星ヶ台	諏訪	64
65	285.2	97.4	899.7	727.0	279.5	378.7	740.7	34.20	10.83	13.15	0.50	星ヶ台?	諏訪?	65
66	196.4	77.2	769.7	554.3	213.2	285.6	555.9	34.45	10.03	13.25	0.59	星ヶ台	諏訪	66
67	294.5	112.3	1061.3	825.3	311.9	429.9	843.3	34.24	10.58	12.94	0.56	星ヶ台	諏訪	67
68	273.4	106.8	1012.9	804.1	306.5	418.0	841.0	33.94	10.54	12.93	0.57	星ヶ台	諏訪	68
69	306.7	108.4	1048.1	779.5	290.0	391.7	756.5	35.15	10.34	13.08	0.53	星ヶ台	諏訪	69
70	282.9	101.0	958.3	752.9	288.5	390.6	783.5	33.98	10.54	13.02	0.53	星ヶ台	諏訪	70
71	258.2	100.9	977.4	739.7	284.9	379.9	750.7	34.32	10.32	13.22	0.58	星ヶ台	諏訪	71
72	318.5	122.6	1112.1	894.1	345.4	464.0	913.5	34.17	11.02	13.20	0.54	星ヶ台	諏訪	72
73	339.3	130.0	1205.1	919.6	353.7	471.2	937.2	34.29	10.79	13.19	0.55	星ヶ台	諏訪	73
74	305.4	115.5	1061.4	821.0	313.5	431.1	848.2	34.01	10.88	12.99	0.54	星ヶ台	諏訪	74
75	247.7	93.0	890.9	688.4	264.8	359.4	712.4	33.99	10.44	13.08	0.56	星ヶ台	諏訪	75
76	218.0	104.7	856.4	1118.0	96.3	487.7	659.8	47.34	12.23	4.08	0.59	鷹山or小深沢	和田	76
77	308.5	118.9	1102.5	820.1	314.9	421.2	834.2	34.31	10.79	13.17	0.55	星ヶ台	諏訪	77
78	286.3	110.1	1063.3	805.5	305.9	409.1	841.9	34.10	10.35	12.95	0.57	星ヶ台	諏訪	78
79	327.3	127.0	1153.5	876.2	335.3	453.6	891.5	34.27	11.01	13.11	0.55	星ヶ台	諏訪	79
80	186.8	71.3	682.2	546.3	201.2	278.0	546.3	34.76	10.44	12.80	0.56	星ヶ台	諏訪	80
81	414.7	109.0	990.0	812.7	307.5	420.0	822.9	34.39	11.01	13.01	0.38	星ヶ台?	諏訪?	81
82	293.3	143.0	1178.8	1646.5	131.4	717.4	959.4	47.66	12.13	3.80	0.60	鷹山or小深沢	和田	82
83	314.2	120.9	1169.9	894.4	341.5	452.6	885.2	34.75	10.34	13.27	0.57	星ヶ台	諏訪	83
84	206.4	80.6	760.3	549.2	217.4	286.2	576.3	33.72	10.60	13.34	0.57	星ヶ台	諏訪	84
85	301.5	116.9	1095.1	865.3	334.9	450.5	888.2	34.08	10.68	13.19	0.56	星ヶ台	諏訪	85
86	348.4	132.2	1248.0	871.6	325.5	435.1	846.3	35.17	10.60	13.13	0.55	星ヶ台	諏訪	86
87	257.1	99.6	953.0	755.0	294.5	397.9	780.0	33.89	10.45	13.22	0.57	星ヶ台	諏訪	87
88	120.1	43.7	408.5	284.1	103.8	140.3	275.3	35.36	10.70	12.92	0.53	星ヶ台	諏訪	88
89	281.2	106.7	1007.1	782.8	301.8	412.3	818.9	33.80	10.59	13.03	0.55	星ヶ台	諏訪	89
90	182.2	70.5	672.2	506.3	197.9	269.3	528.4	33.71	10.49	13.17	0.57	星ヶ台	諏訪	90
91	301.5	116.9	1061.3	869.7	338.9	453.8	909.1	33.82	11.02	13.18	0.55	星ヶ台	諏訪	91
92	288.0	109.5	1000.7	807.6	309.9	419.6	841.4	33.95	10.94	13.03	0.54	星ヶ台	諏訪	92
93	303.7	114.2	1039.7	766.0	295.1	396.6	794.1	34.02	10.98	13.10	0.53	星ヶ台	諏訪	93
94	304.5	119.1	1072.5	863.5	335.1	448.2	898.1	33.93	11.11	13.17	0.55	星ヶ台	諏訪	94
95	350.5	133.4	1238.9	917.8	347.4	462.5	912.0	34.77	10.77	13.16	0.55	星ヶ台	諏訪	95
96	335.0	111.3	1027.6	843.3	320.8	432.0	856.9	34.38	10.83	13.08	0.49	星ヶ台?	諏訪?	96
97	305.8	116.6	1061.2	846.2	324.4	440.3	871.8	34.08	10.98	13.07	0.54	星ヶ台	諏訪	97
98	229.5	88.7	853.3	681.9	265.9	354.7	710.1	33.88	10.39	13.21	0.57	星ヶ台	諏訪	98
99	271.1	101.0	957.5	741.7	288.8	386.9	767.0	33.96	10.55	13.22	0.55	星ヶ台	諏訪	99
100	264.3	102.5	914.9	744.6	290.9	393.8	773.7	33.80	11.20	13.21	0.54	星ヶ台	諏訪	100

第20表 測定値、指数値及び産地推定結果(2)

第3節 弥生時代

弥生時代の遺構は検出できなかったが、かく乱から磨製の両刃石斧が1点出土した（第63図、PL43）。石材は安山岩で、重量は727.54 gである。刃部はよく研磨され、曲刃を呈する。最大幅及び最大厚は器体中央に位置し、基部と刃部に向かいやや窄まる。器体中央や側面の一部には敲打調整痕が残る。類例としては、条痕文土器が出土した弥生時代前期末から中期初頭の塩尻市下境沢遺跡に認められる（塩尻市教育委員会 1998）。また、朝日村内においては、熊久保遺跡と東電南遺跡で前期末または中期初頭の条痕文土器を表採したとの報告がある（朝日村村誌刊行会 1991）。周辺遺跡の類例や、朝日村内で確認されている弥生時代遺物の状況から、氏神遺跡で出土した両刃石斧は弥生時代前期末から中期初頭の可能性を指摘できよう。



第63図 弥生時代の遺物図

第4節 平安時代

1 概要

氏神遺跡では、平安時代の遺物として灰釉陶器と羽釜の鏝部分の表採が報告されている（朝日村村誌刊行会 1991）。今回の発掘調査により、竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡2棟、杭列1列、墓坑1基、土坑14基を確認した。

遺構群の立地や軸方向を観察すると、軸方向が直交もしくは直行するS B 3001とS T 3002のAグループ、墓坑（S K 4007）のBグループ、これらとは軸方向が異なるS T 3001は、それぞれ別個のグループであったとみなすことができる。それぞれが時期差なのか、それ以外の要素を示しているのかは、S B 3001以外の遺構に伴う遺物が少ないため明らかにしがたいが、相互に若干の時間差を含みながら平安時代中期という短時期に存続した集落の姿を示していると推定する。

平安時代の遺物はS B 3001から、土師器、黒色土器A、灰釉陶器、鉄製刀子が出土した。土器の年代は10世紀中葉から後葉に比定できる（長野県埋文センター 1990 a）また、墓坑（S K 4007）からは人骨が出土した。竪穴建物跡出土遺物の絶対年代は、S B 3001のカマド構築礫に付着した炭化物及び、同竪穴建物跡から出土した甑（21）に付着する炭化物の放射性炭素年代測定の結果、前者は408～537calAD、後者は776～991calADの暦年較正值（ 2σ ）が得られた。前者の結果は土器群の編年と相違するが、これは放射性炭素年代測定に用いた試料の状態に起因するものと推定する。後者の結果は、土器群の編年から推定される絶対年代に、概ね近い値となる。

2 遺構（第8・64・69図）

氏神遺跡で確認した平安時代の遺構は、竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡2棟、杭列1列、土坑14基である。整理作業における遺構の検討で、土坑を2基追加した。竪穴建物跡と掘立柱建物跡は、いずれも3トレンチにあり、墓坑は4トレンチにある。一方、1・2・5トレンチでは遺構が確認できない。4トレンチの標高809.6m付近にあるS K 4007が最も高く、3トレンチの805.8m付近にあるS K 3019が最も低い。全体として、土坑は調査範囲の中心付近に分布する。トレンチごとの遺構数は、以下のとおりである。

トレンチ3：竪穴建物跡1軒

掘立柱建物跡2棟

杭列1列

土坑4基

トレンチ4：土坑10基

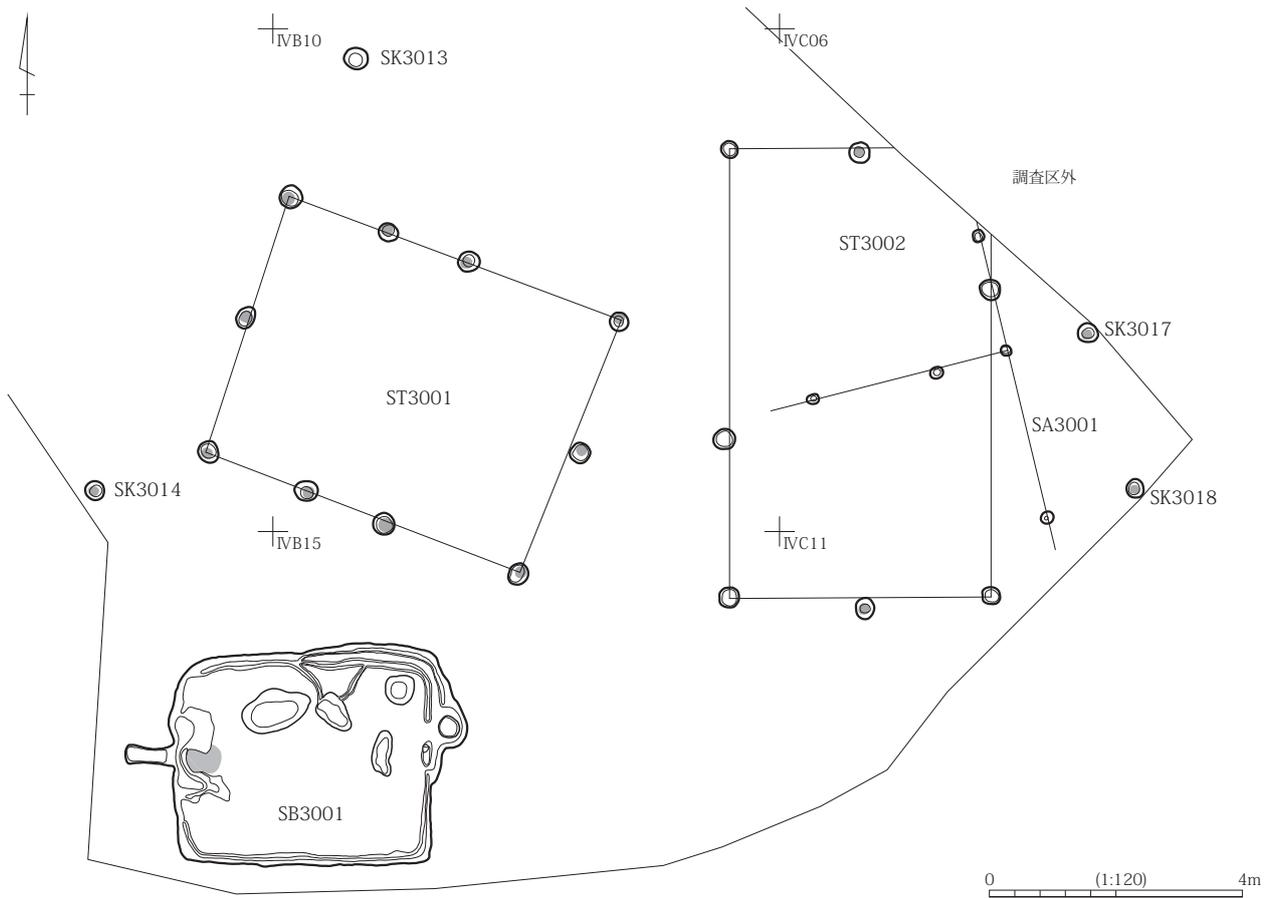
墓坑1基

（1）竪穴建物跡

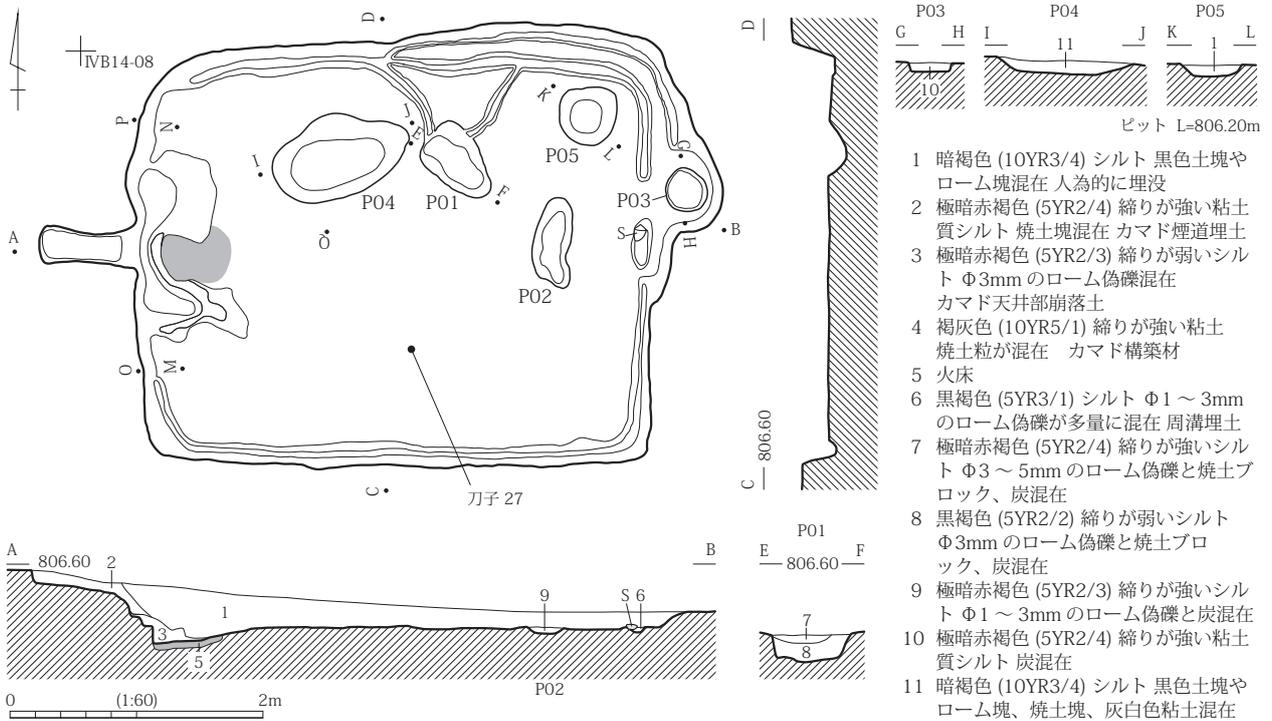
S B 3001（第64～66図、写真図版8）

検出位置 IV B 14・B 15（3トレンチ）

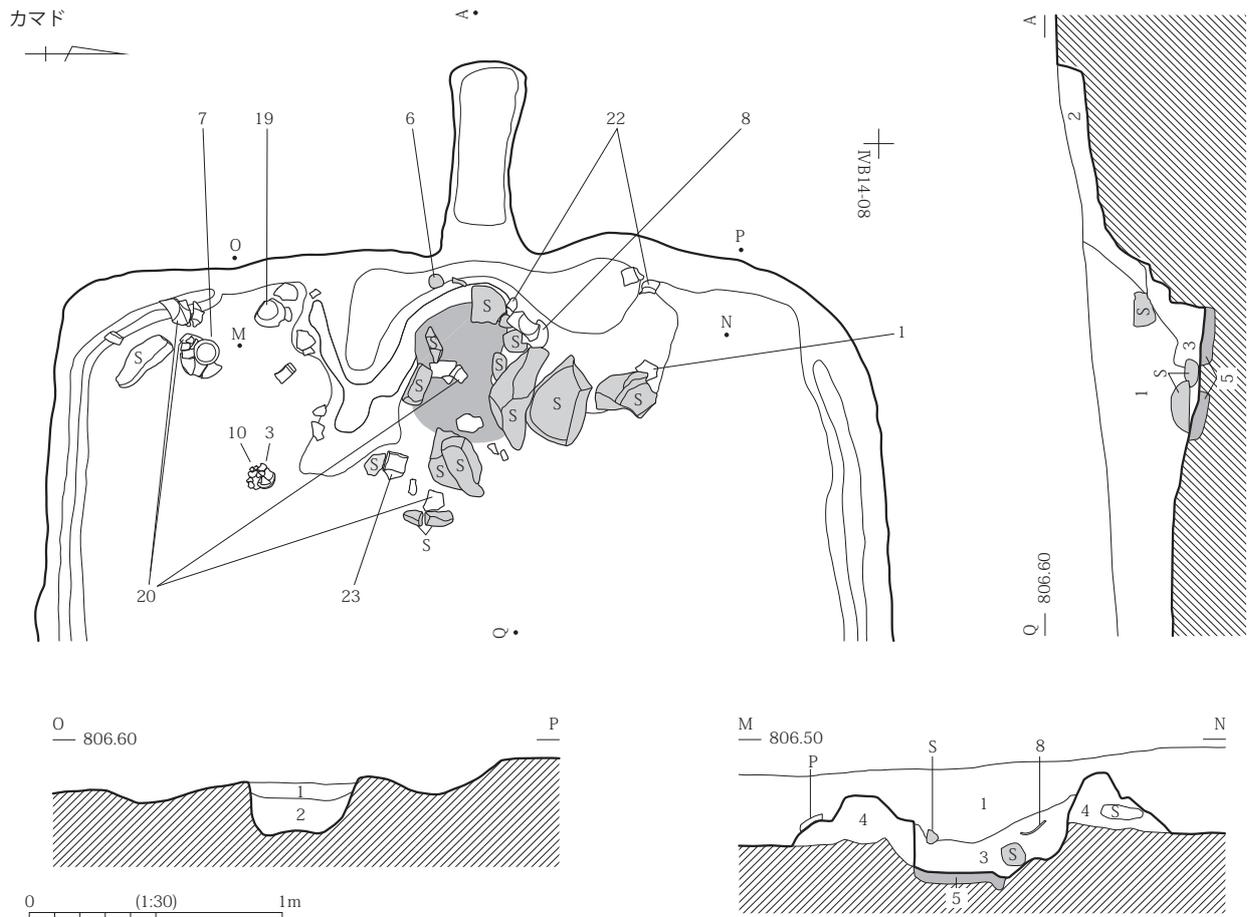
調査経過 3トレンチの東端から重機で掘削したところ、3トレンチの南壁付近から古代の土器が比較的多く出土した。3トレンチの東側と南側を拡張したところ、当該箇所付近から黒褐色土の方形の落ち込みと、落ち込みの西壁中央外側に焼土を確認し、古代の竪穴建物跡の存在を想定した。V層上面で遺構検出を行い、平面プランを確定してS B 3001とする。西壁中央外側の焼土は、カマドの煙道、対向する東壁の中央やや北寄りにある張り出しを出入口部と想定した。



第64図 平安時代の遺構分布拡大図 3トレンチ



第65図 平安時代の遺構図(1) SB3001(1)



第66図 平安時代の遺構図(2) SB3001(2)

煙道の中軸を通る南北セクションポイント(以下「SP」という。)A-Bと、これに直交する東西SP C-Dにベルトを設定し、ベルトに沿う形で先行トレンチを掘削する。なお、SB3001内はカマドに向かって右側から時計回りに1~4区(カマドに向かって右側が1区、左側が4区)を設定し埋土を掘削した。SPA-Bの西側検出面及びSPC-Dの南側検出面下20cmで、極めて硬い床面を検出する。また、SPC-Dベルトに沿った先行トレンチで床面直上から刀子が出土した。ベルトとカマド周辺の埋土を残して、壁面及び床面の検出を行う。埋土は3層に分かれ、黒色土偽礫やローム偽礫が混在する1層は、人為的に埋め戻したものと判断した。埋土内の遺物は1~4区ごと一括で取り上げる。埋土2層上から1層にかけて、土器片や扁平石が比較的少量に出土した。床面の壁際で溝跡を、東壁で張出部の落ち込みを検出した。



SB3001 検出状況(南東より)



SB3001 土層堆積状況(東より)



S B 3001 2層上面遺物出土状況（東より）



壁溝から延びる溝跡と連結したP 01（東より）

S P A - Bベルト及びS P C - Dベルトの断面を記録後、ベルトを除去し、壁面及び床面全体を精査する。2区床面で不整形の落ち込みを検出し、P 01とする。P 01の埋土には焼土ブロックが混じっていたため、小鍛冶関連遺構と想定し、発掘後に埋土をすべて3mmメッシュのフルイにかけたが、鉄関連遺物は見出せなかった。東壁張出部の落ち込みをP 03とした。P 01・03を完掘し、その後、床面で検出したP 02及び壁溝を掘削した。P 02は半裁し、断面の記録後に完掘した。



S B 3001 カマド完掘状況（南東より）

カマド周辺にS P A - Bベルトと直交するS P M - N、S P O - Pを設定し、掘削した。天井部は崩落しており、天井部の土を埋土3層とした。礫や遺物の出土状況とカマドの状態を記録した。なお、礫や遺物は番号を付けて取り上げた。カマド袖部分(4層)には構築礫の抜取り痕が確認できたため、その状況を記録した。カマド平面図には火床の範囲を記録した。煙道部は焼土ブロックが混じり、締まりが弱い粘土質シルト極暗赤褐色土により埋没していた。最終的にカマドはすべて解体した。

S B 3001の床面再精査で、P 04・05を検出した。

遺構の構造 長軸4.00 m、短軸3.35 mの規模で方形を呈する。東壁に、出入口部と想定する50cm程の半円形の張出部が認められ、そこに直径30cm、深さ10cmのP 03がある。煙道部は西壁に認められ、長さ70cm、幅20cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁に沿って溝が巡る。2区側の壁溝は二重になるため、若干拡張したものと考える。壁溝は東側中央付近の出入口部とカマド周辺で途切れる。東側の途切れ部分は、出入口に起因するものと推定する。

床面は、V層を基調とし極めて硬く、若干の凹凸がある。床面積は、約11㎡（東西約3.8m×南北2.9m）である。床面の中央やや北寄りにP 01、中央東寄りにP 02、東壁張出部にP 03、P 01の西隣にP 04、北東コーナーにP 05がある。P 01には、北側の壁溝から延びる溝2条が連結する。埋土には、焼土塊が比較的多量に混じっており、床面からの深さは20cm程度である。底面に近いところからは土師器の坏と盤が出土した。P 02・04は、平面形、段面形ともに不整形であり浅いため、床面の凹凸を落ち込みと誤認した可能性もある。北東隅のP 05の平面形は正円形で、位置から柱穴と考える。P 03は出入口のピットと想定できるが、ほかのピットの機能・用途は不明である。

カマドは、西壁の中央に位置する。礫が混じる灰白色粘土で構築されたカマド袖と、被熱を受け明瞭に赤化硬化した火床、ススが付着した礫が多数出土した。これらの礫は内山沢や鎖川で採集できる垂円礫の砂岩である。崩落した天井部と見ることが出来る埋土3層からは、土師器坏や埴、甗、羽釜の破片が多く出土した。土器片を投棄しながら、カマドを意図的に壊したと推測する。また、カマド袖部分では構造礫の一部の抜取り痕を確認した。煙道部は焼土塊が混じり、締まりが弱い粘土質シルト極暗赤褐色土により埋没する。

遺物出土状況等 カマドとその周辺、1区、4区の床面近くから羽釜や甗、甗と土師器坏や埴、盤、灰釉陶器埴が集中し(1・3・5～7・9・10・17・19～25)、2区埋土から土師器坏、黒色土器坏、灰釉陶器埴(4・12～14・18)がまとまって出土した。4区床面から刀子(27)が、P 01から土師器盤と坏(非掲載遺物)、P 04から灰釉陶器小埴(15)が出土した。

調査所見 S B 3001は、西側にカマドを構築し、対面する東側に出入口がある。柱穴は、P 05が該当するであろう。埋土から扁平の石が比較的多量に出土したが、礎板石とは認定できない。床面中央やや北寄りから、埋土に焼土ブロックが比較的多量に混じったピットがあるため、本遺構に小鍛冶的要素があると推定する。本遺構とその北東にあるS T 3002と軸方向が同じである。

カマド周辺から出土した礫に炭化物が付着しており、その放射性炭素年代測定では、暦年較正年代で408～537calAD(2 σ)という結果を得た。カマド内および周辺の出土遺物からみて、本遺構の年代は10世紀中葉から後葉と想定していたため、再度、本遺構の埋土から出土した甗(21)に付着した炭化物の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代で776～991calAD(2 σ)の年代値を得られ、出土遺物から想定する年代観とも概ね整合した。この結果を本遺構の絶対年代と判断した。

(2) 掘立柱建物跡

S T 3001 (第64・67図、写真図版9)

検出位置 IV B09・10・15 (3トレンチ)

調査経過 3トレンチの東部で検出作業を行ったところ、ローム偽礫を含む締まりが強い黒褐色土の縄文土器片が多量に混じる落ち込みを広範囲に確認したため、縄文時代の竪穴建物跡の存在を想定した(S B 3002)。この竪穴建物跡の埋土上面から、S B 3001の埋土と酷似する締まりが弱い黒色土の円形の落ち込みを複数検出した。検討の結果、これらを古代の掘立柱建物跡の柱穴と想定し、部分的にIV層(あるいはS B 3002の埋土1層)を残す。さらに西側を検出すると、同様の埋土の落ち込みが連続してみつき、2間×3間の掘立柱建物跡と判明した。本遺構の柱穴は北西隅の落ち込みから反時計回りにP 01～P 10と番号を付けた。柱穴は、直径20～30cm程度の正円形で、中央には、直径10～20cmの黒色土の落ち込みがあり、これの内側を柱痕、外側を掘方と考えた。柱穴は、直交する二方向の断面図を作成する予定だったが、柱穴の径が小さいため、地山とともに掘削を行う方針に変更した。柱穴は柱痕を段下げし、完掘状況の撮影、平面図を作成した。柱穴は、P 01-P 03、P 03-P 06、P 06-P 08、P 08-P 01を通るS Pを設定するとともに、各柱穴を4分割するように、通しのS Pラインと直交するS Pラインを設定して対向する埋土の掘削を開始した。断面写真と断面図を記録して、残りの埋土を掘削した。



S T 3001 検出状況(北東より)



S T 3001 P03の断面（北東より）



S T 3001 完掘状況（南西より）

遺構の構造 長軸 5.30 m、短軸 4.10 mの長方形を呈する。10基の柱穴で構成される側柱の掘立柱建物跡である。長軸方向の軸線は、北から69度西に振る。柱穴の検出面からの深さは、西側がやや深く、東側がわずかに浅くなるが、おおむね30cm前後である。柱間は2間×3間、柱間寸法は以下のとおりで、短軸の柱間の方が長軸方向より広い。また長軸のP 05-06、P 08-09の間隔も、他よりも広い。

長軸 P 01-10 : 1.60 m P 10-09 : 1.30 m P 09-08 : 2.40 m

P 03-04 : 1.65 m P 04-05 : 1.25 m P 05-06 : 2.20 m

短軸 P 01-02 : 1.95 m P 02-03 : 2.15 m P 06-07 : 2.05 m P 07-08 : 2.05 m

遺物出土状況 P 03～05・07・08・10の埋土から土師器片が出土したが、図化できるものはなかった。

調査所見 隣接するS B 3001やS T 3002とは軸方向が異なるため、これらとは共存しないと推定する。

S T 3002（第64・68図、写真図版10）

検出位置 IV B10・B15・C 06・C 11（3トレンチ）

調査経過 3トレンチ北東隅のV層上面で検出及び精査を行ったところ、締まりが弱い黒褐色の落ち込みが5か所あり、落ち込みは、方形に配置することを確認したため、S T 3002とした。この時点では1間×2間の掘立柱建物跡と想定した。落ち込みの段下げを行ったところ、P 02・08の中央に直径18cmの黒色土が円形に残存していたため、柱痕と判断し、この部分を段下げした。

柱穴の掘削は4分割して行った。P 01・03・06・07は検出面からの掘込みが10cm不足と非常に浅く、底部が平坦な柱穴で共通していたのに対し、P 02は深さが40cm程で、P 05は31cm程で断面が筒形の柱穴である。P 05は締まりがやや強い黒褐色の粘土質シルトで、縄文時代の土坑の埋土と酷似するため、本遺構を構成する柱穴ではなく、縄文時代の土坑と判断し、S K 3028の遺構番号を付けて、本遺構から除外した。また、平面形、断面形、埋土の特徴、配置から、S K 3015をP 07に、S K 3021をP 08として、本遺構を構成する柱穴と判断した。

P 01・03・06は、2方向の断面図を作成し、P 02・04とP 08は1方向のみの断面図を記録した。

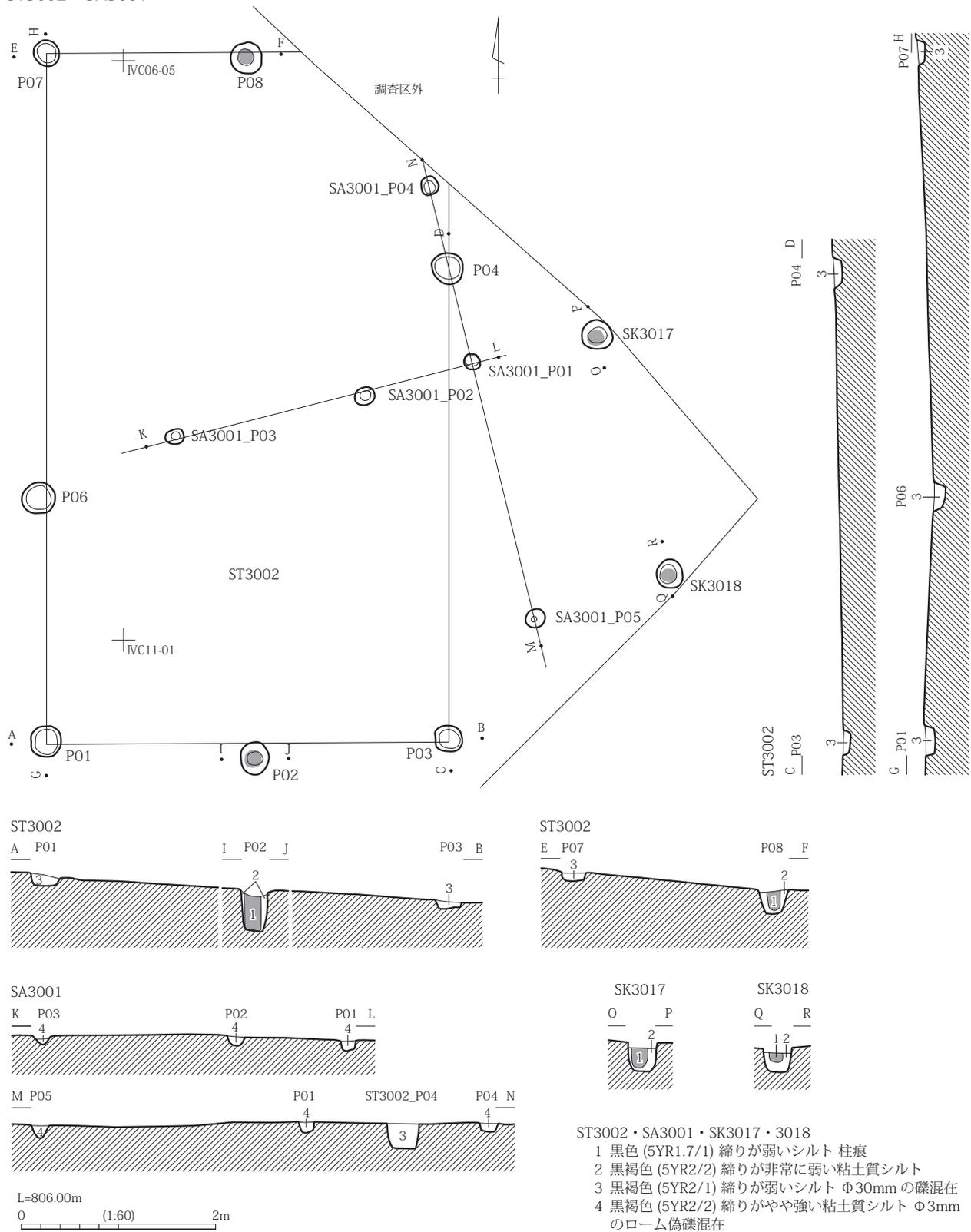
遺構の構造 長軸 6.80 m、短軸 3.90 mの規模を有し長方形を呈する。北東隅は調査区外になるため検出できなかったが、7基の柱穴を検出した。長軸方向の軸線は、ほぼ北を向く。P 04やP 06に対向する柱穴は確認できず、柱穴の掘り込みが検出面まで達していなかった可能性がある。柱間は2間×3間、柱間寸法は以下のとおりである。

長軸 P 01-06 : 2.45 m P 06-07 : 4.35 m P 03-04 : 4.70 m

短軸 P 01-02 : 2.00 m P 02-03 : 2.90 m P 07-08 : 1.95 m

遺物出土状況 P 02～04の埋土から土師器片が出土したが、図化できるものはない。

ST3002・SA3001



第 68 図 平安時代の遺構図 (4) S T 3002、S A 3001、S K 3017・3018

調査所見 隣接するS B 3001と軸がほぼ直交するため、共存していた可能性がある。

(3) 杭列

S A 3001 (第64・68図、写真図版9)

検出位置 IV C 06 (3トレンチ)

調査経過 S T 3002調査時の精査で、V層上面で直径10cmほどの黒褐色土の落ち込みがT字形に配置されている状況を確認し、S A 3001の遺構番号を付けた。落ち込みを段下げし、平面図と写真記録後、断ち割りを行い断面写真及び断面図を記録した。P 05は、断面形がV字形を呈するため、杭が打ち込まれたものと考えた。



S T 3002 P02の断面(南より)

遺構の構造 ピットはT字形に並び、P05の断面形がV字形を呈するため、杭を打ち込んだ痕跡と想定し、杭列と推定した。P 01～03の軸は、北から75度東に振っており、P 04・05はこれに直交する。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

調査所見 P 01・04・05の軸線は、S K 3017・3018を通る軸と並行する。

(2) 墓坑・土坑(第64・69図)

調査経過 土坑は、3トレンチの一部では、IV層中ないしS B 3002の埋土上面で確認できたものもあるが、4トレンチを含めて、大半はV層上面で検出した。縄文時代の遺構の多くはIV層基調の極暗赤褐色土が埋土であるが、平安時代の遺構は、Ⅲ層基調の黒色ないし黒褐色の埋土であるため、両者の区別は比較的容易だった。S K 3014、3017、3018、4004、4008、4046、4047は、土坑の規模と配置から掘立柱建物跡の柱穴の可能性もあるが、建物跡として明瞭な配置を確認できなかったため、土坑と捉えた。

なお、4トレンチの北壁で検出した落ち込みは、整理作業時に平安時代の土坑と認定し、S K 4046・4047の遺構番号を付けた。

墓坑であるS K 4007は、V層上面での検出中に人骨(頭蓋骨および大腿骨)が出土したため、付近を精査したところ、S B 3001の埋土と同じⅢ層基調の黒褐色シルトの落ち込みを確認した。落ち込みは長方形を呈した。人骨が出土したことから、土坑の上面はすでに削平されたと判断した。S K 4007は、4分割して埋土を観察したが、大腿骨部分を削平したため、平面図は記録できなかった。西壁寄り中央部から長幹骨の一部が出土したが、骨は脆弱なため取り上げることはできなかった。墓坑内における出土位置から考えて、おそらく上腕ないし前腕の骨と推定する。骨以外に遺物の出土はない。頭蓋骨は記録後、発泡ウレタンで梱包して取り上げた。

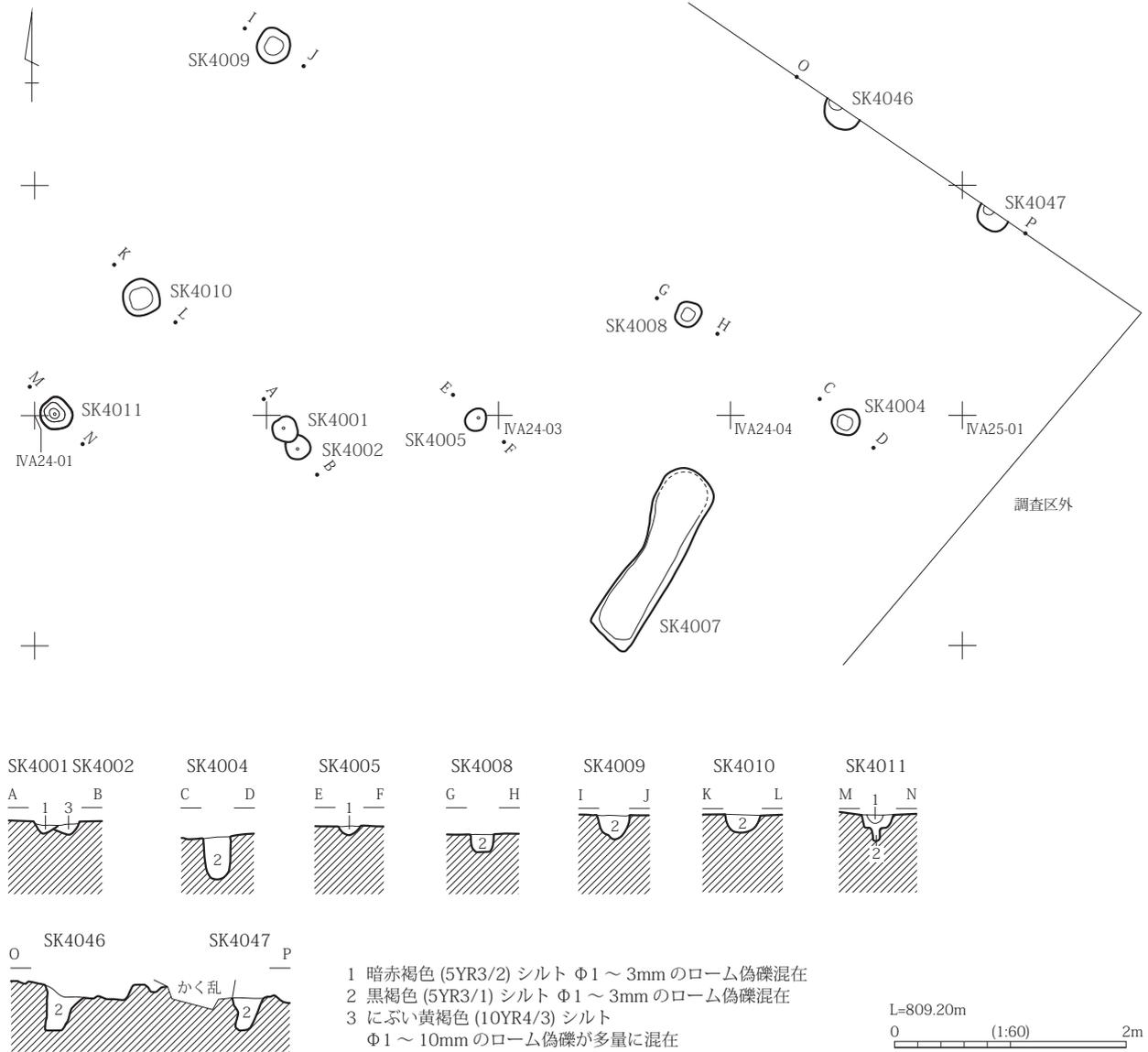
S K 3014・3017・3018 直径30cm程度の円形を呈している。掘方の埋土はいずれも締まりが弱い黒褐色シルトで、黒色土の柱痕がある。土質はS T 3001の柱穴と同じである。S K 3017の埋土から灰釉陶器片が出土したが、図化できるものはない。

S K 3014は3トレンチの南側へ、S K 3017・3018はトレンチ東側へのびる掘立柱建物跡の柱穴の可能性はある。

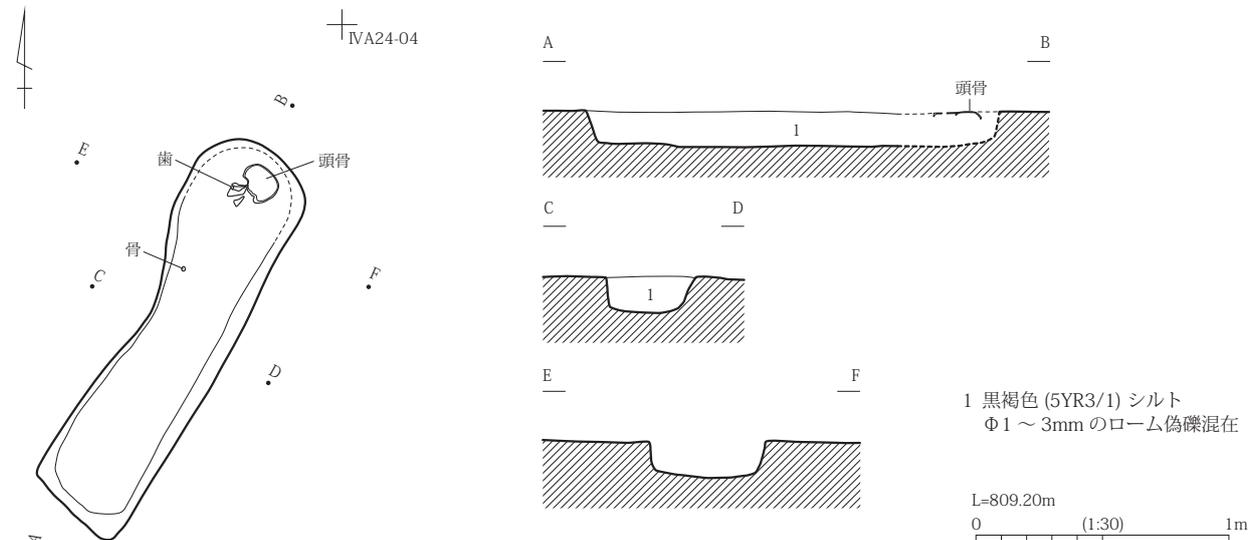
S K 4004・4008・4046・4047 直径は27cm～45cmで、平面形は円形を呈する。埋土はいずれも黒褐色シルトで、柱痕はない。S K 4004・4006・4007・4008は方形に並んでおり、埋土が共通するため掘立柱建物跡の柱穴と考えることができるが、発掘時に認定することはできなかった。

S K 4007 (第Z図、写真図版10) 墓坑は、長さ162cm、幅34～45cm、深さ14cm、平面形は不整長方形

平安時代4 トレンチ遺構配置図



SK4007



第 69 図 平安時代の遺構図 (5) 4 トレンチ墓坑、SK



S K 4046 (左) と 4047 の断面 (南西より)



S K 4007 頭蓋骨出土状況 (南より)

を呈する。主軸は北から東へ35度振れる。東西の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁は外傾している。底面はほぼ水平で、長さは156cmである。墓坑の形状と大腿骨の位置からみて、仰臥伸展葬と推定するが、木棺等の痕跡は確認できない。人骨の頭位は、土坑の主軸と同じで、顔面は西を向く。本遺構は、S K 4004 と S K 4008 とを結ぶ軸と直交する。土器が出土していないため時期を確定することはできないが、埋土がS B 3001 と同じであることから、平安時代に帰属すると推定する。

遺構番号	小地区	図番号		図版番号		方向	規模			形	柱穴	カマドの位置	その他の施設	時期
		遺構	遺物	遺構	遺物		長軸 cm	短軸 cm	深さ cm					
SB3001	IV B08・14	8 64 65 66	70 71	8	44 45	E-W	400	335	22	方形	P05	西壁中央	P01～04 壁溝	10C 中～後

第22表 平安時代竪穴建物跡一覧表

遺構番号	中地区	図番号		図版番号		柱穴	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径 cm	短径 cm	形	深さ cm	底長 cm	形	
ST3001	IV B09・10・15	8 64 67		9		P01	37	37	円	21	15	A	柱痕有
						P02	38	27	楕円	25	27	B	柱痕有
						P03	35	30	卵	20	25	A	柱痕有
						P04	37	33	卵	28	0	F	柱痕有
						P05	35	34	円	32	26	B	柱痕有
						P06	36	31	楕円	19	0	F	柱痕有
						P07	30	30	隅丸方	20	23	A	柱痕有
						P08	30	30	円	25	0	F	柱痕有
						P09	34	32	円	25	0	F	柱痕有
						P10	32	27	楕円	22	16	B	柱痕有

第23表 平安時代掘立柱建物跡 杭列一覧表

遺構番号	中地区	図番号		図版番号		柱穴	平面			断面			特記事項	
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径 cm	短径 cm	形	深さ cm	底長 cm	形		
ST3002	IV B10・15 IV C06・11	8 64 68				P01	30	30	円	10	28	B	柱痕有	
						P02	34	28	楕円	43	22	C		
						P03	28	28	隅丸方	8	22	B		
						P04	30	30	円	5	25	B		
						P06	34	33	円	10	28	B		
						P07	27	26	円	8	23	B		旧 SK3015
						P08	33	32	円	27	23	C		旧 SK3021 柱痕有
						SA3001	IV C06	8 64 68		9		P01		21
P02	21	18	楕円	9	12							A		
P03	19	15	楕円	5	0							D		
P04	20	17	卵	8	15							B		
P05	20	19	円	14	0							F		

第23表 平安時代掘立柱建物跡 杭列一覧表

遺構番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径 cm	短径 cm	形	深さ cm	底長 cm	形	
SK3007	IV B04-09・13	8				—	55	54	円	20	28	A	
SK3013	IV B10-01	8 64				—	37	35	円	17	0	E	
SK3014	IV B09-15	8 64 67				—	30	30	円	20	0	F	柱痕有
SK3017	IV C06-11	8 64 68				—	32	32	円	32	0	F	柱痕有
SK3018	IV C06-15	8 64 68				—	30	27	円	22	0	F	柱痕有
SK4001	IV A24-02	8 69				—	21	20	円	12	0	F	
SK4002	IV A24-02	8 69				—	(22)	21	円	12	0	F	
SK4004	IV A19-16・A24-04	8 69				—	25	23	円	37	0	F	
SK4005	IV A19-14・A24-02	8 69				—	19	18	円	7	0	E	
SK4007	IV A24-03・07	8 70				NE-SW	162	35	不整長方	14	(156)	B	人骨出土
SK4008	IV A19-15	8 70				—	23	22	円	15	13	A	
SK4009	IV A19-09・10	8 70				—	31	29	円	20	20	A 底面段差	
SK4010	IV A19-13	8 70				—	32	32	円	14	0	E	
SK4011	IV A19-13・A24-01	8 70				—	28	28	不整円	24	18	A 底面段差	
SK4016	IV A13-10	8 70				—	45	42	円	12	0	D	

第24表 平安時代土坑一覧表

遺構 番号	小地区	図番号		図版番号		方向	平面			断面			特記事項
		遺構	遺物	遺構	遺物		長径 cm	短径 cm	形	深さ cm	底長 cm	形	
SK4017	IV A13-10	8 70				—	38	38	円	22	0	F	
SK4046	IV A19-12	8 70				—	32	—	円	38	14	C	整理作業 時に認定
SK4047	IV A20-13	8 70				—	27	—	円	30	9	C	整理作業 時に認定

第24表 平安時代土坑一覧表

3 遺物

平安時代の遺物は、S B 3001、S T 3001、3002 から土器が 1,348 片（総重量 10,158 g）、S B 3001 から鉄製刀子が 1 点、SK4007 から人骨が出土した。種類は土師器、黒色土器 A、灰釉陶器が認められ、須恵器は出土しない。器種は食膳具（坏・埴・皿・盤）、煮炊具（甑、小型甕）、貯蔵具（甕）である（土器の分類は、長野県埋文センター 1990 a に従う）。これらの土器の 99% は S B 3001 から出土した。S T 3001、3002 出土土器は土師器や黒色土器 A の食膳具、甕の破片が出土しているが、図化できるものはない。

S B 3001（第 70・71 図、PL44・45）

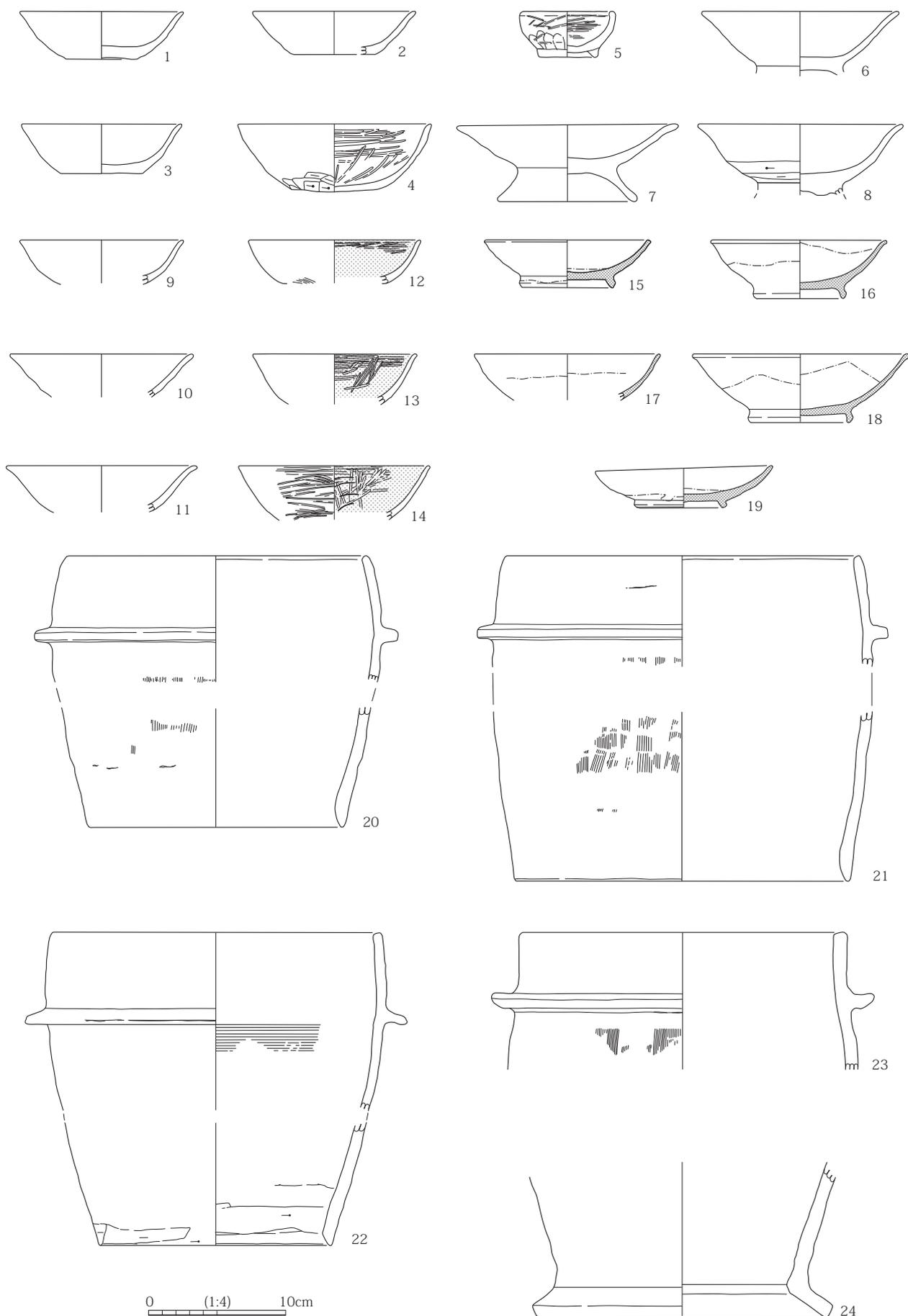
土器 S B 3001 からは 1,336 点（総重量 10,136 g）出土した。食膳具は土師器の坏（1～4）、埴（5、6）、盤（7、8）、底部を欠損する食膳具（9～11）、黒色土器 A の底部を欠損する食膳具（12～14）、灰釉陶器の埴（15～18）、皿（19）がある。土師器の盤を除き、食膳具において大小の法量分化が認められる。灰釉陶器は漬け掛けである。煮炊具は土師器の甑（20～24）、小形甕（25、26）がみられる。甑は鏝をもつ。甑、小形甕ともにカキメにより調整される。これらの特徴から、S B 3001 出土の土器群は松本編年 10～11 期に並行すると推定でき、10 世紀中葉から後葉に相当する。

金属製品 鉄製刀子 1 点が出土した（27）。切先は先細りし、茎部に対し刀身部のラインは並行する。関は背関のみ作り出される片関で、茎部および刀身部のラインから直角に立ち上がる。

SK4007（第 71 図、PL45）

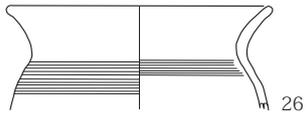
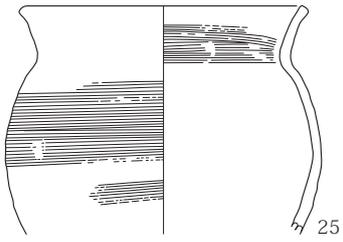
人骨 頭骨が 1 個体分出土した。頭位軸は北から東に 30 度傾き、顔面は北西方向を向く。遺存状態は非常に悪いが、検出状態で頭蓋骨、眼窩、上顎、脛骨を確認した。また、頭骨に伴い歯を採取した。

出土骨を鑑定した茂原信夫氏の所見は以下のとおりである。歯は咬耗がややすすんでおり、咬頭頂と思われる部分のエナメル質が磨耗し、穴が空いている。近遠心径と思われる大きさは 8.4mm である（計測は藤田 1949 に従った）。形態的には上顎小白歯の舌側半か、第 3 大白歯の舌側咬頭部半のどちらかと思われるが、近遠心径の大きさを現代日本人の平均値（権田 1959）と比較すると、上顎第 3 大白歯（男性で 8.94 mm、女性で 8.86mm）が最も近く、第 3 大白歯の舌側咬頭部半と判断することが妥当である。この歯を形態および近遠心径の大きさから総合的に推定すると、3 咬頭性の上顎左第 3 大白歯の舌側咬頭を含む舌側半の可能性が高い。歯の状態から、頭骨の年齢層は壮年から熟年程度と思われる。性別は不明である。

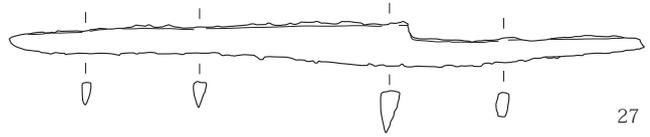


第70図 平安時代の遺物図(1) S B 3001(1)

SB3001



0 (1:4) 10cm



0 (1:2) 5cm

SK4007

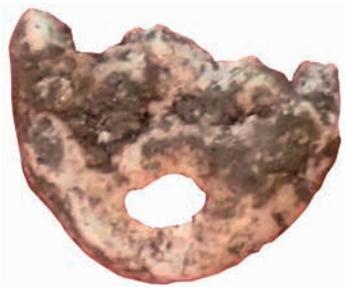


0 (1:3) 10cm



頭骨出土状況

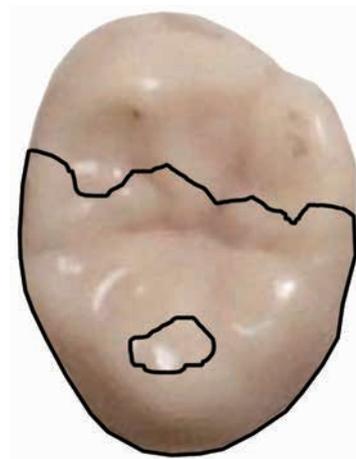
咬合面



舌側面



上顎左M3 (模型歯)



0 (5:1) 1cm

第71図 平安時代の遺物図(2) S B 3001 (2)、墓坑

4 科学分析

氏神遺跡の平安時代遺構及び遺物に係る科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社と株式会社パレオ・ラボに業務委託して放射性炭素年代測定を実施した。以下に科学分析結果の概要を記述する。詳細は付録のDVDに収録した。

(1) 放射性炭素年代測定

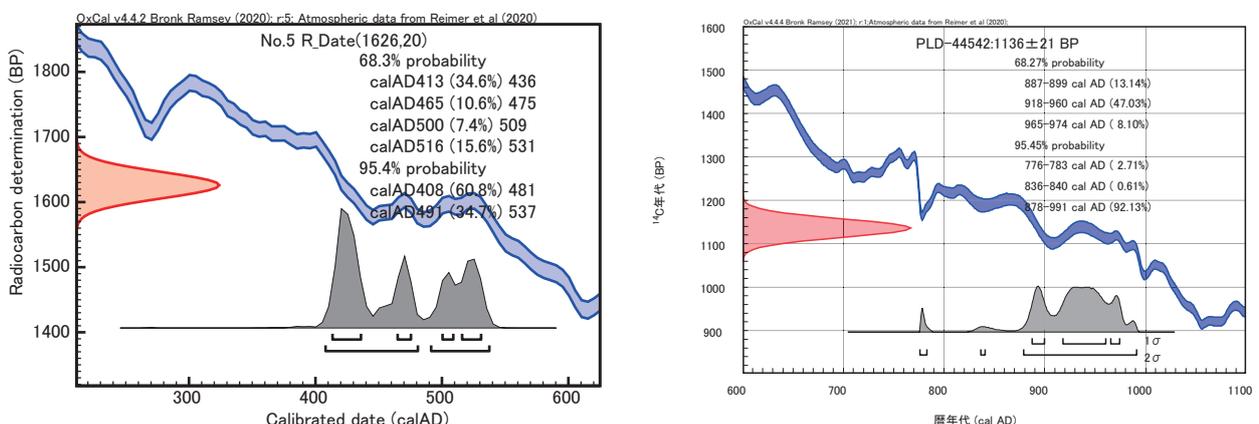
平安時代の竪穴建物跡（SB3001）と出土した土器群の絶対年代を把握し、出土土器群の編年的位置を明らかにするための基礎データを得ることを目的に、年代測定を実施した。年代測定で放射性炭素年代測定を選択した理由は、試料が得やすく測定精度が高いためである。

今回はSB3001のカマド構築材である礫に付着した炭化物及び同遺構出土の甎（21）に付着した炭化物の年代を測定した。

測定結果は第25表である。第72図はIntCal20（Reimer et al.,2020）を用いた暦年較正結果である。カマド構築礫付着炭化物の同位体補正を行った値は、 1625 ± 20 BPである。暦年較正值（ 2σ ）は、408～537calADである。SB3001の年代は出土土器群から10世紀中葉から後葉と推定していたが、測定結果は5世紀であり、推定年代よりも古い。これは試料が少なく、かつ脆弱であったので、酸やアルカリ処理をしていないことから、不純物を除去できなかった可能性がある。この結果を受け、同遺構から出土した甎（21）に付着する炭化物を採取し、年代測定を実施した。同位体補正值は 1136 ± 21 BPである。暦年較正值（ 2σ ）は、776～991calADである。そのうち92.1%は878～991calADの年代値となり、9世紀後半から10世紀後半の年代を示した。この年代観は出土土器群による推定年代に近いものであり、遺構及び出土土器群の絶対年代値と考えてよいと判断できる。

No.	試料名	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代										Code No.					
					年代値												確率%			
					cal	AD		cal	AD		cal	AD		cal	BP					
5	SB3001 カマド構築石付着炭化物	-	1625±20 (1626±20)	-23.82 ±0.26	σ	cal	AD	413	-	cal	AD	436	1537	-	1515	cal	BP	34.6	PLD-42240	pal-12933
						cal	AD	465	-	cal	AD	475	1486	-	1475	cal	BP	10.6		
						cal	AD	500	-	cal	AD	509	1450	-	1442	cal	BP	7.4		
					2σ	cal	AD	516	-	cal	AD	531	1435	-	1420	cal	BP	15.6		
						cal	AD	408	-	cal	AD	481	1543	-	1470	cal	BP	60.8		
						cal	AD	491	-	cal	AD	537	1459	-	1413	cal	BP	34.7		
6	SB3001 カマド出土甎 No.31 (掲載番号 21)	-	1136±21 (1135±20)	-23.96 ±0.15	σ	cal	AD	887	-	cal	AD	899	1063	-	1051	cal	BP	13.1	PLD-44542	
						cal	AD	918	-	cal	AD	960	1033	-	990	cal	BP	47.0		
						cal	AD	965	-	cal	AD	974	985	-	976	cal	BP	8.1		
					2σ	cal	AD	776	-	cal	AD	783	1174	-	1167	cal	BP	2.7		
						cal	AD	836	-	cal	AD	840	1114	-	1110	cal	BP	0.6		
						cal	AD	878	-	cal	AD	991	1072	-	960	cal	BP	92.1		

第25表 放射性炭素年代測定結果（2）



第72図 IntCal20による暦年較正結果（2）

第6章 調査の総括

第1節 氏神遺跡及び周辺遺跡における縄文時代前期末から中期の動向

1 縄文時代前期末から中期中葉の土器変遷

氏神遺跡の土器群は、縄文時代前期末、中期初頭、中期中葉の3時期が認められる。ここでは、松本盆地南西部の遺跡から出土した土器と比較することで、本遺跡の編年的位置を明らかにしたい。当該期、特に前期末から中期初頭の土器群は、多系統の土器が共存し、複雑な様相を呈する。長野県においては、「久兵衛尾根Ⅰ・Ⅱ式（藤森編1965）」や「籠畑Ⅰ・Ⅱ式（武藤1968）」、「晴ヶ峰式、梨久保式（三上1987a・b）」等、多数の土器型式が設定され、研究史的な位置付けがなされている。前期末から中期初頭の土器群を整理するために、山本典幸氏はA～Kの型式系統（型式組列）を示し、それらが地域ごとに異なった組み合わせをもつ様相を示し、これらを五領ヶ台式土器様式と呼称した（山本2000）。今村啓爾氏は当該期の土器群を「系統の束」として理解することを提案した。器形や文様帯の配置等、連続的に変化する要素を重視した系統分けを行い、当該期中部高地の土器群は、五領ヶ台式系統の土器と、松原式からの系譜を引く踊場系の2系統が共存する状況を示した（今村2010）。

本報告では、系統の理解は今村氏の研究を基本とし、土器群の系統とそれらの組み合わせを、同一時期のアッセンブリッジ（assemblage）として把握する必要があると考え、第26表のような概念規定をした。また、本報告では、本遺跡の資料が含まれる十三菩提式新段階から藤内Ⅰ式（日本考古学協会長野大会の編年（以下、「協会編年」）の1～5期）までを検討対象とする。

前期末 前期末は、十三菩提式古段階に位置づけられる諸磯C式からの系譜を引く池田系、十三菩提式古段階に位置づけられる鍋屋町式からの系譜を引く鍋屋町系、池田系が北白川系の影響を受けて成立した中空口縁系の3つの系統が組み合わせたり、これらの他十三菩提式系統や朝日下層系統が客体的にみられる。

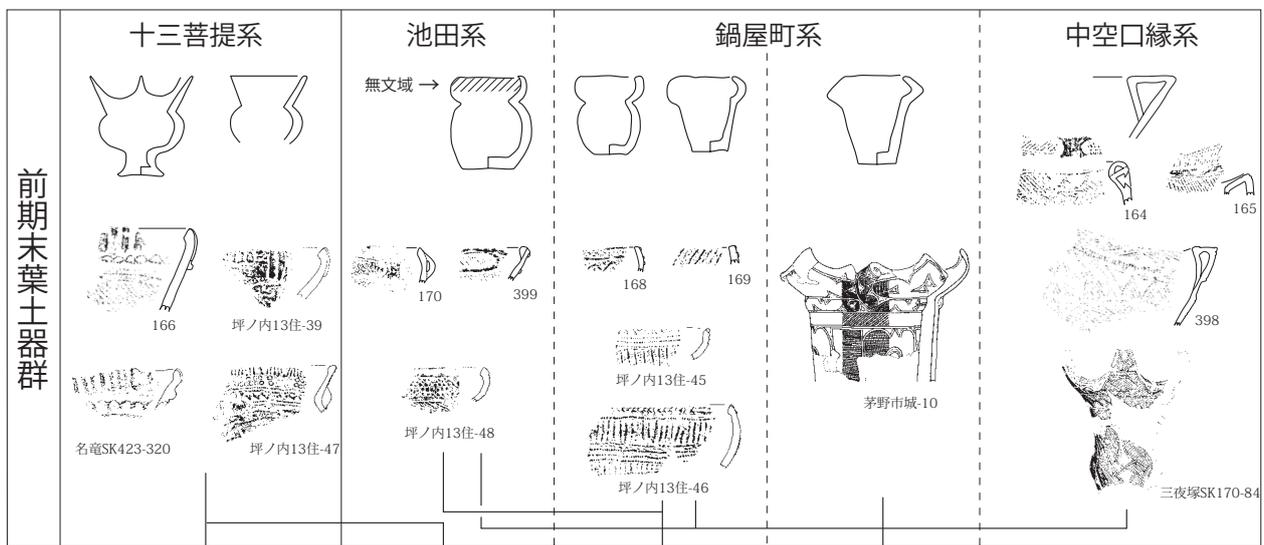
十三菩提系統は器形全体がわかるものが少なく、破片から推定せざるを得ないが、口縁は外側に開き、鍋屋町系や池田系のように内湾するものや「く」の字状に屈曲するものはみられない。胴中部が球形に膨らむものが少なく、低い台を付けたような形の底部として認められる。いわゆるトロフィー形土器は、このような器形の代表例である。本遺跡S B 3003から出土した166や山形村名籠遺跡S K 423から出土した320、松本市坪ノ内遺跡13号住から出土した47は十三菩提系統にあたと推定する。

池田系の器形は、口縁は内湾し、胴部が膨れるものが基本である。小形と大形に分かれ、大形は胴部の膨れがより顕著である。文様は集合沈線により施文され、口唇部には幅広の無文帯を有する。当遺跡S B 3003から出土した170や、S K 3025から出土した399は大形にあたと推定する。坪ノ内遺跡13号住から出土した48が池田系にあたと推定する。

鍋屋町系の器形は、口縁は内湾、または「く」の字状に内側に屈曲し、胴下部がずんぐり膨らんだものと底部に向かい直線的に窄まるものがある。文様は、北白川系の影響を受けソーメン状浮線文を多用するものと、集合沈線を施すものの2種に分かれる。本遺跡の資料はS B 3003から出土した168、169、S B 4001から出土した301、S K 3025から出土した404が鍋屋町系にあたる。茅野市城遺跡出土土器や坪ノ内遺跡13号住から出土した45、46が鍋屋町系である。

時期	型式・土器群と系統	氏神	協会編年
前期末	十三菩提 池田 鍋屋町 中空口縁	I 期	1・2期
中期中頭	五領ヶ台 踊場	II 期	
中期中葉	口縁外開形 折衷形 口縁屈曲形 円筒形	III 期	3～5期

第26表 型式・土器群と系統の組み合わせ



第73図 松本盆地における縄文時代前期末葉土器群

中空口縁系は、口縁部の器壁を内側に2回折り曲げ、中空部分を包み込む形の特殊な口縁部をもつ一群である。当遺跡S B 3003から出土した164、165、S K 3025から出土した398、山形村三夜塚遺跡S K 170から出土した84が中空口縁系にあたる。

そのほか、S K 3024から出土した384、S K 5009から出土した506にみられる小円貼付文や刻みを有する浮線文は、北陸の朝日下層系統のものと考えられる。

特に、本遺跡で中空口縁系が出土したことは注視できる。鍋屋町系や池田系の周辺遺跡における出土例は、多くないながらも度々報告されており、「籠畑Ⅱ式」等に分類される。また、長野市松原遺跡では、この2つの系統が組み合わさり共存する様相が、今村氏により「松原式土器」として認識されている。ただし、松原遺跡には中空口縁系は認められない。中空口縁系は北陸や南関東で出土しているにもかかわらず、中間地点の松原遺跡や千曲川流域で認められない事実を、今村氏は千曲川流域の遺跡が前期末における北陸—南関東間の情報交換ネットワークから外れていた結果と解釈しており、その時期の交流路は北陸から糸川川沿いに、諏訪から甲府盆地を抜けたものであったと想定している（今村 2010）。

本遺跡が所在する松本盆地は、まさに今村氏が想定した交流路に位置しており、中空口縁系の出土及び、

それを有する土器群の組み合わせの認識は、松本盆地に千曲川流域とは異なる土器群の組み合わせを保有する集団がいたことを示す重要な事象と考える。ただし、本遺跡から出土した前期末の土器は、中期初頭の土器に混じる形で出土しており、名籠遺跡、三夜塚遺跡、坪ノ内遺跡においても、同一遺構からすべての系統が伴って出土する状況ではない。そのため、ここで指摘する前期末の土器群の組み合わせは仮説の段階であり、今後の類例が待たれる。

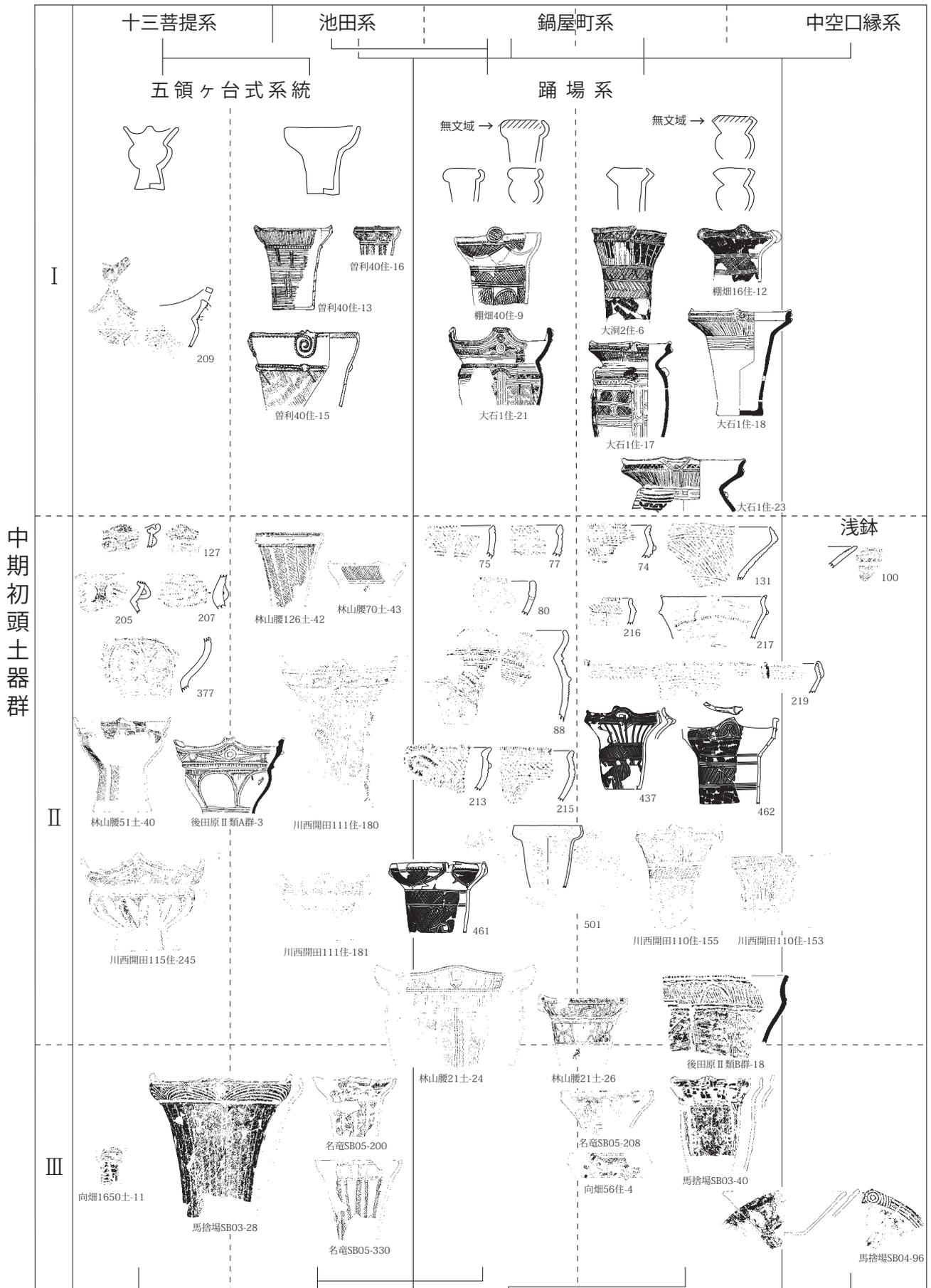
中期初頭 中期初頭は、十三菩提式系統からの系譜を引く五領ヶ台式系統と、池田系、鍋屋町系、中空口縁系の系譜を引く踊場系が組み合わせり共存する土器群に、北陸や関西等の遠隔地の土器が客体的にみられる。

五領ヶ台式系統の器形は2つに大別できる。一つは口縁部が大きく外側に開き、口頸部は球形に膨らみ、胴部は外反する。これは十三菩提系の器形における、低い台のような底部が胴部となったものと考えられる。本遺跡では、S B 3003 から出土した127、S B 4001 から出土した205、207、209、S K 3024 から出土した377がある。松本市林山腰遺跡51号土坑出土の40、松本市川西開田遺跡115号住出土の245、岡谷市後田原遺跡Ⅱ類A群の3、松本市向畑遺跡1650号土坑出土の11がみられる。もう一つは口縁部が内湾気味に外に開き、胴部は外反する。大きく外に開く十三菩提式系の口縁部が縮小または省略され、球形に膨らむ口頸部が口縁となった形態で、胴部は十三菩提系の底の形を引き継ぐ。本遺跡では、明確にこの器形を有する土器は認められないが、富士見町曾利遺跡40号住出土の13、15、16、林山腰遺跡70号土坑出土の43、126号土坑出土の42、川西開田遺跡遺跡111号住出土の180、181、名籠遺跡S B 05から出土した200、330、茅野市馬捨場遺跡S B 03出土の28がみられる。

踊場系の器形も2つに大別できる。1つは口縁部が内湾し、胴部が底部に向かい直線的に僅かに窄まるまたは膨らむもので、これは前期末の池田系および鍋屋町系の口縁が内湾する器形のものに系譜を辿ることが可能と思われる。口唇部の無文域を池田系から引き継ぐものもある。もう一つは口縁部が「く」の字状に屈曲し、胴部は直線的に底部に向かい僅かに窄まるものと膨らむものがある。これは鍋屋町系の口縁が「く」の字状に屈曲するものと、中空口縁系に系譜を辿ることが可能と思われる。また池田系にみられる口唇部の無文域をもつものも認められる。前者にあたる土器は、本遺跡S B 3002から出土した75、77、80、88、S B 4001から出土した213、214、S K 4042から出土した461、S K 5007から出土した501がみられる。茅野市棚畑遺跡40号住から出土した土器、茅野市大石遺跡1号住出土の21、林山腰遺跡21号土坑出土の24、26がある。後者にあたる土器は、本遺跡S B 3002から出土した74、S B 3003から出土した131、S B 4001から出土した216、217、219、S K 4032から出土した437、S K 4042から出土した462がある。岡谷市大洞遺跡2号住出土の6、棚畑遺跡16号住出土の12、大石遺跡1号住出土の17、18、23、川西開田遺跡110号住出土の153、155、111号住出土の187、後田原遺跡Ⅱ類B群の18、名籠遺跡S B 05から出土した208、向畑遺跡56号住から出土した4、馬捨場遺跡S B 03から出土した40がみられる。

これらの系統は器形によって認識しているが、文様要素とも無関係ではなく、例外はあるものの五領ヶ台式系統の地文は縄文が多く、踊場系は沈線文が中心である。

これら中期初頭の土器群の組み合わせは、五領ヶ台式系統の土器における編年に基づきⅠ～Ⅲに細分できる。Ⅰは松本盆地では類例がほとんどみられず、諏訪周辺の遺跡にみられる。五領ヶ台Ⅰ式を伴う曾利遺跡40号住、それに並行すると推定する大石遺跡1号住、棚畑遺跡40号住、大洞2号住が属する。長野県では「久兵衛尾根Ⅰ式」や「梨久保式」に分類されるもので、「協会編年」Ⅰ期に相当する。Ⅱは、これまで長野県においてほぼ類例がみられなかった、五領ヶ台Ⅱa式を伴う。また、本遺跡S B 3002出土の100や馬捨場遺跡S B 04出土の96口唇部内面に押引文が施される浅鉢がみられるようになる。これらの浅鉢は、系譜を遡ることができるものが周辺には見当たらないため、外来の系統が新たに中期初頭土器



第74図 松本盆地における縄文時代中期初頭土器群

群の組み合わせに加わったものと理解した方がよいと思われる。当遺跡 S B 3002、3003、4001 のほか、林山腰遺跡、川西開田遺跡 110、111 号住、後田原遺跡が属する。「協会編年」では明確に位置付けられておらず、1 期と 2 期の中間のような土器である。氏神遺跡には五領ヶ台 I 式に近い細線文が施される S B 3003 出土の 128 や S K 5006 出土の 495 がみられる。そのため 1 期により近い様相を示すと考えられる。Ⅲは五領ヶ台Ⅱ b、c 式土器を伴う。松本盆地での類例は名籠遺跡と向畑遺跡の一部にみられるのみで、馬捨場遺跡や岡谷市船霊社遺跡、岡谷市梨久保遺跡、原村長峰遺跡等諏訪周辺の遺跡にいくつか認められる。長野県では「久兵衛尾根Ⅱ式」や「深沢式」と呼ばれ、「協会編年」2 期に相当する。

中期中葉 中期中葉の土器群の組み合わせにおける各系統は、中期初頭にみとめられた五領ヶ台式系統、踊場系の各系統を引き継ぐもの、踊場系と五領ヶ台式系統の 2 つが折衷したと思われるもの、中期初頭から出現した口唇部内面に押引文をもつ浅鉢の系統に、円筒形や胴部から口縁に向かい直線的に外に開く器形等の新たな系統と考えられるものが共存する。

中期初頭における五領ヶ台式系統の口縁部が大きく外側に開き、口頸部は球形に膨らみ、胴部は外反する器形を引き継ぐものが認められる。本遺跡 S B 1001 から出土した 16、川西開田遺跡 20 号住から出土した 1、山形村淀の内遺跡東 7 号住から出土した 33、塩尻市剣ノ宮遺跡 24 号住から出土した 109 等をあげることができる。

踊場系の系統を引き継ぐものは、口縁が「く」の字状に屈曲する。口頸部が外に開くものと、縮小または省略され胴部の一部となるものがある。胴部は外反または垂直ぎみに立ち上がるものと、膨らむものが認められる。「平出第Ⅲ類 A 土器」の多くはこの系統に組み込まれる。本遺跡では S B 1001 から出土した 8、35、朝日村熊久保遺跡 2 号住から出土した 4、5、6、9、27 号住から出土した 8、川西開田遺跡 27 号住から出土した 46、28 号住から出土した 74 が認められる。淀の内遺跡東 5 号住から出土した 14、東 7 号住から出土した 29、剣ノ宮遺跡 24 号住から出土した 108 がみられる。

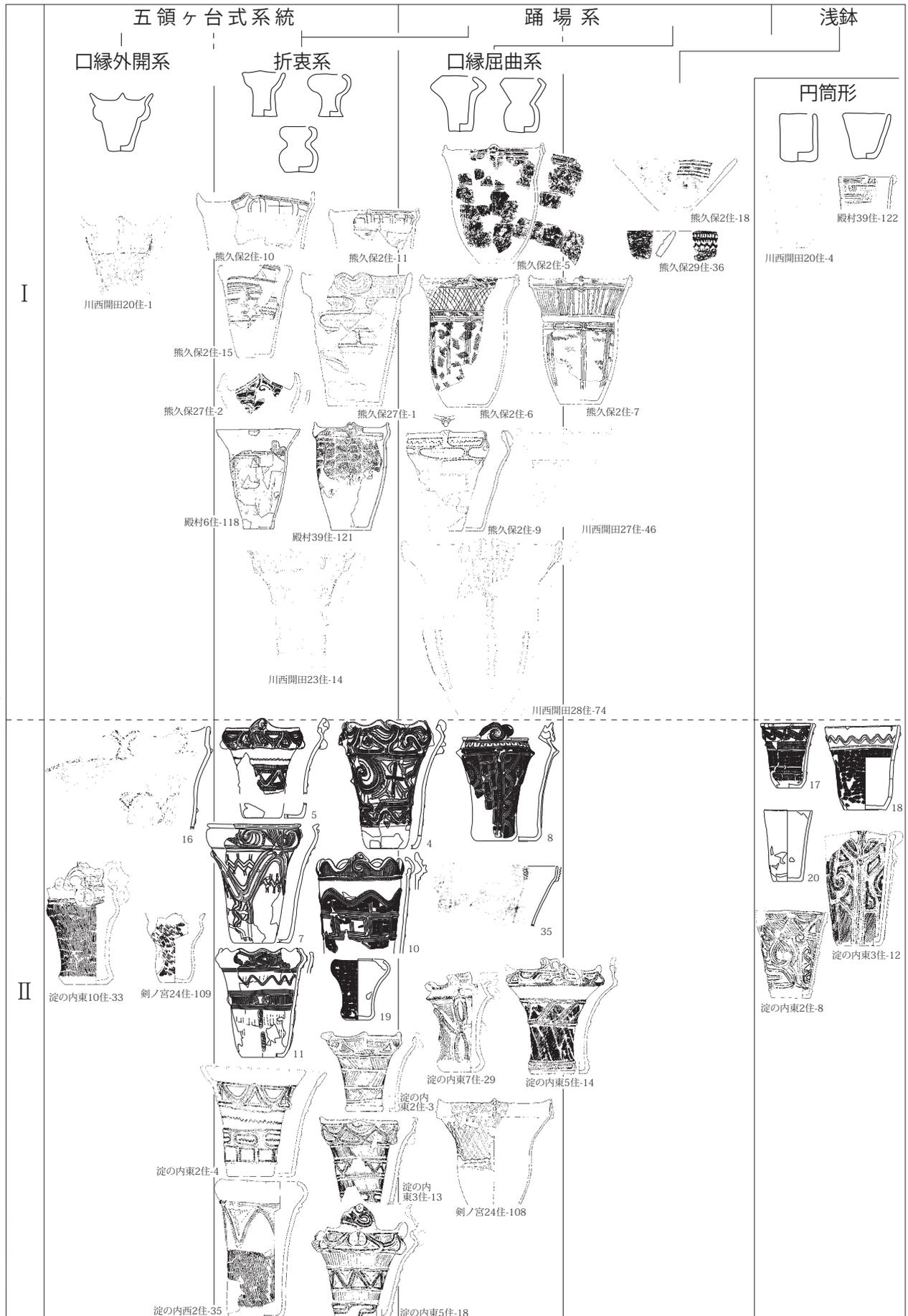
踊場系と五領ヶ台式系統が折衷した土器は、口縁部は踊場系からの系譜を引く内湾する口縁に、胴部は外反して立ち上がるものと、膨らんだものが認められる。外反して立ち上がる胴部は五領ヶ台式系統の胴部の形を引き継いだものと思われる。これらの土器には口縁の内湾が緩いものも多く、これは五領ヶ台式系統の外に開く口縁の形態が影響したものと想定する。本遺跡 S B 1001 から出土した 4、5、7、10、11、15、19、熊久保遺跡 2 号住から出土した 10、11、15、27 号住から出土した 1、2、川西開田遺跡 23 号住から出土した 14、山形村殿村遺跡 6 号住から出土した 118、39 号住から出土した 121、淀の内遺跡東 2 号住から出土した 3、4、東 3 号住から出土した 13、東 5 号住から出土した 18、東 7 号住から出土した 30 がみられる。

口唇部内面に押引文をもつ浅鉢は熊久保遺跡 2 号住から出土した 18 や 29 号住から出土した 36 が認められるほか、口唇部内面の押引文が消え、口唇部外面に鎖状隆帯や押引文を施文するものが、川西開田遺跡 20 号住から出土した 5 や剣ノ宮遺跡 24 号住から出土した 117 にみられる。この 2 種の浅鉢は異系統の可能性が高いと考える。

円筒形や胴部から口縁に向かい直線的に外に開く器形は当遺跡 S B 1001 から出土した 17、18、20、周辺遺跡では川西開田遺跡 20 号住から出土した 4、殿村遺跡 39 号住から出土した 122、淀の内遺跡東 2 号住から出土した 8、東 3 号住から出土した 12 等をあげることができる。これらの土器の器形は、中期初頭の周辺遺跡にみられた各系統に系譜を遡ることが難しく、外来の系統が新たに中期中葉土器群の組み合わせに加わったものと理解した方がよいと思われる。

中期初頭同様、器形と文様要素は関連しており、踊場系を引き継ぐ器形は沈線文が中心であり、五領ヶ台式系統を引き継ぐ器形は縄文を地文とするものが多い。

中期中葉土器群



第75図 松本盆地における縄文時代中期中葉土器群

これら中期中葉の土器群の組み合わせは猪沢式期から新道式期のⅠと、藤内Ⅰ式期のⅡに細分することができる。Ⅰは熊久保遺跡2号住、27号住、川西開田遺跡20号住、27号住、28号住、殿村遺跡6号住、39号住等が認められる。「協会編年」3・4期に該当する。Ⅱは当遺跡S B 1001のほか、淀の内遺跡東2号住、3号住、5号住、7号住、剣ノ宮遺跡24号住が認められる。「協会編年」5期に該当する。基本的にこれらの土器群の組み合わせにおける各系統は、これ以降の藤内Ⅱ式期や井戸尻式期において存続すると考えるが、口縁部内面に押引文をもつ浅鉢がⅡではみられなくなる等、消滅する系統もある。また、口縁部外面に鎖状隆帯や押引文を施文する浅鉢、円筒形や胴部から口縁に向かい直線的に外に開く器形等、新たに組み込まれる系統もある。中期中葉は器形以外も、文様において前期末や中期初頭に中心であった縄文系と沈線文系のほかに、隆帯による施文や区画文、焼町土器に代表される曲隆帯等、新たな文様要素が取り入れられるようになる。中期初頭から引き継がれる系統に、新たな系統が組み込まれ、中期中葉の土器群の組み合わせが成立したのであろう。

2 縄文時代における氏神遺跡の石器群

氏神遺跡から出土した縄文時代の石器は、1,423点、総重量134,489.8gである。その内、1,254点、重量130,133.3gは縄文時代に属する遺構から出土し、そのほかは平安時代の遺構に混入したものと、遺構外から出土したものである。

縄文時代の石器を分析する際の視点と方法は、阿部朝衛氏により示されている(阿部1985)。石器の分類、石器組成、石器製作技術の3視点を構造的に把握することで、その変化を現象的に把握可能であると説明している。この3視点は縄文時代に限らず、石器群を分析する視点としてすべての時代に適応可能なものであるが、特に縄文時代石器を対象とする際、旧石器時代の石器よりも把握がしやすい要素として、①それぞれのまとまりの石器における属性間の距離が大きい場合が多く、分類が行いやすい点、②共伴する土器によって詳細な年代的位置付けが可能であり、より精緻に通時的・共時的な分析と理解ができる点がある。本節では、阿部氏の指摘する3視点および分析上の利点に留意し、本遺跡の石器群を整理する。年代的位置付けは同一遺構から共伴する土器をもとに行い、年代的位置付けが可能な石器1,163点、重量111,110.6gを分析対象とする。中期初頭の(五領ヶ台Ⅱa式に伴う)石器は947点、重量96,783.3g、中期中葉の(藤内Ⅰ式に伴う)石器は216点、重量14,327.3gである。点数、重量いずれも出土石器全体の8割以上が対象となり、石器群全体の特徴を把握するために十分な数量であると考えられる。

石器の分類 石器を分類する際に基準となる属性は、多くの場合「形」である。形を作り出す際には、素材に対する加工の部位や方法、それを実施するための道具、加工の順序等の石器製作技術が駆使されることになる。その時に大きさや重量等もコントロールされる。したがって、石器の分類は、石器製作技術も加味したものとなる。

本遺跡の石器は、剥片や分割礫を素材とする剥片石器(打製石器:石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、ピエス・エスキュー、打製石斧 磨製石器:磨製石斧)と礫をそのまま利用する礫石器(敲石、凹石、磨石、台石、石皿、砥石、石錘)、剥片石器の素材や残滓類(石核、剥片、碎片)、僅かな加工や使用の痕跡を見いだせる剥片(二次加工ある剥片、微細剥離ある剥片)に大別できる。カッコ内は、細別であり、石器の分類や器種は、このレベルで認識されることが多い。

剥片石器の場合、最終加工が打製によるものか、磨製によるものかの中分類を経て、細別に至る。また、剥片石器の多くは、それぞれの石器に施される加工および、それによって作り出される形の属性差が大きい定形的な石器であるため、分類上問題となることはあまりないと考えられる。

分類上問題となるものは、不定形で属性差の小さい一部の剥片石器や礫石器、僅かな加工や使用の痕跡

を見いだせる剥片である。これらは礫や剥片をそのまま、または僅かな加工を施し道具として用いたものであり、その分類基準は、肉眼で観察される痕跡の種類（敲打痕、凹み痕、磨痕、加工痕、刃こぼれ等）と、それらが残される箇所である。これらの認定基準は問題が指摘されて久しいが、本報告では筆者の主観的な観察にもとづいている。また、これらの痕跡が1つの石器に複数認められる場合もある。その場合、本報告では痕跡の切り合いを観察し、最後に残されたと判断した痕跡をもとに分類した。

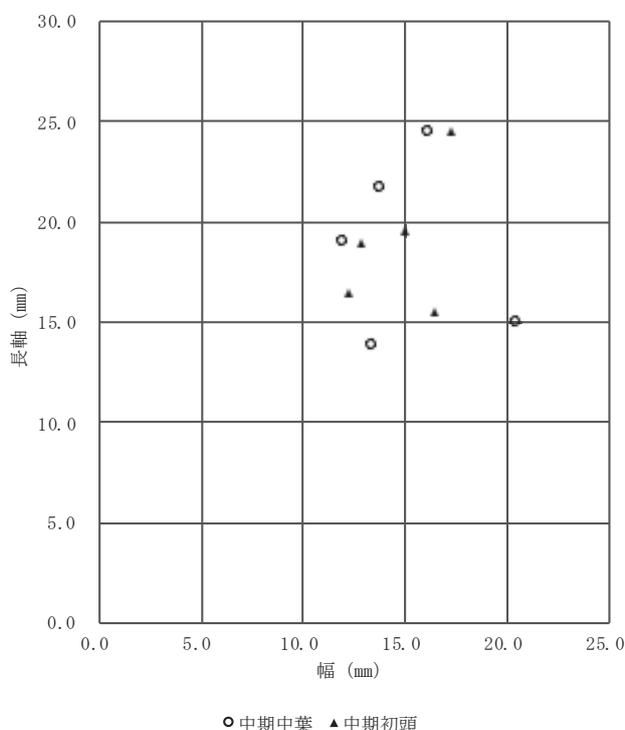
以下、分類別に各石器の特徴を記述する。

石鏃 27点出土した。すべて黒曜石の剥片、またはズリ¹を素材とする。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭が10点（完形品5点、失敗品3点、欠損品2点）、中期中葉が11点（完形品5点、失敗品2点、欠損品4点）である。完形品よりも大形なものや、左右非対称のもの、厚みが減じられていないものを失敗品と位置付けた。欠損品は先端や茎部の一部を欠損する。完形品を見ると、中期初頭は、長軸が幅よりも1.3倍ほど長いもの（106、108、109、386）とほぼ正三角形を呈するもの（107）が認められる。すべて凹基無茎鏃であるが、108は殆ど内湾しない。中期中葉は、長軸が幅よりも1.3倍ほど長いもの（38、39、41、42）とほぼ正三角形を呈するもの（45、46）、幅が長軸よりも1.3倍ほど幅広のもの（47）が認められる。すべて凹基無茎鏃であるが、内湾が浅いもの（38、39）と殆ど内湾しないもの（45）がある。第76図は完形品の長幅比を示したものである。中期中葉に幅広のものが認められる以外は、目的とする規格にほぼ変わりが無いことがわかる。

石錐 11点出土した。10点が黒曜石製、1点が凝灰岩製である。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭が5点、中期中葉が2点で、いずれも黒曜石製である。本遺跡では、断面形が菱形を呈する定形的な石錐は、遺構外から出土した凝灰岩製1点のみである。その他は黒曜石の剥片（50、110、111）、またはズリ（49、316、433）を素材とし、両側辺に部分的な加工を施して先端を細らせ、断面形が三角形を呈する不定形なものである。素材の選択や加工の方法等に時期差はみだせない。

石匙 4点出土した。3点がチャート製、1点が頁岩製である。すべて中期初頭に位置づけられ、剥片を素材とする横型の石匙である。317は制作が途中で停止していると判断したため、失敗品と考える。

スクレイパー 10点出土した。内9点を図示した。小形品と大形品に細分できる。小形品は51のみである。黒曜石製の剥片の端部に、平面形が曲線状、断面形がD字形となる片刃の刃部を作り出す。中期中葉に位置づけられる。そのほかは大形品である。いずれも大形の剥片を素材とし、剥片の縁辺に平面形が直線状の片刃の刃部を作り出す。石材は黒曜石に比較し粒子が粗く、衝撃に強いものが選択される。年代的な位置付けが可能なものは、中期初頭が5点（花崗岩1点、砂岩3点、泥岩1点）、中期中葉が



第76図 石鏃完形品長幅比

註1 板状または角柱状を呈する小形の黒曜石原石

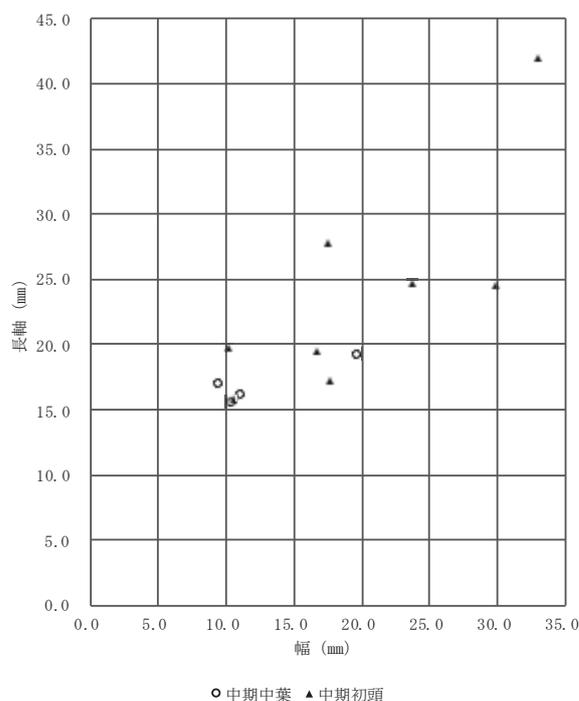
4点（安山岩3点、砂岩1点）である。小形品が定形的な石器である一方、大形品は石材、加工の部位や頻度、形状に規格性が乏しい不定形な石器である。また、石材は遺跡近隣で採取可能なものであり、砥石の破片を転用したものもみられる（343）。このことから、大形品は、一部の二次加工ある剥片や微細剥離ある剥片と同様に、阿子島香氏の指摘する「使えればそれでよい」石器と位置付けることができる（阿子島1984）。

ピエス・エスキーユ 15点出土した。すべて黒曜石の剥片を素材とする。年代的な位置付けが可能なものは、中期初頭が9点、中期中葉が4点である。この石器は、向かい合う縁辺に、両極打撃による階段状剥離がみられるものが分類される。加工がほぼ行われないため、剥片の形状、大きさがそのまま反映される、不定形な石器である。第77図は、完形品の長幅比を示したものである。中期初頭に比べ、中期中葉は大きさにまとまりがあるようにもみえるが、規則性はみいだせない。これは、この石器の道具としての性格の他に、剥片剥離技術に両極打撃が用いられ、結果として道具としてのピエス・エスキーユと、剥片としてのピエス・エスキーユが分離できないために起こる現象の可能性がある。

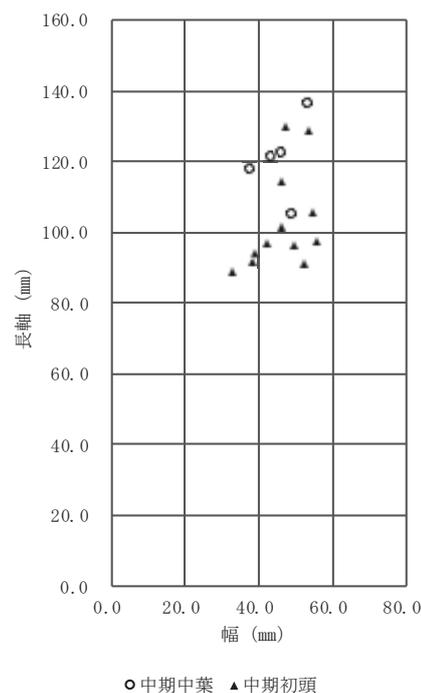
打製石斧 44点出土し、その内24点を図示した。剥片両面の周辺に加工を施し、短冊形や撥形に成形する。石材は流紋岩4点、安山岩2点、凝灰岩5点、砂岩17点、泥岩12点、粘板岩4点である。年代的な位置付けが可能なものは、中期初頭が25点（流紋岩2点、安山岩1点、凝灰岩2点、砂岩10点、泥岩6点、粘板岩4点）、中期中葉が13点（流紋岩2点、安山岩1点、凝灰岩2点、砂岩5点、泥岩3点）である。いずれも遺跡近隣で採取できる、硬質な岩石を石材とする。この傾向に年代的な違いはみいだせない。完形品は中期初頭が12点、中期中葉が5点で、いずれの時期も半数以上が欠損する。

完形品を対象とし、第78図は長幅比、第79図は長厚比を示した。幅に変化はみられないが、長軸は100mm前後のもの、120mm前後のものが認められ、前者は中期初頭に多く、後者は中期中葉に多い傾向がある。また、厚さは中期初頭が10mm～15mmに集中するのに対し、中期中葉では厚さが10mm以下の薄形のもの（56）と、20mm前後の厚形のもの（57～59）が認められる。

磨製石斧 1点出土した（473）。透閃石岩製の小形品である。全面研磨されており、平面形は撥型、断



第77図 ピエス・エスキーユ完形品長幅比

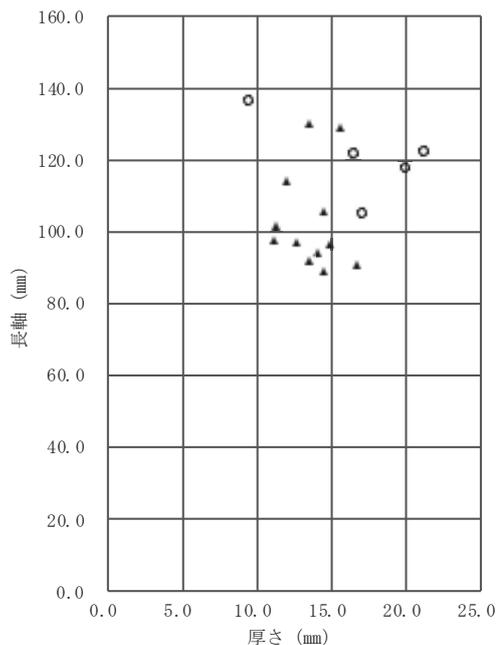


面形はD字形を呈する、片刃の石斧である。当遺跡において、透閃石岩の加工の痕跡はみいだせないため、搬入品であると考えられる。中期初頭に位置付けられる。

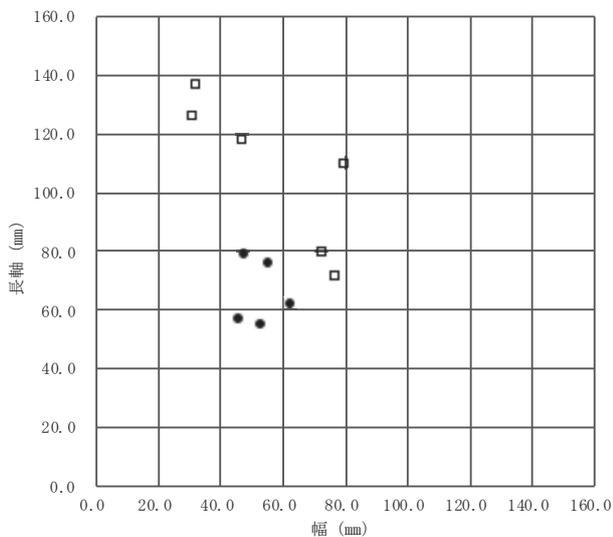
敲石 30点出土し、13点を図示した。片手で保持できる重量、大きさの礫に敲打痕が観察される石器である。すべて遺跡近隣で採取できる砂岩を石材とする。年代的位置付けができるものは26点あり、いずれも中期初頭である。これらを中心にみると、形態は円形(115、434、436)、楕円形(116)、棒形(365、414)、多角形(467)を呈する。形態により敲打痕が残される部位が異なり、円形は周縁、楕円形と棒形は端部、多角形は角部に残される傾向が強い。また、凹み痕が合わせて観察されるものもある(117)。完形品の大きさや重量をみると、重量200g未満の一群と200g以上の一群に分けられそうである。

第80図は長幅比、第81図は長厚比、第82図は幅厚比をそれぞれ示したものである。幅や厚みは重量による違いは認められず、30～50mmに集中する。一方、長軸は、重量200g未満の一群が50～80mmに、200g以上の一群が110～140mmに集中する傾向がある。これは握りやすさの関係で、手に保持する部位である幅および厚さは、強い規制を受けるのに対し、長軸の長さを調整することで、必要な重量を担保していたためと推定する。

凹石 25点出土し、8点を図示した。片手に保持できる重量、大きさの礫に敲打による凹み痕が観察される石器である。石材は安山岩3点、花崗岩1点、砂岩19点、泥岩1点、礫岩1点である。年代的位置付けが可能なものは、中期初頭16点(安山岩2点、花崗岩1点、砂岩13点)、中期中葉5点(砂岩4点、礫岩1点)である。いずれも遺跡近隣で採取できる石材である。扁平礫や角柱状の礫等の広い面を有する礫が選択され、その面に凹み痕が残される。凹み痕は、複数残される場合がある。また、敲打痕や磨痕が

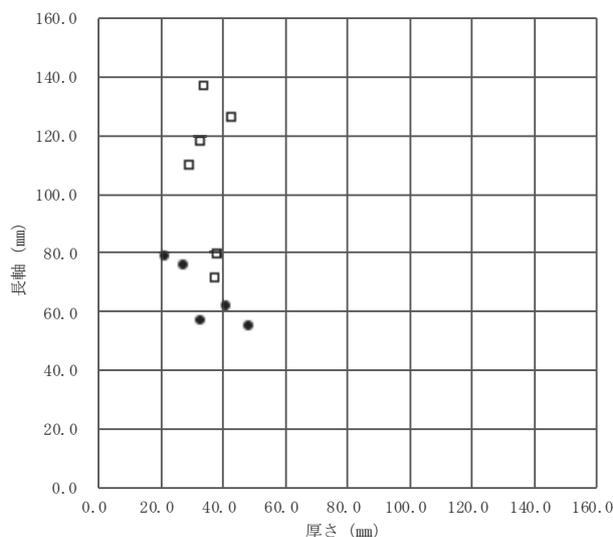


○中期中葉 ▲中期初頭
第79図 打製石斧完形品長厚比



●軽量(200g未満) □重量(200g以上)

第80図 敲石完形品長幅比



●軽量(200g未満) □重量(200g以上)

第81図 敲石完形品長厚比

合わせて観察されるものもある（194、335、460、487）。

磨石 2点出土し、1点を図示した。片手に保持できる重量、大きさの礫の表裏面に明瞭な磨痕が観察される石器である。年代的 position付けが可能なものは中期初頭に位置づけられる砂岩製1点のみであるが、欠損が酷く図示できなかった。典型的なものは遺構外から出土した安山岩製の512である。

台石 25点出土し、4点を図示した。片手で保持することが難しい重量、大きさの礫の表裏面や側面に敲打痕が観察される石器である。すべて遺跡近隣で採取できる硬質な砂岩を石材とする。年代的 position付けが可能なものは、中期初頭20点、中期中葉2点である。ほぼすべての台石に欠損や剥離面が認められる。この時に生じた剥片を、大形スクレイパー等の硬質な岩石を石材とする一部の剥片石器の素材に用いられた可能性がある。

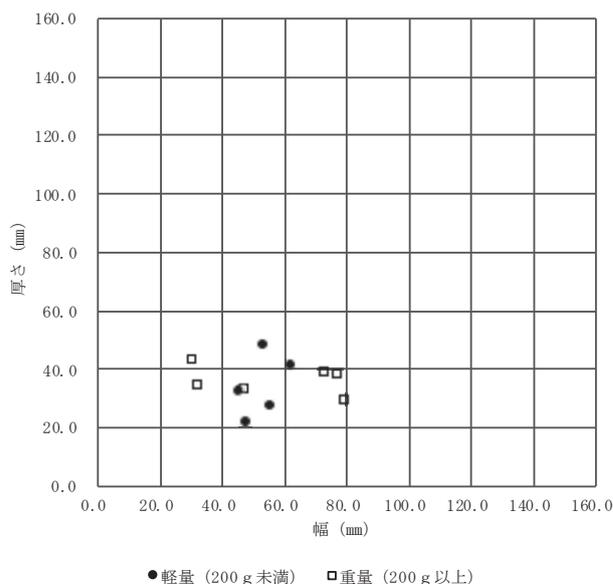
石皿 6点出土し、3点を図示した。片手で保持することが難しい重量、大きさの礫の表面に摩耗痕による、大きな凹みが観察される石器である。石材は安山岩2点、砂岩4点であり、いずれも遺跡近隣で採取できる石材である。すべての石皿が半分以上を欠損していると推定する。年代的 position付けが可能なものは5点あり、いずれも中期初頭である。

砥石 8点出土し、3点を図示した。礫の表裏面や側面に磨痕が観察される石器である。磨石とは片手で保持することが難しい重量、大きさであること（63）や、磨痕が面全体に及ばないこと（120、463）などの違いがある。すべて、遺跡近隣で採取できる砂岩を石材とする。台石や石皿同様、欠損や剥離面が認められるものが多い。この時に生じた剥片を大形スクレイパー等の硬質な岩石を石材とする一部の剥片石器の素材に用いたようであり、343の背面に砥石として利用されたときに残されたと推定する磨痕が認められる。

石錘 5点出土し、4点を図示した。礫の片側、または両側の端部に、剥離により抉りや、磨り切りにより溝を作り出す石器である。抉りや溝は紐等を結ぶための部分と推定する。4点（凝灰岩1点、砂岩2点、泥岩1点）が中期初頭、1点（砂岩）が中期中葉である。形態は楕円形（64、121、122）と長楕円形（508）がある。長さは27.4～65.7mm、幅は22.4～31.7mmで、大きさには、ばらつきが認められるが、特に幅に比べ長さのばらつきが大きい。重量は5.3～49.1gあり、こちらもばらつきが大きい。石錘は、その重量が機能上重要な要素であると思われる。その重量にばらつきが認められるということは、石錘にはいくつかの用途が想定され、用途ごとに適切な重量のものを選択していたと推定する。

石核 70点出土し、黒曜石製のもの4点を図示した。剥片石器の素材剥片を剥離した残核が中心である。石材は黒曜石51点、安山岩2点、チャート1点、砂岩15点、粘板岩1点である。年代的 position付けが可能なものは、中期初頭50点（黒曜石33点、安山岩2点、砂岩14点、粘板岩1点）、中期中葉4点（黒曜石3点、砂岩1点）である。時期別に重量の平均値を見ると、中期初頭は黒曜石8.6g、安山岩400.0g、砂岩691.8g、粘板岩84.4g、中期中葉は7.3g、砂岩1440.0gである。

黒曜石は、かなり小形になるまで消費するのに対して、その他の石材は、比較的大形の状態で廃棄して



第82図 敲石完形品幅厚比

いると考える。これは遺跡に搬入される黒曜石が小さいこと、黒曜石を石材とする剥片石器が概して小形であること、遺跡近隣で採取可能な石材よりも入手にコストがかかるため、限界まで消費する傾向が強いこと等が考える。そのほかの石材は、遺跡に搬入された状態が、かなり大きく、重い岩石であったこと、これらを石材とする剥片石器が、黒曜石製のものに比べ大形であること、遺跡近隣で採取できる岩石であり、入手が比較的しやすいため、限界まで消費する必要がないと考える。

剥片、削片、碎片 合わせて1054点出土した。この数は、出土した石器全体の74%にあたる。石材は黒曜石911点、流紋岩1点、安山岩3点、下呂石、2点、チャート9点、砂岩96点、泥岩20点、粘板岩8点、凝灰岩2点、石英1点、結晶片岩1点である。剥離の際に稜の形成を行っているものを削片とした。2点確認でき(138、445)、いずれも黒曜石である。大きさが1cm四方以下のものは碎片とした。碎片の重量は0.1g以下が殆どである。

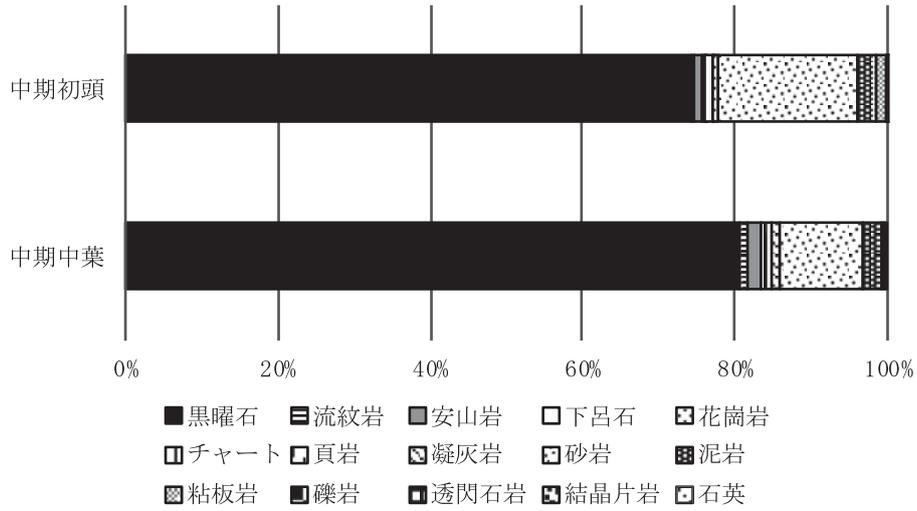
年代的な位置付けが可能なものは、中期初頭728点(黒曜石615点、流紋岩1点、安山岩3点、下呂石2点、チャート6点、凝灰岩2点、砂岩74点、泥岩16点、粘板岩8点、石英1点)、中期中葉154点(黒曜石140点、チャート3点、砂岩8点、泥岩2点、結晶片岩1点)である。いずれの時期も黒曜石の点数が群を抜いて多く、ついで遺跡近隣で採取できる砂岩が多い。中期初頭には遠隔地の石材である下呂石(124、416)が認められることが注目される。

二次加工ある剥片、微細剥離ある剥片 合わせて53点出土した。石材は黒曜石52点、下呂石1点である。石鏃や石錐、剥片、削片、碎片同様に黒曜石が中心である。加工によるものと思われる剥離が観察されるものを二次加工ある剥片、刃こぼれ等と思われる微細な剥離が観察されるものを微細剥離ある剥片とした。年代的な位置付けが可能なものは、中期初頭33点(黒曜石32点、下呂石1点)、中期中葉14点(すべて黒曜石)である。剥片と同様に中期初頭に遠隔地の石材である下呂石(123)が認められる。

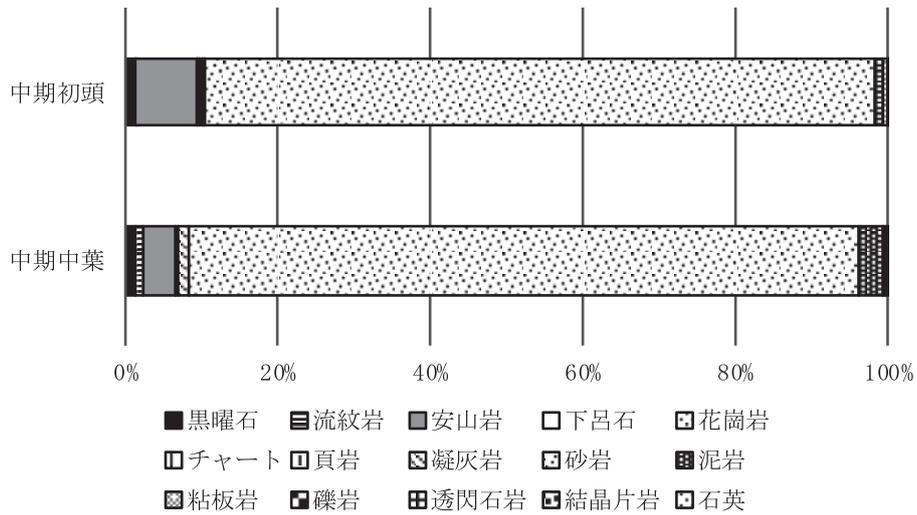
石材 時期別に本遺跡における縄文時代石器の石材数比を第83図に、石材重量比を第84図に示した。石材の選択に時期による違いはみいだせない。数比で見ると黒曜石が全体の80%近くを占めるが、重量比を見ると1%ほどである。これは、黒曜石を石材とする石器が、小形の剥片石器に集中しており、大きな原石を必要としないこと。また、これら黒曜石の産地は、いずれの時期も約95%が諏訪エリア、5%が和田エリアと判明しており(第5章第2節4参照)、入手において移動コストがかかること。その対策として運搬コストを低減するために、もともと小さい原石や、原産地で原石を加工し、大きさや重量を減じて当遺跡に持ち込んだと推定する。逆の在り方を示すのが砂岩である。砂岩は、数比では15%ほどであるが、重量比では90%近くを占める。これは、砂岩を石材とする石器が大形で重量のあるものに集中するため、大きな原石が遺跡に持ち込まれたことを示している。大きな原石を遺跡に搬入するため、運搬コストが増大する。その対策として遺跡近隣に産する砂岩を利用し、移動コストを減じたものと推定する。安山岩や泥岩、粘板岩も砂岩と同様の性格をもつ石材であると考えられる。

時期によって、主体的に用いる石材の利用形態に差はないが、下呂石(岐阜県産)や透閃石岩(新潟県または富山県産)等の遠方の石材は、中期初頭にのみ確認できる。これは、資源獲得領域の違いが反映される場合と他集団との交流圏の違いが反映される場合の、主に2つが想定されるが、本遺跡の場合を考えてみたい。本遺跡では、主体的に利用する石材に、時期による違いはみいだせないため、資源獲得領域の大幅な変化を読み取ることは困難である。中期初頭の土器に関西系や北陸系、東海系の遠隔地の土器が認められる一方、中期中葉にはそれらが確認できない状況を合わせて考えれば、中期初頭は中期中葉に比べ、他集団との交流圏が非常に広域であったことが推定できる。

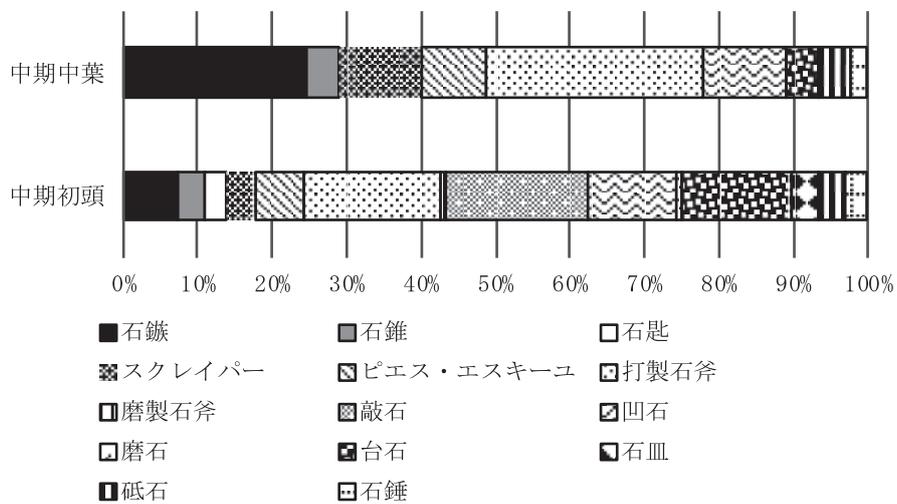
石器組成 第85図は年代的な位置付けが可能な石器の時期別の分類組成を示したものである。なお、全体の8割近くを占める石核や剥片等の剥片石器における素材や残滓類、二次加工ある剥片や微細剥離ある剥



第83図 石材数比率



第84図 石材重量比率

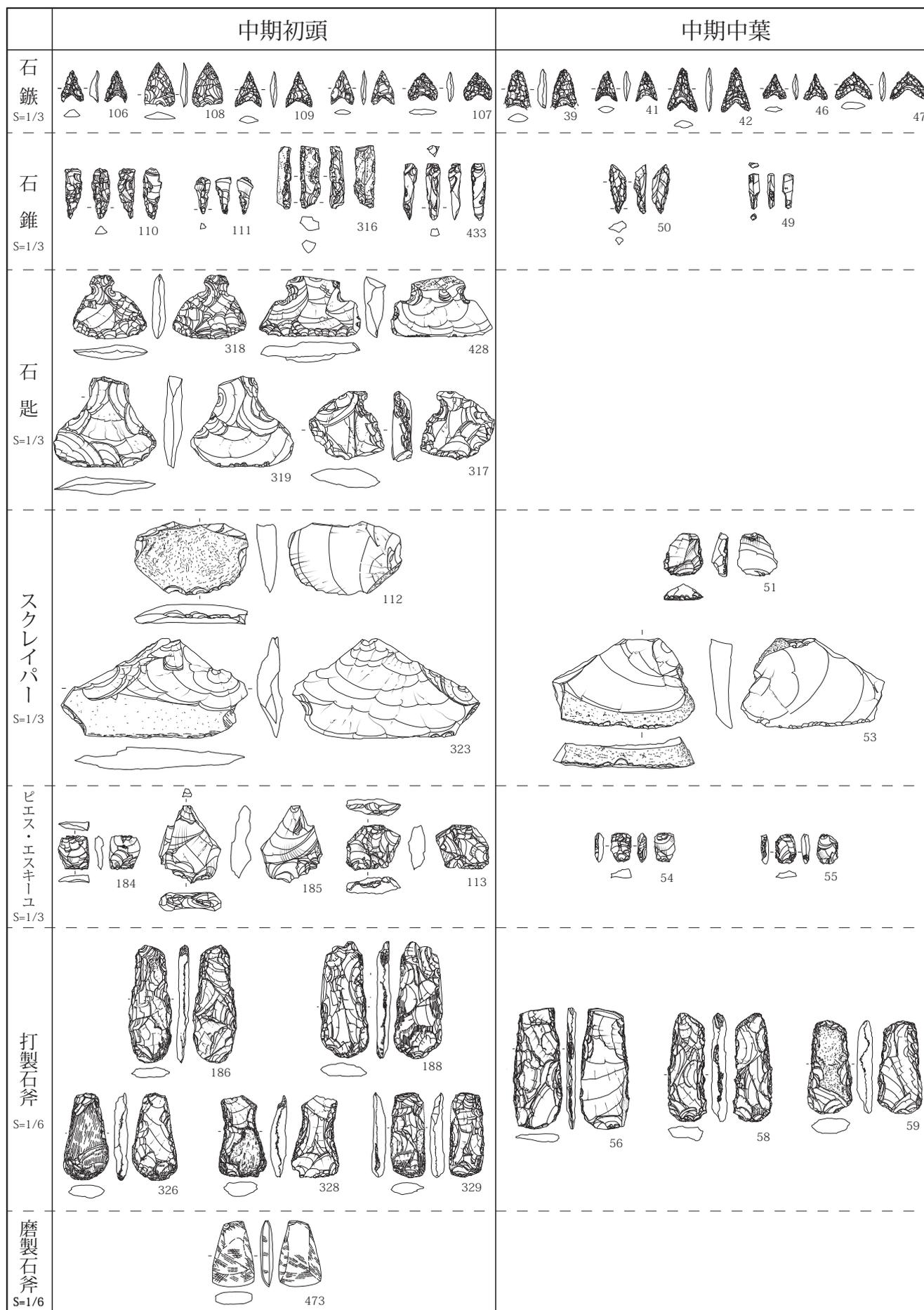


第85図 石器組成

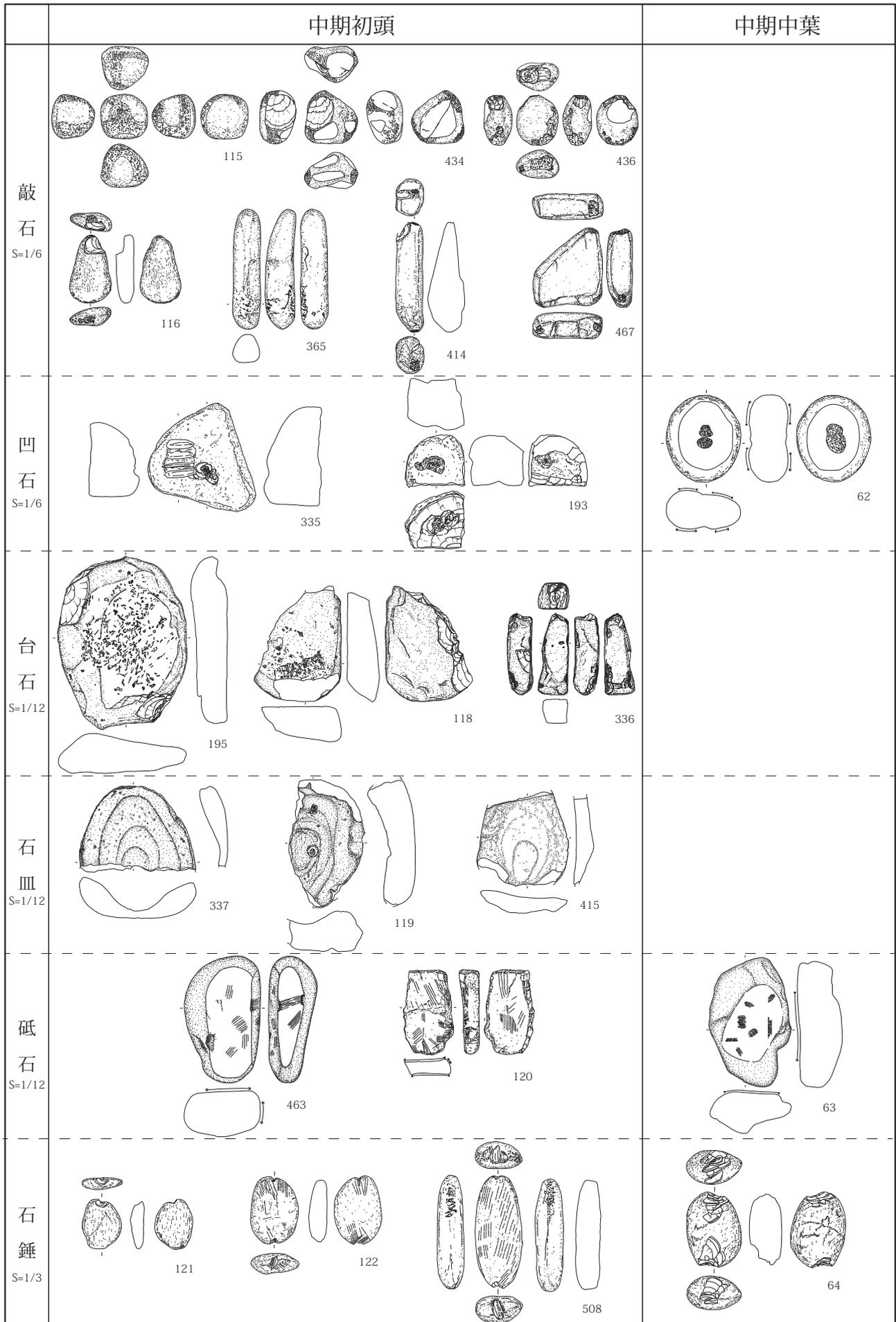
片は、組成表に含めていない。

中期初頭と中期中葉を比較すると、石鏃の比率が中期中葉の方が高いこと、礫をそのまま利用する礫石器全体の割合が中期初頭の方が高いこと、石匙、磨製石斧、敲石、磨石、石皿が中期中葉に認められないことが挙げられる。石器組成は、当時の社会集団における生活様態のほか、遺跡や遺構の機能や性格によって変化する。本遺跡の場合、この石器組成の違いがいかなる意味を持つのか考えてみたい。生活様態については、個々の石器において時期ごとの変化が僅かであること、石材選択において時期差がみいだせないこと、土器において中期初頭からの系統を引き継いだものを中期中葉で使用していること等から、文化伝統につながりをもつ社会集団であった蓋然性が高いと考えられる。また同一遺跡のため、地形や環境条件もほぼ同じであったと推定できることから、大きな変化は想定しがたい。本遺跡は、集落跡と考えられるため、機能および性格の違いも見出しがたい。また、遺構をみると、遺物の出土状況が注目される。本遺跡における中期初頭の遺物出土状況は、特筆するものではないが、中期中葉の竪穴建物跡における遺物の出土状況は、いわゆる「吹上パターン」²という特殊なものである。「吹上パターン」の解釈は様々であるが、竪穴建物の廃絶過程において、中期初頭と中期中葉に大きな違いがあったことは間違いないであろう。中期中葉において竪穴建物が廃絶される際に、そこに残す石器と残さない石器をそれぞれ選択していたのではないかと考える。具体的には、中期初頭は通常の竪穴建物が廃絶される過程で残される一般的な石器組成であるのに対し、中期中葉における「吹上パターン」を呈する竪穴建物跡は、廃絶の過程で石鏃を多く残す一方、敲石や磨石、石皿等の礫石器はほとんど残さず、それが石器組成に反映されていると考える。このような仮説は、本遺跡の状況のみで言及できるものではないため、ここではその可能性を指摘することにとどめる。

註2 竪穴建物廃棄後に埋没過程で土器が一括遺棄される状況。炉跡などの埋設土器と遺構埋土から出土した土器に時期差が想定される。



第86図 氏神遺跡の石器群(1)



第87図 氏神遺跡の石器群(2)

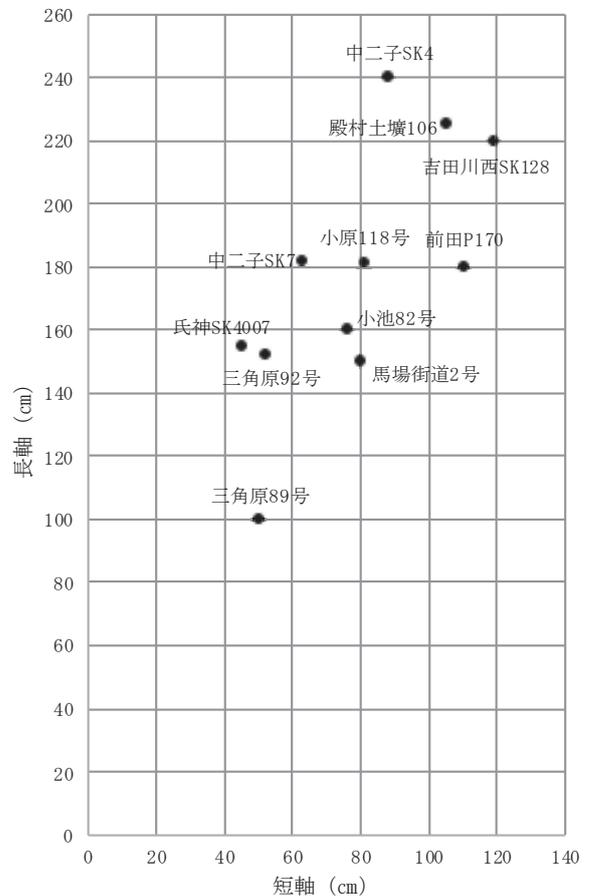
第2節 氏神遺跡の平安時代における墓坑と集落

氏神遺跡では、平安時代に属する竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡2棟、杭列1列、墓坑1基、土坑14基を確認した。竪穴建物跡から出土した遺物から、10世紀中葉から後葉に位置づけられる。この中で、墓坑については、発見例は希少である。氏神遺跡の場合、本該期の集落の中心は調査範囲の東側にあると推定するが、調査範囲が狭いため、集落の全体像を捉えることは難しい。そのため本節では、墓坑と集落の関係を中心に、周辺遺跡の事例と比較する。

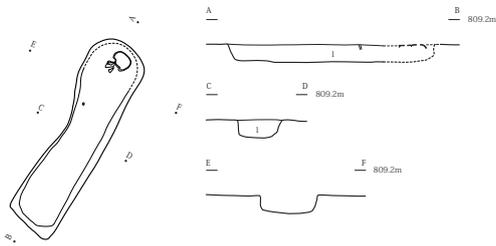
長野県における、平安時代の墓坑については、原明芳氏の詳細な分析がある（原1998）。原氏の集成を参考として、松本盆地における10世紀中葉から後葉の墓坑をみると、氏神遺跡を含め9遺跡11例（第89図、第27表）が確認できる。

第88図は墓坑の長短比を示したものである。長軸長は、最大が中二子遺跡SK4の240cm、最小が三角原遺跡89号土坑の100cmである。短軸長は、最大が吉田川西遺跡SK128の119cm、最小が氏神遺跡SK4007の45cmである。平面形は、ほとんどが長楕円形（長軸長が短軸長の2倍以上）を呈し、一部楕円形（長軸長が短軸長よりも長く2倍未満）や不正楕円形もみられる。主軸方向は、南北軸を志向する傾向が認められよう。氏神遺跡以外の墓坑では副葬品が認められ、土師器や黒色土器、灰釉・緑釉陶器の他、八稜鏡や漆椀（吉田川西遺跡）、鉄鐸（小原遺跡）が副葬される。規模と副葬品の関係をみると、長軸長よりも短軸長との相関を指摘できそうである。長軸長が最大の中二子遺跡SK4と最小である三角原遺跡89号土坑も副葬品が認められ、墓坑の規模（長軸長）と副葬品の有無に関連性を見出すことはできない。また、長軸長としては平均的な氏神遺跡において副葬品は認められない。短軸長は最大の吉田川西遺跡SK128に、土師器のほか、希少な八稜鏡や漆椀、緑釉・灰釉陶器が出土し、最小の氏神遺跡SK4007では副葬品はない。また、短軸長60cm以上の墓坑には、土師器や黒色土器のほか、緑釉・灰釉陶器が副葬されるが、それよりも小さい例に緑釉・灰釉陶器は副葬されない。短軸長110cmの前田遺跡P170に緑釉・灰釉陶器が認められないが、墓坑の平面形は不整楕円形を呈しており、平面形も副葬品と多少の相関があると想定する。

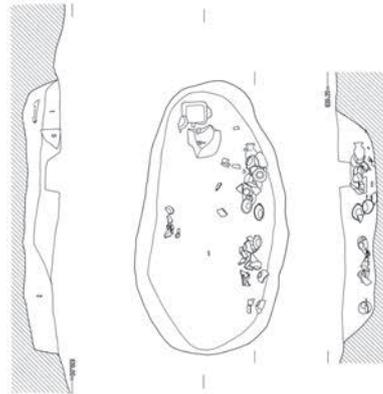
これらの墓坑において、木棺の存在が確認できた例はないが、松本市石行遺跡では木棺に伴うと推定する釘が出土している。また、原氏は、吉田川西遺跡等における副葬品が、重なるように出土した状況から、多くの墓坑には木棺が伴っていたと推定している。また、原氏の集成によれば、釘の出土が確認できる例は、短軸長が60cm以上の墓坑に認められ、原氏が指摘する副葬品の出土状況を呈する例も、一部例外はあるものの、短軸長60cm以上のものに多くみられる。木棺を墓坑内に設定するためには、短軸長を遺体の幅よりも大きくする必要があると考えられるが、本節では木棺構築の限界値が短軸長60cmは



第88図 10世紀中葉から後葉の墓坑長短比



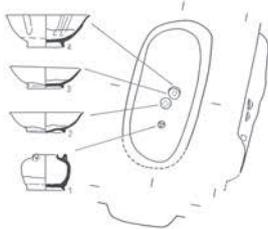
No.1 氏神遺跡 SK4007



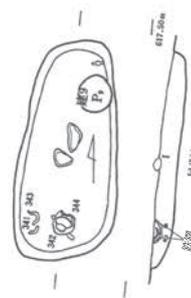
No.2 吉田川西遺跡 SK128



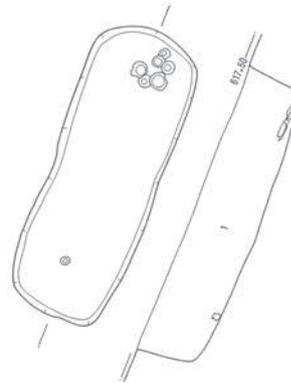
No.3 殿村遺跡 土壙106



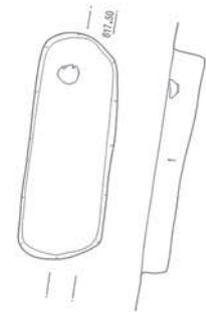
No.4 小池遺跡
第82号土坑



No.5 小原遺跡
118号土坑



No.6 中二子遺跡 SK4



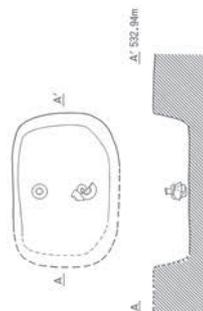
No.7 中二子遺跡 SK7



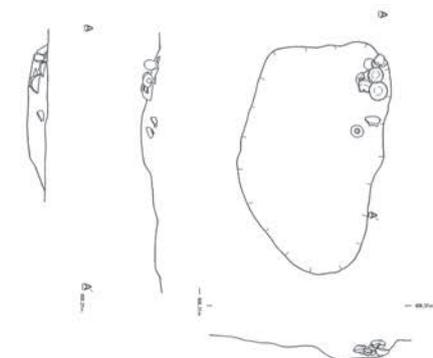
No.8 三角原遺跡
89号土坑



No.9 三角原遺跡
92号土坑



No.10 馬場街道遺跡
2号土壙



No.11 前田遺跡 P170



第 89 図 10 世紀中葉から後葉における松本盆地出土の墓坑

No	遺跡	遺構名	所在地	平面形	軸方向	規模			副葬品	土坑の種類	同時期の最も近くに分布する建物跡からの距離	墓と集落の関係
						長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)				
1	氏神遺跡	SK4007	朝日村	長楕円形	N-35° -E	155	45	14	なし	④	SB3001から西に44m	B
2	吉田川西遺跡	SK128	塩尻市	楕円形	N	220	119	30	鏡、漆、灰、緑、土	①	SB209から南に18m	A
3	殿村遺跡	土壙106	山形村	長楕円形	N-21° -W	225	105	12	灰、土	①	周辺に同時期の建物跡は未確認	B
4	小池遺跡	第82号土坑	松本市	長楕円形	N-12° -E	160	76	20	灰	①	近隣に多数の建物跡があるが詳細な時期は不明	-
5	小原遺跡	118号土坑	松本市	長楕円形	N-5° -E	181	81	15	鐙、鉄器、灰、土	①	57号住居址から北西に46m	B
6	中二子遺跡	SK4	松本市	長楕円形	N-21° -E	240	88	54	灰、土	①	周辺に同時期の建物跡は未確認	B
7		SK7	松本市	長楕円形	N-9° -E	182	63	25	緑	①	周辺に同時期の建物跡は未確認	B
8	三角原遺跡	89号土坑	安曇野市	長楕円形	N-15° -W	100	50	15	土、黒	③	38号住居跡から南に10m	A
9		92号土坑	安曇野市	長楕円形	N	152	52	16	土	③	42号住居跡から北に18m	A
10	馬場街道遺跡	2号土壙	安曇野市	楕円形	N	150	80	28	灰、須	①	4号住居址から東に4m	A
11	前田遺跡	P170	大町市	不正楕円形	N	180	110	16	土、黒	②	6号住居址から北東に18m	A

鏡：八稜鏡 鐙：鉄鐙 漆：漆椀 灰：灰釉陶器 緑：緑釉陶器 土：土師器 黒：黒色土器 須：須恵器

第27表 10世紀中葉から後葉の墓坑一覧

どと推定する。したがって、短軸長 60cm以上の墓坑に木棺の存在を想定し、それ以下の墓坑に木棺は構築されなかったと考える。これをもとに、木棺の有無と副葬品の関係から、墓坑は、被葬者の階層に応じて、以下の4種が作り分けられていた可能性を指摘する。①木棺を構築し、希少な副葬品を伴う例、②木棺を構築し、日常の食膳具を副葬品に伴う例、③木棺はなく、日常の食膳具を副葬品に伴う例、④木棺と副葬品を伴わない例である。①～④は被葬者の社会的地位のほか、墓を造営した集落の社会的地位や財力が影響し、作り分けられたと推定する。

最後に、これらの墓坑と「人間集団としての集落」(以下、集落と略称する)の関係をみたい。同時期と判断する竪穴建物跡と墓坑の距離をみると、A.墓坑の20m以内に竪穴建物跡が存在し、墓坑は集落の内部に分布する例、B.墓坑から40m以上離れたところに竪穴建物跡が存在し、墓坑は集落から離れて分布する例の2タイプが認められる。

原氏は、9世紀後半以降にみられる、「伝統的集落」の崩壊や縮小、新たな地での集落形成等の、集落の変動、墓坑の在り方を捉え、古墳時代以来の集落同士の結びつきの崩壊に対応し、集落ごとに葬地をもつ状況や被葬者の後継者が、デモンストレーションとして集落の中心で葬儀を行った結果、集落内に墓が造営されたと指摘した。合わせて集落から離れた場所に葬地を形成する思想は継続した可能性も言及している。

Aタイプの墓坑は、被葬者の後継者が集落の中心で葬儀を行った結果と考えるが、それぞれの集落の力関係によって、木棺の有無や副葬品の内容は大きく異なっていたと考える。しかし、必ずしも後継者が集落の中心地でデモンストレーション的な葬儀を行う必要はなく、その場合にBタイプの墓坑が残されたのであろう。この場合も集落の力関係により、木棺の有無と副葬品の内容には大きな変化があったと推定する。本遺跡SK4007の場合、墓坑と集落の関係はBタイプに属し、木棺や副葬品を伴わない墓坑であることを考慮すれば、SK4007の被葬者の埋葬時には、デモンストレーション的な儀式は実施されず、墓坑を造営した集落に有力者は存在したものの、周辺地域に影響を与えるような集落ではなかったと想定する。

第3節 まとめ

朝日村内には、氏神遺跡を含め縄文時代の遺跡が22ヶ所、平安時代の遺跡が9ヶ所ある（朝日村村誌刊行会 1991）が、内容が明らかなものは少ない。縄文時代遺跡の発掘調査により、遺跡の内容が明らかになったものは鎖川流域や、氏神遺跡が立地する内山沢流域に集中している。これら地域の縄文時代遺跡は中期中葉から後葉を中心とするものが主体であり、そのほかの時期については、表採遺物からその存在を認識できる程度であった。

今回の発掘調査では、朝日村内はもとより、松本盆地全体を見渡しても類例が少ない、縄文時代中期初頭（五領ヶ台Ⅱ a式期）と、中期中葉（藤内Ⅰ式期）の遺構や、土器及び石器などの遺物が量的にまとまって確認した。これらは、松本盆地における縄文時代中期の編年研究や社会像の復元に資する、重要な資料と考える。

松本盆地の平安時代集落における調査例の多くは松本市や塩尻市の低地に集中しており、山側の段丘面に位置する遺跡の調査例は貴重である。また、氏神遺跡では集落に伴う墓坑を確認できた点も注目される。今回の調査例が、平安時代における墓坑と集落の関係をさらに解明する資料となれば幸いである。

末筆ながら、発掘調査に御協力いただいた朝日村の皆様、発掘調査から報告書刊行に至るまで、貴重な御教示を頂いた皆様に感謝申し上げる次第である。

参考文献

- 赤塩 仁 2008 「十三菩提式土器」『総覧 縄文土器』
- 阿子島香 1984 「不定形石器分析の視点」『文化』第47巻第3・4号
- 朝日村 2020 『朝日村第6次総合計画』
- 朝日村村誌刊行会 1991 『朝日村誌』下巻 歴史・地区誌・年表編
- 朝日村教委 2003 『熊久保遺跡第10次発掘調査報告書』
- 朝日村教委 2006 『三ヶ組遺跡第I次発掘調査報告書』
- 阿部朝衛 1985 「縄文時代石器研究の視点と方法」『法政考古学』第10集
- 泉 拓良 2008 「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧 縄文土器』
- 今福利恵 2008 「勝坂式土器」『総覧 縄文土器』
- 今村啓爾 2010 『土器から見る縄文人の生態』
- 鶴飼幸雄 1977 「平出第三類 A 土器の編年的位置付けとその社会的背景」『信濃』第29巻第4号
- 大町市教委 1981 『長野県大町市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 借馬遺跡Ⅲ 追分遺跡 前田遺跡 南原遺跡』
- 岡谷市教委 1970 『後田原遺跡』
- 小口 高 1988 「松本盆地周辺の流域における最終氷期末期以降の地形発達を規定した要因」『地理学評論』61巻12号
- 加藤三千雄 2008 「新保・新崎式土器」『総覧 縄文土器』
- 北見一弘 2003 「刀子小考Ⅰ」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅳ
- 小林国夫 1961 「いわゆる信州ローム」『地質学雑誌』67巻784号
- 小林国夫 1963 「中部地方の洪積世火山灰層」『第四紀研究』第3巻第1～2号
- 小林謙一 2008 「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学2 歴史のものさし - 縄文時代研究の編年体系 -』
- 小杉 康 2008 「土器型式編年の基礎概念」『縄文時代の考古学2 歴史のものさし - 縄文時代研究の編年体系 -』
- 塩尻市教委 1979 『小段遺跡 - 長野県塩尻市小段遺跡調査報告』
- 塩尻市教委 1987 『史跡 平出遺跡』
- 塩尻市教委 1992 『上竹・云光』
- 塩尻市教委 1993 『小段遺跡発掘調査概報』
- 塩尻市誌編纂委員会 1995 『塩尻市誌 第二巻 歴史』
- 塩尻市教委 1999 『北原遺跡』
- 塩尻市教委 2001 『剣ノ宮・峯畑北遺跡』
- 塩尻市教委 2008 『小段遺跡』
- 静岡県考古学会・シンポジウム実行委員会 1998 『縄文時代中期前半の東海系土器群 - 北屋敷式土器の成立と展開 -』予稿集
- 信濃史料刊行会 1956 『信濃史料』第1巻 考古資料篇 上
- 下田 力・大塚 勉 2008 「松本盆地西方山地の地形と地質構造」『信州大学環境科学年報』30号
- 縄文セミナーの会 1989 『第3回縄文セミナー 縄文中期の諸問題』
- 縄文セミナーの会 1993 『第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相』
- 縄文セミナーの会 1995 『第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
- 縄文セミナーの会 2009 『第22回縄文セミナー 中期初頭の再検討』
- 縄文セミナーの会 2013 『第26回縄文セミナー 縄文中期中葉土器研究の現状と課題』
- 杉木有紗 2019 「朝日村山鳥場遺跡の石材利用 - 剥片石器編 -」『長野県埋蔵文化財センター年報』35
- 鈴木康二 2008 「特殊凸帯系土器（北白川Ⅲ式・大歳山式土器）」『総覧 縄文土器』
- 茅野市教委 1990 『棚畑』

茅野市教委 1992『城遺跡』

寺内隆夫 1987「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ一型式変遷における一視点」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1

寺内隆夫 1996「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』

寺内隆夫 2002「後沖式土器への系譜 - 千曲川流域における中期前葉（初頭）、斜行沈線文系の土器について -」『長野県の考古学』Ⅱ

長崎元廣 1997「中部地方の縄文時代前期末・中期初頭における土器型式編年論の系譜と展望（1）」『長野県考古学会誌』83号

長崎元廣 1998「中部地方の縄文時代前期末・中期初頭における土器型式編年論の系譜と展望（2）」『長野県考古学会誌』84・85号

長野県教委 1977『長野県指定文化財調査報告』第8集

長野県考古学会 1965『長野県考古学会誌』3号

長野県豊科建設事務所・穂高町教委 1987『矢原遺跡群（馬場街道遺跡）』

長野県埋文センター 1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書5-松本市内その2- 神戸遺跡 上二子遺跡 中二子遺跡』

長野県埋文センター 1990 a『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4-松本市内その1- 総論編』

長野県埋文センター 1990 b『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8-松本市内その5- 北栗遺跡』

長野県埋文センター 1991『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3-塩尻市内その2- 吉田川西遺跡』

長野県埋文センター 2002『広域営農団地農道整備事業八ヶ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書-茅野市内- 馬捨場遺跡』

長野県埋文センター 2005『安曇野農業利水事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書 三角原遺跡』

長野県埋文センター 2010『国道474（飯喬道路）埋蔵文化財発掘調査報告書 川路大明神原遺跡』

長野県埋文センター 2019『山鳥場遺跡・三ヶ組遺跡』

波田村教委 1972『長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡緊急発掘調査報告書』

波田村教委 1973『長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡第2次緊急発掘調査報告書』

波田町教委 1984『長野県波田町中下原遺跡踏査報告』

波田町誌編纂委員会 1987『波田町誌 歴史現代編』

波田町教委 2005『若沢寺跡』

波田町教委 2007『若沢寺跡2』

原 明芳 1998「信濃の古代墳墓」『長野県考古学会誌』86号

原 明芳 2003「灰釉陶器考 - 松本平の平安時代の食膳具様式の関連で -」『長野県考古学会誌』103・104号

東筑摩郡教育会 1919『東筑摩郡誌』

東筑摩郡誌編纂委員会 1951『東筑摩郡郷土資料文化部中間報告 考古其の一』

東筑摩郡・松本市・塩尻市誌編纂委員会 1973『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上

樋口昇一・小松虔・横山正 1963「長野県東筑摩郡朝日村熊久保遺跡調査概報（1）（2）」『信濃』16・4・7

藤沢宗平 1952「松本平に於ける弥生式文化」『信濃』第4巻第12号

藤森栄一編 1965『井戸尻 - 長野県富士見町における中期縄文時代遺跡群の研究 -』

増子康真 2008「北裏C～北屋敷Ⅱ式土器」『総覧 縄文土器』

松本市教委 1974『長野県松本市今井こぶし畑遺跡 緊急発掘調査概報』

松本市教委 1987『松本市 神林川西遺跡緊急発掘調査報告書』

松本市 1993『松本市史 第四巻 旧市町村編Ⅲ』

松本市 1994『松本市史 第四巻 旧市町村編Ⅱ』

松本市 1996『松本市史 第二巻 歴史編Ⅰ 原始・古代・中世』

松本市教委『松本市内田雨堀遺跡 緊急発掘調査報告書』

松本市教委 1987『松本市神林川西遺跡 緊急発掘調査報告書』

- 松本市教委 1988 『松本市林山腰遺跡 緊急発掘調査報告書』
- 松本市教委 1989 『松本市向畑遺跡Ⅱ ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書』
- 松本市教委 1990 『松本市坪ノ内遺跡 緊急発掘調査報告書』
- 松本市教委 1990 『松本市向畑遺跡Ⅲ 緊急発掘調査報告書』
- 松本市教委 1991 『小池遺跡 - 平安時代集落址の発掘調査 -』
- 松本市教委 1993 『松本市小原遺跡Ⅱ 緊急発掘調査報告書』
- 松本市教委 1997 『小池遺跡Ⅱ 一ツ家遺跡 緊急発掘調査報告書』
- 松本市教委 1998 『長野県松本市 今井北耕地遺跡Ⅱ 緊急発掘調査報告書』
- 松本市教委 1998 『長野県松本市 境窪遺跡 川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ 緊急発掘調査報告書』
- 松本市教委 2001 『長野県松本市 川西開田遺跡Ⅴ 三間沢川左岸遺跡Ⅲ 緊急発掘調査報告書』
- 松本市教委 2002 『長野県松本市 川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ 古代・中世編 松本市新臨空産業団地造成に伴う緊急発掘調査報告書』
- 松本市教委 2003 『長野県松本市 川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ 縄文編 松本市新臨空産業団地造成に伴う緊急発掘調査報告書』
- 松本市教委 2015 『長野県松本市 波田下原遺跡 2・3 和田中西原遺跡 2』
- 松本市教委 2017 『長野県松本市 三間沢川左岸遺跡 発掘調査報告書』
- 松本市教委 2020 『長野県松本市 麻神遺跡第3次発掘調査報告書』
- 三上徹也 1987 「大洞遺跡・縄文時代前期末～中期初頭の分類と検討」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 1 - 岡谷市内 - 大久保 B、下り林、西林 A、大洞、膳棚 A、膳棚 B (白山)、膳棚 B、中島 A、中島 B、柳海途』
- 三上徹也 1987 「梨久保式土器再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要』 1
- 三島正之 2013 「武居城」『長野の山城 ベスト 50 を歩く』
- 水沢教子 2014 『縄文社会における土器の移動と交流』
- 宮崎朝雄・綿田弘実 2013 「長野県における縄文時代中期土器の編年と動態」『一般財団法人日本考古学協会 2013 年度長野大会発表資料集 文化の十字路信州』
- 三村邦雄 1966 「長野県東筑摩郡朝日村西洗馬五社神社の鉄鉾と鉄鐸」『信濃』第 18 卷第 3 号
- 三村邦雄 1975 「東筑摩郡朝日村西洗馬出土古銭調査報告」『中信史学』第 2 卷第 1 号
- 武藤雄六 1975 「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」『考古学集刊』第 4 卷上
- 村井大海 2021 「縄文時代中期の松本盆地における下呂石製石器」『長野県埋蔵文化財センター年報』 37
- 矢野健一 2008 「縄文時代の編年」『縄文時代の考古学 2 歴史のものさし - 縄文時代研究の編年体系 -』
- 山形村誌編纂会 1980 『村誌やまがた』
- 山形村教委 1971 『長野県東筑摩郡山形村唐沢遺跡 洞遺跡 緊急発掘調査報告書』
- 山形村教委 1971 『唐沢・洞遺跡』
- 山形村教委 1981 『三夜塚遺跡』
- 山形村教委 1982 『神明遺跡 三夜塚遺跡』
- 山形村教委 1983 『堀ノ内遺跡 北唐沢遺跡』
- 山形村教委 1987 『殿村遺跡』
- 山形村教委 1997 『淀の内遺跡』
- 山形村教委 1998a 『山形村埋蔵文化財調査年報 (平成 9 年度国庫補助事業)』
- 山形村教委 1998b 『中町立道西遺跡 第 1 次発掘調査報告書』
- 山形村教委 1999 『山形村埋蔵文化財調査年報 (平成 10 年度国庫補助事業)』
- 山形村教委 2000 『本郷遺跡』
- 山形村教委 2001a 『淀の内遺跡Ⅳ』

- 山形村教委 2001b 『境窪遺跡Ⅱ - 三間沢川河川改修工事に伴う緊急発掘調査報告書 -』
- 山形村教委 2002 『三夜塚遺跡Ⅲ』
- 山形村教委 2007 『名笹遺跡』
- 山形村教委 2008 『中島遺跡』
- 山形村教委 2009a 『清水寺遺跡Ⅱ』
- 山形村教委 2009b 『下原遺跡 三夜塚遺跡Ⅳ』
- 山形村教委 2010a 『淀の内遺跡Ⅵ』
- 山形村教委 2010b 『三夜塚遺跡Ⅴ』
- 山形村教委 2012 『ヨシバタ遺跡』
- 山口 明 1984 「中部地方における前期末葉土器と鍋屋町式土器」『長野県考古学会誌』48号
- 山本典幸 2000 『縄文時代の地域生活史』
- 山本典幸 2008 「五領ヶ台式土器」『総覧 縄文土器』

写真図版



調査範囲 全景（北東より）



調査範囲 全景 1トレンチ（右）から5トレンチ（真上より）



SB1001A・B 完掘状況 (西より)



SB1001A・B (上空より)



SB1002 完掘状況 (南東より)



SB1001A・B 遺物出土状況 (南より)



SB1001A・B、1002 1 トレンチ北側検出状況 (東より)



SB3002 完掘状況 (西より)



SB3002 (上空より)



SB3002 P03 埋土断面 (南西より)



SB3002 P05 埋土断面 (東より)



SB3002 P07 埋土断面 (南東より)



SB3003・3004 完掘状況（北西より）



SB3003・3004（上空より）



SB3003・3004 完掘状況（南東より）



SB3003・3004 埋土断面（南西より）



SB4001 完掘状況 (南西より)



SB4001 及び周辺の土坑 (上空より)



SB4001 完掘状況 (北西より)



SB4001 埋土断面 (北西より)



SB4001 埋土断面 (南西より)



1 トレンチ土坑群 (上空より)



SK1003 完掘状況 (南西より)



SK1031 (奥)・1034 遺物出土状況 (北西より)



SF1001 埋土堆積状況 (南東より)



3 トレンチ土坑群 (上空より)



SK3008 埋土堆積状況 (南西より)



SK3003 上半部完掘状況 (南西より)



SK3001 完掘状況 (南西より)



4 トレンチ土坑群 (上空より)



SK4041 完掘状況 (南より)



SK4044 完掘状況 (北東より)



SK4032 遺物出土状況 (北西より)



5 トレンチ土坑群 (上空より)



SK5005 完掘状況 (南西より)



SK5002 上半部埋土堆積状況 (南西より)



SK5002 下半部完掘状況 (南西より)



SB3001 完掘状況（東より）



SB3001（上空より）



SB3001 施設検出状況（東より）



SB3001 カマド周辺遺物等出土状況



SB3001 カマド完掘状況（東より）



ST3001 完掘状況 (北東より)



ST3001 と SB3001 (東より)



ST3001 P07 埋土堆積状況 (東より)



SA3001 完掘状況 (西より)



SA3001 P01 埋土堆積状況 (南より)



ST3002 (部分) 完掘状況 (西より)



SK4007 検出状況 (西より)





7



8



9



10



11



12



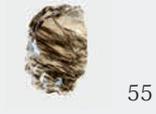
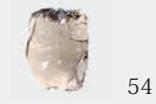
13















69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



89



88



90



91



92



93



94



95



96











187



188



189



190



191



192



195



193



194



196



197



198



199



200



201



202



203





SB4001 (2)





SB4001 (4)



308



309



310



311



312



313



314



315



316



317



318



319



320



321



322



323



324



325



326



327



328



329



330



331



332



333



334



336



335



337



338



339



340



341



342



343



344



345



346



347



348



351



349



350



352



353



354



355



356









417



419



420



422



423



418



421



425



426



427



424



428



429



430



431



432



433



434



435



436



4 トレンチ SK (2)



461



462



463



464



466



465



467



468



4 トレンチ SK (4)、5 トレンチ SK (1)





5 トレンチ SK (3)、遺構外出土遺物





SB3001 (2)



発掘調査集合写真

報告書抄録

ふりがな	うじがみいせき							
書名	氏神遺跡							
副書名	朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	133							
編著者名	村井大海 平林 彰							
編集機関	(一財) 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL:026-293-5926 FAX:026-293-8157							
発行年月日	2022年(令和4年)3月11日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うじがみいせき 氏神遺跡	ながのけんひがしちく 長野県東筑 まぐん 摩郡 あさひむらにしせま 朝日村西洗馬 むかいほら 向原1845-1ほ か	204510	17	36° 11' 90" 世界測地系	137° 87' 60" 世界測地系	20200406 ～ 20200803	2,000㎡	村道改築事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
氏神遺跡	集落跡	縄文時代	縄文時代中期初頭：竪穴建物跡3軒、陥し穴1基、土坑32基 中期中葉：竪穴建物跡2軒、焼土跡1基、土坑3基 後期後葉：陥し穴1基	縄文土器（前期末、中期初頭、中期中葉）、ミニチュア土器、焼成粘土塊、石器		縄文時代中期初頭、中期中葉、10世紀中葉から後葉の集落遺跡。中期初頭は五領ヶ台Ⅱa式と踊場系の土器群が、中期中葉は藤内Ⅰ式及び平出ⅢAの土器群が主体を占める。		
		平安時代	竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡2棟、杭列1列、墓坑1基、土坑14基 時期不明：土坑44基	灰釉陶器、土師器、鉄製刀子				
要約	<p>鎖川支流の内山沢川左岸の南東向き緩斜面の段丘上(波田面)に立地する。縄文時代中期初頭は、竪穴建物跡4軒、陥し穴1基、土坑32基を調査した。遺構の集中範囲は調査区外の南側に広がる可能性がある。遺物は、五領ヶ台Ⅱa式と踊場系が主体を占める土器群が出土した他、関西系や北陸系の土器、下呂石の剥片等、遠隔地との交流を示す資料が出土した。中期中葉は、竪穴建物跡2軒、焼土跡1基、土坑3基を調査した。遺構の集中範囲は調査区外の北東側に広がる可能性がある。竪穴建物跡から、藤内Ⅰ式と平出第Ⅲ類A土器が主体を占める土器群が、いわゆる「吹上パターン」の様相を呈して出土した。平安時代は竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡2棟、墓坑1基を調査した。遺構の集中範囲は調査区外の南側に広がる可能性があり、集落の規模を明確にできないが、各種遺構が複合して構成される集落であり、今後、当該期の集落における構造分析に資する資料と考える。出土した遺物及び放射性炭素年代測定の結果から、10世紀中葉から後葉の集落と判断できる。</p> <p>氏神遺跡から出土した五領ヶ台Ⅱa式土器は長野県内では希少であり、また、松本盆地における山側の段丘面に位置する平安時代遺跡の調査例は少なく、縄文時代、平安時代ともに貴重な事例となった。</p>							

令和4（2022）年3月11日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 133

氏神遺跡

朝日村向原地域道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行者 朝日村
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
E-Mail maibun@naganobunka.or.jp

印刷者 蔦友印刷株式会社
〒381-8511 長野県長野市平林一丁目 34-43
TEL 026-243-2351 FAX 026-251-0001